

学位論文

e-textの文体論

内山和也

2004

学位論文

e-textの文体論

広島大学大学院教育学研究科
日本語文化教育学専攻

内山和也

目次

目次	3
本論の構成	7
序論	8
0 . 1 研究目的	9
0 . 1 . 0 はじめに	9
0 . 1 . 1 文体論の目的	9
0 . 1 . 2 本論の目的	9
0 . 2 文体論に関する先行研究	11
0 . 2 . 0 はじめに	11
0 . 2 . 1 表現 の概念	11
0 . 2 . 2 文体 の概念	16
0 . 2 . 3 文体論の起点	18
0 . 3 研究方法と対象	19
0 . 3 . 0 はじめに	19
0 . 3 . 1 コミュニケーション について	19
0 . 3 . 2 表現 について	21
0 . 3 . 3 文体 について	23
0 . 3 . 4 研究の具体的な対象	24
引用・参考文献（序論）	i
1章．隠喩と換喩 ～表現主体の問題を中心に	26
1 . 1 文体論における隠喩と換喩	28
1 . 1 . 0 はじめに	28
1 . 1 . 1 隠喩に関する問題	28
1 . 1 . 2 隠喩と効果	28
1 . 1 . 3 隠喩と理解	31
1 . 1 . 4 隠喩と文脈	34
1 . 1 . 5 隠喩と意味	37
1 . 1 . 6 反復と複製	39
1 . 1 . 7 隠喩と行動	40
1 . 1 . 8 二大原理としての隠喩と換喩	41
1 . 1 . 9 換喩と提喩（ 1 ）	41
1 . 1 . 1 0 換喩と提喩（ 2 ）	43
1 . 1 . 1 1 隣接性の概念	44
1 . 1 . 1 2 浸透する二極	45
1 . 2 文体の分類における換喩の機能 ～ 計量文体学 について	49
1 . 2 . 0 はじめに	49
1 . 2 . 1 テキストの分類	49

1.2.2	原著者推定	50
1.2.3	文体とパターン認識	53
1.2.4	操作主義的文体観	55
1.3	表記における隠喩の機能 ~ カタカナ表記語 の機能について	56
1.3.0	はじめに	56
1.3.1	日本語の言語表記体系	57
1.3.2	片仮名語の分類	57
1.3.3	片仮名表記語の表現効果	61
1.3.4	コンピュータにおける文字の役割	63
1.3.5	コンピュータにおける隠喩の役割	63
1.3.6	片仮名表記語の将来 ~ 理論的予測	65
1.3.7	片仮名表記語について	66
1.4	文章における換喩の機能 ~ 冒頭 について	69
1.4.0	はじめに	69
1.4.1	冒頭の機能について	69
1.4.2	文章論について	70
1.4.3	冒頭と呼びかけ構造	72
1.4.4	文章の完結性と統一性 ~ 「文章」と換喩	75
1.4.5	冒頭と書き出し	76
引用・参考文献(1章)		v

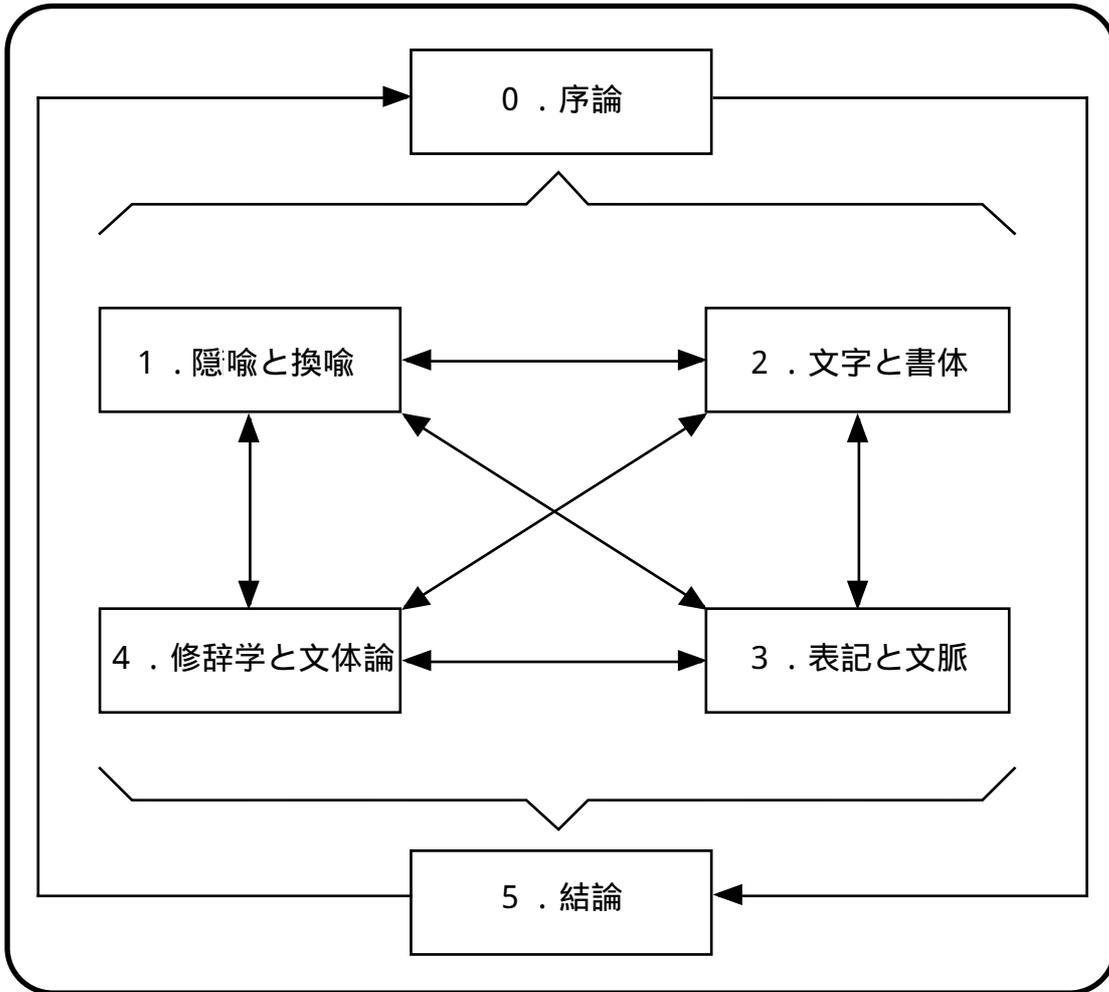
2章	文字と書体 ^{スタイル} ~ 書体の問題を中心に	78
2.1	文体論における 期待 と 情報	79
2.1.0	はじめに	79
2.1.1	情報理論的文体観	79
2.2	文字と電子文字との関係 ~ 肉筆 としての電子文字	81
2.2.0	はじめに	81
2.2.1	文字と技術との関わり	81
2.2.2	書風と書体	83
2.2.3	ことばとモノ	85
2.2.4	文字と情報	86
2.2.5	連続性と不連続性	87
2.2.6	文字の肉筆性	88
2.3	文体と書体との関係 ~ スタイル としての書体について	89
2.3.0	はじめに	89
2.3.1	読み手の参与と読み的手段	89
2.3.2	消しゴムについて	90
2.3.3	異体字と図像性	91
2.3.4	紙とリレーシステム	92
2.3.5	書体の選択について	92
2.3.6	書体の読み取りについて	93
2.3.7	読まれるものとしての書体	94

2.4	文体と物語との関係 ~ 表現 としてのデジタル・フォント	96
2.4.0	はじめに	96
2.4.1	蒐集について	96
2.4.2	フォントマニアについて	96
2.4.3	データベースについて	97
2.4.4	リストについて	99
	引用・参考文献(2章)	xii
3章	文脈と表記 ~ メディアの問題を中心に	102
3.1	第二の言文一致と第二の欧文脈	104
3.1.0	はじめに	104
3.1.1	第二の言文一致	104
3.1.2	第二の欧文脈	105
3.2	現代口語体における言と文	109
3.2.0	はじめに	109
3.2.1	現代口語体の表現特徴	109
3.2.2	言語における速度について	112
3.2.3	俗語・隠語と個性的スタイル	115
3.2.4	電子メディアと言語の変化	118
3.3	句読点と表記符号の用法について	119
3.3.0	はじめに	119
3.3.1	表現における句読点の問題点	119
3.3.2	スタイルと筆記用具	120
3.3.3	スタイルとコンピュータ	120
3.3.4	日本語表現における句読点の役割	120
3.3.5	句読法への表現上の制約	122
3.3.6	e-textにおける句読点	123
3.3.7	句読法と文のスタイル	124
3.3.8	文字と表記符号	125
3.3.9	句読点と表記符号	128
3.4	振り仮名と宛字とについて	129
3.4.0	はじめに	129
3.4.1	振り仮名の視覚性について	130
3.4.2	振り仮名の媒体性について	133
3.4.3	振り仮名の触覚性について	134
3.4.4	振り仮名の形式性について	135
3.4.5	e-textと振り仮名	137
3.5	文体における修正と引用とについて	139
3.5.0	はじめに	139
3.5.1	修正における追加と削除	139
3.5.2	引用と文例集	142
3.5.3	テキストの修正装置	145

4章・修辞学と文体論 ～身体と行動の問題を中心に	146
4.1 文体・表現・修辞	147
4.1.0 はじめに	147
4.1.1 『表現学仮説』再考 ～表現と修辞	147
4.1.2 表現学と諸科学	152
4.1.3 共感覚と情報通信技術	154
4.1.4 ジャンルとスタイル	156
4.2 言語とスクリーン ～児童文学に見る色彩語	157
4.2.0 はじめに	158
4.2.1 色彩・色彩名・色彩語	158
4.2.2 水準に応じた色彩語の表現	160
4.2.3 色彩語と文字	162
4.2.4 色彩語と色彩	164
4.3 電子空間の言語的ふるまい ～ブログを手がかりに	165
4.3.0 はじめに	165
4.3.1 話しことばの包摂	165
4.3.2 表現の一般性と個別性	167
4.3.3 ハイパリンクの質と量	169
4.3.4 ブログの表現について	171
引用・参考文献(4章)	xxii
結論	172
5.1 まとめ	172
5.1.1 言語教育との関わり	172
5.1.2 まとめと結論	172
引用・参考文献(結論)	xxvi

本論の構成

本論文は、以下に示す図のように非線形な関係をもつ各章から全体が構成されているが、章番号に応じた線的構成にも配慮したものになっている。



序論

- 0.1 研究目的
 - 0.1.0 はじめに
 - 0.1.1 文体論の目的
 - 0.1.2 本論の目的
- 0.2 文体論に関する先行研究
 - 0.2.0 はじめに
 - 0.2.1 表現 の概念
 - 0.2.2 文体 の概念
 - 0.2.3 文体論の起点
- 0.3 研究方法と対象
 - 0.3.0 はじめに
 - 0.3.1 コミュニケーション について
 - 0.3.2 表現 について
 - 0.3.3 文体 について
 - 0.3.4 研究の具体的な対象

本章は、1節で本論の研究目的をのべる。2節では、先行研究の総論的部分を抽出して批判的に検討する。3節では、本論の用語の簡単な規定を行なうとともに、研究の具体的対象について述べる。

0 . 1 . 研究目的

0 . 1 . 0 . はじめに

ここでは、文体論および本論の目的について述べる。具体的には、1項で文体論の研究目的と意義とを述べ、2項に本論の研究目的を掲げる。

0 . 1 . 1 . 文体論の目的

文体論の目的は、それを解明すべく文体について論じるものである。但、ムーナン（1970：219）は、次のように指摘している。

12

文体は人間的な現象で非常な複雑性を持つ...したがって、いつの日にか文体についての説明をまとめあげられるとしたら、その説明は極度に複雑なものであろう。文体の定義の簡潔に縮めた表現はすべて一方的な貧困化であろうし、そのことはずっと変わることはあるまい。

文体論の歴史は特に短いものでないが、その探求はいまだ発展の途上にあるといえる。
スタイリスティックス英語文体論は、米英が 国際語 を一極支配するなか、英語教育の版図拡大とともに大きく発展した。他方、日本語文体論は、70年代以降目立った進展がないともいわれる。

どのような学術領域と連携する（あるいはしない）のであっても、文体論が文学と語学との中間の空隙に存在し、それ自体が自立した研究領域であったことはない（ウイドウソン1989）のは事実であるように思われる。語学と文学の間にあることは、批評として弱く・語学として非科学的だと見られることもあった。しかし、そのような二項的評価のあるかぎり、文体論の意義が減じるこ
24 ともないはずである。

0 . 1 . 2 . 本論の目的

「文体」や「文体論」に対しては、さまざまな概念規定が存在しうるが、少なくともそれが言語形態に立脚した議論にかかるものだという点は揺るがない。但、「言語の論」としての「文体」の論は、しばしば非言語的領域に及ぶ。その場合、「文体」はコミュニケーションの問題と考えられるべきものとなる。本論は、このことを文体論の領域横断的性格のあらわれと評価し、その場合、まず「文体」を「表現」との関わりで捉えるべきであると主張する。

また、「文体」や「表現」という術語は、書きことばについてというのが本来の用法である。しかし、われわれの言語行動は、近年大きく変化し、「文体」や「表現」の概念にも反省が強いられていると考えられる。例えば、表現の研究は、表現に 普遍 と 個別 の弁証法が成り立つこと（永尾1988）に好んで言及してきた。このことは正しいと思われるが¹、それだけに、紙の一般的性質をもって 表現 の普遍的特質とする議論が通用してきたことは残念なことだといえよう。本

0.1. 研究目的

論は、表現の研究がメディアや技術を考慮することなしに済ますことはできないと考え、e-textを重要な研究対象と見なす。ネルソン(1994)が示しているように、テキストとはe-textのことであり、紙のテキストはその下位集合に他ならない。このことは、いまや理論上の問題にとどまらず、われわれのコミュニケーションは全面的に電子化してきている。そのなかにあつては、e-textが文体論にとってどのように興味深い対象であるかというより、文体論がe-textに対してどのように興味深い視点を提供しうるものであるかこそが問われよう。

本論は、以上の点を踏まえ、文体の問題を論じてゆく。具体的な研究目的は以下のように示される。

- I 文体(論)と表現(学)との関係を考える
- II 文体・表現をコミュニケーションの問題として考える
- 12 III 文体・表現と技術・メディアとの関わりを考える
- IV 前記三号と言語教育との関わりを考える

要約：本論は、現在の具体的な言語的状况を踏まえ、そのなかに 文体 がどのような問題として現われているのかを明らかにしようとする。

¹普遍と個別に関する議論では、常に以下のような疑問を提示することができる。つまり、普遍しかないのであれば、普遍が個別的にあることになり、個別しかないのであれば、個別が普遍的にあることになる。

0.2. 文体論に関する先行研究

0.2.0. はじめに

文体論に関する先行研究を検討する。ここでは「表現」と「文体」との関係を中心に、総論を概観することにしたい。具体的には、1項で「表現」および「表現学」の概念を、2項で「文体」および「文体論」の概念を検討する。

0.2.1. 表現 の概念

ソシュール(1972)は、音声言語こそが言語学の対象であると強調する。言語の発生へと遡る
12 クロニクルな作業を相対化する試みの中で、言語の本質を時間的性質に求めたのである。言い換えれば、言語には 言語学的な時間 (レプスキー1975、拙論1998) が関与するということである。言語体系が「共ぎれでつぎはぎした衣(ソシュール1972:239)」であることは、体系が常に創造され、その反復と存在とが同値であることを示している。小林(1972:112)は、「[ソシュール113頁の図の] Dわ永遠の現在だから... DがD'に進んだとしても、A B面わいつもそこにある。ゲンわ絶対の現在であり、それにわ過去も現在もありえない」と述べている。共時態は、絶対的な抽象性と具体的な普遍性を持った時間の概念として捉えられるということである¹。一方、われわれの日常的な時間概念は、A B面を漸近線として無限に分割されてゆくのではなく、苦もなくそこを突き抜ける。物理的(絶対的)な時間と経験的(具体的)な時間とは、原初的(直線的)な時間意識において対立するのである。

このような時間概念がのちのちもっとも問題になるのは、年代記的な研究への批判が文字へ向けられたことである。ソシュールの 言語学的な時間 にあって、時間は(古)文書の空間の中に集
24 約されるのではなく、体系が生成する瞬間瞬間にすべての時間があるのであり、空間化することで時間を容易く停止させられるという楽観に対する告発の当然の帰結として、「言語学」は音声言語の研究と表現されたのである。コロミーナ(1996:037f.)は、ソシュールにあって文字は音声言語の 写真 なのだと指摘し、次のように述べている。

[ソシュールが] 打ち立てる音声言語と文字言語のあいだの根底的な分割は、外部と内部の間の空間的な対立に基づいていて、そこでは文字言語は音声言語の映像であり、表象であり、外部であり、衣装であり、ファサードであり、そして仮面である。...だが[ソシュールによれば]最終的には、書かれた言葉と話された言葉は絡み合ってしまう。...[空間の関係性の内側にあるものは]外部において文字言語があまり十分に表象していなかった「内部」なのではなく、ということは音声言語が忠実に現前する思考なのでもなく、音声と文字の絡み合いだったのである。ソシュールはここで、文字を外部、つまり思考やその音の外部映像とだけ同定しているのではない。そうではなく、まったく写真的

¹時間が(その上に異なる 事柄 が排列されるような継続性としてでなく)固有の時間的質をもった 事柄 の間の差異として把握されるときに 差異は時間的である といえらるれば、共時態は時間的な差異によって構成されている。時間と差異については、斉藤(2000)参照。

0.2. 文体論に関する先行研究

な映像として同定しているのだ。写真の問題提起的位置は、空間や言語や、そしてこの時代の文化を
考えることから、決して切り離すことができないのである。

「撮られるべきもの以外に、撮られうるものは何もない（ブルデュー1990b：30）」といわれる
ように、写真は客観的に真実の記録であることを社会的に条件づけられてきた。そして、そのかぎ
り「安定した世界が揺れ動く決定的瞬間を捉えることをその特殊な使命とするところか、平凡な実
践は...時間性を持ち込むことで現実を解体することになる側面や偶然の出来事を排除する（ブル
デュー1990a：92f.）」のである。まさに、文字は、写真がそうであるように、むしろ現実を被覆
し身体的・体験的理解を阻むものと見做されたのである²。しかし、カステル（1990：315ff.）の
いうように、写真が「客観的で中性的な画像ではないと同時に極度に主観的な幻想の媒体でもな
く、（社会的制度として）客観的にも（個人の行動の結果として）主観的にも捉えられるような
12 場 であると解されれば、写真=文字は必ずしもソーシャルの退けるところとはならなかっただ
ろう。あるいは、Peirce(2.281)は、写真を類像アイコンでなく指標インデックスだと考えている。写真は現実の写し
でなく³、現実の標本サンプルとうけとられるのである⁴。そもそも、表現は（動詞としても名詞としても）
物理的実体を伴う具体的な事実であり、それが創造的であるといわれる（丸山1993など参照）の
も、表現を通じてこそ表現が世界を構成する物理的現実の一部となるからである（
0.3.2）。この、表現の創造性について、ソーシャルは次のようにいう。

われわれの思考は、語によるその表現を無視するときは、無定形の不分明なかたまりにすぎない...
思考と向い合っの言語独特の役割は、観念を表現するために資料的な音声手段をつくりだすことで
はなくて、思想と音との仲を取り持つことである。ただしそれらの合一は必然的に単位の相互限定に
落ちつくことになる...いささか神秘めくが、「思想・音」は区別を内含し、言語は二つの無定形のか
たまりのあいだに成立しつつ、その単位をつくりあげるのである。.....それゆえ言語学のしごと場は、
24 二つの秩序の要素が結合する境界地域である；この結合は形態をう[む]...言語的事実によって結ば
れた二つの領域は、...観念と音との連結は徹底的に恣意的[である]（ソーシャル1972：157ff.）

つまり、表現以前に表現すべきものがあるわけでないということである。もちろん、それ以前に
いかなる実在もないということではなく、表現は表現によって生みだされ、表現によってこそわれ
われは実在をリアルなものと実感できるということだろう。したがって、表現はすべてすでに表現さ
れたものであり、テキストはプレテキストとの関係において成立することになる。そこにソシュー

²文字をめぐる「時間」の概念に大きな影響を与えるだろうものに、ICTの発達がある。古来、瞬間と持続とは経験的時間においてのみ併存してきたと思われる（例：美的経験）が、ICTが可能にしたのは、瞬間と持続とを物理的時間の中に併存させることである。その結果、文字ベースのICTにあって、文字には、時間との関わりで音の担うすべてがありうるのである。そして、この事実は具体的な言語事実によって明らかにすることができるであろう（本論の各章参照）。

³常識的に考えても、写真が現実似ているというのはおかしい言い方である。

⁴写真を記号と見ることが、それを語る映像に貶めるという批判（ティスロン2001）には理がある。但、写真が指標だということは、それが世界を切り取る行為であり・世界の一部としてのモノだということだろう。

ルがつけくわえるのは、表現するものと表現されるものとの関係は、必然的で・一体不可分で・しかも因果的でないという事実である。

一方、表現が本質的に因果的關係によって成立するという立場もある。例えば、加藤（1972）は、人間のあらゆる行動は「情報行動」だと述べている。個体が感覚器を通じて環境から受けとる刺激を情報と呼ぶとすると、刺激への反応で経験が構造化され、意識となって働く。しかし、言語というシンボル体系を獲得した人間は、物理的環境にでなくそれぞれのシンボリックな環境に存在せざるをえず、シンボルへの反応で形成される意識＝意味の体系が行動を通じて（物理的）対象をつくりだすときには、対象はシンボルと観念との産物だというわけである。そして、「人間関係というのは、人間がたがいに他人にとっての環境である、という関係のことである。その主体と環境とが、シンボリックな交渉をおこなうときに生まれる関係が、コミュニケーション過程というものだ（加藤1972：169）」から、「情報行動」は、主観の対象化（客体としてあらわすこと）であると同時に
12 対象の主観化（主題として表象すること）でもあることになる。同じく、永尾（1975：4）は、「人間活動ないしは表現の一切は、現在における、すぐれて個別的な、主観と客観との緊張関係としてのみあり得るものであると考えられる」と述べる。ここで、「緊張関係」とは、表現主体が場面を客観（客体）として捉えるときには場面との関係で表現主体の主観（主題）が確立されることを指し、主観と客観との・人間と言語との相互観照的因果性を前提する見方である。簡単な類比でいえば、景色が景色を見る者との関係から生じるというより詳しく分析すれば、景色を見る者（主体・主観）が景色（客体・対象）の原因で・景色が景色を見る者の原因だという理解だといえる。

しかし、この図式は表現の理解として良いものでない。いったい主観や主体といった概念は人間以外には使いにくい、しかも世界のなかで人間だけが表現するわけでも、言語だけが表現の手段であるということもないのである。例えば、Travers（1989：428）は、行動の手掛かりを探索することで動物が世界とインタラクティブな関係にあることを強調し、「ヒトやコンピュータは、
24 象徴記号の操作で知能を実証することができるが、動物は、振る舞いを通じて見せることしかできない。状況に対する振る舞いの妥当性こそが知能なのである〔引用者訳〕」という。ここには二つの含意がある。ひとつは、知性の関係論的定義（黒崎1987：IV章）であり、たとえば、人間と共存しないコンピュータは十分に知的ではありえないという秩序（ボルター1994：10章）を意味している。ひとつは、知的に見えるという点では振る舞いもまた表現だということである。特に、表現として為された人間の振る舞いは「ジェスチュア」と呼ばれる。喜多（2002：14）は、ジェスチュアを「あることを表現しようという意図の達成に向けての行為の一環として起こる非道具的で非言語的な身体の動き」と定義している。つまり、われわれの表現には、身ぶりや手ぶりといった明らかに動物的なものから、コンピュータと協働した高度に機械的なものがあるわけである。したがって、表現の中心に人間を据えようと表現者の主体性を強調することは、人間を過当に均質化することになる。そのとき、言語を話すのが人間だけであり、人間であればだれしも言語を話さるのであれば、言語以外のコミュニケーションに注意を払う必要はない。しかし、一方に乳児が、
36 一方に言語を欠く成人がいるという事実は確かに存在しているはずである。言語は使用者間に優劣を伴った分布を示すのであり、同時に、方言の連続体を前にしては国語が均質なものということもで

きない。そして、言語が均質なのではないと知られるとき、言語がコミュニケーションの連続体に位置すると考えることは、むしろ自然であろう。表現の研究がそこに人間のいる学問でなければならぬことは、しばしば指摘されてきた⁵し、いまのところ人間が言語の唯一の尺度であることも事実といえる。人間が人間として人間に最大の関心を持つべきだということを否定する理由は思い当たらない⁶が、人間のみに関心を払えば足りるという考えには、それに反対する十分な理由がある⁷と考える。人間と動物との不連続性を唱えるところで採用されているのは、いるはずのないものはいるべきでない⁷という理屈である。しかし、そこにも誰かがいるのである。そこに人間のいる学問であることを標榜するあまり、行動の科学や情報通信の技術を遠ざけ、人間を過度に中心化・均質化する立場に与すべきではまったくくない。それは、現実の言語状況から研究を乖離させるだけでなく、人間を一層不幸なものにするだろう。

われわれが、表現を理解しようとする際には、窓のアナロジーの方が蓋しよいものだろう。

- 12 ここで、窓は景色を見るためにあるのではなく、窓によって景色と景色を見る者、そして両者の（必然的だが因果的でない）関係とが作りだされるのである。これは、化学でいうインタフェイス（界面）の概念に近く、インタフェイスは「ある一つの状況を、互いに独立な二つのもの、あるいは二つの概念の相互作用の結果とみるのではなく、むしろ、その両者を、一つの相対的状況の二面としてみる（坂本1987：16）」ところに生じる概念として一般化されうる。木坂（1992）は、表現の成立を、形態的部分を統一する外的論理と意味的部分を整序する内的論理の協調統一によるものとする。明示的な伝達性を志向する外的論理と個性的な表現性を志向する内的論理とが、相互作用による緊張関係の中で豊かな表現をつくりだすのだという。ここで、外的論理とは（不定の）思考にかたちを与え表現の形式的な妥当性を整えるものであり、内的論理とは（不定の）事柄に意味を与え表現の真実性を整えるものである。したがって、このことは、二つの観念が因果的に関係して表現を形成するという考えと混同されるべきでない。表現に二面性があることは、言語記号に相対的な二面のあることから帰結するのである。表現の成立は、因果的な二面性を指定することによつてではなく、非因果的な二面性によってこそ理解されるべきなのである。そして、表現を非因果的
24 二面性によって成立すると見ることは、もうひとつの重要な原理を明らかにする。

波多野（1958：103）は、言語が世界を捉えるための分類原理（環境モデル）であると仮定するとき、「言語が何よりもまず表現である、という命題が、われわれに初めて明きらかなものとなってくる。」といい、表現を次のように説明する。

⁵例えば、「文章研究は、話し手の意図が、言語という形式にどのように実現されているかを追及するものである。ことばの研究は、こうして、言語を、人間行為の一形式として、表現の一形式として改めて捉え直す道を得ることになる。言語の研究が、人間のいる言語の研究に高められることを願わずにはいられない（永尾1992：133f.）」。また、「異文化間のコミュニケーションでも、ディベートでも、それを行っているのは人間であることを忘れてはならない。インターネットでのコミュニケーションがどのように進もうとも人間存在の証としての表現研究でなくてはならない。論理的であるということ、そのことが冷たいとか非人間的であると捉えられるような表現研究ではならない（安東2001：210）」。

⁶たとえば、Williams（1986：118）は、視点の重要性を次のようにいう。「誰も宇宙に対する人間の重要性といった主張はすべきでない。人間にとっての人間の重要性こそが主張されるべき点なのである」。

⁷この表現は、安部公房「公然の秘密」（安部1975所収）から借用している。

0.2. 文体論に関する先行研究

『あrawし』として、中間者的存在を負わされたものを表現という。言語は、たんに『ある』（存在）ではない。また『あrawれ』（現象）でもない。それは『あrawし』として中間者的性格をになわされているものなのである。もちろん『あrawし』は、それ自身としての存在となりうる（表現の弁証法）。しかし、それはあくまで中間者的なものとして発生したのである（波多野 53）。

つまり、表現が過程としてあるいは状況として成立しているとき、存在（対象）と知覚とはそれぞれに表現の一面として象徴的に把握されるということである。表現が存在と知覚との因果的な作用によって形成されるというのではなく、存在と知覚とが表現で単に同期するのだと見るとき、表現は一面において知覚であり、同時に一面において存在であると受けとられることになる。心理学的な含意は措くとしても、このような言語（記号）と表現との関係から、言語（記号）がむしろ表現の手段であることが理解されるわけである。

- 12 ここまで、表現の成立を主観と客観との因果関係において見る考えが適切でないことを論じてきたが、ある因果関係の中で、表現が表現主体を個別的なものとして確立するという考えは、文体を個人スタイルの個性と見做す認識の原型だといえる（cf.ペレルマン1980：136f.）。周知のごとく文体は尖筆スタイルを語源とし、書字空間に文字をかきつける身体の軌跡が文体認識の基盤である。古典的定義 文は人なり では、問題になりうるのは書き手の身振りだけであり⁸、これは弁論術としての旧修辞学が内容よりも話し方を問うことと並行する。この絶対的な一元論から、書き手（表現者）と文章（表現）とを別個に措定したうえで同一視する二元論への移行は、認識上の自然ななりゆきに思われる。そこでは、文体を作者の個性の一部と見做し、あるいは作者の個性・体質の発露と見ようとする。文体は、書き手の身体レトリックの同義語から換喩へとずらされ、そこが旧修辞学との分水嶺になる⁹。そして、文体と（書き手の）身体とのあいだに 距離 が生まれると、読み手 との関係が問題にされるのもまた自然なことだろう¹⁰。しかも、読み手が人間であれば、書き手が人間でなければならない（あるいは存在しなければならない）こともない。このような考えを励ましたの
- 24 がコンピュータである。日本語の文体論にいち早く 読み手 の概念を取り込んだ（今井1975：83）とされる中村は、コンピュータが書き手となりうることに注意を促している（中村1974：7f.）。もともと、機械は人間を理解する隠喩として用いられる。からくり仕掛け、時計、計算機

⁸ピュフオンのものとして知られるこの句は、本来「思考の中に置かれる秩序と運動である」という意味だった（田島1991：19）というが、その真意が那邊にあったかということは当面の問題でない。この句の解釈に関しては久保（2000：156n3）も参照。

⁹拙論（1999）では、文体論の研究史を以下のように記述した。

W：書き手、T：テキスト [T]、R：読み手、S：文体 [S] とすると、
書き手そのもの（文体論以前・旧修辞学） $W = S$ [W]
作者の個性 $W + T = S$ [W・T]
' 作品に投影された作者 $W \cdot T = S$ [W]
読者の印象 $T \cdot R = S$ [W・T]
' 作者が産出し読者が受容 $W \cdot T \cdot R = S$ [R]

¹⁰文体が書き手の内側の何かであれば、それは人間関係のとりわけ相互理解の裡に開陳されなければならない。「話し手と聞き手との間に魂の触れ合いが予めなければならぬ。言論は聞かれなければならず、本は読まれねばならない。聞かれもせず、読まれもしないならば、何もなかったことになる（ペレルマン1980：32）」のである。

と当時の最も複雑な技術的構成物は、常に人間の隠喩であった。しかし、中村の方法が、主観を排そうとするために既存の作家論・作品論を結論とする前提で表層を操作している（井口1996：70f.）と批判されるとき、読み手の立場を標榜するだけでは人間中心主義の制約を免れないことが知られるのである。結局、国立国語研究所（1977）の比喩研究がそうであるように、書き手としてのコンピュータとは「コンピュータのような表現主体」という非人間性の直喩の縮約でしかないのだらう（直喩と隠喩とについては [1.1]）。

しかし、言語と読み手との関係に注目することは、むしろ正当なことであろう。読み手であることは、人間に対してのみ開かれたものである。論理的な理解と体験的な理解とが異なる限り、コンピュータは人間が理解するようには人間言語を理解しえないであろう。ソシュールの言語論は、読み手の立場によってたつものとされる（ジェイムソン1988：26）ことがあるが、それゆえ文字＝写真を体験的理解を妨げるベールとしてむげに退けたのであり、同時に、そこは人間中心主義になりにくい地点ともいえる。人間以外の占めえない地点で、人間について考えることはまったく正しいことであり、そこから言語学の視点が他の視点と比較可能であること、言語が他の体系と比較可能であること（cf.ガデ1995）も理解されるのである。

0.2.2. 文体 の概念

すでに、前項で文体の概念にかかわりはじめているが、「文体」という語はもっとも曖昧な術語かおおよそ要領をえない用語（土屋1986）であり、古今東西「文体」に与えられた定義の数々を詳細に検討することはほとんど人間業でなくなる。ここでは、「文体」概念の定義の根幹に ことばをモノとして見る視点 があったこと（月村1990：3 ff.）を確認しておきたい。文体の認識は、それが人間の外部に実在することを基盤とするものなのである。以前、しばしば 表現の科学 文体の科学 という言い方¹¹がつかわれたのも、それが「科学」と共有すべき実在論的基盤に由来するものといえるだろう。

実際にメディアについて考えるとき、テキストは、われわれの外部に物理的な実現形態をもつものである。「表題はテキストを商品に変える機能を持つ（バルト1988：191f.）」といわれるが、商品化された文学テキストの最も一般的な流通形態は書物（桂2003：298ff.）であった。ネグロポンテ（2001：17ff.）は、デジタル文化に関する「書籍」を出版した理由に、(1)デジタルな文化を理解すべき人ほどデジタルなメディアを使いこなせないこと、(2)商業的な流通形態として紙の書籍がなお有効であること、(3)双方向マルチメディアは速すぎて思索に向かないことをあげている。この文脈で問題なのは第2号である¹²。すなわち、（個々別々の）メディアが消失するときこそ メディア の重要性が実体的にあらわれ、そのときに（個々の）メディアは価値ある商品になるとい

¹¹このような文脈で、科学とは、われわれの知識や信念と独立に存在する対象に対する客観的・体系的な記述として真理の表現と見なしうるものを指している。客観的な世界の常識的な表現が言語だとすると、科学はその厳密で緻密な表現だということである。但、このような「科学」という語にはあまり実質的な意味合いはない。たとえば、吉田（1995）は、法則を解明する研究とプログラムを解明する研究との相互に連続的なふたつの科学があるとして、言語や社会などの情報構造の記述は、プログラムを解明する科学でありうるという。但、その場合のプログラムの記述は極度に複雑なはずで、ついに説明の便宜で複雑さをどこまで単純なものに還元すべきかといった議論に落ち着くだろう。

うことである。このことを、ネグロポンテ（2001：105）は、「メディアはメッセージではない。メッセージを具体化したものがメディアなのだ」という。デジタルビット化されたメッセージは、さまざまなメディアに具体化可能であり、異なる具体化の時々異なる商品価値を実現するのである¹³。テキストに物理的基盤があり、かつ、そのあり方が潜在的に多様なのであれば、テキストは多様な解釈を可能にする。物理的なモノは、われわれが何を考え・何を信じるかとは関わりなく存在するからである¹⁴。但、テキストにいかなる恣意的な解釈が可能であっても、テキストがそれを許していると考えべきではない。相対主義を二つの言説の間に適用すること自体に罪はないにしても、しかし、それらが現実に対立するのであれば¹⁵重大な帰結を引き起こすことがある¹⁶からである。コミュニケーションについても、見解の相違ということでは解決されない致命的で現実上の対立がありうることをわれわれは知らねばならず、そのことはわれわれの知識や信念とは独立に存在する客観的世界の存在なしに可能ではないのである¹⁷。

- 12 このように、文体およびテキストの意識が素朴な実在論に根差すように、文体研究も《実在論》を基本的な前提とすることになる。したがって、文体論は、表現という出来事をも一つのモノと見ようとするものなのである。その点で、VRは興味深い対象である。事実上のリアルと現実とは常に循環し明確な境界を持たない。Baudrillard（1994：12）は、「ディズニーランドは、それが『リアルな』国にあることを隠すために存在する。すべての『リアルな』アメリカは、すなわちディズニーランドなのである [引用者訳]」と書いている。われわれはICT（情報通信技術）により言語行動がひとりの人間に帰することができなくなるほど、起源としての表現主体をもとめてゆくことになるのかもしれないが、すでに述べたように、それが人間的な方向だという認識は明らかな錯誤である。

¹²第1号に関連して、斉藤&川澄（2003：5 ff.）は次のように指摘している。「『パソコンを使えない人がいるようだ。講習会に出てください』と言っても、本当に出てほしい人は出てこない。…情報弱者の問題は、本人ではなく、技術を提供する側が解決しなければならない」。かかる技術と言語表現との関係は [3.3]で、第3号（メディアの速度）に関連する問題は [3.2]で言及する。

¹³デジタルなメディアでは、情報の受けとり方を読み手が決定できる。例えば、映画をDVDで観るかオンライン配信で観るか映画館で観るかは、読み手がどのような身体的快感を求めているかに依存している。映画（＝デジタルデータ）は映画であるより前にタイトルによって商品化され、上演において個々のメディア（＝映画）となるとときに金銭と交換される。

¹⁴同様に、外部に客観的な世界が実現するからこそわれわれは書くことができる。つまり、「書くとは、あなた自身のパロールを他人たちが勝手に閉じるのに委ねることなのです。そして、エクリチュールとは、われわれがけっして答えを知ることのない一つの提案に他なりません（バルト1972：379）」。

¹⁵観念上の対立と現実上の対立についてはWilliams（1985：160ff.）参照。

¹⁶例えば、科学と疑似科学との境界を疑うことが持つ不利益に関してはフリードランダー（1997）参照。また、科学の中にも境界が必要である点は、同書10章及び山崎（2002）参照。

¹⁷このことは、次のようにいうこともできる。「単なる主観論では個々が勝手なイメージ世界を描いているというだけだが、それでは生物は生きてゆくことができない…いわゆる『客観世界』をわれわれが信じる根拠はここにある。『客観世界』が存在するというのも、とりあえずそういうものが存在するとみなして行動したほうが生存上好都合で、コミュニケーションも成功する場合が多いためだ（西垣1994：275f.）」。もちろん、このかぎり、客観的世界の真実を究極的に知ることができないという議論（不可知論）はありうるが、感覚的経験を超えて客観的世界が実在しないという議論（反実在論）はわれわれの利益にはならないだろう。

0.2.3. 文体論の起点

特定のシステムの作動に決定的な外的コード（秩序）や究極的な内的コード（規律）が必要だということは論理的必然でない。また、コードが外部に指定されたり、内部に備えつけられたりしなくとも良いところでは、因果律は線的でない¹⁸。このことを表現において立証するには、e-textの存在を指摘するだけで十分だろう。テキストは、「表現主体」という備えつけのコードも、「表現法」（永尾1975：1，1992：103）といった外的コードもなしに成立すると考えられ、線的な因果性によって理解されるべきものでない。また、読みが連続的な処理によるとすると（[2.2.5](#)）、文を超えたところには文の継起的な連鎖以外のものではなく（バルト1979b：5）、テキストに統一性と構造とを予言するものは、読みにおける体験的な理解（身体を通じた再-生産）だと考えられる。その度々の異質性の体験でなく、体験の異質性が重要なのであれば¹⁹、そこは記号論的読解の場であろう。ボルター（1994：341f.）が「コンピュータが約束するのは、言語とコミュニケーションに関する記号論的な観点が具体化されるということだ」と述べるように、ICTは言語とコミュニケーションの議論にかたちを与えることになるのであり、文体論もそこを出発点と定めるべきであろう。そのとき、紙のテキストはe-textの下位類と理解されることになる。

要約：われわれは世界を表現するために言語（記号）を用いる。表現の研究が人間の学を標榜すべきからには、言語をコミュニケーション行動やテクノロジーにおいて考えないのは片手落ちである。また、文体論は、ことばをわれわれの外部に実在するモノと見做すことに基づく。議論を具体化するという点で、文体論はICTを議論の起点とすべきである。

¹⁸端的には、並列定義と視点循環（タークル1996：232-234）などとして知られる。例えば、現実とヴァーチャルリアルとは両立するもので混同されるものでない。その区別は誰にでもでき、実際にほとんどの人はそうしている。問題はむしろ過剰な区別に際して生じる。過剰な区別が視点の循環を困難にするとき、われわれはその区別を身体的基盤（皮膚の内側と外側との知覚）に求める。「それが、情報からなっているのか（バーチャル）、原子からなっているのか（リアル）を見分ける唯一の方法は、口に入れて食べてみるしかない（Tiffin and Terashima2002：36）」というわけである。しかも、身体がすでにテクノロジーとのハイブリッドなのであれば、視点は容易に混同されることになる。

¹⁹俗な言い方をすれば、面白いものは何度読んでも面白いのである。それは「効果」と呼ぶことができる（[0.3.2](#)）。

0.3. 研究方法と対象

0.3.0. はじめに

本節では、本論の用語の簡単な規定を行なうとともに、研究の具体的対象について述べる。

0.3.1. コミュニケーション について

本論では、コミュニケーションにおいて文体を考えるという立場をとる。一般に、コミュニケーションとは、受け手の行動変容を意図して用いられた信号ないしは儀式化されたディスプレイ（クレブス&デイビス1991：369、ドーキンス1993：291f.）をいう¹。コミュニケーションは、
12 協調的というより競合的であることを基本とする行動のやりとりであり、そこでしばしば見られる協調は、競合の結果である（ドーキンス1991：264-300、Dawkins and Krebs 1978）²。一般に、コミュニケーションには、二個体が必要とされる。しかし、言語的コミュニケーションで求められるものは、意図と解釈、つまり、発信点と受信者とである。ここで、発信点は必ずしも人である必要はなく（エーコ1980：19）、必ずしも擬人化されるものでない（中村1974：7f.）。

言語的コミュニケーションでは、テキストを介して「私」に抵抗し、また、それを操作しようとする「他者」に出会う。ここで、「私」を 読み手 と呼び、「他者」を 書き手 と総称する。書き手は、その利益のために読み手を操作しようとして意図するものと見做される。コミュニケーションに意図が関与することは、それが情報と関わる唯一の方法でないことを示している。書き手は、「表現主体」などと呼ばれてきた統一的自己でなく、むしろ読み手の/に対する環境の一部と言い換えられる。読み手の読みの可能性を差し向けるものが アフォード テキスト であり、そこには物質的な実在が支えとして必要になる（0.2.）。読み手は、書き手の意図に抵抗・対抗するが、マニピュレート コミュニケーションが成功裡に遂行されるときには、おおむねその支配に服している（テキストが読み手を制御するわけではない。読み手が、テキストの可能にしないものさえ可能であると主張しうることは、その端的な現れである）。また、コミュニケーションの自然な秩序の用意として、テキストには分割と結合の構造的な方法が与えられている（3.5.）。環境は、行動者に様々な行動の手がかりを提供するもので、埋め込まれた行動を引き出したり要求したりする。ギブソン（1985）は、

¹ここでいう信号やディスプレイとは、あとで考察する「表現」にほぼ等しい。コミュニケーションが、相互理解の手段でないという考えは、言語に関しても特に珍しいものでない（例えば、小林1972、森1988など）。ここでは、むしろそれが選択進化するという点を重視すべきだろう。また、行動の変容は一時的なものだけでなく習慣的な変更も含むものである。例えば、Kerr（2001）は、階段の利用を促すバナーメッセージ（貼紙）がショッピングセンターの来客の行動変化に持続的な効果を持つことを実証している。

²人は何をしたいと思う人になりたいかによって何をしたいと思う。このように、そうしたい人でありたいがためにそうしたいと思うということは、利他行動を欲する利己主義があることを意味する（例：親切な人になりたいという利己的欲求は親切にするという利他的行動でこそ満たされる）。ただ、それは意識の問題ではない（何かでありたいと思うことは、人目を気にしてなされるのであってはならない）し、また、利他行動を利己主義に基づいて記述することは、すべての行動の根拠を利己性に求めるということでもない。利己性は、どのような生物もそれ自体にとっての利害と致命的なやり方で関わることを拒否できない（ことがありうる）という事実の理論的な帰結にすぎない。

このことを「アフォーダンス」と呼んでいる。われわれは、事物の配置や人工物によって行動の手がかりを埋め込んだり、他個体の行動を変化させたりすることができる（日常的な行動が、空間の一定の秩序に支えられていることについてはKirth1995も参照）。環境に行動の様々な手がかりが埋め込まれているように、テキスト（空間）には、コミュニケーションの手がかりが埋め込まれ、また、部分テキストは一定の方法で構造化されている。そのとき、部分の構造化の度合いの低い話されたテキストでは、時間による構造化が行なわれる（書きことばについては [4.3.](#)）。

シービオク（1985：184）は、「情報の本質は変化であり、記号現象の前提は生命である」という。人間が情報システムであっても生体システムであっても（事実はその両方だろうが）記号の使用が生命の本質に関わっているのであれば、基本はAと非Aとを 分ける ということである。記号の使用において、コードは、あるものをあるものに関係づけるときに働く変換規則であり、その重要性は、それがつねに変換の過程でAと非Aとを分けてゆくところにある。いいかれば、コードは関係化の原理・媒介項であり、ある形式を別の形式に差し向けるものはすべてコードである。コミュニケーションのコードは、操作するものと操作されるものとを分け、（両者の関係には知覚可能な媒介が想定されるので） 見られるもの と 見るもの とを分ける。ここで、操作するものの側の可能性は、明らかに操作されるものの感覚の仕様に制限されている。環境が人間の身体に対して普遍的な可能性を提示するものであるとすると、身体と環境との関係こそがコミュニケーション行動の最も基本的な図式となる。また、読み手は常に 見るもの であり 操作されるもの だが、 見られるもの と 操作するもの とが一致するとは限らない。このことは、文字を基盤としたe-textにおいて書き手と読み手との境界の曖昧化としていっそう明らかである。 見られるもの の物理的デザインは、 見るもの を能力や嗜好において分け、 見るもの は 見られるもの を価値や信用において分けようとするといえよう（視覚システムについては [4.2.1.](#)、相互の分類については [4.3.2.](#)）。コミュニケーションの参加者は、互いに互いを分類し評価しあうのである（「分ける」ことについては、柳川2001を参照）。この競合的關係の中で、書き手は著作者の権威に訴え、読み手は解釈装置 = 文化的・社会的な道具立ての権威で対抗する。表現者と読み手との一致という理念的平等性の要求は、コミュニケーションが力関係の競合を伴うものである限り、常にあり続けるものである。しかし、書き手であることと読み手であることとはは循環的な関係が成り立っている。これは、発話順序機構などとして直線的に制度化されている部分も大きい。エコーミー ターンテイキング 金銭についていえば、書き手として受け取る報酬と読み手として支払う代金とが均衡していることが望まれる。ICTの発達の中で既存の著作権がさまざまな形で侵害されているのは、それが理念的平等を可能にする技術という面を有するからだろう（しかし、強固な資本主義システムの中では新たな貧者が生じるだけである）。

われわれの行動は、しばしば完全に無意味であったりひどく突飛であったり、読み手の行動の変化がコミュニケーションにおける力関係に直接起因するものばかりでないことは明らかである。また、読み取り可能な媒介のすべてが、書き手・読み手の力関係の競合・調整という時間的過程のうち生じたものであるという確証もない。世界の物理的現実を通じ、多くの偶然性も介在するであろう。従って、環境による制約を考えるとときには、読み手にとって第一義的な環境要因が（想定される）書き手と（他の）読み手の存在であったとしても、各人の嗜好やメディアなどの経済的・物

理的要因による干渉を考慮しないわけにはゆかない。環境・行動者・両者の相互関係は、いずれも動的に変動する系だといえる。

0.3.2. 表現 について

表現には、^{ノイス}過程としての動態と^{プロダクト}結果としての静態との二面を想定することができる（木坂1992：91ff.）。この見方によれば、表現は、特定の内容をでなく、表現に至る複雑に接合された動き・働きが現れるプロセスを表現するものである。表現に先だって表現すべきものはないので、「芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するものではなく、見るようにすることにある」（クレー1973：122）というアイディアは、表現の本質を良く言い表わすものと思われる。われわれは、何かを言うために話すのでなく、話すときに何かを言うのである。また、行動によってその行動の12 意味を知ることがあり、ことばの意味を知るためには話されなければならないのである。ここで、表現の静態は 見えるもの であり、言い換えれば、すべてが表面である。この全面的可視性の要求によって、言語表現はテキストの形をとるよう目指される³。他方、表現の動態は、行動が存在を規定し、存在が意識を規定すると考えるとき⁴、行動と存在との関係であると考えられる。また、表現における動態と静態との関係は、可能性と現実性、全体と部分との関係に比較でき、表現主体の選択としてよりも、¹² そうでありえた表現 の存在を示すものと解される。

表現とコミュニケーションとは、必ずしも同義語でない。コミュニケーションは、コミュニケーションを 意図 して働き掛ける側面がある⁵が、表現に意図は必要でなく、表現を意図した表現は芸術である（ヤコブソン1973：192）。表現は、ある 予測 を含んでいるということ是可以する。ある環境がある形式や形態の存在を有利にするということがある場合、その関係も形式・形態の構成要素の一つであると見做すのなら、特定の環境が特定の形式や形態を呼び出す傾向があるという言い方は無理なものでない（但、その記述は困難であろう）。予測とは、表現に（解釈の）内部

³表現がテキストを目指すのであれば、表現がテキストを用意するといえそうに思える。また、テキストが読みをアフォードするなら、表現は読みの可能性の具体的な源泉である。同時に、（読みを実現するところの）読み手は潜在的な書き手であり、書き手の可能性の源泉である。

⁴どのような言語を通用するかは、その社会・経済・文化的環境と担い手の選択とによって決まる。ネトル&ロメイン（2002）は、民族的言語・文化の消失を担い手の主体的選択と捉える「良心的な」態度に対して、豊かさと文化との二者択一を迫る論理が暴力的であると指摘する。民族的言語を守ることと経済的豊かさとの両立しうる関係、その方法こそが示されなければならない。そこで提示するのが、生物-言語多様性という視点である。「ある言語の使用を選択することは、特定の共同体のアイデンティティを持つ、ないしはそこに帰属するという行為である。自分が何ものであるかの選択は人間の権利であると、私たちは信じる（ネトル&ロメイン2002：270-271）」という立場は支持すべきものだろう。言語行動が人の存在を規定し、存在がその意識を規定するのである。したがって、意識は行動に随伴し（一定のフィードバックを含むとしても）非因果関係におかれるものと考えられる。

⁵コミュニケーションの意図性について、ドーキンス（1993：291）は次のように説明している。「Aの行動がBの感覚器官を操作し、その結果としてBの行動が変わるとき、AとBとの間にコミュニケーションが成立したという...『操作する』ということばは『影響を与える』ということばよりも好ましい。というのも、『影響を与える』ということばでは、Aが偶然にBの行動を変えてしまう場合も含まれるからである」。

モデル化による制約を課して表現を制御するもので、表現に課された条件（評価の基準）として一般性を持つが、特定の効果を保証（エンコード）するものでない。一方、効果という語は、読み手に解釈を遂行させること、あるいは解釈を通じて読み手に期待される行動変容に対して用いることができる。但、書き手の意図と説得を目指すことは同じものではない。例えば、「限られた人を相手とする言論が説得を目指すものであり、普遍的聴衆を相手とする言論は確証を目指すものである。（ペレルマン1980：42）」。また、書き手の意図は、受け手にテキストを解釈させることで半ば成功しているもので、内容にかかる説得を問題にする弁論術とは異なる。

われわれは、物質をでなく情報を知覚することで世界と関わりあうもので、物理的世界の中にわれわれを位置づけるのはその差し向ける情報の知覚である（ギブソン1985）⁶。バルト（1988：89f.）も指摘するように、モノは、常に モノ+記号 として存在し、オレンジは、ここにオレンジがある という指示的で存在広告的なメッセージと オレンジは果汁が多くて渴きをいやす という言表的で機能表示的メッセージとを換喩的關係において構成する。われわれは、情報を通じて物質的基盤と関係しあうのである。世界の中で自発的に行動するものは、単に存在が複雑なだけでなく知的である。何ものかが 知的 であるとは、その振る舞いが知的に見えるということであり、知的な存在は、環境との相互作用の中で、相対的に高い情報の濃度を保ちながら、情報と関わるものでなければならない。したがって、あらゆる表現は知的であり、表現にかたちを与えるのが文体である（0.3.3.）とすれば、知的な振る舞い=知的なデザインを通じて、表現と文体とは関係づけられるであろう。このことは「ミームとしての文体（拙論1996⁷）」と表現できる（ミームという意味では、要素と結合則との共に粒子的な単位からなるコードとも言い換えられる。スタイルをミームとの関わりで捉える視点は吉岡2000にも見られる）。本論では、ミーム（ドーキンス1991：301ff.）という語をとりたてて強調はしないが、文体をミームと見るのは悪いアイデアではないと考える。ミームの概念は、ネオダーウィニズムに従いながら獲得形質が遺伝する方法を示すものであり、したがって、ミームはあらゆるチューリングテスト（Turing 1950）にパスできるからである。そうであれば、文体は人間が言語において表現できることはすべて表現できることになるからである。また、たとえばコンピュータの出力（ディスプレイの上の振る舞い）を知的と見做されることは、書き手から物理的に切り離された文献上の言語表現が知的だと見られることと

⁶但、ギブソン（1985）による知覚とコミュニケーションとの厳格な区別は、嶋田（1991：244）が指摘するように、いささか極端に思われる。われわれがコミュニケーションするからには、物理的環境の中に存在しながら、記号・情報の人間的なバージョンとしての環境（内部モデル）とともに生きるというべきだろう。普遍的な世界とは、常に物理的世界であると同時に「環境世界（ユクスキュルほか1973）」でもあろう。そのなかで、われわれは、身体を通じて接続しうる現実の世界（認識可能な世界）を表現しうるかぎり表現するものと考えられる。

⁷内山（1996）での主要な主張は以下の通り。《文体は、狭義には要素と結合則との共に粒子的な単位からなるコード（ミームとしての文体）であり、広義には、読み手の参与（読み・解釈）によるテキスト成立過程の副産物（個別言語的な解釈戦略と非言語的な雑音）として生じるものと理解される。文体には、発信段階に位置するものと受信段階に位置するものがあるが、いずれもコード（「メッセージに対して、可能性の総体であるとともに、結合及び適用規則の体系」）として記述可能である。それぞれは、発信者の操作への意図に連動したコードによる受容と、それに対抗する受信者の「読み」という道具立てを介した解釈（言語学的意味以上の意味作用）とに対応する。したがって、文体をコミュニケーションの中で考えるかぎり「文体論は、二重の領域を有している」。但、文体を深層と表層の両方向から捉える（基底の構造からの変形と付加的なノイズ）二元的視点は問題が大きい。

同型である（ウォーナー1999：50ff.）といえる（また、コンピュータのアウトプットを書きことばと見做すことは、そこに本来的な音声的対応者がいない以上、書きことばを話しことばの不完全な再現と見ることから、現実的にわれわれを解放する）。この言語的コミュニケーションのチューリングテストは、表現に「一人称」を想定する習慣⁸として現れるものと考えられる。

0.3.3. 文体 について

文体論とは 文体 を研究する学問領域であり、そのとき言語の形態に基礎を置くものである。その場合、文体論が、テキストの内容を説明するのではなく解釈を解放する（ウィドウソン1989：2）と考えることは重要であろう。これは、テキストが唯一の起源に還元できないものである一方、テキストの（物理的）形態が解釈に何の影響も及ぼさないとも考えないということである。テキストに対して 正しい解釈はないが、間違った解釈はある という原則を想定するのである。このような考えは、例えば「文章」と呼ばれるような実体的単位が存在しないこと（4.1.^{リニア}）に励まされている。現代のメディアが明示的に教えるように、表現はむしろ引用的な過程であり、線の表現の起源として独創的な書き手というものもない。書き手は、書籍の装丁と読み手の想定の中に存在し、権利と責任の主体としても要請される（フーコー1990）。一方、読み手は編集者とでもいべき地位にある。そうであれば、テキストを解釈する読み手には、部分テキストの分割・結合の構造的な方法が提供されているはずである。つまり、部分テキストは様々な可能性を（読み手に）差し向けるが、非現実的な可能性も同時に差し向けるのである。

「迎二十年の記」で、文体の研究は「表現のすがたとしての文体の論」とされている。長嶋（2000）によると、「すがた」という語の記述的な意味は、(1)あるものの存在に依存し、(2)専ら視覚によって捉えられ、(3)個として周囲から際立って存在し、(4)ある思いを喚起するという4要素を含むものになる。このことを認めて、「表現のすがた」にあてはめるならば、(1) 表現 の存在に依存し、表現は物理的実在を必要とすること（したがって、文体は表現に対して、言い換えれば書き手と読み手の力関係に対して適応的である必要がある）、(2)表現が「見えるようにすること」であること、(3)表現は部分であれ全体であれ（読み手にとって）一定のまとまりが同定できること、(4)表現が 読み手 の認知環境を改変しうることと見ることができよう。文字通りに解釈すれば「表現のすがた」とは、表現という事柄ないしは出来事が、ひとつのモノとして受けとられることをあらかずものだと考えられる⁹。このような見方は、本論の考えに合致するものであり、本論は、文体を「表現のすがたに対する大文字の遺伝子型（GTYPE）」とする規定（拙論1999a）を採用することにしたい。

Langton(1989:22f.)は、GTYPEを以下のように定義している。

⁸書き手と読み手との力関係の競合を考慮するとき、一人称を想定する習慣は、意味ある情報を受けとるための戦略と見られ、潜在的な書き手である読み手の利益に一致すると思われる（4.3.2.）。

⁹この認識は、同じく『表現研究』の扉に掲げられる「なぜ文章は積みかさねうるか」という問いの答えを含んでいるように思われる。つまり、モノあるいはモノの機能は単純に加算できるのである。（2.4.）

0.3. 研究方法と対象

われわれは、秩序的でない下部規則の集合を指して『一般化された遺伝子型』（またはGTYPE）という術語を使用することになる。また、われわれは、特定の環境で現働化された下部規則の相互作用から創発する行動と/や構造を指して『一般化された表現型』（またはPTYPE）という術語を用いる。GTYPEは、本質的に、複雑な機構の仕様書であり、PTYPEは特定の環境下での相互作用の結果としての振る舞いである...要するに、GTYPEは、振る舞いを構成する個別的な一要素に対する下部規則であり、専ら要素の集合体の中での局所的な相互作用に関わる。PTYPEは、GTYPEの非線形で局所的な相互作用から創発する（物理的で具体的な）振る舞いである〔引用者訳〕。

また、GTYPEとPTYPEの間には次のような関係がある。まず、PTYPEはGTYPEから最大限の可能性（相互作用・組み合わせ）をひきだすため、特定のGTYPEから創発するPTYPEを予測する汎用の手続きは存在せず、逆に、特定のPTYPE(の特徴)は複雑な相互作用によるものであるため、特定のPTYPEを可能にするGTYPEを特定する汎用の手続きも存在しない(Langton1989:23ff.)。但、これは常に唯一の正しい答えを導き出す計算方法がないということで、答えがないとかそれを知ることができないということではない。

すでに述べたように、表現とは知的に見えるものである。また、本論はこのことを認めるのだが、知的であることが知的に見えるということであれば、知的に見えるということは知的に設計されていると見做されるということである。したがって、文体はその知的なデザインデザインの原理として、その原理はテキスト空間において自らを最大化しようとする方策であると思われられることになる。また、文体論とは、表現をさまざまな手段で解体して¹⁰GTYPEの可能な限り一般的な記述を試みるものとなる。但、ここで注意すべきは、文体が表現の起源リエンジニアリングなのではないということである。ドーキンス(1987:328ff.)の比喩を借用すれば、レシピであって設計図でないということであり、バルトステレオタイプ(1979a:112f.)の言い方を借りれば、定型であって原型でないものである。但、本論は、文体がテキストの表現に本質的なものであり、かつ決定的な影響を与えると考えるが、文体が表現をつくっているということとはできない(これは遺伝子が生物をつくっていないことと同じである)。表現をつくっているのは、たとえば言語表現アーキタイプにあっては文字なのである。

0.3.4. 研究の具体的な対象

本論は、コミュニケーションに基本を置き、文体を「表現のすがたに対する大文字の遺伝子型(GTYPE)」とする作業定義にしたがい、現在の言語状況を踏まえた種々の事象を検討することによって 文体 の考究に貢献しようとする。具体的には、電子的・電光的环境に実現するe-textと紙や音声などを素材とするものとの比較を、表現的な事象としてとりあげてゆく。

本論が特にe-textをとりあげるのは、理論が実践より高尚であるとしても、「モノ」の直接性は軽視されるべきでないからである。たとえば、認知科学の中核は「人工知能(AI)」と呼ばれるコンピュータ工学だったといえるが、世界最初の「認知科学者」チューリング(ライバー

¹⁰これは、直接的な操作のレベルが表層であることを否定するのではない。一般に、人為的な選別は表現型に機能することで十分である。卑近な例：強い野球チームを作るには野球選手の子どもを集めるより、野球の巧い者を集めたほうがいい。

1994 : xiii) の接近法は「何かが行ないうことを証明する唯一の妥当な方法としてはそれを実際に行なって見せる以外になく、何かが存在しうことを証明する唯一の妥当な方法としてはそのものを実際に建設して見せる以外にない、という場合もある」(ライバー95) というものであった。人工知能が、知能の工学的構築を目指すのに対して、生命の工学的構築を目指す研究は「人工生命 (AL)」と呼ばれる。Dennett (1995) は、ALが哲学の諸問題にいろいろな手掛かり・方法を与えると同時に、哲学はそこからさまざまな問題をも引き出すことができると指摘している。問題や課題となる事象の工学的構築は、言語の理論にも有効である。ランドウ (1996 : 338) は「ハイパーテキストは理論に対して経験的な実験室を提供する。実践や、改良、拡張の手段となる。言い換えれば、想像力を試す空間となる」といい、ボルター (1994 : 291) は「今や電子メディアが、デリダが印刷で散々苦心しなければ書けなかったもの、あるいは『グラ』での凝った活字表記で具体化しようとしたものをたやすく表示することができる」という。分散型ハイパメディア (その実

12 体はe-textである) は、言語や文学の理論に対して、さまざまな経験的事実と新たな理論的問題とを与える。そして、重要なことは、それらが文体論の何を明らかにできるのかでなく、文体論がどのような問いを投げ掛けることができるのかということにこそあるのである。

要約 : コミュニケーションとは、受け手の行動変容を意図した表現である。表現とは、見えるようにすることであり、その見えるものである。表現のすがた に対する大文字の遺伝子型 (GTYPE) が文体である。文体論とは、表現を解体してGTYPEの記述を試みるものである。本論はその好適な対象としてe-textを議論の対象にする。e-textは テキスト の実体であり、且つ テキスト をつくりあげる手続きでもあるからである。

引用・参考文献（序論）

- 安部公房（1975）『笑う月』新潮社.
- 安東修平（2001）「表現研究の歴史」,飛田良文 [ほか] 編『表現』（現代日本語講座 2）pp.185-210, 明治書院.
- 井口時男（1996）「文学は文学をどう考えているか」,井口時男・往住彰文・今山真著『文学を科学する』（インターレクチュアライブラリ 1）pp.60-96, 朝倉書店.
- 今井文男（1975）『文章表現法大要』笠間書院.
- ウィドウソン, H.G.（1989）『文体論から文学へ』田中英史, 田口孝夫訳 [1975], 彩流社.
- ウォーナー, ジュリアン（1999）『本とコンピュータを結ぶ』高山正也, 柳与志夫監訳; 上保佳穂, 鎌倉治子, 河合美穂訳 [1994], 勁草書房.
- 内山和也（1996）「文体試論」広島大学卒業論文.
- （1998）「終わりということ～会話における時間と虚構とについて」, 『広島大学日本語教育学科紀要』第 8 号, pp.85-90.
- （1999）「共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文.
- カステル, ロベール（1990）「画像と幻想」山形熙訳 [1965], ピエール・ブルデュエ監修『写真論 その社会的効用』（叢書・ユニベルシタス 290）山形熙・山形直子訳, pp.287-329, 法政大学出版局.
- 桂英史（2003）「ハイパーテキストなど存在しない」, 兵藤裕己 [ほか] 著『テキストとは何か』（小森陽一 [ほか] 編集・岩波講座文学 1）pp.285-308, 岩波書店.
- ガデ, フランソワーズ（1995）『ソシユール言語学入門』立川健二訳 [1987], 新曜社.
- 加藤秀俊（1972）『情報行動』（中公新書306）中央公論社.
- 木坂基（1992）「日本語表現法 日本語表現法研究の構想」, 奥田邦男編『日本語教育学』（教職科学講座第25巻）pp.88-102, 福村出版.
- 喜多壮太郎（2002）『ジェスチャー 考えるからだ』金子書房.
- ギブソン, ジェームズ, J（1985）『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』古崎敬 [ほか] 訳 [1979], サイエンス社.
- 久保光志（2000）「芸術における『規範』と『自己表現』 文体概念の歴史に即して」山田忠彰, 小田部胤久編『スタイルの詩学 倫理学と美学の交叉』pp.136-159, ナカニシヤ出版.
- クレイ, パウル（1973）『造形思考〔上〕』土方定一 [ほか] 訳 [1956, 1971], 新潮社.
- クレブス, J. R. & N. B. デイビス（1991）『行動生態学（原書第 2 版）』山岸哲, 巖佐庸共編 [1987], 蒼樹書房.
- 黒崎政男（1987）『哲学者はアンドロイドの夢を見たか 人工知能の哲学』哲学書房.
- 国立国語研究所（1977）『比喩表現の理論と分析』秀英出版.
- 小林英夫（1972）『言語学通論 言語活動の構造と変遷の理論の書』（改訂第 7 版）, 三省堂.
- コロミーナ, ビアトリス（1996）『マスメディアとしての近代建築』松畑強訳 [1994] 鹿島出版会.

- 齊藤正男・川澄正史（2003）『ITで人はどうなる 人間重視の情報技術を』東京電機大学出版局.
- 齊藤博（2000）「計時と象徴営為」, 齊藤道子編著『時間と支配：時間と空間の文明学』pp.125-198, 東海大学出版会.
- 坂本百大（1987）「インターフェイスの記号論」, 日本記号学会編『文化のインターフェイス境界・界面・越境』（記号学研究7）pp.13-26, 東海大学出版会.
- シービオク, T.A.（1985）『自然と文化の記号論』池上嘉彦編訳, 勁草書房.
- ジェイムソン, フレドリック（1988）『言語の牢獄 構造主義とロシア・フォルマリズム』川口喬訳 [1972], 法政大学出版局.
- 嶋田厚（1991）「情報の定義について J.J.ギブソンの投げた石」, 日本記号学会編『かたちとイメージの記号論』（記号学研究11）pp.239-248, 東海大学出版会.
- ソシュール, フェルディナン・ド（1972）[1940]『一般言語学講義』小林英夫訳 [1915, 1916, 1949], 岩波書店.
- タークル, シェリー（1996）『接続された心 インターネット時代のアイデンティティ』日暮雅通訳 [1995], 早川書房.
- 田島宏（1991）「文体の概念をめぐって 『文体』とStyle」, 日本文体論学界編『文体論の世界』pp.17-21, 三省堂.
- 立川健二・山田広昭（1990）『現代言語論 ソシュール・フロイト・ウィトゲンシュタイン』新曜社.
- 土屋俊（1986）「記号と情報」, 中村雄二郎 [ほか] 著『記号 論理 メタファー』（新・岩波講座哲学3）岩波書店.
- ティスロン, セルジュ（2001）『明るい部屋の謎 写真と無意識』青山勝訳 [1996], 人文書院.
- ドーキンス, リチャード（1987）『延長された表現型 自然淘汰の単位としての遺伝子』日高敏隆, 遠藤彰, 遠藤知二訳 [1982], 紀伊国屋書店.
- （1991）[1980]『利己的な遺伝子』日高敏隆 [ほか] 訳 [1989, 1976], 紀伊国屋書店.
- （1993）「コミュニケーション」, デイヴィッド・マクファーランド編『オックスフォード動物行動学事典』木村武二監訳 [1981, 1987] pp.291-307, どうぶつ社.
- 永尾章曹（1975）『国語表現法研究』三弥井書店.
- （1988）「表現学再考—シンポジウムの司会を終えて—」, 『表現研究』第48号, pp.17-23.
- （1992）「日本語の文法について」, 永尾章曹編『日本語学』pp.103-134, 和泉書院.
- 長嶋善郎（2000）「『姿』の分析」, 山田進 [ほか] 編『日本語 意味と文法の風景 国広哲弥教授古稀記念論文集』, pp.161-166, ひつじ書房.
- 中村明（1974）「文体の性格をめぐって」, 『表現研究』20号, p.1-11.
- 西垣通（1994）『ペシミスティック・サイボーグ 普遍言語機械への欲望』青土社.
- ネグロポンテ, ニコラス（2001）[1995]『ビーイング・デジタル』（新装版）西和彦監訳, 福岡洋一訳 [1995], アスキー.
- ネトル, ダニエル&ロメイン, スザンヌ（2001）『消えゆく言語たち：失われることば、失われる世界』島村宣男訳 [2000], 新曜社.
- ネルソン, テッド（1994）『リテラリーマシン ハイパーテキスト原論』ハイテクノロジー: コミュニ

- ケーションズ社訳 [1980, 1992], アスキー.
- 波多野完治 (1958) 『心理学入門 暮らしの中にはたらく知恵』 光文社.
- バルト, ロラン (1972) 『エッセ・クリティック』 篠田浩一郎, 高坂和彦, 渡瀬嘉朗訳 [1964], 晶文社.
- (1979a) 「文体とそのイメージ」 沢崎浩平訳 [1966]. 『現代思想』 7(4), pp.106-113, 青土社.
- (1979b) 「物語の構造分析序説」 花輪光訳 [1966], 『物語の構造分析』 p.1-54, みすず書房.
- (1988) 『記号学の冒険』 花輪光訳 [1985], みすず書房.
- フーコー, ミシェル (1990) 「作者とは何か?」 清水徹, 豊崎光一訳 [1969], 『作者とは何か』 (ミシェル・フーコー文学論集 1) pp.9-72, 哲学書房.
- フリードランダー, マイケル.W. (1997) 『きわどい科学 ウソとマコトの境域を探る』 田中嘉津夫, 久保田裕訳 [1995], 白揚社.
- ブルデュー, ピエール (1990a) 「写真の社会的定義」 山形熙訳 [1965], ピエール・ブルデュー監修 『写真論 その社会的効用』 (叢書・ユニベルシタス 290) 山形熙・山形直子訳, pp.89-120, 法政大学出版局.
- (1990b) 「統一への信仰と培われた差異」 山形熙訳 [1965], P・ブルデュー監修 『写真論 その社会的効用』 (叢書・ユニベルシタス 290) 山形熙・山形直子訳, pp.17-88, 法政大学出版局.
- ペレルマン, カイム (1980) 『説得の論理学 新しいレトリック』 三輪正訳 [1977], 理想社.
- ボルター, ジェイ・デイヴィッド (1994) 『ライティングスペース 電子テキスト時代のエクリチュール』 黒崎政男, 下田政俊, 伊古田理訳 [1991], 産業図書.
- 丸山高司 (1993) 「表現的存在 歴史的生の存在論」, 『思想としての20世紀』 (岩波講座現代思想) pp.139-186, 岩波書店.
- ムーナン, ジョルジュ (1970) 『言語学とは何か』 福井芳男, 伊藤晃, 丸山圭三郎 [1968], 大修館書店.
- 森常治 (1988) 「文学テキストにおける文学記号の諸問題」, 日本文体論学会編 『テキストの記号論』 (記号学研究 8) pp.25-52, 東海大学出版会.
- ヤコブソン, ローマン (1973) 「言語学と詩学」 八幡屋直子訳 [1960], 川本茂雄監修 『一般言語学』, pp.183-221, みすず書房.
- 柳川範之 (2001) 「『分ける』 ビジネスと情報技術の発展」, 東京大学総合研究会編 『分ける』 (東京大学公開講座73) pp.55-80, 東京大学出版会.
- 山崎茂明 (2002) 『科学者の不正行為 捏造・偽造・盗用』 丸善.
- ユクスキュル, ヤーコブ・フォン & ゲオルク・クリサート (1973) 『生物から見た世界』 日高敏隆, 野田保之訳 [1934, 1940, 1970], 思索社.
- 吉岡洋 (2000) 「スタイルと情報 - メディア論を超えて - 」, 山田忠彰, 小田部胤久編 『スタイルの詩学 倫理学と美学の交叉』 pp.160-185, ナカニシヤ出版.

参考文献一覧(序論)

- 吉田民人・鈴木正仁編(1995)『自己組織性とは何か 21世紀の学問論にむけて』ミネルヴァ書房.
- ライバー,J(1994)『認知科学への招待 チューリングとウィトゲンシュタインを道しるべに』今井邦彦訳[1991],新陽社.
- ランドウ,ジョージ・P.(1996)『ハイパーテキスト 活字とコンピュータが会うとき』若島正,板倉巖一郎,河田学訳[1992],ジャストシステム.
- レプスキー,ジュリオ・C.(1975)『構造主義の言語学』菅田茂昭訳[1966],大修館書店.
- Baudrillard, Jean. Simulacra and Simulation. Trans. Sheila Faria Glase. Ann Arbor: U of Michigan P, 1994; originally published in French by Éditions Galilée,1981.
- Dawkins, Richard and John Krebs. "Animal signals: Information or manipulation?" Behavioural Ecology: An Evolutionary Approach. Eds. J. Krebs and N. Davies. Oxford: Blackwell Scientific, 1978. 282-309.
- Dennett, Daniel. "Artificial Life as Philosophy." Artificial Life: an overview. Ed. C.G.Langton. Cambridge,Mas.: MIT P, 1995. 291-292.
- Kerr, Jacqueline, Frank Eves and Douglas Carroll. "Six-month observational study of prompted stair climbing." Preventive Medicine 33(2001) 422-427.
- Kirsh,David. "The Intelligent Use of Space." Artificial Intelligence 73 (1995) 31-68.
- Langton, Christopher G. Ed. Artificial Life: the Proceedings of an Interdisciplinary Workshop on the Synthesis and Simulation of Living Systems held September, 1987, in Los Alamos, New Mexico. Redwood City; Tokyo: Addison-Wesley P, 1989.
- . "Artificial Life." Langton 1-47.
- Peirce,Charles S.S. Collected Papers of Charles Sanders Peirce 5th ed. Eds. Charles Hartshorne and Paul Weiss. Cambridge,Mas.: Belknap Press of Harvard UP. 1978.
- Tiffin, John and Nobuyoshi Terashima 編著(2002)『ハイパーリアリティ 第三千年紀のパラダイム』寺島信義監訳[2001],電気通信協会.
- Travers, Michael. "Animal Construction Kits." Langton 421-443.
- Turing, A.M. "Computing Machinery and Intelligence." Mind 59.236 (1950) 433-460.
- Williams, Bernard. Ethics and the Limits of Philosophy. Cambridge Mas.: Harvard UP, 1985.
- 「迎二十年の記」,『表現研究』昭和58年以降の各号の扉.

1章 隠喩と換喩

- 1.1 文体論における隠喩と換喩
 - 1.1.0 はじめに
 - 1.1.1 隠喩に関する問題
 - 1.1.2 隠喩と効果
 - 1.1.3 隠喩と理解
 - 1.1.4 隠喩と文脈
 - 1.1.5 隠喩と意味
 - 1.1.6 反復と複製
 - 1.1.7 隠喩と行動
 - 1.1.8 二大原理としての隠喩と換喩
 - 1.1.9 換喩と提喩(1)
 - 1.1.10 換喩と提喩(2)
 - 1.1.11 隣接性の概念
 - 1.1.12 浸透する二極
- 1.2 文体の分類における換喩の機能 ~ 計量文体学 について
 - 1.2.0 はじめに
 - 1.2.1 テクストの分類
 - 1.2.2 原著者推定
 - 1.2.3 文体とパターン認識
 - 1.2.4 操作主義的文体観
- 1.3 表記における隠喩の機能 ~ カタカナ表記語 の機能について
 - 1.3.0 はじめに
 - 1.3.1 日本語の言語表記体系
 - 1.3.2 片仮名語の分類
 - 1.3.3 片仮名表記語の表現効果
 - 1.3.4 コンピュータにおける文字の役割
 - 1.3.5 コンピュータにおける隠喩の役割
 - 1.3.6 片仮名表記語の将来 ~ 理論的予測
 - 1.3.7 片仮名表記語について
- 1.4 文章における換喩の機能 ~ 冒頭 について
 - 1.4.0 はじめに
 - 1.4.1 冒頭の機能について
 - 1.4.2 文章論について
 - 1.4.3 冒頭と呼びかけ構造

1 . 4 . 4 . 文章の完結性と統一性 ～ 「文章」と換喩

1 . 4 . 5 . 冒頭と書き出し

本章では、主に「表現主体」に関連することがらを検討する。

1 節では、予備的考察として本論での隠喩と換喩の概念規定を明確にする。2 節では、「操作主義的文体観」について、特に計量文体学をとりあげて考察する。3 節では、主に隠喩に関わる具体論として、ディスプレイ上の文字とカタカナとの関わりを論じる。4 節では、主に換喩に関する具体論として、文章論における「冒頭」の概念を再検討する。

1.1. 文体論における隠喩と換喩

1.1.0. はじめに

本節では、^{メタファー} 隠喩と^{メトニミー} 換喩の概念について論じる。

1項から7項までは、隠喩が字義通りの意味しか持たず、特定の認知内容に還元できないことを確認し、コミュニケーションにおける書き手と読み手の力関係の上に成り立つものであると論じる。

8項以下では、換喩との関係で位置づけにゆれのある^{シネクドキ} 提喩について考察し、提喩が換喩の一種であると論じる。

1.1.1. 隠喩に関する問題

ブラック（1986：3）は、「隠喩の概念」を研究する際に問題となる7つの問いを掲げている。

「ある事例が隠喩であることを我々はどうやって知るのか」「隠喩であることを見知るのに何か基準があるのか」「隠喩は本義的表現に言い換えることができるか」「隠喩は『無色の意味』に付け加えられた装飾と考えてよいか」「隠喩と直喩にはどのような関係があるのか」「もしある隠喩が『創造的』であるとするれば、それはどのような意味においてか」「隠喩を用いる際の眼目は何か」

この一覧が、隠喩に関する問題のすべてであるわけではないが、いずれも重要なものと考えられている。本節の議論は、以上のすべてに明確な解を提示するものではないが、^{メタファー} 隠喩と^{ジミラー} 直喩および^{アレゴリー} たとえ話（寓意）との比較を中心に 隠喩の概念 について考察することにしたい。

1.1.2. 隠喩と効果

まず、本論では隠喩を次のようなものと考え、以下の項で詳しく論じてゆく。

隠喩は、事実の言及である。その点では 現実世界で偽となろうと、字義通りに真となる想像上の可能世界において受けとられようと 隠喩は 字義通りの意味¹しか持たない。しかし、単に字義通りに受けとるだけならば、それを隠喩と呼ぶ必要はない。なんとなれば、事実を誤認した言明と隠喩とは解釈において明らかに区別されるのであり（例：「山猫は狼である」・「男は狼である」）、しかも、「偶然的もしくは非意図的な隠喩は紛れもなく存在しうる（ピアズリー1986：40）」のである。隠喩は、隠喩として解釈され、それ以上の効果を持つが故に隠喩なのである。この点で、隠喩であることは、形式によってでなく参与者間の力関係によって決まると考えられる。隠喩は隠喩として解釈されるものであり、隠喩の解釈者は人間でしかなく、われわれは可能世界（そうでありえた世界）と現実世界（そのようである世界）との関係を日々打ち立てながら

¹文は、それが情報を担うかぎり評価を伴う。文の意味は一義的には真理値であると見做されてよい。

²、極めて常識的に生活している。隠喩は、聞き手の日常性を脅かす面があり、聞き手は日常性の枠内で最も合理的な選択として「直感」を用いて常識的に解釈しようとする。そのとき、既存の解釈装置を利用して、常識に訴えることも少なくない。その点で、隠喩は約束や嘘と似ている。われわれは、現実世界の常識によって³、隠喩を類似性の指定であるととる。例えば、「男は狼だ」は隠喩でありうるが、「男は狼の一種だ」「男は狼の類いだ」「男は狼と同じだ」がそうだとはいいいにくい。これは、形式の問題ではなく、後者が日常性を脅かさないからである。しかし、後者の表現も隠喩的なものであるということはできるであろう。隠喩の本質は隠喩として解釈されることだが、隠喩の解釈過程は類似性や類包含関係に関する認知過程を含むことが多いのである。類似性の指定であるという解釈を導くことは、隠喩の効果の一つであるといえる。隠喩は、その解釈に特別の経路があるのでなく、読み手において、その常識を脅かさないよう合理的に解釈されるときに様々な経路をとるものと考えられる。そして、そのときに読み手の用いる戦略が類似性の指定と受けとることである。他方、書き手が採用する戦略は、意図した認知内容の伝達でなく、隠喩が推論を用いて特定できる根拠を持つと信じさせることである。隠喩が類似性の指定と解釈されるとき、「XはYである」という表現形式の隠喩⁴は「XがYにZにおいて類似していると思ふ」という3項関係に組み替えられる。ここで、類似性が三項関係として提示されていると考えることは重要である。ブラック(1986:13)は、隠喩が「隠れた類比または類似を提示することだとする考え」を比較説と呼んでいる。しかし、これは対象Xと対象Yとがpを共有している、あるいは、対象Xにおけるpは対象Yにおけるqであるという関係で、本質的には二項関係である。そのかぎり、XとYとは互いに似ているがゆえにpを共有しているにすぎない。一方、Searl(1979:101)も「類似性が隠喩の了解においてはしばしば一役買うとしても、隠喩的言明は必ずしも類似性の言明ではない」と指摘しているように、隠喩の解釈では、類似が成り立つための視点として第三項Zが求められるのである。つまり、XとYとは、Zによらずに互いに似ていることはないのである。ここで、隠喩は「事実の言及」であるので、整合的な説明としては事物の中/間に探索されるべきだが、語の中/間に探索するのも読み手の裁量といえるだろう。但、多くの隠喩は、XとYとを入れ替えることができない。例えば、「男は狼だ」と「狼は男だ」とは等価に受けとられはしない⁵。これは、視点Zの主観的な構成を通じ、Xをそれが持ちうる性質を備えたXという個別例、YをYに含まれる個別例が持ちうる性質を備えたYという部類として理解するということを意味している(この点

²意味論における可能世界概念の必要性や重要性を特に説くものではない。われわれは、外界に対する何らの信念もなしに生活してゆくことは困難だろうし、複数の世界が一つの統一的な世界であるという秩序の中でしか日常を構築できないだろうということである。

³Levin(1979:131)は、われわれは「論理上必然的な立場ではない」が、「発話と世界の[真理]条件とが非両立である場合、条件を固定されたものとして発話が解釈されなければならないと想定する」傾向があると指摘している(カギカッコ内引用者訳)。それに対し、テキストの語り手が基本的に無謬である文学では、世界の条件の方が解釈されるという。

⁴本論は、隠喩の基本形を「XはYである」と考える。他の形態をとる隠喩はすべて基本形に還元して説明できる(橋元1989:159ff.)からである。なお、「XはYでない」型は「『XはY(である)』でない」と考える(この点については、注④も参照)。

⁵しかし 時間と空間 とは速度の中で、人間と動物 とはAIの中で、人間/脳と機械/コンピュータ とはALの中で常に反転するメタファーによって繋がっているようにも思える [1.3][3.2]。

については、Glucksberg and Keysar(1990も参照)。このことから、例えば「男は狼だ」の隠喩としての解釈では、男には一種の狼であるものがあるという点から類似性の探索をおこなう可能性が生じる。ここでは、XにYが適用されると同時に、YにXが適用され、類似性の探索は双方向に行なわれる。この点で、隠喩は「見立て」⁶であるということが出来る（ZにおいてXをYとして見る）。あるいは、そう仕向けることによって、意味空間を探索する読み手を表現に呼び込むような種類の語用である。Zは可能性の範囲が無限であり、「醜い家鴨の仔の定理」（渡辺1978：90ff.）で任意の対象（複数）に等しい類似性の示しうること（あらかじめ述語の間に価値による重みづけがある場合は除く）が証明されるように、形式的に決定できるものでないからである。また、例えば X：男 が、最適と仮定された基準 Z：獰猛さ について、虎よりも Y：狼 に似ているという類いの事実も証明できない。特定の何かに最も似ているものといったところで、その度合いは究極的に無限小の差異によるものなのである。結果として、探索は延々と続けられねばならず、われわれはそこに豊かさを感じることになる。この豊かさは、必ず文学的な効果に繋がる。文学とはそのような読解の豊かな可能性を最も貪慾に求めるものをいうからである。隠喩の解釈過程における豊かさは、隠喩そのものが持つ隠喩的意味と誤解されやすい。しかし、隠喩は、意味内容は形式的な手続きで一意的に決定できる（多義性も、いくつかの意味が定まるという点では同じことだが）という信頼への攪乱で、もう一つの意味を生み出す過程ではないのである。実際に、隠喩は、その隠喩としての解釈自体が拒否されることがありうるものであり、逆に、その不能になる際にも効果を発揮するものと思われる。隠喩的意味の想定は、後付けの説明によって、理解できる隠喩の産出法^{きわ}を明らかにするけれども、隠喩の機能について、あるいはそれがどのようにして隠喩なのかについて理解するには余りたすけにならない。ところで、隠喩とはことなり、直喩に（誤って）もう一つの意味を想定することはない。類似性に直接言及する直喩が求めるのは、意味内容の具体化に過ぎないからである。直喩を表わす文がいずれも真であるように、特に常識を脅かすことがなく、その解釈では（読み手の気づいた）いくつかの類似点が拳がればそれでよいのである。それに対して、隠喩が求めるのは問題解決であるから、隠喩における認知過程と解釈過程とは異なるものである。前者は（解のない）類似性の抽出を目指すものであり、後者は参与者の力関係の中での具体的な解決の提示を目指すものである。そのため、隠喩性とも呼ぶべき隠喩の程度の相違は、解釈者が書き手との力関係によって依拠する解釈装置（この概念には言語文化的・言語社会的含意がある）とのかかわりで決まる側面があることになる。解釈装置は本質的に評価性を内因化しているからである。

ここでの記述は、Davidson（1978）に多くを負っているが⁷、しばしば指摘されるようにその議論は曖昧であるようにも見える⁸。大浜（2000）は、議論の曖昧さは、意図の現前を解釈の前提

⁶立川（1995：202f.）は、「類似性に基づく同一化の操作」と区別して「見立て」を次のように定義している。「『見立て』とは、（言語と見立てられた）ある記号構造を別の（言語と見立てられた）記号構造に『翻訳』（転移）する操作である」（原文全傍点）。

⁷当該論文については、デヴィッドソン（1987）の訳者注解、菅野（1985）、ハッキング（1989）も参考にした。隠喩論に関しては、Ortney ed.（1979）、Ortney ed.（1993）、Goatly（1997）、柄谷（1996）を参考にした。

とせず、発話を機械的に正しい意味に結びつける共有された汎用の機構がないことを主張し、にもかかわらずそれを理論化していないためだという（しかし、デヴィッドソン1991：315ff.によれば、そもそも厳密な理論化は不可能なのではあるが）。本論は以下のことを付け加えたい。Davidson（前掲書）の議論は、隠喩の解釈が「それが隠喩である」という解釈自体とどう関わるのかという隠喩論の伝統的な問題に対して明確な態度を それが隠喩であると解釈することは、隠喩の解釈の前提とはならないが随伴するという以上には っていない。むしろ、隠喩であることと隠喩の解釈との全体を捉えることが強調されているように思われる。但、卑近には「『男は狼だ』は隠喩でない」という取り消し可能性が示すように、書き手において隠喩と意図されていることは解釈にも質的影響を与えるだろう⁹。結局、意図の現前を前提する必要は必ずしもないといわれるとき、どのような理論化を経てもわれわれは曖昧さを感じるということだろう。

1.1.3. 隠喩と理解

「共有された認識」は、結果であって原因でない。一方が話したことを他方が「理解」したとき、両者で認識は共有されるが、認識が共有されているからといって何かが理解できているというのではない。「共有された認識」の認知的内容について、理解は誤解を含む とか、その解釈過程について、理解は好意的な曲解である といったところ「共有された認識」に到る機構は謎である¹⁰。

そもそも、「共有された認識」という概念は、理解に関する素朴な驚きの表明であり、原理の記述ではありえないものだろう。例えば、Davidson（1992）は、会話の成功や理解の構成を保証する原理としてでなく、それが達成されたときに、その時々後づけで為されるべき議論を示す。それは、Davidsonにも信じられるものでないだろう。実際にDavidsonは「言語学上の能力のこの特徴描写は、ほとんど循環論であるがために、間違いであることはあり得ない[引用者訳]」（前掲

⁸例えば、「彼は通常の意味での曖昧な論者というわけではないが…彼についての解説や批判には、『私が彼を理解しているならば』といった前置きがつくことがしばしばある。そのことに驚いてはならない（パスモア1990：119）」。

⁹隠喩には、隠喩であることが明らかでありながら、読み手がそのことを少しも顕在化しないという状況で最も効果的にはたらく側面がある。隠喩を字義に限定し、「効果」という観点からする限り、この問題は重要である。例えば、「デスクトップ」が「机の上」でないことは誰もが知っているが、誰もが（あたかもそこが）机の上であるかのように振る舞っている（[1.3]）。言語に行動の問題が交差しているので、しかも、それは、言葉によって何をするかではなく、何をさせられるのかという局面を含む それは語用論的問題だけを生じるのではない。そこから直ちに決定論的な言語的相対論（強い相対論）が想起されるのだが、現実問題として、隠喩はそのような「実効性のある」相対主義を生じはせず 机の引き出しに聖書がなければならぬと考える文化があったとしても、コンピュータのハードに聖書（データでなく聖書そのもの）が内蔵されていないことを疑問とは感じないだろう 、問題は読み手が科学技術に対してどのように教化され

ているのかという点に尽きる。誰でも、自分の現実感を信じる権利がある。不動の大地と周期する太陽を信じても構わないのだが、同時に地球の周期という科学の存在を知る務めも恐らくあるのである。技術についても同じことが言える。それが机でないという自らの現実感を信じる権利と同時に、それが机であるという技術の存在を知る務めも恐らくあるのである。ここで、務めを遂行すべき知識と能力とが多く（理論や製品の）「消費者」に不足している場合には、問題はひとえに教育の政治性に関わる。結果、隠喩の解釈が何を前提すべきなのかという議論は、現実的難問となる。

書)」として、循環論であることを認めている。理論的に表明された特定の原理が理解という事実を可能ならしめるのでなく、理解という事実こそが特定の原理の理論的表明を可能にするということは、理解とは、誰かが何かを話し・誰かが何かを理解するということですのですべてが尽くされ、どのようにして理解に達したのかについての記述は特に必要でないからである。しかも、Davidson（前掲書）は、「事前理論 prior theory」と「経過理論 passing theory」という2つの厳密に定義されない概念からなる理論を提案している。前者は「聞き手が話し手に対して所持している始動用の解釈理論、と話し手が見なしているもの」であり、「聞き手が話し手の発話を解釈するために前もってどんな準備をしているかを表現する」ものであり、後者は「聞き手が実際に発話を解釈する仕方」、「聞き手が用いるように話し手が意図している理論」である。そして後の部分で「経過理論に達する法則はないのである。おおざっぱな格率と方法論的普遍性に対立するものとしての、いかなる厳密な意味での法則もない」と述べている（カギカッコ内引用者訳）。これは「共有された認識」による信用ならぬ解決と同じく（或は全く逆に）、理解が保証されていないにもかかわらず（或はそれ故にこそ）理解に到達しようという驚きの表明である。同時に、形式的な議論の限界を示唆するものでもある。脱構築派の場合、同じことが字義通りの意味の一意的決定が可能だという幻想に対して表明される（デヴィッドソンとデリダの理論的近似については、森本1987参照）。

発話の理解に関する日常的且つ非形式的な論理を示して見せることは難しく、もし示しえたとしても、そこで説明されるのはわれわれが「理解する」ことを常々行なっているということではかない。どのようなものであれ、それが理論である以上、全ての場合を満たすことはないだろう。往々にして、理論的一般化は説明力を低下させ、満足すべき具体的説明の獲得は理論の一貫性の障碍となる。理論と説明とに最適な関わりを見いだすことが重要なのではなく、それが現実の場面であれば、理解とは理解に達したことを記述すれば足りるのである。

このような議論の教えるところは、理解の本質は恐らく直感の領域に属するだろうことである。われわれは自らの常識に従っては理解しづらい事柄（特に概念や理論）を、論理的に突き詰めるのではなく、素朴に直感しようとする。ここで「直感」というのは、おおよそ体系的に理論化されていない自然で素朴な信念ないしは確信を指している。直感の概念に依拠した議論は、直感に係る形式を産出する普遍的な機構を想定することができる一方、事物の関係性を推論に還元して理解することはできない。そのため、直感は、典型的には物語の理解や相似性の認識に見られる。物語はあらゆる事柄を描くことができる。これは、非論理的前提（例えば、炎を吐く竜を疑うことなくうけいれる）が「『これは何についての作品なのか？』という問いに答える物語の中心概念」（シユス

¹⁰議論の趣旨はやや異なるが、情報伝達が首尾よく遂行されている場面では、理論上の必要性に拘らず、コードの共有を想定しておくことが役に立つと考える。本来、コードの共有は情報伝達の効率性という点から望まれるものである。いわゆる共有知識のパラドクスは厳密な論理においてしか生じないもので、現実には特に問題でない。いったいコードモデルは、情報のやりとりで当然生じるべき情報の圧縮を想定しており、正確性と同じだけ効率性に基づいている（情報の可逆的圧縮＝符号化）。いうまでもなく、書き手と読み手の関係では、共有知識を想定する責任は主に書き手にのみ求められる。また、クリティカルな場面では、情報伝達はほとんど役に立たないか、高度なコード化が実現されているか（例：「逃げろ！」「危ない！」「地震！」）のいずれかである。後者では、言語のコードが直ちに神経のコードに翻訳されることで、「人の言うことを聞く」ことが読み手の行動上の利益になりうることを最低限の状態で保証していると考えられる。

ター、シルバーブラットによるインタビュー；シルバーブラッド2001：57）になっているからである。また、あらゆるものがあらゆるものに（同じだけ）似ている以上、われわれはどのようなものの間にもさまざまな類似点を見いだす（また、それを言い表わす）ことができる。その場合、推論はその有効な説明にはならないのである。

論理的な理解よりも直感を優先する傾向は、自然科学に対して顕著であり、それは隠喩という形で現れる。われわれは、真実と思うものを信じることは容易にできるが、科学的真理判断することは困難なのであり、ペレルマン（1980）のいうように、レトリックは大衆化された論理学なのである。しかも、われわれは隠喩に引きずられ　　バタフライ効果、カオスの縁、ビッグバン、シュレジンガーの猫、遺伝子の乗り物　　本来の理論とは相容れない拡張や時に正反対の理解を構成しさえする。われわれは、隠喩を介して自らの常識を脅かさないひとつの物語を構成するのである。ここで、科学に対する直感の結果が、ということはそのプロセスの全体が隠喩であることが示すように、隠喩には直感による理解行為という側面があると考えられる。そして、科学に対する隠喩的理解が必ずしもはかばかしくばかりなのは、科学を直感的に理解するのが非常識なのに対して、隠喩を直感的に理解しないのもまた非常識だからだと思われる。

われわれは、科学の内容を常識を超えたもの、さらには常識に反したものとさえ受けとってしまうことがある。これは、われわれが真実（事実についての正当な解釈と主張されるもの）が事実（現実のものごと）とは別のどこかにあり、かつそれよりも高尚だと信じがちなことを示唆している。しかし、科学で両者はかなり確実に一致するもので、科学はわれわれの常識のもっとも緻密で厳格な表現にほかならない。科学は、そもそも直感的に理解できるものとは限らず、そうであったとしてさえ非常識なのでもありえないものなのであろう。それがいかに難解であっても、科学の理論を拒否することは、たとえば「超常現象」を受け入れる（それを具体的にどの程度信じ、日常生活にとりいれるかは別の話である）ことと等しく、明らかに非常識である（科学と隠喩については、オルトリ&ヴィトゥコフスキー1999、ソーカル&プリモン2000も参照）。一方、隠喩は常識的には判断のむづかしい字義を持つが故に、われわれは論理的理解でなく直感に訴える。それを直感によって理解することなしに非常識を持ち込むことは、隠喩から意味を奪う。「男は狼だ」は隠喩だが「男はCANISLUPUSだ」はそうならないであろう。これは、平均的な読み手にとって、狼の学名はやや高度だからである（一方、隠喩がしばしば理解を助けるとされるのは、平均的な読者にとって身近な対象がYとして採られたときに、隠喩として解釈されやすいことによる）。このような場合、読み手は、それが自分に宛てられたメッセージでないと判断し、解釈を拒否するだろう。しかし、読み手としてテキストに参加しつつ、それが自分宛でないと考えれば、それは非常識に属する。その場合、読み手がどこまでそうするかとは別に、テキストはすべて自由に改竄できることになるからである。隠喩に対して指摘できることは、それが紛れもなく理解できることである。しかも、現実の常識によっては判断できない字義を含むとしても、正当な論理において　　真理への一貫した理由づけにおいて科学が科学として受けとられるべきであるように　　隠喩はまず字義通りの意味で隠喩として受けとられるべきなのである。そのために、ここで隠喩が直感的に理解されるべきものであることを強調したい。　　問題は、それがどのようなものであるかということになるが、隠喩と対象の理解との関係については項を改めて述べたい（[1.1.4](#)）。

隠喩は、しばしば、それが字義通りに受けとられるべきことを利用して、「山田君は間違いなく狼だ」と言われたり、「そうはいつでも、男は男だ」（この文は常識的に見て疑いなく真である）と言われたりすることがある。これらは（隠喩を含む）文が真であると主張するものだが、隠喩の真偽を主張できるかぎり（ここで、隠喩に真偽が定まるかは問題でない）文が偽であると主張する場合もありうる（「XはYでない」型の隠喩）。一般に、隠喩において文の値は偽であるが、文として真である隠喩が珍しいというわけではなく（Cohen1975:671）、「山田くんは狼ではない」（橋元1989:158f.）のような場合も隠喩だということができるのである。実際に、文が真となる隠喩があることは、文が偽であることが隠喩の要件（必要条件）とはなりえないことを明らかにする。そのため、Davidson(1978:247f.)は、文の真偽そのものよりも、解釈において偽であると受けとりうること（明らかな偽か、不合理な真であること）が重要だと議論している。言い換えれば、少なくとも隠喩の効果が発生するときには、隠喩は隠喩として解釈されなければならない、そのときには、表現は何らかの形でわれわれの常識を脅かすということだろう。但、「XはYでない」型の隠喩は、「『XはY（である）』でない」と分析しうる引用形式の表現であり、実際に多くが先行する隠喩（とりわけ死喩）の再利用と見做されるため、表現としては陳腐なものとなる。

ところで、「山田くんは狼でない。」には、構造的に二義的に解釈される余地がある。この文は「山田くんは『狼でない』」とも、「『山田くんは狼』でない」とも解釈できる（同じことは単なる否定平叙文でも成り立つ）。いうまでもなく、隠喩となりうるのは後者の場合（文が偽であると主張する場合）のみである。Davidson(1978:248n9)が、「隠喩の否定命題は、すべて潜在的に隠喩である[引用者訳]」と指摘しているように、「XはYでない」型の隠喩は、否定命題「 \neg 『山田君は狼である』」（「『山田君は狼である』は命題として偽である」と）と解釈される。語はそれ自体に真理値を持たないので、「山田くんは『狼でない』」のように「狼」であるかないかを云々したところで隠喩にはならない。「山田くんは非狼だ。」や「山田くんは狼外存在だ。」も隠喩とはいえないだろう（これらは「山田くんは狼以外の何かだ。」の類とは異なる）。まとめていえば、「(1)男は狼である。(2)山田君は狼でない。(3)したがって、山田君は男でない。(4)狼でない男は男ではないのである。」という一連の表現のうち隠喩でありうるのは(1)である。この場合、(2)は文字通りに真であり、(3)は文字通りに偽である。また、(4)は「男」の二義性による字義通りの文で「人間は動物だが動物でない」と同じである（かかる二義性については、菅野1985:204f.も参照）。したがって、「山田くんは狼でないが狼だ。」の下線部は隠喩（「XはYでない」型の隠喩）でない。たとえば、「山田くんは鈴木でないがイチローだ。」は、山田くん が 山田イチロー という名前であるとき真であり（もちろんこれは隠喩ではない）、そうでなければ偽である。後者（文が偽である場合）において、「山田くんは鈴木でないがイチローだ。」に隠喩としての解釈が成り立つのであれば（例：野球が巧い、肩が強い）、「山田くんは次郎だがイチローだ。」は隠喩であり、「山田くんはイチローでないがイチローだ。」も当然に隠喩である。但、「山田くんはイチローでないがイチローだ。」の前件（下線部）が隠喩として働いているわけではない（そうあるためには 山田くん が 山田イチロー という名でなければならない）。いったい、隠喩の基本形を「XはYである」と見做すと、「Xは[修飾語句]Yである」という形式が原則的に可能なのである。具体的には、「山田君は[きっと]狼だ。」「山田くんは[本当に]狼だ」「山田く

んは「どこから見ても」狼だ」などが隠喩として成り立つわけである（ここで、文が真であるという主張に係る修飾語句が多いのは、隠喩が字義通りに受けとられるべきものだからであろう）。同様に「山田くんは「狼でないが」狼だ」も修飾語句が挿入された隠喩（文が真であると主張する隠喩交じりの表現）であり、「山田くんは狼でないが狼だ」の下線部は、文字通りに真であり且つ単に字義通りの表現である（隠喩と否定表現との関係は本節末の参考図にまとめて示した）。なお、これと同じ形式でも「バナナの木は木でないが木である。」は隠喩ではない（バナナの木は形態論上は「草」なので、この文は文字通りに真である）。

1.1.4. 隠喩と文脈

隠喩は、明確な言葉で表現できない不確定で曖昧・複雑な全体を理解するための工夫が殆ど唯一の手掛かりと見られてきた。しかし、その限り隠喩は対象をより良く理解するための助けにはなっていない。両者の関係 物語、神話 はどこまでも延長できるが、親しみやすくはなっても何ものも明確にはならない。そもそも隠喩は既知の二つのものから成り立つものが多い。レリス（1986：26f.）は次のように述べている。「既知のすべての対象は相互依存関係によって相互に関連しあっているわけである。これらの対象から任意の二対象を選び出し、それ固有の名辞によって示されているのはどちらであるか、他方の隠喩でないのはどちらであるか、または、その反対を決定することは不可能である。人間は移動する樹木である、と同じく、樹木は根を張った人間である。天空が精妙な大地であるごとく、大地は肥厚した天空である。さらに、私が一匹の犬の疾走を見ているとすれば、それは、同じく、疾走が犬の行為を行なっているのだ。」

隠喩が理解の直接の手掛かりでなく、対象となる概念や理論の理解や解釈の文脈を包括的に指し示すものであるとすると、不明確なものを明確なものによって理解する手段とはいえようが、隠喩が特定の命題の表現でないならば、それは既に一つの物語を解釈のコードとして与えていることになる。実際に、隠喩には解釈のコードの手掛かりが意図的に与えられる場合も少なくない。その場合、われわれは 隠された意味 の想定に誘引されがちである。例えば、ヴィリリオ（1998：27）は次のように述べている。「[映画がプロパガンダから芸術的アプローチへ転換するとき] 芸術は宣伝広告から解放され、あらかじめ消化しやすくされたメッセージから解放されます。宣伝広告の本質は、隠されたメッセージをもつことです。そして芸術の本質は、それ自身以外のメッセージをもたないということです。それはひとつの大きな謎になるのです」。しかし、隠喩は一語か二語で物事の本質を指示するところに本領を持つものと見られてきた。それは、十分に長い隠喩は、たとえ話や寓意と見られるからである。寓意には、それを 持続された隠喩である とするクインティリアヌスの定義が引き継がれており、「たとえ話」は大掛かりに展開された諷喩である（野内1998）。

たとえ話はそれ自体を解釈すべき文脈を同時に指示するものであり、逆に隠喩の研究は、文脈から切り離された短い切片を取り扱い、その意味を追及する。そのときにも、隠喩には字義通りでないもう一つの意味が与えられる。そうせずには、隠喩の生じる豊かさを説明できそうにはないからである。隠喩に字義通りでないもう一つの意味があるという考え方は、文脈に応じるものであって

もなくとも、隠喩が本質的に字義通りの意味を失うということである。ポーゼは、隠喩と寓意とを意味の消失という点から整理する。間接的意味を表わすものにおいて、隠喩は隠喩の意味を持ち本来の意味を消失するもの（二つの意味を持つ）、寓意は本来の意味を維持して別のことを表わす（一つの意味を持つ）ものであり、隠喩の中には簡潔なもの（一語）も長いもの（語群）もある（ポーゼについてはトドロフ1987：113ff.による）。隠喩論が、意味の失い方に関する理論であれば、言語は全面的に隠喩である 或はヨリ穏当に、隠喩は「標準的な表現」からの逸脱ではないと言いたくなる。

本論の立場は、隠喩と隠喩でない文とは形式においては区別されないが、使用においては相違があるとするものである。そのため、隠喩が意味を失うという直感が信用できるものであっても、別の意味を獲得するというやり方で失うのだと考えることはない。隠喩が意味を失うときには、まったくの無意味か、（類似性の探索に執心して）意味など微塵も顧慮されないという状況が生じていると考えるべきなのである。そして、その限り、Davidson(1978;1992)の言うように、書き手の想定した認知内容を読み手が再現するという図式を採用することはできないであろう¹¹。また、隠喩が使用の問題であり、嘘や約束や宣言などと同じ類いのものならば、それがテキスト・談話の中でどのように用いられているか問わなければならない 嘘は真実の言及とも約束とも同じ言語形式をとる。

従って、 隠喩である ことは 隠喩として解釈される ことと同じで、隠喩は「たとえである」というより、（隠喩は字義通りの言及でしかなく）「たとえになる」。更に、そうであれば、隠喩はたとえ以外のものにもなりうるという点で、更に多くのものを生みだすだろう。隠喩という言語的形式がまずあり、その反復が寓意やたとえ話となるのではない。

「隠喩の意味」から隠喩を考えようとする研究を、発話でなく専ら単独の文を取り扱ってきたと批判できる（杉本2000）とき、隠喩と寓意やたとえ話とははっきりと別の名を与え¹²、隠喩をこそヨリ価値あるものとする姿勢を見なければならぬ。隠喩は簡潔でありながら複雑微妙である点で、どのような散文の記述とも交換できない価値を持ち、であればこそ、様々な注釈によって接近されなければならないものになる¹³。隠喩が至高の価値を持つ限り、隠喩に接近する批評家も至高の価値を持つ。そして、それは、ストラテジー 隠喩の簡潔さに対する注釈の膨大さがその隠喩の価値を固定する点で、寓意やたとえ話には用いえない策略である。

¹¹「二人の人が必要とするものは、もし彼らが口頭語を通して理解し合うことになっているならば、発話から発話までの経過理論において収斂する能力である。彼らの出発点は非常に異なるものであろう。（中略）従って、同様にその時収斂を達成する戦略や計略は異なるであろう [引用者訳] (Davidson 1992)」。

¹²本来、文彩の定義はどんぶり勘定で為されるもので、アレゴリーや誇張法と直喩など、重なり合うものも少なくない。それらは、とりあえず分類されており、且つ（重複があり境界が不明瞭で）明確に区別できないからこそ、交差参照されるFAQを豊富に含んだマニュアルのように、特定の場で用いる手法の便利な一覧表なのである（そしてまた規範として押し付けられもする）。

¹³このような二重性は、Davidson(1978:253)にも述べられている。「[隠された]メッセージを述べ立てようとする批評家は、そもそもにおいて混乱している。もともと存在しないメッセージが都合よく立ち現れたりするわけがないのだ。但、そうはいつでも、隠喩の説明や明示が無駄だということもない。/ 隠喩の作者が理解させようとする事、あるいは感受性や教育程度の高い読み手が把握していることが理解したいと思うのなら、わたしたちの多くには助けがあることになる。いわゆるパラフレーズの合法的機能とは、無精で無学な読み手に熟練した鑑定者のような見目を与えるところにあるのである [引用者訳]」。

1.1.5. 隠喩と意味

日常会話の中で、隠喩はたとえ話として（読み手に）利用されることが多いように思われる。それが解釈の手掛かりであると同時に、何かを直接言わないところに意味があるのだとすれば、難しい概念を理解するためのものでもなく、豊かな解釈を得るための仕掛けでもなく（日常言語は時に驚くほど詩的なことがあるが、それはわれわれが明晰には語らないからである）、字義通りの意味を失うことを巡る駆け引きなのである。既に述べたように、隠喩が字義通りの意味しか持たないのであれば、隠喩が意味を失う最も効果的方法は、隠喩としての解釈を遂行させつつ、それが隠喩であるという解釈を忘れさせることである。では、隠喩が字義通りの意味しか持ちえないのであれば、隠喩が意味を失ったときに何が起こるのであろうか。

一つには、「面白さ」（杉本2000）があるだろう。本来、直接に類似性を指示する直喩には対象を理解させる働きがあるが、リファテール（1978：142f.、341n8）は、「駱駝のように腹這いになっている駝鳥」という表現は、「駝鳥」と「駱駝」という語を提示することによるエキゾチズムの誇張であって説明でないという。同じように、日常会話で用いられる隠喩には、明らかに比喻でさえないものがある。会話の文脈にある事物と語とその物理的側面とを含む、を導入することが面白いのである。それは決して比喻ではない。むしろ、語呂合わせや駄洒落に近いのである。そうして、読み手をテキストに釘付けにし、自らを書き手として確保しようとする。また、解釈自体が拒否されるという事態がありうる。既に述べたように、解釈を拒否しながら、接触を解除しない状況は読み手の非常識を表わすが、しかし、「わからない。」「なにそれ？」と言った瞬間に、読み手は会話において自らの優位を確立することになる。すなわち、自分こそが書き手になるのである。新たな回路を開く点で、無視や飛ばし読みとは違った方略である。

本論の見解では、日常会話で隠喩が問題になることは殆どないだろう。会話の線的進行は、隠喩が強い探索すなわち解釈の滞留性（文学の隠喩は慎重なものが陥る落とし穴といえよう）に不利である。従って、日常会話の中の隠喩は受け流される。先に述べた参加者間の駆け引きは、結果としてトピックに注意を引きつける役割しか果たさない。また、隠喩がどこにでもある（日常会話でわれわれは自由に話すから、隠喩はどこにでもありうる）ことは、われわれが字義通りの意味がどこにでもあると信じるのと同型である。字義通りの意味は、嘘に関して問題になるが、ほとんどの隠喩はそもそも明らかに偽である（ここで、隠喩を嘘の一種と見ることが隠喩的意味の想定に繋がることに注意すべきであろう。われわれは、嘘が真実を覆い隠す仮面であると考える傾向があり、その結果、隠喩にもう一つの・本当の意味を求めることになりがちである。そのため、Davidson1978は、隠喩が嘘であるとはいわず、嘘に似ているとしかいわない）。結果として、隠喩の不在は、審美的態度によってしか知ることができないものとなる。ただ文学だけが（自己完結した）非日常でありうるからである。Levin(1979:133ff.)が指摘するように、発話と世界が対立したときに世界が発話に譲歩するのだとすると、それは何かについて知ることが何かが存在すること（と精密に同じ）であるような状況あるいは前提でのみ有効になり、したがって「素朴な」理解では、それは文学以外にないように思われる。つまり、「もし詩のことばが字義通りに受けとられるならば、そのときにこそ、そこに描かれた世界はまったくひとつの創造物なのである〔引用者

訳] (Levin1979:133)」。それゆえに、隠喩は、「陳腐だ。」というものであれ、審美的基準にかかる性質を持っているべきなのである。また、杉本(2000)は、価値評価を隠喩の重要な効果であると主張しているが、あらゆる読み取り可能な情報は評価を前提する(アイゲン2001:16ff.)ものと考えべきである。例えば、文においては真理値の付与がその端的な形式といえる。つまり、隠喩の効果を価値評価に求めるのであれば、それが審美的基準による価値評価を導くところに特質があるものと考えことになるだろう。隠喩が、単なる類似性の言及(認知過程に類似性検出の神経作用を含むもの)と異なるのも、かかる審美的価値評価によるものと思われる。

ところで、隠喩が意図された類似性の指定でなく、一群の物語を含むものでもなければ、それは、難解なものを平易なものによって、あるいは日ごろ縁遠いものを身近なものによって理解するための汎用の手段ではない。では、隠喩とはどのようなものなのか。

隠喩に関しては、大きくわけて、表現上の装飾・表現の必須手段・認知の必須手段と見る立場がある(レオンダー1979など参照)。本論は、隠喩が表現の必須手段であると考え。但、従来のレトリックは、隠喩には隠喩によってしか表現しえない「意味」があるとの立場からついに文学へと向かった。一方、杉本(2000)は、隠喩には隠喩によってしか表現し達成しえない「産物」があるとの立場から、談話中の隠喩の機能を研究すべきとしている。その解釈が豊かであればあるほど、効果の予測は困難であろうから、往々にして全体に陳腐な表現となる日常の話しことばを対象にすることは現実的な選択といえる。レトリックは、本来、ことばを話すときの 目的 と 手段 として考えられるものだったが、民主制から君主制になり人々がものをいえなくなった結果、 内容 と 形式 として文学の美的な観点に関わるようになったものといわれる(トドロフ1978:74ff.)。ここで、直接民主制下のレトリックを弁論術と呼ぶことにすると、説得の術である弁論術では、何を話すかよりもむしろ何かを話すときの態度こそが重要であっただろう。それは主に行動における問題であって(言語行動も態度の一部である)、言語そのものは殆ど問題でない。しかし、現代に生きるわれわれは、それなりに自由にものをいい且つそれが大抵は無駄なおしゃべりであって見れば、ことばも 目的-手段 内容-形式 の両面から、すなわち行動と言語の両面から論じられるべきであろう。

杉本(2000)は、隠喩の生みだすものには言語的に明示できないものがあるが、それも正当な隠喩の効果として扱われるべきだと主張し、隠喩を使用する目的は効果を目指すことであるとする。われわれの言語で解釈したり表現したりできないものをわれわれの言語の問題と見做すという議論には、おそらくどこかに無理や誤りがあるのだが、隠喩は明らかにそのような問題を含んでしまうものであり、そのためプラグマティックな発話行動を包んだ行動一般の領域で考察せざるをえないものと思われる。本論の議論では、隠喩は、使用によって「たとえ」にもなればそれ以外のものにもなるという点で、コミュニケーションの始発点として働くという以外にはいいようのないものになる。

隠喩を研究する場合には、解釈が意味論上の操作に還元できないように、認知過程と解釈過程とを混同すべきでない。解釈過程とは、神経化学的作用だけでなく、コミュニケーションの上に位置を占めるものである。Dawkins and Krebs(1978:285)が、「動物が、それ自身に平均的に有益な方法で環境に应答するように選択淘汰される」という事実の必然的な副産物として、他の動物は、

それら自身のためにその応答を転覆するように選択淘汰されることがある。これがコミュニケーションである[引用者訳]」と述べているように、コミュニケーションとは単なる情報の伝達でなく、個体間の力関係の熾烈な競争を伴うものである。隠喩はコミュニケーションの観点から論じられるべきであり、そのときには参与者間の力関係が問題にされるであろう。

1.1.6. 反復と複製

読み=テキストの解釈で、読み手は、書き手の認知的想定を再現するのではなく、主体的にコミュニケーションの回路を開くことで、共時的な相互性と(歴史的な)間テキスト性との交点となる。メタファーは、概念を別の概念のカテゴリーに結びつけるというより、むしろ、話し手を本質的に他者である聞き手と結びつけるのである。坂部(1989:145)は、「隠喩化の作用[は]...ひとつの主体が、これまで疎遠であり無関係であったいまひとつの主体とみずからを関係づけるはたらきないし能力に対応するものと見なされうる」と述べている。

1.1.4および1.1.5で議論した通り、隠喩は、たとえられた対象の理解の促進を生じることはないが、対象を親しみやすいものにし、飼いなすことはありえる。そして、それは、書き手の側から見れば、コミュニケーションに「読み手」という他者を取り込むことと同じなのである。隠喩として解釈されるものこそが隠喩であるから、隠喩は、読み手をテキストに招き入れるものだといえるが、同時に、彼がどのような読み手であるべきかを定めようとする。隠喩は、高尚な読み手と平均的な読み手とを別々の入り口から招き入れるのである。批評や註解としてよく知られたこの事実は、書き手と読み手との力関係を左右する。

隠喩は歴史的経過によって無効となるのではない。例えば、嘘は、それが昨日の約束であったにせよ、今日ひとたび私にとって嘘であるとすれば、それが嘘でなかったことは一度もなく、それが嘘になった瞬間も一度しかないのである。一般に、人はある振る舞いをすることによってある存在でありうるものであり、ある存在である以上は一定の責務を負うからである。いいかえれば、人は何をするかによって何者であるかが決まり、何者であるかによって何をすべきかがわかるのである。このことは、未来の行為(その実行)が過去の行為(その約束)に縛られることに端的にあらわれる(これは、すべて倫理的な要請である)。かかる連鎖によって、われわれは、何かでありたいと願い、また、その価値を実現すべく行動するものである。何をしたいと思う人になりたいかによって何をしたいと思うということであり、人は自分が約束を守る人でありたければ約束を守ろうとするし、そうでなければそうしないであろう。約言すれば、約束は始めから守られる(約束である)か、守られない(嘘である)かのいずれかなのである。

Davidson(1978)は、隠喩は一度がぎり隠喩になるもので、隠喩は隠喩であり続けるという¹⁴。これは、隠喩が意味でなく使用あるいは効果の問題であることを示すものである。たとえば、ハッキング(1989:306)は「[隠喩は]文に、新しい意義をつけ加えているのではない。...[隠喩に]

¹⁴ 「[隠喩について]新奇性は問題でない。表現というものは、最初に出会ったときに、新品の字義的な役割に関する正当な評価を割り当てられるものなのであって、ある文脈でひとたび隠喩と受けとられた表現は百回聞いたところで隠喩であり続けるのである[引用者訳](Davidson 1978:244)」。

短時間だけつけ加わる新しい意義といったものはないのである」と述べている。だが、ここで隠喩に箴言・警句として通用するものが少なくないことに注意する必要がある。箴言は、一人の智慧が万人の財産となったものだ。身体の軌跡を受肉させ経験を造形することは、引用によって万人の知識の一部（常識！）となる。引用は、反復や過程の複製でなく、しかも、創造の則ち類似性発見の瞬間を含まない形式の複製である。従って、隠喩は新奇性のみによっては規定されず、また、明らかに隠喩であるとして利用可能な形式が存在する（死喩についてはリクール1989など参照）。そして、隠喩が一度だけ創造されたという確信は、権威や権力を書き手に帰属させることになる（複製の歴史的回路と権力の問題についてはベンヤミン1999を参照）。

1.1.7. 隠喩と行動

メタファーから「隠喩的意味」の想定を外すと、それが言語的に明示できない言語的問題を孕むという困難を生じうる（[1.1.5.](#)）だけでなく、隠喩の解釈が無限だという帰結も生じる。隠喩が、隠喩的意味に限定されないのであれば、どのような解釈や、いかなる（社会的・文化的）機能を導いても、それを可能にするような要素や状況は常に存在しているはずである。何を言っても正しいのであれば、隠喩の研究は汲めども尽きぬ魔法の泉であろうか。

隠喩的意味から解放された隠喩研究の理論上の課題は、「隠喩的意味の決定」を「隠喩の使用の目的の達成」と言い換えて、その条件の定式化が可能かどうかということになりそうである。しかし、われわれの行動が明らかに環境に限定されているとしても、われわれが行動する環境は、静態的記述だけでなく、われわれの行動自体が環境と相互作用をするからには、行動（決定）の基盤として環境（状態）を限定して示すことは難しい（山田1997）。このことは、意味が文脈に限定されているにしても、意味決定を含む特定の解釈に対する文脈の条件を限定して定式化することはできない（カラー1985：197ff.）ことと平行する。コミュニケーション行動という一階上の観点を採用しても、環境との相互干渉は難問である（もっとも、この問題は、必ずしも理論が直ちに直面するものではない。例えば、場面と状況とを区別し、場面との関係では典型的に・状況との関係ではその場限りに決定されるということもできるかもしれない）。

いったい、コミュニケーションを通じて目指されるのは、自らの利益を最大化することであり、言語表現において、その目的を（部分的に）達するのは、殆どの場合に書き手である。しかし、個々別々の状況で、参与者自身が利益を評価する汎用の基準はないであろう。自らの利益が精密にどのようなものであるのか常に知っている書き手はいないからである。書き手や読み手は、様々な戦術によって自らの利益を確保しようと振るまい、（試行錯誤を通じ）平均的に見てそのことに成功しているにすぎない。最大の利益を求めながら常にそこそこの利益で満足することで、われわれはうまくしておおせているというべきだろう。しかし、それは成功なのであり、それはわれわれが生きている、つまり情報を発信し続けているという「事実」によって裏づけられる。

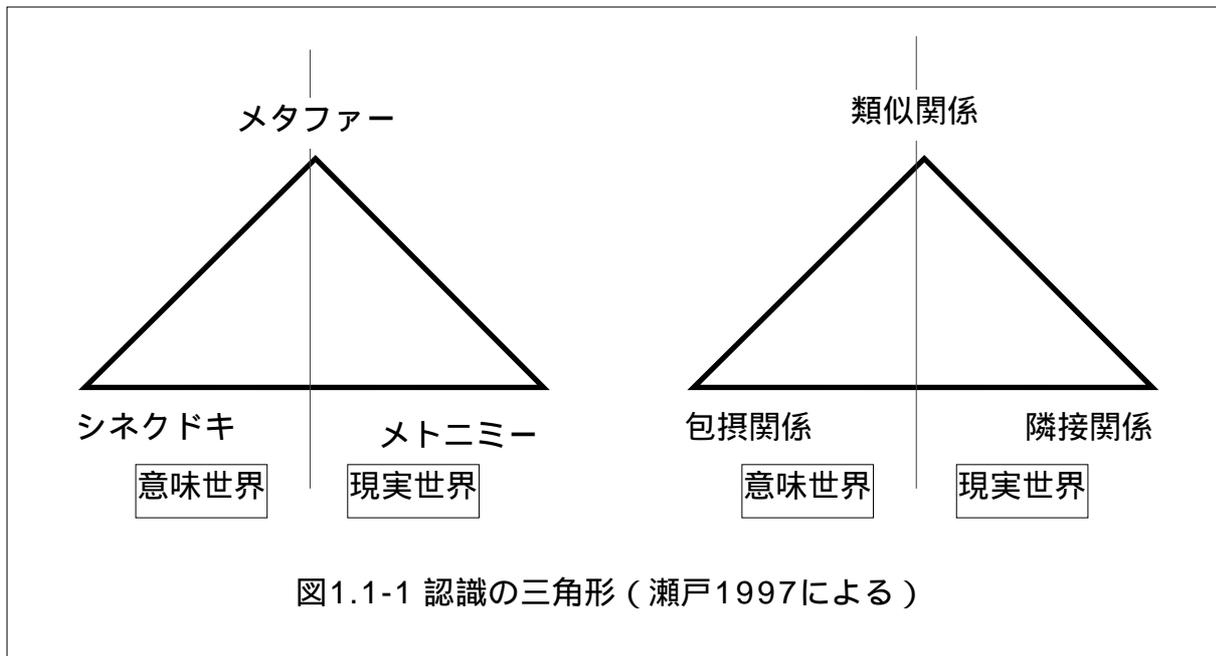
言ってみれば、隠喩の最大の効果が、隠喩の使用可能性であるという循環の中で、隠喩の効果とそこに関わる要素との関係の階層化された一覧表を作るために、隠喩の研究は続けられることになるのかもしれない。

1.1.8. 二大原理としての隠喩と換喩

隠喩と換喩とは、しばしば転義法の最重要の二項としてとりあげられる。特に、ヤコブソン（1973b）が両者を言語表現の二大原理として対置したことは「修辞学が『文彩』という唯一の種の下に同定されるようになった（バルト1979：141）」ことの象徴的な帰結といえる。しかし、この二分法に対し、野内（2002：31ff.）は、相似性の原理に隠喩をあてることを「根本的な錯誤」とし、正しくは提喩と指定されるべきと論じている。これは、ヤコブソン（前掲書）が提喩を換喩の一種と見做すのに対して、提喩が換喩と区別される独自の比喩だという主張を含むものである。本邦では、佐藤（1978）以来、提喩を加えた三分法が熱心に説かれており、提喩が換喩と本質的に区別しうるかについて根本的な対立が見られるのである。以下、両者の見解に基づいて提喩について考察してみたい。

1.1.9. 換喩と提喩（1）

提喩を換喩の一種とする考えは、修辞学の伝統的見解である。他方、佐藤（1978）は、提喩を独自の比喩であると論じる。これを承けて、瀬戸（1986¹⁵, 1995, 1997）は、隠喩・換喩・提喩の三者をレトリック認識の点から明確に区別している（図1.1-1）。同じく、野内（1998, 2000, 2002）は、全体-部分の関係による換喩と、類-種の関係による提喩とは明確に区別されなければならないとしている。

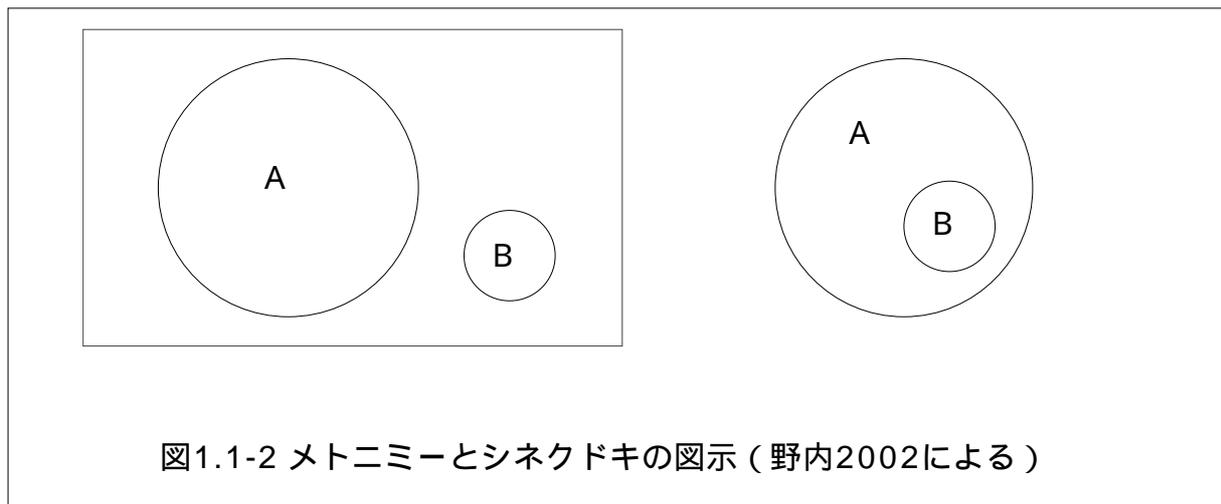


野内（2002：49ff.）は、「シネクドキとメトニミーとの混同の原因は、『上位-下位』関係から成る『類-種』の立体構造を『大-小』関係から成る『全体-部分』の平面構造にすり替えてしまうことにある」として、換喩と提喩の図示のしかたも混同に多いに関係していると説く。全

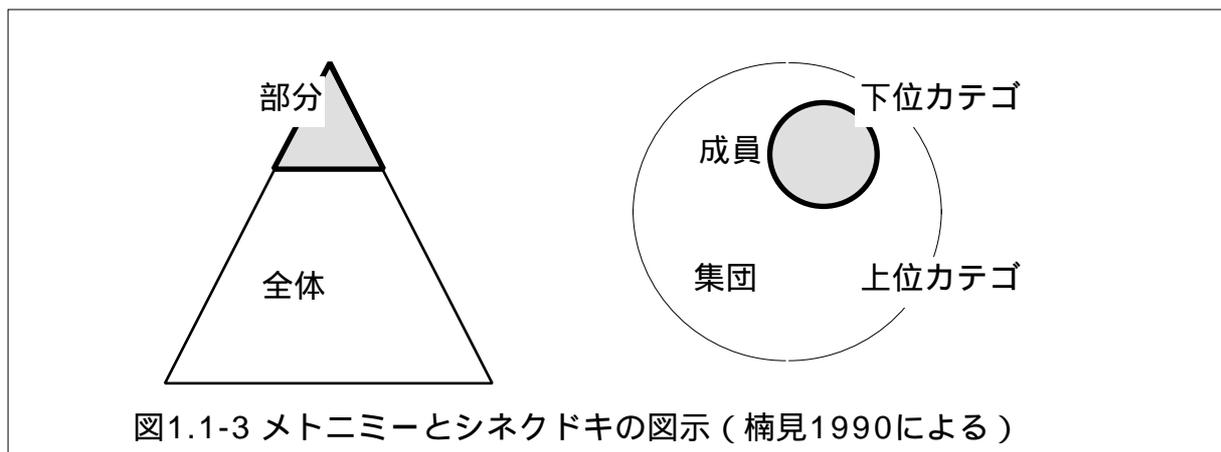
¹⁵瀬戸（1986）は、増補改訂され瀬戸（1997）の第二部として収録されている。以下、瀬戸（1986）は瀬戸（1997）を参照することによってかえる。

1.1. 文体論における隠喩と換喩

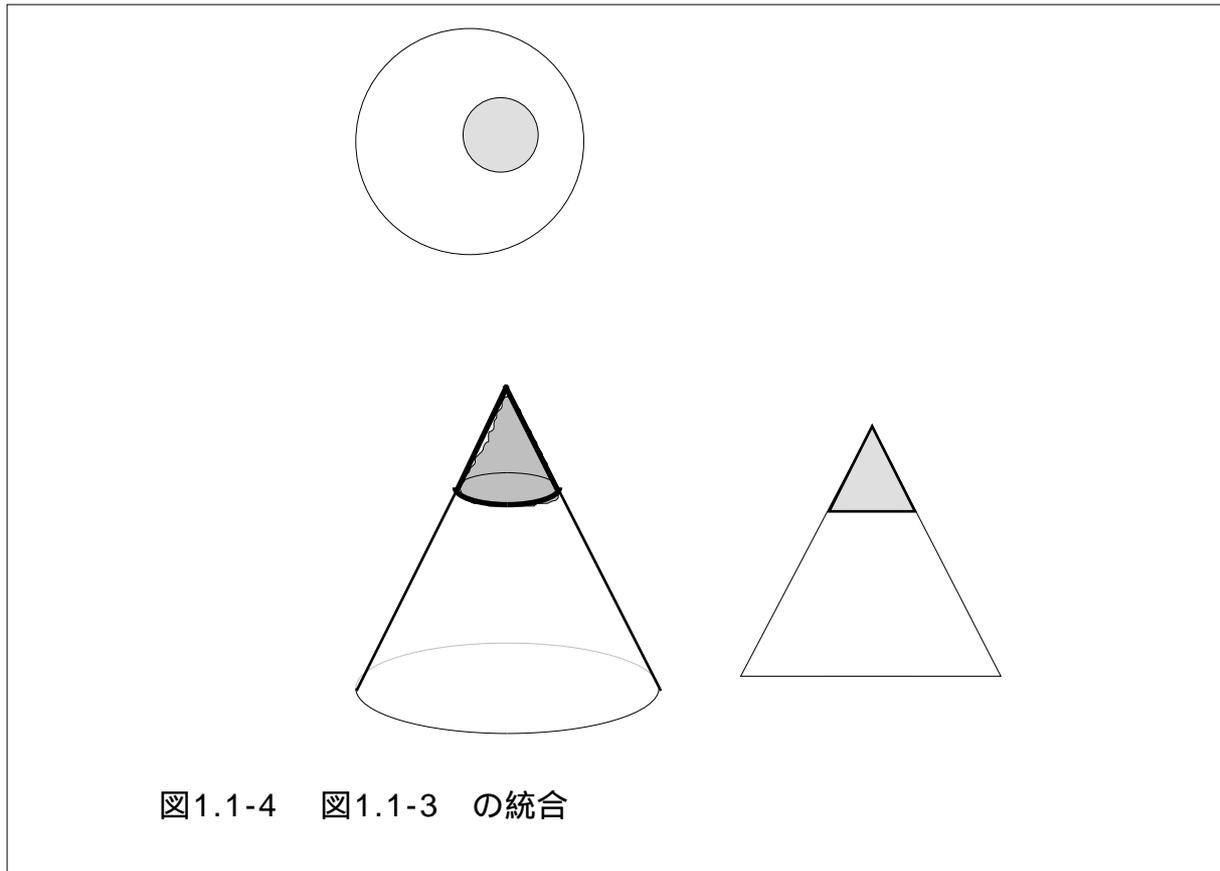
体と部分の換喩は図1.1-2のように図示されなければならないが、図1.1-2のように図示することが提喩との混同を招くというわけである。しかし、図1.1-2は奇妙なものに思える。図1.1-2は、全体と部分との関係を部分の間の大小関係に読み替えることで成り立っている。その結果、点線の矩形によって部分Bとより大きな部分Aとを包摂する第三項が要求される。しかし、野内（前掲書）が繰り返し注意するように、換喩で求められるのがAとBとの「事実的關係」であるならば、点線の矩形は必須でないはずである。その関係（ここでは大小関係）が、比較によって構成されるものであるかぎり、Williams(1985:17f.)が指摘するように、両者を包摂する第三項を必須と見做すのは論理的に誤りなのである。したがって、提喩を図1.1-2のように図示することは適当ではなく、図1.1-2のようにしか図示しえないであろう。



また、佐藤（前掲書）・瀬戸（1986）に依拠して、換喩と提喩とを「直感的推論のモード」として区別する楠見(1990)は、両者を図1.1-3のように示している。これを眺めると、図1.1-4のように示すこともできそうに思える。そして、その限り、野内（前掲書）が、換喩を平面構造・提喩を立体構造と見立てることが、恣意的な比喩ではないかという疑念が生じてくる。



瀬戸（1997：164）は「図示そのものが幻想を生み、理論的混乱の原因となる」と指摘しているが、提喩と換喩とが区別しがたいことは、別に図示の問題ではない。野内（2000：30f.）は、提喩を認知的なプロトタイプ化に基づくものとし、「仮想的であれ現実的であれとにかく事実世界に深く関わる文彩である（同書57）」換喩と区別している。同様に、瀬戸（1995, 1997）は、類と種の関係（提喩）は意味の上の関係であり、事実の上の関係である全体と部分の関係（



換喩)と厳密に区別されるという。確かに、瀬戸(1997:50、163f.)のいうように、「桜は花の一種」であり「枝は桜の部分」である。しかし「『類-種』関係も『全体-部分』関係の一種である」というのは、少なくとも日常の用語法では許されるはずである」という主張は正確でない。「花」が「花の種類」のメタクラスであるときに、「桜は花の部分」であることは論理的に正しいと思われる。また、類と種の関係が意味の上の関係であり、全体と部分の関係が事実の上の関係であるという主張も「日常の用語法では許されようが」論理的には不当(菅野1994:154f.)である。

つまるところ、提喩が「類-種」の関係によることを認めても、それは「全体-部分」の関係による換喩の下位類であると「少なくとも論理的には」考えられるべきである。以下、この点をさらに詳しく考察してゆく。

1.1.10. 換喩と提喩(2)

ヤコブソン(1973b)によれば、隣接性の異常では、いわゆる文法が失われ、統辞法の話線への顕在や言語単位間の階層的な関係が維持できないものとされる(前者は結合の言語的操作に含まれる連鎖の異常、後者は同じく共起の異常である)。その結果、隣接性の異常では隠喩的性質が現れると説明される。一方、相似性の異常では、隣接性に基づく語の置き換えが生じるとされ、それらはすべて換喩だと説明される。相似性の異常は、また、対象言語と同じ体系をメタ言語として用いる能力の喪失であるとも見做され、表意するものと表意の対象および両者の関係を統一的に捉える

能力の欠損であると考えられる。したがって、相似性の異常では「指標あるいは写像 [本論の用語では類像：引用者注] から、それ相当の言語的な象徴へ移行することができ (ヤコブソン前掲書 31) 」ず、患者のことは指標にとどまるのである。このとき「象徴は、かれ [パース] も力説しているように、そのなかに類像と指標との双方が、あるいはどちらかひとつを摂りこむことができる (ヤコブソン 1984 : 53) 」が、十全な言語表現が範列と統辞との二重の操作を受けるように、象徴は類像 (の性質) と指標 (の性質) とをとりこむことになる。

ヤコブソン (1973b) が、提喩を換喩の一種と見做すことは、畢竟、ソシュールに抗して、結合の中に共起と連鎖との二重の操作が含まれるとする主張と並行するものと見るべきだろう。ヤコブソンの議論では、音素に共起する各素性は隣接関係に置かれるが、素性と音素とは上位-下位の包含関係にあるといえる。音素はその上位単位内における機能によって捉えられ、音素があることは上位単位があることによるのみ示される (上位単位は究極的に表現の全体に行き着く) のである。ここで包含関係と隣接関係とに、瀬戸 (1997) が示すような区別 (後者のみが現実の関係である) が成り立つのであれば、話線での要素の継起的連鎖のみが現実であることになる。しかし「音素は機能する、ゆえに ergo、音素は存在する」 (ヤコブソン 1977 : 101) という立場からは、共起もまた現実なのである。したがって、提喩は換喩と本質的に区別できないものと見做される。また、提喩が換喩の下位類になることは、ヤコブソン (ヤコブソン & ハレ 1973 : 88f.) が、音素と音とを類-種の関係と見る立場を不十分であると見做し、特質の抽出という全体-部分の関係に係るものとするところからの当然の帰結というべきだろう。

1.1.11. 隣接性の概念

冒頭にも述べた通り、野内 (2002 : 32) は「換喩と対立させるべきなのは隠喩ではなく、提喩ではあるまいか。われわれの知るかぎり、この点を指摘した論者はこれまでなかったように思う」と述べている。しかし、この指摘が特に新しい議論であるとは思われない。

ヤコブソンは、最も頻繁にチャールズ・パースの学説に言及する言語学者の一人としても知られているが、Peirce (2.277) は、隠喩を *hypoicon* の下位分類に立てている。*hypoicon* の同じ下位分類にあって、一次的なものはイメージ、二次的なものは図表である。つまり、隠喩は、表意の対象である第一項 [A] と表意する第二項 [B] とを視点となる第三項 [C] において統一することを表意の対象 [X'] とする類像 (的性質を持つ表意記号) [X] ということになる¹⁶。しかし、Todorov (1973 : 17) は、「修辞学用語では、類像は隠喩というよりもむしろ提喩である [引用者訳] 」と指摘している。これは、前述の野内の指摘と基本的に同じ議論であるといえる。この異論に対して、Sebeok (1975 : 255n3) は、「提喩は、ほかの換喩と同様、その規定に収まる点で、明らかに指標に属する [引用者訳] 」と反論している (類像については、Sebeok 1976 も参照) 。ここで、指標とは「記号とその表意する対象とが隣接する関係にあるもの、言い換えれば、対象の

¹⁶リチャーズ (1961 : 82ff.) の 相互作用説 における「主意」「媒体」「隠喩の根拠」に比較できる。なお、この点はしばしば指摘されるが、リチャーズの用語は、二重の三項関係 (類像の表意の対象としての三次性と言語記号が本来的に持つ三次性) にまたがって使われるために混乱した印象を受ける。

サンプルである[引用者訳](Sebeok1975:245)」記号をいう。修辞学へのヤコブソンの最大の貢献が、「隣接性」の概念のもとに曖昧なものを括って換喩を隠喩と対比させたこと(樋口1995:36f.)だともいわれるように、ヤコブソンの「隣接性」の概念は雑多なものを含んでいて一見明瞭でない。但、「隣接性」に対する瀬戸(前掲書211ff.)の論難に対しては、菅野(前掲書155)が指摘するように、「隣接性」を全体-部分の関係と読み替えればよいであろう。隣接性を一方が他方のサンプルとなる関係と説明するSebeokの反論と同様の指摘であると考えられる。

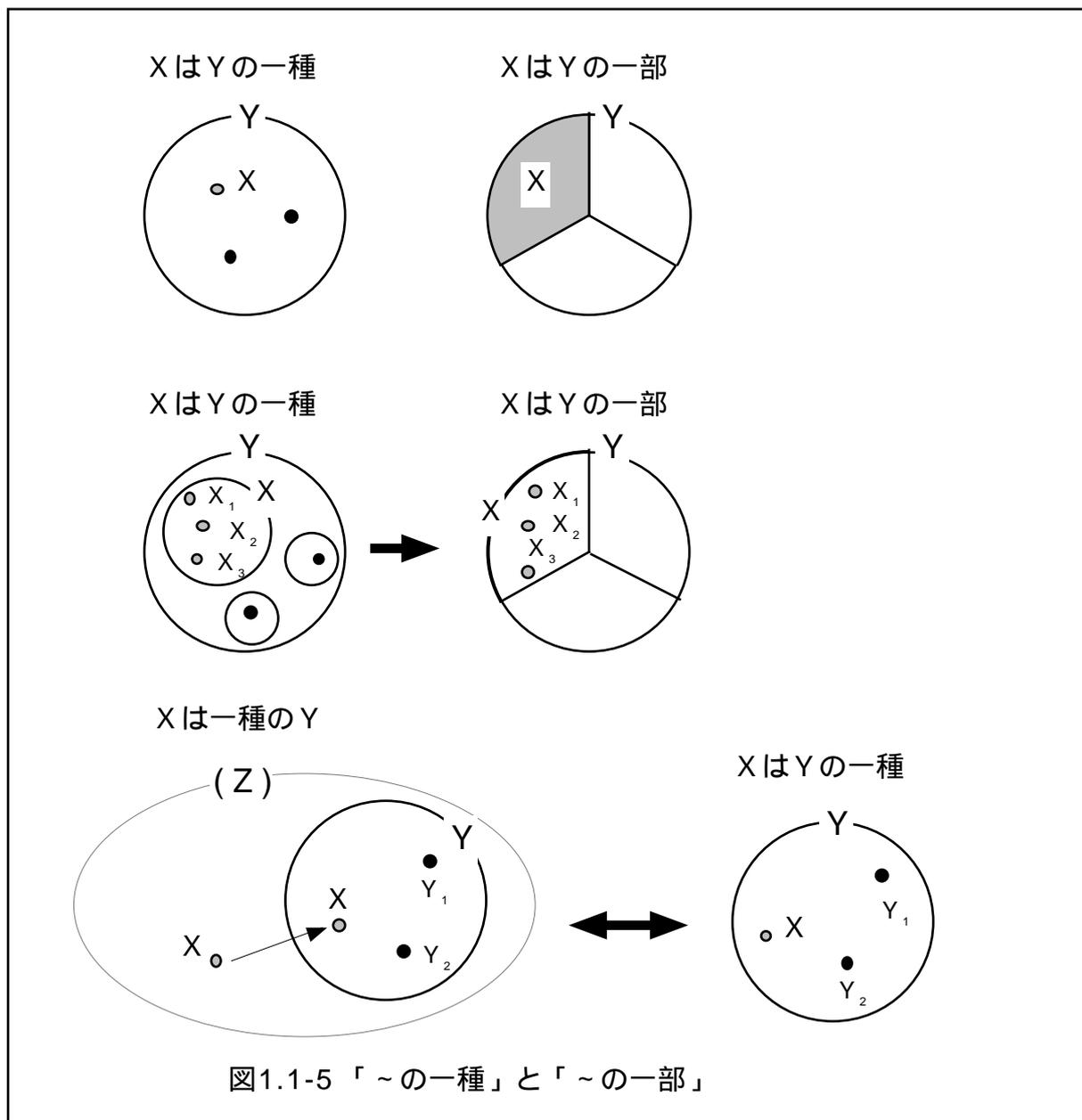
また、シービオク(1991:282)によれば、換喩は「或るものをその指標のひとつで置き換える手法」だが、指標は、Peirce(2.248)によって次のように説明される。「指標は、対象に影響される限り、それが表意する対象と必ず何らかの性質を共有する。そのため、特別な種類のものであっても類像を含んでいるのである。但、何がそれを記号にしているかという点でいえば、単に対象に類似しているということだけでなく、対象によって実際に限定されているということなのである[引用者訳]」。指標は対象と似ているのであり、たとえば、Peirce(2.248)によれば、写真は類像でなく指標である。したがって、換喩も類似性を含むものと考えられる。野内(2000:20ff.、2002:32ff.)は、提喩が「直接的類似性」に基づいていると指摘し、換喩と対立するものと議論しているが、提喩に類似性が認められたとしても、それは提喩が換喩の一種であることを妨げるものとはいえないのである。

1.1.12. 浸透する二極

提喩が換喩と同じ原理に基づいているとしても、提喩の概念は無効でない。ヤコブソン(1973a:211)は「隣接性に相似性が重ねられたものとしての詩においては、換喩はすべていくらか隠喩的であり、隠喩はすべていくらか換喩的色彩を帯びている」といい、バルト(1971:193)は「メタフォールの系列はすべて統合化されたパラディグムであり、メトニミーはすべて、凝結して体系に吸収された統合である」という。このような相互浸透を理解する際に提喩を利用することは、悪いアイデアでないと思われる。すなわち、隠喩は提喩に似ているのである。

隠喩の基本形を「XはYである」と仮定すると(橋元1989:159ff.)、隠喩は「ZにおいてXをYと見做す」という三項関係に組み替えられて解釈されるべきものである。そのため、隠喩の解釈はXとYとの類似性の探索を含むが、適切な視点Zが形式的に決定不能であるため、しばしば視点Zが棚上げされて(特に死喩化したものでは)「X[個]は一種のY[類]である」と理解される。その場合の二項的な理解は、提喩の原理と類似したものであるといえる(図1.1-5参照)。

野内(2000:77ff.、2002:73ff.)は、隠喩と提喩との違いを「間接的類似性」と「直接的類似性」という概念で説明しようとする。しかし、そのような曖昧な概念によるまでもなく、二項関係に基づく提喩は、本質的に三項関係の文彩である隠喩とは原理においてまったく異なるものと考えられるのである。隠喩が提喩に似ているのは、その具体的な解釈において、第三項の論理的な決定が困難だからである。そして、この困難も隠喩の豊かさを生じるもののひとつなのである。それに対して、野内(2002:73)は、隠喩を「『類似性』に基づく『見立て』」であり「『XをYとして見る』ことだ」と規定している。野内の議論は、換喩の原理の説明に必須の第三項を推定し、隠喩



を二項的に説明する点で、まったく転倒したものに思われる。そして、それが提喩を換喩と区別しようとするために生じることは明らかであろう。

旧修辞学がその分類においてひとつのラベルを与えたように、表現の中に、提喩として説明すべき文彩のあることは事実であろう。また、換喩と提喩とを異なる日常的論理と結びつけた表現と認めることもできると思われる（この点では、笠貫2003の議論が説得的である¹⁷）。その点で、換喩を隣接性すなわち全体-部分の関係による文彩、提喩を類-種の関係による文彩と見做すことは正当であろう。しかし、両者は同一の形式的な原理に基づいていると考えられる。提喩は換喩の一種であり、野内らの三分法は論理的に失当である。

¹⁷ 森（2001a, 2001b, 2002）は、類-種の関係を表わすシネドキと全体-部分の関係を表わすメトニミーとに共通の概念図式がありうるとしている。しかし「提喩と全体-部分の換喩の区別は明解に認めたくて、両者が共通のイメージスキームで捉えられることを指摘するのが本旨である（多門2002：2）」のならば倒立した議論に思われる。

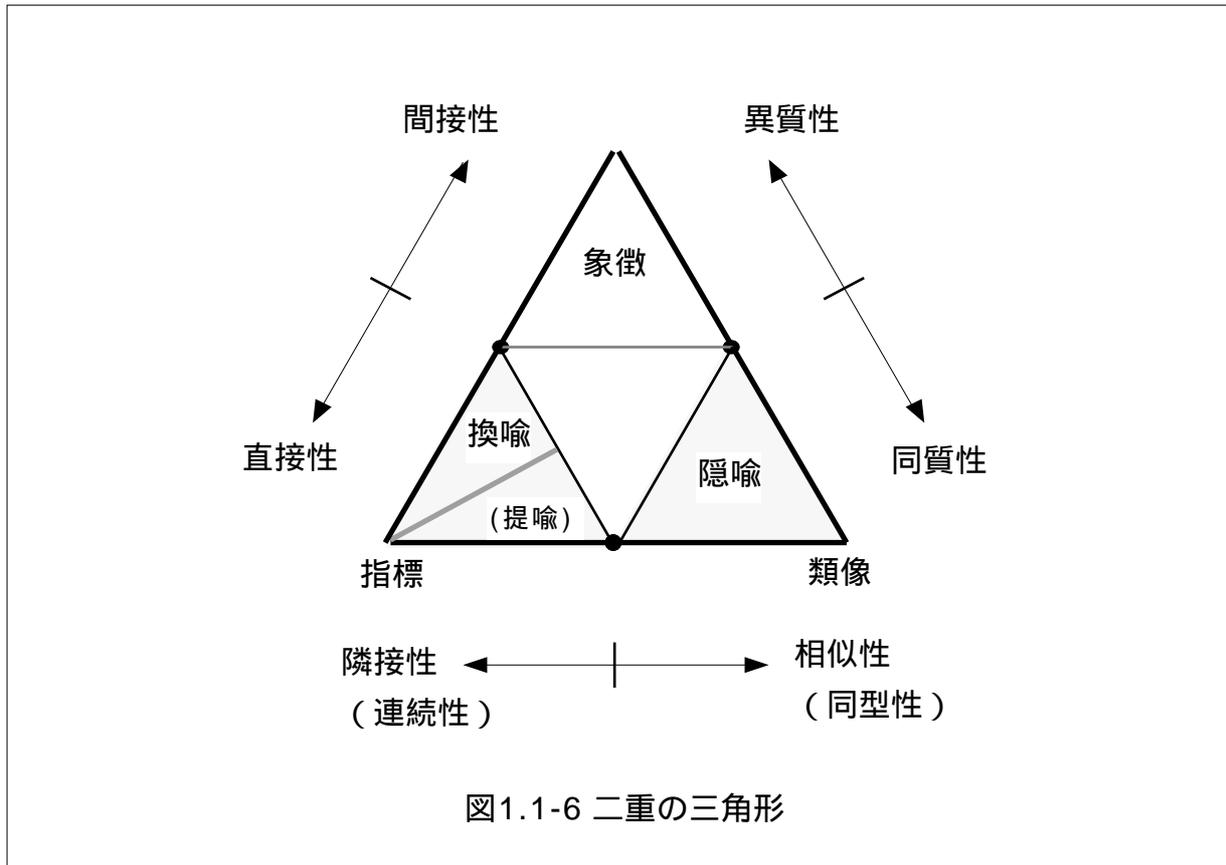


図1.1-6 二重の三角形

要約：隠喩は、字義通りの文（文の真理条件）を用いて聞き手の常識を脅かすことによって、聞き手にさまざまな解釈を引き起こすように 意図 するコミュニケーションの手段である。換喩は、現実世界での 全体-部分の関係 に基づいた記号の用法である。また、提喩を換喩と区別する説があるが、提喩は換喩の一種と見るべきものである。

参考図：隠喩と否定との関係

X Yのとき

XはYである Xは本当にYだ = 『XはYである』は真である 真
 彼は男である 彼は本当に男だ
 彼はバカである 彼は本当にバカだ ... x

真 x XはYでない = 『XはYである』は偽である 偽
 彼は男でない
 彼はバカでない ... x

XはYでないが (Xは) Yである全体として
 偽 真 x
 彼は男でないが男である
 彼はバカでないがバカである ... x

XはYだが (Xは) Yでない全体として
 真 x 偽
 彼は男だが男でない
 彼はバカだがバカでない ... x

XはYである Xは本当にYだ = 『XはYである』は真である 偽
 彼は狼である 彼は本当に狼だ

偽 XはYでない = 『XはYである』は偽である 真
 彼は狼でない

XはYでないが (Xは) Yである全体として
 真 x 偽
 彼は狼でないが狼である

XはYだが (Xは) Yでない全体として
 偽 真 x
 彼は狼だが狼でない

真：真である
 偽：偽である
 : 隠喩でありうる
 : Yが多義的な場合に隠喩でありうる
 x：隠喩でない

1.2. 文体の分類における換喩の機能 ~ 計量文体学 について

1.2.0. はじめに

文体論を「テキストの表層の要因をてがかりとしながら、その個別性や類型性をとりだすことで展開する領域（野村2000：259）」と見做す立場がある。言い換えれば、文体をひとまとまりのテキストの換喩と捉える立場であり、そのとき、文体は、テキストの個別性をとりだす手続きと同一視されることになる。その意味で、「操作主義的文体観」といってよいものである。

本節は、その一つのバリエーションと見なすスタイルの数理的研究（計量文体学¹）の概説を通じて、「操作主義的文体観」について考える。

12 1.2.1. テキストの分類

文体論は、「文学的文体論」と「語学的文体論」とに二分して理解されることがあった。作者の人間性や個性・認識や世界観の個別性をテキストの 深層 として想定することでテキストの 表層 の構造を理解しようとする立場が「文学的文体論」であり、 表層 の要素の操作によってテキストの 深層 にある構造を記述しようとする方法が「語学的文体論」である。これらの文体論の間の関係は、理論的に解決されたとはいえないが、一時期見られた苛烈な対立は解消されており、「現在では文体論の研究者が言語学の側、あるいは文学の側に立って固有の領域を守るよりも、その中間領域を当然の研究対象とする傾向がきわめて強い（豊田1991：65）」ともいわれている。いずれにせよ、一方が 起源 の個別性を求め、一方が 形態 の個別性を問題にするのならば、それは計量的・数理的研究へ収斂するものと考えられてよいはずである。たとえば、「語」の分布は、その一例だろう。もしも、語の分布やその逸脱的使用が個人の個別的な文体のあらわれという
24 ことならば、書き手のコンピュータを調べてみればよいはずである。語の短期及び長期の頻度情報の利用は、カナ漢字変換の基礎をなし、日本語ワードプロセッシングの実用化を可能にした最も基本的な設計概念である（森・八木橋1989：29ff.）から、それはユーザ辞書に記録されているであろう。この意味でいう文体とは、いずれほとんど体質的なもので、われわれが 書く という行為を行なうときにそこにアクセスし、一定の改変を加えながら（しかし、本質的には変更困難な一貫性を持つものとして）利用する計量的なリソースである。

学術的な研究の分野は、分類・理論・実証という3つの基本軸によって成り立っていると考えられる。研究史において文体論の源流であるレトリック（旧修辞学）は、「恐るべき分類作業（バルト1979：69）」であるといわれ、後に規範として硬直化してゆく。また、国語表現法などの古色めく規範も、規範となることを意識した表現の分類学であり、その点ではすべてが無効なのではない（われわれは、そのような分類にいささかも頼ることなく研究対象を確定することはできそうにない）。かかる分類の軸から見ると、文体論は、テキストの帰属による「階層的な分類」（媒体・

¹村上（2002）では、「計量文献学」の語があてられている。テキストの原著者や執筆年代の特定を試みるという意味では「計量文献学」の方が適当とも思われるが、本論では慣用に従うものとする。

時代・筆者・テキストジャンル・テーマ・表記・レジスターなど)を用いることが多かった(階層的な分類の具体例については山中1991など参照)。階層的な分類は、テキストのおおまかな性質を指すことができる。数的情報がイメージを惹起しないのに対し、類型的な階層名に対してあるイメージを持つことは容易である(分類とイメージとについては、中尾1990参照)。しかし、階層的な分類は、明確な基準に基づくものでなく、階層も緩やかな上下関係を持つだけである。一方、「操作主義的文体観」に基づく立場のひとつと見做されるスタイルの数理的研究は、特定の基準に対するテキストの相対的位置関係による分類(相対的分類)を与えるものと見做すことができる。文体が、テキストの特異性という意味を含むのであれば、文体認識はそれ自体に複数のテキストの比較を含むことになり、相対的分類が用いられるべきであるといえる²。その点で、テキストの相対的分類は文体分析の基礎とされるべきものであろう³。以下、本節では、計量文体学について簡単な考察を行うことにしたい。

12

1.2.2. 原著者推定

スタイルの数理的研究は、テキストを相互にグループ分けする一方で、テキストの特異性という点からは、原著者推定authorship attributionを、特に重要な問題としてきた⁴。それは、テキストと他のテキスト(複数)との相対的關係を定める作業を含む。階層的な分類に基づいた文体研究⁵は、例えば、あるテキストが著者という階層で帰属する特定の個人に応じて、その特徴を述べ立てるものであるから、著者未詳のテキストから原著者を推定するといった問題には向いていない。

テキストの原著者推定には様々な手法が提案されているが、十分な精度があれば、汎用性があり、機械的であり、適用が容易であるほどよい。その点では、語学的単位(表現上の特徴)を指標として用いない方法があるならば、恐らくそれは優れた方法であろう⁶。そこで注目されるのが、Zip圧縮を用いる方法である。

Zip圧縮を用いる方法(Benedetto et al.2002)が主張するのは、以下の方法である。Zip系

²階層的な分類に従えば、例えば、「三島由紀夫のテキスト」は、三島由紀夫が実際に執筆したテキストの(実際に存在する)一群を指す。一方、相対的分類では「この三島由紀夫のテキスト」と「その三島由紀夫のテキスト」しかない。「三島由紀夫のテキスト」は、特定のデータを特定の基準で括ったもの(唯名論的カテゴリ)となる。本論は、文体論にとって後者の立場がより望ましいと考える。

³分類は場合に応じて選択されるべきだということで、原理的な優劣をいうものでない。

⁴スタイルの数理的研究の流れについては、金(1999)参照。

⁵階層的な分類について言えば、いわゆる「文学的文体論」と「語学的文体論」との違いは、分類の用い方に係る。語学的立場は、分類に基づいて対象を指定し、そこからテキストの言語的特質をとりだそうとする。他方、文学的文体論は階層名とテキストとの必然的な關係を求め、階層名とテキストとに相互規定を想定する。「文体は表現主体によって個性的につくられるのみでなく...文体によって表現主体は流動し、逆につくられてゆく(原1975:130)」のであり、問題は言語の表層に還元できないと主張される。

⁶言語要素の分析などの事前処理を必要としないため、適用が容易であり、テキストジャンルや「談話体」(魚返1963の用語で、よりくだけた口語体の意味。現代語では、無助詞表現や表記符号の非規範的表記などを含む)などの話体の影響も受けないだろう。

1.2. 文体の分類における換喩の機能

のファイルアーカイバ・ソフトウェアは、圧縮アルゴリズムに LZ77 (Lempel-Ziv符号化のスライド辞書法) を基礎として用いている。これはデータ列中に重複して出現するキャラクタ列を認識し、それらに同じタグをつけるというものであり、同じパターンの列が繰り返し出現するほどファイルの圧縮率が高くなる。これをテキストに応用すれば、具体的に以下の方法で、その相対的關係を知ることができる。複数のテキストについて、(未知の) テキストXから部分xを抽出し(その他すべての) テキスト A_i の後に追加して A_i+x を生成する。 $L(A_i+x)-L(A_i)$ を測定する。(ここでLはzip圧縮されたファイルのビット数を示す) テキストXは の値が最小になるテキストと同じグループに属する。

ここでは、1バイト・2バイトキャラクタの混在する日本語のテキストにおける同方法の有効性を、以下のように調査する。また、それがテキストのテーマ判別に応用できるか否かについても簡単な調査を行う。

- 12 資料には、7人の書き手による学術論文34編(図や表を除く本文の全文)を用いた⁷。ファイルサイズは、最小4581バイト~最大56526バイト(平均22501.5バイト)で、平均文字数約11255字(400字詰め原稿用紙約28枚)。資料は、直接本人から入手したものとウェブ上に公開されたものがある⁸。なお、ファイルは、形式を統一し⁹、xとなる10~15KB程度の連続した任意の一部分を抽出した。対象となるテキストの全てが交替でXの役割を努めるようにした。ファイルの圧縮にはMacGzipを用い、リソースフォークは無視した。

この方法では、調査に用いた34の資料すべてで同一著者のテキストに対して適切な位置関係が指定できた。また、ランク1及びランク2を同一著者のテキストが占めたものが29(85.3%)、同一著者のテキストが上位を独占したものが13(38.2%)あった(詳しくは表1.2-1を参照)。

ここで、表1.2-1で第2席を別著者のテキストが占めた例を見ると、類似したテーマを扱っているものが多いようにも思われる(表1.2-2および表1.2-3参照)。そこで、自己と他者 および 遺伝的アルゴリズム をテーマとするそれぞれ1対のテキスト(各々共通の術語が多

⁷年齢は20代~60代で、男性4名・女性3名。複数の非日本語母語話者を含んでいる。対象に論文を用いたのは、(1)著者が明確である、(2)同一著者について一定の長さを持つ複数のテキストデータを得やすい、(3)基本的に筆者自身が電子化している、(4)権利関係が問題になりにくい、などの理由による。逆に、小説や随筆では、調査のための電子的複製が著作権との関係で扱いが難しく、権利の切れているテキストでは(多くの場合)表記にJIS外字、ルビなど(電子的に)扱いにくい要素が含まれる。特にルビは、文体や表現と密接に関わっていることが示されており(木坂1979、浅田1999など参照)、多くのルビを含む近代小説の類は(本稿に限らず)電子的処理の適切な対象と考えにくい。

文章の種類には諸説あるが、阪倉(1963)による機能的分類が基礎にされることが多い。これは文章を第1類(日記などの独語的文章)、第2類(手紙などの特定の相手を目指した伝達文章)、第3類(報道や論文など不特定の相手への伝達文章)、第4類(小説などの内言的文章)に大別するものである。文章種内のスタイル特徴を論じた研究に較べて、文章種間のスタイル差を論じたものは少ない(山口1991:135)が、一般的に以下のことは言えるものと考えられる。第1類や第4類では、第2類・第3類以上に個性的スタイルが目指され、或は許容されるということである(多くの文章作法書では、客観的伝達を旨とする文章は中立的スタイルをとることが良いとされている)。ここでは、第3類に分類される資料を対象とすることで、方法のより良い検証が可能になるものと考えられる。

⁸抽出に無作為性が低い、統計学的な処理を施すのではないので特に問題にならないと判断した。

⁹文字・改行コードを統一(S-JIS、CR)して、本文を整形した(行末スペースや制御文字など)。処理は専用のソフトウェア、スクリプトを用いて行った。

1.2. 文体の分類における換喩の機能

資料	サイズ	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5
M 1	14144	M 3	M 5	W 5	W 2	M 4
M 2	15889	M 3	M 5	M 6	M 4	W 2
M 3	35541	M 4	M 5	2	M 2	W 2
M 4	18457	M 3	2	M 5	W 5	W 2
M 5	16974	M 6	W 5	W 1	M 3	W 2
M 6	14839	M 5	M 7	W 1	M 3	W 5
M 7	13529	M 6	M 5	M 2	W 4	M 3
1	29066	3	2	W 2	W 5	P 3
2	28884	1	3	W 2	W 5	P 3
3	23235	1	2	W 2	P 1	W 5
L 1	4581	L 3	L 2	W 5	W 2	M 3
L 2	16269	L 3	2	W 2	W 5	M 3・1
L 3	16340	L 2	M 3	2	W 2	W 5・L 1
W 1	25374	W 2	W 5	W 4	W 6	2
W 2	28117	W 5	W 1	W 6	W 4	1
W 3	15294	W 5	W 2	W 1	W 4	3
W 4	17030	W 5	W 2	W 1	W 6	W 3
W 5	30440	W 2	W 6	W 1	W 4	P 1
W 6	19457	W 2	W 5	W 4	2	W 1
A 1	23448	A 2	A 3	O 1	O 2	O 3
A 2	29148	A 3	A 1	O 2	O 3	O 1
A 3	24674	A 2	A 1	O 1	P 2	O 2
C 1	21152	C 2	C 3	C 6	C 8	C 7
C 2	27689	C 1	C 3	C 6	C 8	C 7
C 3	28076	C 1	C 2	C 6	C 4	C 8
C 4	9284	C 3	C 6	C 2	C 8	C 7
C 5	18292	C 3	C 7	C 6	C 2	C 1
C 6	56526	C 2	C 3	C 7	C 4	C 1
C 7	29692	C 5	C 3	C 2	C 4	C 1
C 8	26040	C 3	C 2	C 6	C 4	C 7
P 1	24845	P 3	P 4	O 1	O 2	P 2
P 2	19295	P 3	O 1	P 4	P 1	O 2
P 3	24878	P 4	P 1	O 2	P 2	O 1
P 4	18553	P 3	P 1	O 2	O 1	O 3

表1.2-1：原著者推定の調査結果

著者を示すアルファベットとテキスト番号を示すアラビア数字とで資料を識別する。サイズは非圧縮時のファイル（データフォーク）サイズを示す（単位バイト）。本文の方法に従ってテストを行ない、圧縮率の高いものから順位をつけ、順位値の上位5位までを示した。

く含まれる)を含んだジャンルやテーマの異なる16のテキスト(ここでは、テーマの拡がりを考慮し、表1.2-1と異なる資料を用いた。資料の平均サイズは22403バイトで、大きなファイルは先頭部分を抜き出した。ファイルの処理は前記に準ずる)の中で、それらが判別されるかどうか確かめた。これは、表1.2-4に示したように、良い結果を得なかった。また、イ-I、ロ-Iに対するランク1のテキストは、それぞれ著者の同じ、テーマの異なるテキストであった。Zip圧縮を用いる方法をテキストの意味論的識別に用いるとする主張は、疑わしいものと思われる。

結果として、Zip圧縮を用いる方法は、原著者との関係においてテキスト間の相対的關係を適切に指定するが、テーマやジャンルとの関係では、階層的分類と一致しないようである。これらは、著者の違いがテキストの特異性を明らかにすると示すものではないが、両者に一定の關係を示す点では、スタイルが書き手の問題であるという最も流布した見方(これはスタイルの数理的研究にも共通した認識である)と一致することが指摘できる。

1.2. 文体の分類における換喩の機能

12

資料	テーマ		
M 1	文体論 (島崎藤村)	W 5	表現学 (研究史)
M 2	表現学 (欧文脈)	W 6	談話分析 (会話の構造)
M 3	文体論 (文の種類)	A 1	文法論 (迷惑受け身)
M 4	文法論 (疑問表現)	A 2	文法論 (接頭辞)
M 5	文章論 (研究史)	A 3	文法論 (構文の意味)
M 6	文体論 (規範文体)	C 1	表記論 (補助記号)
M 7	表記論 (カタカナ)	C 2	表記論 (振り仮名)
1	文法論 (助詞)	C 3	国語史 (資料性の検討)
2	文法論 (題目と格関係)	C 4	音韻史 (研究史)
3	文法論 (連体修飾)	C 5	表記論 (音韻注記)
L 1	文体論 (研究史)	C 6	音韻史 (入声音)
L 2	文体論 (志賀直哉)	C 7	表記論 (音韻注記)
L 3	文体論 (文の長さ)	C 8	音韻史 (半濁音化)
W 1	文体論 (規範文体)	P 1	文法論 (接続詞)
W 2	修辞学 (隠喩)	P 2	文法論 (助詞)
W 3	文体論 (色彩表現)	P 3	談話分析 (会話の展開)
W 4	表記論 (振り仮名)	P 4	談話分析 (比喩展開)

表1.2-2 : テキストのテーマ

表題や冒頭部の記述などから各資料が論じるテーマを端的に示したものを。

M 4	O 2	文構造と疑問表現の関係	題目表示と格関係の関係
M 5	W 5	文章論の研究史	表現学の展開と課題
L 2	O 2	志賀直哉のテキスト分析	題目表示と格関係の関係
L 3	M 3	文の長さとの関係	文の種類と文体の関係
P 2	O 1	接続助詞の用法	並列句と助詞

表1.2-3 : 異なる著者のテキストがランク 2 を得た場合のテキストのテーマ

表題や冒頭部の記述などから各資料が論じるテーマを具体的に示したものを。

計量的なスタイル研究は、「既製の統計学理論を借りて分析しているのが現状である……理論の
 24 中味は black box とみなし、コンピュータで統計パッケージを走らせているのが現状のようである」
 (吉岡1996:234)と言われることがある。特に本稿の方法は、処理を全体的にファイル=アーカイバ=ソフトウェアに依存しており、自らアルゴリズムを操作できないという問題がある。もちろん、データ圧縮法として、zipの採用する方法が最良のものであるわけではなく、より高度な圧縮アルゴリズムの開発が様々な領域で試みられている。辞書法(LZモデル化)による圧縮アルゴリズムにもバリエーションがあり、様々な新しい提案もなされている。また、特定の目的で開発される圧縮アルゴリズムもある(例:DNAシーケンス解析用の GenCompress¹⁰など)。原著者推定のための最良の圧縮アルゴリズム(扱うファイルサイズなどによって一つでないことも考えられる)を研究する余地は大きいものと思われるが、この点は、今後の学際的研究にゆだねられよう。

1.2.3. 文体とパタン認識

36 計量文体学の近年の方法は、パタン認識に基づいてテキストの相対的關係を定めようとするもの

¹⁰<http://www.cs.cityu.edu.hk/cssamk/gencomp/GenCompress1.htm>

1.2. 文体の分類における換喩の機能

資料	テーマ	形式	イ-Iに 対する ランク	ロ-Iに 対する ランク	ハに 対する ランク	ニに 対する ランク	イ-IIに 対する ランク	ロ-IIに 対する ランク	
イ-I	自己と他者	論文	単著	---	3	12	9	1	4
イ-II	哲学の課題	エッセイ	単著	1	5	11	14	---	5
ロ-I	自己と他者	論文	単著	4	---	7	6	6	1
ロ-II	現代言語論	論文	単著	2	1	8	12	3	---
ハ	遺伝的アルゴリズム	論文	共著	14	12	---	4	15	15
ニ	遺伝的アルゴリズム	論文	共著	13	13	1	---	11	12
ホ	文学批評	論文	単著	6	7	13	10	5	7
ヘ	物語論	論文	単著	8	4	5	5	8	3
ト	『河童』	文学	単著	9	8	14	15	7	9
チ	『走れメロス』	文学	単著	12	14	15	13	10	10
リ	指示詞の用法	論文	単著	7	9	9	7	9	8
ヌ	メディア論	エッセイ	単著	5	6	10	8	4	6
ル	文書の電子化	論文	単著	11	10	3	3	13	13
ヲ	プログラム言語	論文	共著	15	15	2	1	14	14
ワ	太陽光発電	論文	共著	10	11	4	2	12	11
カ	進化論	啓蒙書	単著	3	2	6	11	2	2

表1.2-4：テーマ判別の調査結果

表1と重複しない16のテキストを用いて、テーマの判別をテストした。著者の同じ資料には同じ仮名を用い、ローマ数字で区別した。
同一著者のテキストが含まれている場合にはテーマに関わらずランク1を得た。

12

が多い。パタン認識の問題と結びつける研究傾向¹¹は、文体研究を発展させるものといってよいし、言語や言語学の知識を必ずしも要しない点でユニークでもある。また、全体的に機械的処理を行なうことは客観的である。

しかし、かかる数理的な方法も、テキストの文体を把握するための確実な方法であるとはいえない。「文体は、なにごとか把握し規定することが難しいものである (Benedetto et al.)」²⁴といわれるように、その用語の意味するところははっきりせず、(それが把握できるものと定義されるならば) その把握も容易ではないからである。そのため、数理的分析によってテキストに何らかの質的な違いが導かれたときにも、その違いの意味するところにはもとのテキストに対してと同じだけ解釈の余地があるように思われる。違いがあることがわかったからといって、その違いが説明できるとは限らない。また、「文体」という用語に両立しえない意味が与えられることがある以上、複数の方法の総合によって文体を把握しようというものではないが、「文体」に広く合意された意味もない以上、それを把握する確実な方法はないというべきだろう。つまり、文体をパタン認識の問題として捉えた場合、その成果は、テキストの相対的分類や原著者推定の便法となるだろう。われわれは、あるテキストとあるテキストとの違いを直観的に把握できるが、その直観を裏づけるものが数理的な研究である。

¹¹パタン認識は、テキストの美的な受容と密接にかかわる。シービオク(1989: 201)は次のように述べている。「『芸術的な動物』という概念は、動き、音、色彩、形態に対する高度な感受性によってではなくて、流動的な環境の中から動的な構造を引き出す生得、ないしは学習で獲得された能力によって規定されることになる」。

1.2.4. 操作主義的文体観

操作主義的文体観は、文体と表現されたものとの関係をなぞろうとする。このことは、数理・計量的な手法と結びつかないとき、普遍的な類型と特殊な具体例との関係として記述される。問題は、特殊性と普遍性との具体的な配分にあるというより、特殊例をとりあげてなされる「実証」が、文体の理論の実証としては機能せず、文体論を文学論の中に位置づけることにしか貢献しないところにある。その結果、文体論は伝統的に優劣の評価を含むことが多く、主に、優れた文体を称揚することに偏ってきた。

数理的手法に対してどのような態度をとるにせよ、操作主義的文体観は、一方で書き手との関係で文体を理解しようとし、他方で所与の有機的な統一体を前提する傾向がある。しかし、例えば、次のような見解が事実と異なることは、e-textを前にしてはおのずと明らかである。

12

「文章とは、有機的な統一体である言語表現の一全体を意味する。始めがあって、終わりがあり、その間に有機的に連続する脈絡があって、それ自体をすべてとして完結している一全体を指す、たとえば、一作品というようなものである。」(永尾1975: 11)

また、ヨリ現実的な問題として、原著者に集約されない分散的なテキストにあって、原著者推定は象徴的問題といえる。例えば、web上のテキストの原著者が誰であるかは、通信経路をトレースしたほうが効率的である。われわれには、VRと現実の区別がつかないわけでない。もしも、その区別に困難の感じられることがあるとすれば、それは、われわれの知覚(情報への能動的な行為の投影)がデジタルビットと原子との物理的構成の区別に基づかないというに過ぎない。CGも植物も、視覚の投影において桜は桜である。同じように、特定のテキストの原著者をめぐる問題は、われわれの解釈が実体的書き手の区別には基づいていないという当然の真理を示すのである。

24

要約：文体をテキストの個別性をとりだす手続きと同一視する立場は「操作主義的文体観」と呼ぶことができる。操作主義的文体観は、数理的方法と結びつけられたとき(計量文体学)、テキストの相対的分類(修辞学などの階層的な分類に対するもの)の原理や原著者推定の便法となりうる。但、操作主義的文体観はe-textには適用しがたい面がある。

1.3. 表記における隠喩の機能 ～ カタカナ表記語 の機能について

1.3.0. はじめに

カタカナで表記される語の表現効果や、外来語（洋語）という意味でのカタカナ語を含めたそれ自体の是非などは、しばしば議論の対象となる。但、外来語が「国語」を乱すものと批判されたとしても、欧文脈が批判されることは少ない。欧文脈は、韓国では国語を汚すものと批判されるが、日本では国語の表現力を拡張するものと評価される傾向にある（尹1999）のである。外来語と欧文脈とのもっとも明瞭な違いは、前者が主にカタカナで書かれるのに対して、後者が漢字とひらがななどで書かれることだろう。その表記が、外来語と欧文脈とを意識において分けていることは想像に難くない。古く、東アジア諸国は一貫して中国文化の強い影響下にあった¹が、現在まで漢字を公式な表記に重用しているのは日本だけといってよい。各国語に導入された漢字は、体系の相違などといった言語学的理由によって廃用されたのではない（そもそも、文字より前に確かな体系などないだろう）。各国が民族的な言語・文化を形成・発展してゆく中で、中国文化とともに（あるいはそれに先立って）排斥された（井上1993）のである。一方、20世紀に至っても、欧米言語の帝国主義的膨張に対して、日本は文化的アイデンティティを中国文化 というよりも漢字の中に求めがちであった。その基本は、米国の帝国主義対日本の伝統主義という図式であり、さらに「『漢字を救え！』キャンペーン」²では、文字コードという専ら技術的問題が、欧米資本による文化的侵略だと述べ立てられることになった。しかし、実際には、漢字への拘りは国際語を目指すべき日本語の大きなハンディキャップ（田中1993：101ff、117ff.）となっているのである。正しい日本語 が表示できないものと機械を遠ざけるほどに、日本語は廃れてゆくだろう³。

外来語（洋語）をはじめとしてカタカナ語の「氾濫」が指摘されて久しい中で、コンピュータの普及による漢字の「復権」といった主張もしばしば聞かれる。本節では、カタカナと漢字との関係において、「片仮名表記語」が漢字に置き換えられてゆく方向の考えられることを論じたいと思う。具体的には、まず日本語の言語表記体系におけるカタカナの位置を確認し、漢字・平仮名の代替表記としての「片仮名表記語」を定義する。また、片仮名表記語のいわゆる「表現効果」について考察し、e-text環境における片仮名表記語の消長に対する一定の理論的予測を立てることを目指す。

¹「国風文化」とは、東アジアの交易システムの変化で大量流入した中国文化が大衆化されたもの（榎本1992）だが、村井（1976）は、「国風」を「くにぶり」と解し、中国を「都」とした「辺鄙の文化」との解釈を示している。いずれにせよ、一般には、「国風」という（比較的新しい）用語が純粋に日本的なものとして誇られ、卑称と意識されることはなかった。

²日本文芸家協会が1998年に開催したシンポジウム（「漢字を救え！」）に代表される一連の活動を指す。

³たとえば、西垣（2001：105）は次のように主張している。「われわれ日本人は、漢字をはじめ日本語特有の文字に関して、国際会議で主張を繰り返していかなくてはならない。そして、こちらの主張を認めてもらうためには、各国の文字処理について、日ごろから技術的な協力活動を続けていかなくてはならない」。

1.3.1. 日本語の言語表記体系

日本語の言語表記体系 (script) は、文字体系 (notation) としての漢字・平仮名・片仮名・ラテン=アルファベット・アラビア数字の (部分) 集合からなる集合であると考えられる。また、言語表記体系に、句読法、書字方向と折返し方向などの規則 (表記規則) を加えた体系は、表記体系 (writing system) と呼ばれる。文字体系間の使い分けは、表記規則によって厳密に律されているわけではない。その使い分けは、一般に慣習的で、現代日本語では、概念的意味を表す部分が漢字で、文法的意味を表す部分が平仮名で表記される。但、その慣習的であるところが、日本語の正書法 (orthography) の確立の障害であるとも指摘される (森岡&柴田1975: 93-6)。また、文字体系間の使い分けには、語種との関わりも認められる。和語 (固有成分) は、主に平仮名もしくは漢字、非固有成分のうち漢語 (近代中国音を除く) は、主に漢字、いわゆる外来語は、主

12 に片仮名で表記されるものとされる (『日本語教育事典』285ff.)。

1.3.2. 片仮名語の分類

土屋 (1976: 147) は、外来語以外の要素を表記するカタカナに以下の4つの場合があるという。

- A. 片仮名で書く習慣のあるもの。
- B. 漢字制限のため漢字で書けず、片仮名で書くもの。
- C. Bが習慣化して、範囲が広がったもの。
- D. 平仮名と違った、あるニュアンスを持たせるもの。

但、本節では、漢字制限といった文字政策について論じることが目的ではないので、考察の起点

24 としてカタカナで表記される語の分類を考えることからはじめたいと思う。まず、新聞を対象にカタカナが表記する (言語) 要素を調査した。今回用いたのは、毎日新聞朝刊 (1999年8月18日付12A版) 全面 (1面~26面、商業広告・図表・図版を除く) である。調査の結果を品詞別に整理して表1.3 - 1に示す。

以上の帰納的作業から、カタカナが表記する言語要素は以下のようにまとめられる。調査にあたって、注意を要する点は以下の通りである。

- ・原則として複合語水準を一語と認定した
- ・形容動詞の分類は立てず名詞として処理した
- ・混種語を二重カウントしたため合計が一致しない
- ・野球用語「ゴロ」は語源が明確でないため個別の集計から省いた

36 ここでは、以上の結果から、カタカナが表記する要素の分類を以下のように考えたい (表1.3 - 2も参照)。

1.3. 表記における隠喩の機能

12

	総語数		非外国語	
	異なり語	のべ語	異なり語	のべ語数
普通名詞	543	1209	44	65
動詞	2	2	2	2
感動詞	1	1	1	1
代名詞	2	4	2	4
副詞	13	13	13	13
固有名詞	390	783	52	117
地名	100	287	2	3
人名	111	185	5	14
組織名	95	150	12	23
動物名	12	38	12	38
植物名	19	40	14	29
その他	53	83	7	10
符号	7	8	7	8
音声形	5	6	5	6
	963	2026	126	216

表1.3-1 カタカナ語の使用実態（品詞別）

24

- (1)固有名詞（地名・人名・組織名・団体名・題名など）
- (2)外国語（日本人のカタカナ英語・ブローケン英語⁴を含む）
- (3)外国人による日本語（の音声）
- (4)外来語（和製英語を含む）・近代音による漢語
- (5)擬音語・擬態語・擬声語
- (6)動物や植物の和名⁵・俗名
- (7)漢字の慣用的⁶代替表記
- (8)臨時に特定の語（を示す）
- (9)臨時に特定の音（を示す）
- (10)符号の類

表1.3 - 1の調査結果を、この分類をもとに整理し直すと、表1.3 - 3のようになる。

このうち、分類の(4)(5)を「カタカナ語」、(6)(7)(8)を特に「片仮名表記語」と呼ぶことにする。片仮名表記語は、オノマトペの類を除く和語や漢語がカタカナで表記されたもので、本来、漢字・平仮名での表記を予定されるべき語が、カタカナで表記されたものであるといえる。以上の各号の関係は次のように示すことができる。

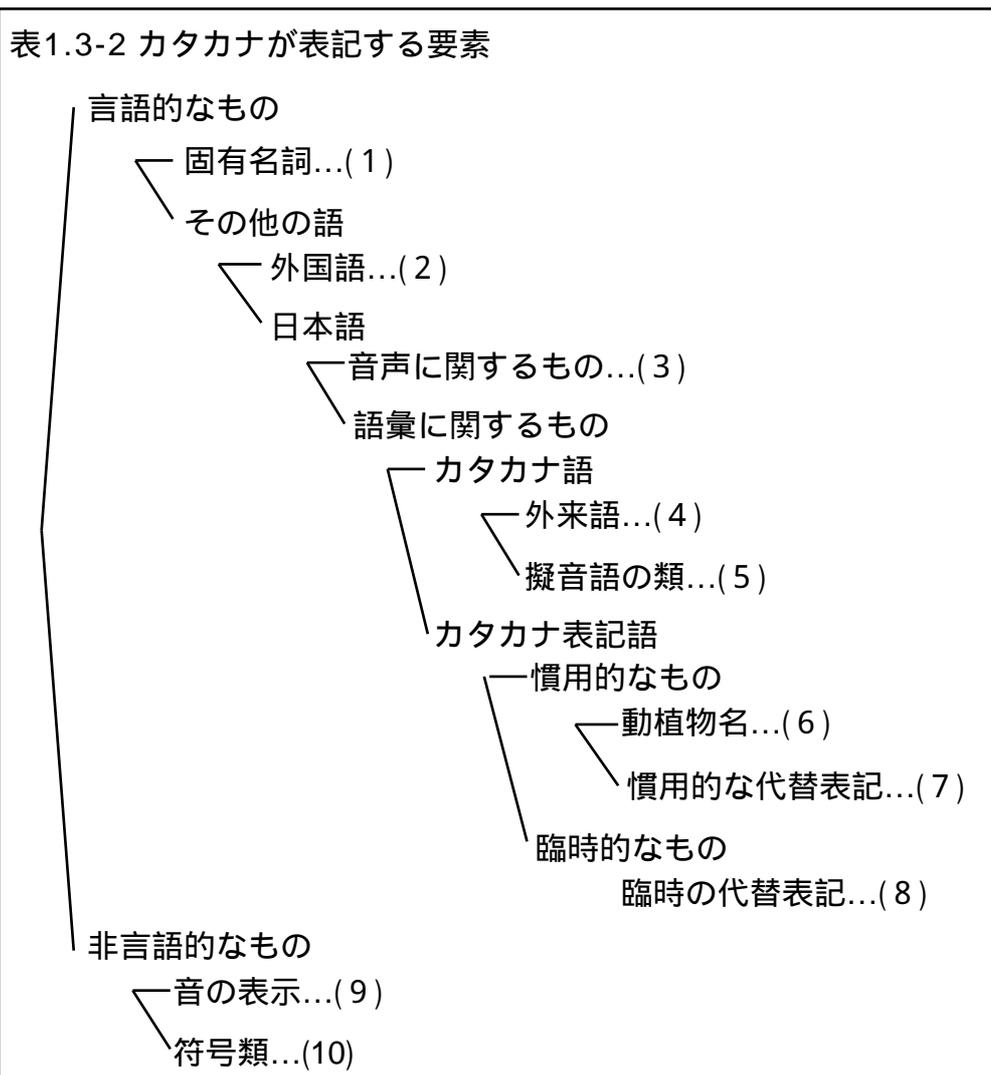
言語的なもの〔固有名詞・その他の語〔外国語・日本語〔音声・語彙（カタカナ語・カタカナ表記

⁴ジャパリッシュ、ジャパングリッシュなどとも呼ばれる。国際語としての英語は、その地域的変種である英国や米国の英語に代表されるのではない（小林1999）。

⁵動植物の和名を片仮名表記にした場合、素人には異分析を生じることがある。アオアズマヤドリ〔×アオアズマ・ヤドリ〕（青東屋鳥）、オオマリコケムシ〔×オオマリコ・ケムシ〕（大鞠苔虫）。

⁶慣用的か否かの識別は、辞書の記述をもとに行なった。

語) } } ・ [非言語的もの (非言語音 ・ 符号)]



12

片仮名表記語は、漢字・平仮名との関わりにおいて考察されるべき側面を有している。たとえば、
 24 樺島 (1978 : 210f.) は「漢字の勢力は次第に失われるだろうが、その速度に影響を与えるのは、
 片仮名の使用ではないかと感じられる」と書いている。また、佐竹 (1989) は、若者における感情
 の表出をもととする話しことば的表現が、非標準的なものとしてカタカナ表記を好むと述べてい
 る。カタカナ表記が、非標準的である点にその表現性の基盤を持つという意見には、現在、逆説的
 な傍証と見做しうるものが付けくわえられうる。近時文章は、カタカナ語よりもむしろ (難解な)
 漢字が多いという見解とともに、それは現れるのだが、カタカナ語が「氾濫」し、文字表記中にカ
 タカナの占める割合が多くなると、寧ろ視覚的に漢字が新鮮になるというのである。樺島
 (1981 : 190) は以下のような予測を記している。

漢字を守って “漢字仮名交じり文” を正式の日本文章とするのなら、今、直ちにむやみな外来語・
 外国語の使用と、漢字を片仮名書きにすることをやめなければ取り返しがつかないことになる。これ
 は文部省の仕事というよりは、文章を書くすべての日本人の問題である。日本人が、漢字の代わりに
 36 片仮名書きすることを止めようと、現在、決心しなければ、漢字は片仮名に食われてしまう。

1.3. 表記における隠喩の機能

12

	総語数		非外国語	
	異なり語	のべ語数	異なり語	のべ語数
固有名詞	357	704	26	48
カタカナ英語	2	2	0	0
外国人の日本語	2	2	2	2
外来語	498	1141	0	0
オノマトペ	13	13	13	13
動植物名	31	78	26	67
慣用的な代替表記	12	14	12	14
臨時の代替表記	36	58	36	58
臨時の音表記	5	6	5	6
符号	7	8	7	8
	963	1322	101	168

表1.3-3 カタカナ語の使用実態（機能別）

そして、少なくとも、このときに、漢字の復権（漢字による表記への回帰）が予見されているのでなければならない。ワードプロセッサの普及によって、漢字使用に対する学習コストの低減という状況はあるものの、「食う - 食われる」の比喩を続行すれば、被捕食者が減少して捕食者が増加すれば、繁殖しすぎた捕食者は自ら被捕食者の増加を予言することになるからである。

しばしば、片仮名は、その直線的で省画化された形態が、軽快でスマートな心理的效果を持つと説かれ、それが外国語（漢文訓読 洋語）を表記するという職能をもって存在していることが付け加えられる。しかしながら、漢字表記の「復権」には、心理的側面以上に、それが非標準的表記であるがゆえの前景化が関与的であるといえる。片仮名表記語は、漢字や平仮名との比率において考えられるものであって、とりわけその 表現効果 を論じるとき、心理学的要因はさまざま有効ではない。漢字や平仮名との比率という観点よりすれば、現代語の「規範文体（木坂1999：9）」に対する規範的な表記体の問題を考えなければならない。

樺島（1981：192f.）は、横書の普及にしたがって、外来語を原語の綴りで表記することが一般化し、終に、ラテン=アルファベットが片仮名の地位にとってかわり、平仮名+ローマ字を基本に漢字を併用する表記 が標準になると「予想することも決して無理ではない」と予言する。日本語の規範的の表記体が「平仮名・ローマ字・漢字交じり文」となるのかどうかは未だ見定められないが、樺島の予想する現象が観察される領域も存在する。陣内（1998：99f.）によれば、戦後のヒット曲名では「漢字かな型の漸減傾向、アルファベット型の急伸、そしてその間隙を縫うようなカタカナ型の微増漸減傾向が見られ」という。他にも、アルファベットによる表記が行なわれている領域にコンピュータ関係分野がある。例を挙げると、「IM市場制覇を狙うMicrosoftの権謀術数」「コンテンツ配信のAkamaiに、AppleとCiscoが出資」「メルコ、Macintosh用の外付けSCSI DVD-RAMドライブを発売」「ProphetがIBMのPowerPCマザーボードの利用計画を発表」「申し立ては、ソーテックのWindowsパソコンe-oneの流通および販売を禁止することを求めたもの」³。

但、ここでは固有名詞という問題を考えなければならないだろう。ある対談で、次のようなやり

とりがなされるくだりがある（佐倉&北野1995：228f.）。

雨宮 ときどきあまりいいとは思えない訳が流布されることがありますよ。それが実は、混乱を招いていることがある。

佐倉 コンピュータサイエンスの用語は、カタカナばかりですよ。

北野 日本語には訳さないままのことが多いよね。

佐倉 分子生物学では、頭文字だけとって略語にしちゃうことが多い。

北野 でも会社名などもひどい訳がありますよ。これは単純な語訳というか訳しすぎかもしれないけど、デジタル・エクイップメント（DEC）を『デジタル機器株式会社』と訳していたものがあったんですから。IBMは、『国際事務機株式会社』。

佐倉 じゃあジャストシステムは、『ちょうど体系』なんて訳されちゃう。

12 北野 最近読んだ本にも、笑えないようなそんな訳がたくさんあった。

新たな外国語の取り入れなどによるカタカナ語の増加は、常に「カタカナ語弱者（陣内1998：96）」を産み出さずにはいられない。カタカナ語のような単純借用でなく、外国語を翻訳借用することは、カタカナ語弱者に対する対応のひとつではあるが⁷、過剰な翻訳（翻訳が常にある種の過剰を引き込むこと）という問題に注意がなされるべきであろう。たとえば、ソシユール学説をめぐる時枝誠記と服部四郎らとの生産的であったとはいいいがたい議論の根本に、時枝が恐らくは小林英夫の訳本をしか利用せず（根来1985）、小林の訳語（*entité*を「実在体」とするなど）がソシユール批判の論拠とされたという事実があった（丸山編1985：158ff.）ということをわれわれは既に知っているのである。とりわけ、それが固有名詞である場合には、無理な翻訳は避けられるべきであり、英語以外の人名や国名・地名などは、原語のつづりでは読み方が分からない場合が多くなるだろうが⁸、無用の誤解を避けるためには、その表記を原語の綴りによって行なうことも有効であると思われる（ラテンアルファベットの使用には、Microsoftが米国籍企業で、トヨタが日本籍企業であるというような情報を表示する機能も認められよう）。従って、そのような範囲では、樺島の指摘する 漢字 カタカナ アルファベット という変化が起こると予測できることになる。但、このような現象が、規範的な表記体に対して起こるのかどうかという点では、更なる留保を必要とする。

1.3.3. 片仮名表記語の表現効果

土屋（1976：151ff.）は、「はな」「くび」「ゆめ」の語をとりあげ、漢字表記語と片仮名表記語とが併行して行われた場合、前者の方がより具体的な事物を指すと述べている。言い替えれば、

⁷大阪読売テレビ「ニューススクランブル」内の陣内正敬の発言。「NNN24」99.8.31放送分による。

⁸「ギョエテとは、おれがことかとゲーテいい」の戯句が有名だが、Alekhine [1892-1946：元チェス世界チャンピオン、ロシア-ソビエトからフランスに亡命]はどうか読むべきか。「アレヒン」か「アリョーヒン」か「アレキン」か「アリューヒン」か。あるいは、チェコ語の有声ふるえ摩擦音を含む“ドボルザーク”はどのように発音すべきか。

1.3. 表記における隠喩の機能

片仮名表記語は対象の比喩的拡張を表示するということになる。

一方、表記の問題は、表現に本質的でないという意見もある。例えば、平野啓一郎の小説の表記については、「ペダンチックな文字遣い」も指摘される（川村1998）。アラビア数字が多用される傾向の中で「千四百四十四年」のような表記は「反動的であり、古色蒼然としたものである」。但、そのような表記の問題は、文学の表現において「文體」の問題が重要であるようには、ほとんど重要ではないという。「『鷗外』と『鷗外』という表記（文字体）の違いによって本質的な差異が生み出されるわけではない」。

表記が文体の問題に本質的でないという指摘は賛同できるものである。但、字体の幅と文字種の選択とでは、問題は同じでない。「渡邊さん」と「渡辺さん」とが同じという程度には、「渡辺さん」と「ワタナベサン」とは同じでないと考えられるからである。たとえば、われわれは、明らかに前者が日本人（日本語母語話者）の呼びかけであり、後者が外国人（日本語非母語話者）の呼びかけであると理解することができるのである。但、そのときにカタカナは音だけを抽出して転写しており、それが表音文字と呼ばれる所以であろう。この、音声形を表示する機能は、カタカナを、一面、客観的な機能を持つものとして見做さしめる。そして、「サルからヒトへのミッシングリンク」、「イネの来た道」、「平成コメ問題」、「ニホン人」のような表記に対して、片仮名表記語が対象を客観的に構成するという機能を持つと認めるに吝かでなくなるのである。

イリイチ（イリイチ・網野1986：61）は、アルファベットが西欧文明の基本概念の形成に関わって果たした意味について考察している。イリイチは、アルファベットには、識字化という意味でなく、アルファベット化（無意識的識字）という問題が生じるのだという。アルファベットは、それによって記述された言語そのものを知らず、あるいは記述された内容が理解できなくとも、文書が読めるという機能を（ことの善悪は別にしても）持つわけである。翻って、片仮名にも、本来、同じ種類の機能が存在しているはずである。漢文訓読の補助記号として発生し、現在に至っても外国語表現に用いられることは、アルファベット同様、その文字さえ知れば、様々の言語を自らの言語の中に表現できる可能性を持つということに気づかされる⁹。そのことを確める実際の例が、進捗しつつあるという報道のなされたことがある（毎日新聞1999年1月4日付朝刊¹⁰）。但、ここでも、片仮名は、音だけを抽出する点で、言語の翻訳にではなく、コードの翻訳に関わっている。同時に、カタカナの直線的で省画化されたその形態は、筆記主体の書き癖を目立たなくするものでもあるだろう。書く身振り・手振りを覆い隠すことは、書きつつあることから意識を遠ざけ、一般化され・抽象化された対象につくことを容易にするものと考えられる。

カタカナは、ローカルなコードをグローバルなコードに変換し、筆記主体の身体を曖昧化することで普遍につこうとする。そして、この客観性が、メタファーとともに本節での問題のひとつを構

⁹漢文訓読は、中国語（漢文）を読む技法であるというより、日本語（和文）を書く技法として発生したと捉えられるべきである（山城1993）。

¹⁰その概要を以下に示しておく：南米ペルーの先住民族アシャニンカ族が、公用語のスペイン語におされて消滅が危惧される部族語（アシャニンカ語）を文字言語として残そうと考えた。ただ、スペイン語のアルファベットは「侵略者の言葉」として拒絶感が強い。アシャニンカ族は、言語学者に向けて民族文字の作成に協力するようインターネットを使って呼びかけ、これに応じて協力を申し出たザビネ・コッペ氏（山陽学園大助教授）が、最適の表記手段としてカタカナを提唱した。

成することになる。片仮名は、片仮名表記語を産む動力として、つまり、その 表現効果 として、概念のメタファー的拡張と、対象への客観性の確保とに機能していると見られる。それらはともに、特定の解釈に回収されうる特性を持っている。このようにして与えられる片仮名表記語の二重性が、その未来を予見するものと考えられなければならないのである。片仮名表記語は、そのことによってコンピュータに、コンピュータによって再編されるコミュニケーションに、必ずしもそぐわないのではないかと予測されることになる。

1.3.4. コンピュータにおける文字の役割

コンピュータ上でも、文字がその重要性を喪失するのではないことは、経験的にもすでに明らかであろう。文字を顕在化する人間の方法（書字行為／筆記行為）は、技術とともに変化する。肉筆（尖筆・鑿・刻刀・毛筆・万年筆・ボールポイントペン・鉛筆・サインペン・シャープペンシル・電子ペンなどが関与する）、キーボード入力（マウスなどの補助手段を含む）、タッチパネル、音声入力、脳内の電気信号の自動変換。最後者の実用性は定かでないが、音声入力は実用化に十分な水準に到達しつつある。同様、刻印された文字も、そのあり方に変化を生じる。対象に穿たれた痕跡、インク（墨、カーボン）のしみ、ディスプレイ上に点滅する光のドット……のようにである。このような技術の発展は、文字をして本来の機能を追及せしめるだろう。それは、活字印刷という直線の関係から逃れ、また、音声の十全な再現であるとか、一個の概念の表示であるとかいった重責からも逃れる。文字は、移動可能で、つまり保存可能な——移動の前後を通じて物理的象の同一性を確保しうる程度の永続性が保証される——視覚表象として期待されたものであると考えられる。

人間やコンピュータが構成するネットワークの上で、文字は、記憶を記録し、記録から記憶を生み出すメディアとして、複製され移動し続ける。文字素という概念は、字形（文字がとる視覚的実態／物理的実質）における示差的特徴の収束を意味すべきであり、単なる抽象化された字形（字形のことなりを捨象して字形と「類 - 例」の関係を構成する概念）と捉えられた場合には、語学的とはいえず、工学的な概念と見られる（拙論1999：70ff.）。それが工学的に構成される概念であるときには、ミーム（ドーキンス1991：306f., 509ff.）が外形（視覚的ヴィークル）を獲得するための装置であると再解釈されるかもしれない。従って、文字は、コンピュータ上で、文字データとしてのみならず画像データとして処理されてもよい¹¹。デジタル環境においては、そのことによって、文字の果す文化的機能が減退するのでは一向にないからである。

1.3.5. コンピュータにおける隠喩の役割

コンピュータ上で、文字がその重要性を喪失するのではないことのもう一つの証左は、コンピュータにおけるメタファーを検証することによって与えられる。

それが歴史に現れて以来、文字に必須の役割は、数的情報を管理することであった。それ以外の

¹¹オンライン電子出版や、電子図書館について考えたとき、文字コードの制約などによってテキスト化が難しい古書や稀覯本、文字学や考古学の専門書の類は画像データとして提供される必要がある

物質的手段（石、貝、結縄、割符）も、同様の機能を果たしうが、穀物の収穫量や会計帳簿を記録することこそ、文字に期待された機能であった（ガウアー1986）。同様に、コンピュータは、文字や画像や音声を扱うという以上に、本来は数字を処理するものである（コンピュータは暫く前まで「電算機」、「電子計算機」とも呼ばれてきた）。ポルター（1994：16f.）は、「端的に言って、コンピュータ・プログラミングは、数学者と論理学者が幾世紀にもわたって行ってきた記号操作の最新版である…形式言語は、従って、コンピュータにとって自然言語である」という。われわれは、17世紀以降、複雑な数式が最も論理的で記号的な表現であり、その到達点がコンピュータなのだと理解しなければならないわけである。コンピュータは、「数」を書き・読むものであり、形式言語の極限として、メタファーから最も遠いもののように思われもする。しかも、コンピュータはメタファーで覆い尽くされている。

ここで、われわれは、メタファーを排除するところに成り立つ言語の透明な論理性が、メタ
12 フェアの産物であったことに思い至る。言語はその本質においてメタファーとならざるをえない。

「修辞学は、文法と論理学に対するはっきりと否定的な関係によって、三学科が（拡張して考えるなら言語が）認識論的に安定した構造物であるという主張を、たしかに無効としてしまう…比喩表現と同様に文法も読むことの不可欠の要素であるわけだから、読むことは、結果的に、文法的認識がその修辞によるずらしによってたえず無効とされる否定的な過程ということになるだろう（ド・マン1992：50）」。

脱構築が明したのは、比喩言語と論理言語とは区別できず、というよりその区別自体がすでにメタファーであり、メタファーとの分離を公然と主張し論理の厳密さ緻密さを誇るはずの哲学的言語ですらメタファーであることが避けられないということであった。言語の本来の意味を、メタファーによって伝達される意味から引離そうとする試みは、そのような境界が無効であることを暴きだす。

コンピュータについて「～メタファ」といえば、システムとユーザとのインタフェイスの基本となるコンセプトを指す。パソコンにおけるヒトと機械との対話は、ひとつには、効率的なインタフェ
24 イスの開発という問題であり¹²、同時に、それは、メタファの問題ともなる。

デスクトップ=メタファは、画面（ディスプレイ）を机の上と考えるものであり、特定の概念を有形化する（「ディスプレイは机である」の形で定式化できる）。これは、別の言い方をすれば、画面を机と見立てる（～を～の視点から～として見る）ということで、このメタファーによって、われわれユーザーが画面を「デスクトップとして見る」ことが可能とされており、あるいは、画面を机としてみるように強いられている——メタファとはディスプレイが机に似ているという意味ではない。寧ろ、それは机なのである。記号と呼びうるものは、特定の形態を有し、われわれの知覚の網に掛かるが、ここではメタファーによってわれわれの認識や行動が組織されており、メタファはインタフェイスの構築に関わりながら、コンピュータというハードを没意識化するように働いている。「ファイル」「フォルダ」という語によって、われわれはそれが0と1とからなるデジタルなデータの磁気的な記録であることを忘れがちである——時として、ディスクを過信し、バックアッ

¹²「パソコン関係者にとって大切なのは、コンピュータをヒトの道具としていっそう洗練させていくことだった。そこではヒトと機械の対話技術が重視され、ヒトの能力を機械で補強しいかに引き出すかが問題となる。こうしてパソコンの目的はAIではなくむしろIA（Intelligence Amplifier）、すなわちヒトの知能の増幅機械ということになる（西垣1997:10-11）」。

ブを怠ってしまう。また、あらゆるメタファは、そのメタファが媒体を透明にすることによって忘れられがちであり、デスクトップを机の上だと意識することは実際に殆どない（「デスクトップはデスクトップである」）。これは、コンピュータのインタフェースを支持するメタファの特性であると考えられる。デジタル環境で文字と人とを繋ぐ、コンピュータのマン=マシン=インタフェースは、様々なメタファによって支持され、そのメタファは、コンピュータのハードを没意識化することによって特定の認識をユーザーに強制し、メタファそれ自体の存在を没意識化させる。

シャルチェ（1999：124）は、「物理的形態が知的美学的内容に影響を与えるということを認めるなら、ある作品が冊子本から電子ネットワークへという具合に、異種の表示形式に移植されたとき、その作品を受容する方法もまた変化することを無視してはなりません」と発言している。たしかに、冊子本の持つ重量感や装飾機能、或は酸化した紙や堆積した埃の匂いは電子本では失われてゆく。対象との身体的関わりは移り変らざるを得ない。また、光のドットを利用したメディアであるコンピュータは、対象を視覚的に構成（把握）するやり方を変革する（三田村1991：68f.）。ネットワーク=メディアが即時性を問題にするのは、それが時間差の極めて小さい双方向伝達を可能にするからだけでなく、それが即感性を要求する電光メディアであるからである。しかし、電子ネットワークが、それを構成する種々のメタファ（例えば、電子“図書館”はその代表例となろうし、電子“本”はブック=メタファやページ=メタファによって有形化される）によって受容方法を支配する可能性が考えられてよいだろう。われわれは「本を読む」と言って、「本を見る」とか（記憶の在処を問われたとき以外）「本で読む」とは言わない。一方、多くの場合、CD-ROMは「再生する」のであり、「ウェブページを見る」のではないだろうか。いまだウェブは 読書 するものにはなっていない。

1.3.6. 片仮名表記語の将来 ～理論的予測

24 コンピュータは、プログラムが与えられなければ ただの箱 である以上、プログラム（コード）を構成する文字によってその機能が発揮されることになる。他方、コンピュータは人間との関わりをメタファによって構築している。前者は、「文字通り」の意味（「事実」と理解される）が人間に対して持つ実践的拘束力に似ており、それが「文字通り」でない構築によって支えられる。また、メタフォリカルに提示され建設されてきたテキスト（の表象）は、ハイパテキストによって「文字通り」に実現され、その実在が証明される。コンピュータは、文字通りの意味が、文字通りでない表現によって、テキストを文字通りに再現するところで、言語におけるその重要性を確保するのである。

36 コンピュータは、表層での統合と二極性との絶えざる反転を重層的に仕組みながら、そもそもは（単純な仕組である）電機的な回路の（多少複雑な）組み合わせに過ぎないディスプレイ上の振舞いを知的なものとして人間が受容する下地を構築している。客観性の確保とメタファー的拡張とに関わる「片仮名表記語」の二重性は、不安定な反転を生ずることなく、常に特定の解釈に回収される。このような「片仮名表記語」の「文字通り」の姿勢は、一見コンピュータのメタファを働かせる上に有用であるようにも見える。メタファを機能するには「文字通り」の姿勢が必要であり、

そのことによって認識が新たに組織され、あるいは、解釈が変更され、種々の効果をもたらすからである。但、片仮名表記語に付随する「文字通り」の姿勢は、常に一意性に回収されるという点で、些か強力である。それは、それがメタファーであるという認識を同時に植えつける。それがメタファーであるという認知は、メタファーを起動する十分条件ではあるが、必要条件であるとは言い切れないであろう。殊に、コンピュータのインタフェイスは、メタファがそれと知られずに機能しているかに見えることによって、人との対話（コミュニケーション）を、その望ましいレベルで行うことを可能にしているように見える（視覚のメタファー）。従って、片仮名表記語の二重性は、それが一意性に達しようという性質を發揮する（それは概念を構成するという点からは望まれるものとなるが）ことによって、コンピュータと人との対話の妨げとなりかねない。

しかして、「片仮名表記語」は、コンピュータでは歓迎される表記でなくなるだろうと予測されることになる。それは 対話 が一段と重要性を主張するネットワーク上のe-text環境では、ますます厄介なものになる。また、「漢字の復権」は、その非常用性が新奇性を喚起するからばかりではないことも理解される。漢字や平仮名のかわりにカタカナが用いられることは、コンピュータ化に逆行していることになる。ここで、片仮名表記語の将来にわたる確実な減少を予測することになる。

1.3.7. 片仮名表記語について

現代日本語で、カタカナが表記する言語的要素は、帰納的手続きにより、

- (1)固有名詞
- (2)外国語
- (3)外国人による日本語（の音声）
- (4)外来語（和製英語を含む）・近代音による漢語
- 24 (5)擬音語・擬態語・擬声語
- (6)動物や植物の和名・俗名
- (7)漢字の慣用的な代替表記
- (8)臨時に特定の語（を示す）
- (9)臨時に特定の音（を示す）
- (10)符号の類

のように整理される。このうち、(4)をはじめに(2)(3)(10)などは表記として比較的安定しているが、(1)はローマ字（アルファベット）との間で表記の分担が進んでゆくと考えられる（かかるカタカナ語からの離脱は(2)(3)(4)に波及する可能性がある）。

外来語など、カタカナ語の「氾濫」が指摘されて久しい中で、「電腦」という漢字語が「コンピュータ（ー）」に対して公然とその地位を主張し、それに替わる地位を獲得するかにさえ見えることは、一見不思議な現象である¹³。この現象の背後には、日本語の言語表記体系におけるカタカナの文字体系としての位置や、他の文字体系との相互性から生じるカタカナによる代替表記に関わ

¹³本節は、1999年9月執筆の論文に基づいている。

る原理的問題との密接なつながりが存在しているように思われる。

コンピュータは、形式言語の到達点としてメタファーから最も遠いもののように思われもする。しかし、それはメタファで覆い尽くされている。コンピュータは、プログラムを構成する文字によってその機能が発揮されることになり、他方、人間とのインタフェースをメタファによって構築している。また、コンピュータはハイパテキストによってテキストの概念を「文字通り」に実現する。その意味で、コンピュータは、プログラムという文字通りの意味が、メタファという非=文字通りの表現によって、テキストという文字通りの意味と文字通りでない意味との抗争を文字通りに再現するものであるということが出来る。文字通りの意味を想定することが隠喩に不可欠であるのは、それが常に事実と結びついているからであり、この意味で隠喩は類似性による見立てである。しかし、(隠喩の)文字通りの意味と見立てとしての効果の間の関係は、一意性をもってそれを解決しようとするならば、容易に見定められない。文学的隠喩はこの困難(決定不能性)を積極的に利用する。しかし、決定不能命題に対してもわれわれ人間の知性はなにごとかを直感・理解するもので、その時、隠喩は文字通りの意味でない意味や、文字通りの意味以上の意味を担うと見なされがちなのである(1.1)。この関係決定という問題は、両者の対立が消去されるときにしか問題としての本来の意味を持ちえないのかもしれない。環境と行動との間の円環システム(0.3)で行動=認識を形作る隠喩の働きは、それが隠喩だという認識を求めないときに最も有効に働く。

かかる重層的な構成に対して、「片仮名表記語」の二重性は、その企図の妨げとなる蓋然性を有している。人とテキストとの出会いのメディアであるコンピュータにおいて、メタファは文字通りの意味を否定するのでも、それに累加して新たな意味を担うのでもなく、両者は巧妙なやり方——メディアの物質性を覆い隠すリアルを生み出す——で互いに互いを消去する。片仮名表記語において、メタファーは文字通りの意味を否定し、その上に新たな意味を重ねようとする。このような性質は、メディアの物質性を呼び起こす。片仮名表記語は、人とコンピュータとの対話/融合の障碍となる。あるいは、現実を攪乱することが、何ら利益をもたらさないからには、e-text環境での片仮名表記語は慎むべき作法となりうるのである(表1.3-4も参照)。

そのような理由で、「片仮名表記語」は、デジタル環境では概ね減少してゆく運命にあるものと予測されることになる。カタカナで代替表記される要素は、漢字や平仮名に回帰することが期待され、そこでは、文法要素を構成する平仮名に対して、カタカナと同じく分節化機能を持つ漢字の概念構成力が相対的に上昇することになる¹⁴。「電腦」という漢字語には、以上のような多少とも入り組んだ背景を見なければならぬものと思われるのである。コンピュータの中で/上で、概念が漢字を資材とすることと、コンピュータの概念自体が漢字を資材とすることと深く関係していると考えられる。したがって、「電腦」という言葉(語)のレジスターが「文字言語レベルにとどまっ

¹⁴この議論は、外来語や日本語の文脈に導入された外国語の衰退を問題にしたり予測するものではないが、そのような方向に関しても考えられるべきことはあろう。家庭生活に深く入り込む家電製品では、マニュアルやユーザが操作上で接触する日本語のわかりやすさが売り上げを左右しかねない状況にあるという(NHK「クローズアップ現代」『ビジネスは日本語が決め手』漢字で差がつく商品開発」1999年9月16日放送分)。このことはコンピュータにも適用される(家電製品の大手量販店は、パーソナル=コンピュータを家電として位置づけたと言われている)。コンピュータの画面上の語(文字)の僅かな相違がユーザの行動(操作)を左右するという状況では、用語やその表記のアイコン化とも言うべき現実が見られ、その中で外来語のあり方が問われることにもなるだろう。

ている（陣内1998：97）」ことも同じ立場から説明できるだろう。

表1.3-4 二項的関係の整理

コンピュータ	ハイパertext	——	テキスト
	プログラム	——	インタフェイス
メタファー	意味	——	表現
テキスト	意味	↔	意味
カタカナ	客観性	—//—	認識（拡張）
文字通り	である		でない

12

要約：現代日本語で、カタカナが表記する言語的要素は、(1)固有名詞(2)外国語(3)外国人の日本語(4)外来語(5)擬音語(6)動植物の和名・俗名(7)慣用的代替表記(8)臨時の語(9)臨時の音(10)符号のように整理される。このうち(1)(2)(3)(4)は、ローマ字（アルファベット）化してゆく可能性がある。また、(6)(7)(8)は「片仮名表記語」と呼ぶことができるが、この類はコンピュータのメタファーとの不整合から漢字・平仮名に回帰してゆくと予測される。

24

1.4. 文章における換喩の機能 ~ 冒頭 について

1.4.0. はじめに

時枝(1960)は、「冒頭」と「書き出し」との概念上の区別を主張した¹。冒頭が機能によって定まり²、位置によって定まる書き出しとは分離可能な概念だとする見解は、以下の疑問を生む。

冒頭と書き出しとは、その区別が言われるだけの類似性あるいは関連性があると考えられるが、この「自然的な」連関をどのように考えるべきであろうか。時枝(1960:66)は、「文章表現といふものは、畢竟、冒頭を冕れることが出来ないものであつて、それは文章の根本的性格である線條性、継時性といふことに由来するのであらう」と述べている。しかし、表現の研究の基盤と指定されることも多い 文章表現の線性格 は再検討されるべきだろう。e-textにおいて、われわれは、予め始まりと終わりとに区切られた文章という単位を自明のものとしてうけとることができるであろうか。そこでは、書き出しと冒頭との関係はどのように捉えられるべきだろうか。

本節では、冒頭と書き出しとの問題を足がかりに、表現における始まりの形式的・一般的様態を考察する。具体的には、2項で 展開 という考えを批判的に検討し、3項で冒頭と書き出しとの区別について、4項で冒頭を規定する表現上の機構を論じる。なお、本論は、表現には冒頭があり、それが研究の重要な対象になることを認める立場をとるものである。

1.4.1. 冒頭の機能について

時枝(1960:52f.)は、『言語過程説』の立場から、文章を 冒頭からの展開 によって成立するものであるという³。木坂(1990:31)は、冒頭書き出しの論には、(1)展開としての文章の性格から行なわれるものと、(2)作文技術として論じられるものとがあるとし、いずれにせよ「線条的な一行構造に流れる脈絡に区切りをつけ、文章に形態的独立性を与えるものは書き出しと結びである。書記活動の発端としての書き出しと、締め括りとしての結びの表現は...単に文章の始めと終りとい

¹「文章における冒頭は、文章の『書き出し』とは別である。どのような文章も、書き出しの無い文章は無いが、冒頭の無い文章といふものはあり得ることである。人間に譬へて云へば、書き出しを頭とするならば、冒頭は、帽子或は冠に比すべきものである(時枝1960:63)」。引用文中一部表記を改めた。以下、同様の場合にも特に断わらない。

²冒頭を機能から分類すると、

- 1 體の輪郭。枠の設定であつて、時、處、登場人物が提示される。
- 2 作者の口上、執筆の態度を述べたもので、本文に述べられる事柄とは明かに次元を異にしてゐる。
- 3 全體の要旨、筋書、概要を述べる。
- 4 作品展開の種子或は前提となる事柄の提示。
- 5 作者の主題の表白。

のようになる(時枝1960:58ff.)。

³「冒頭と、その展開である表現との間には、相互制約の機能的關係が存在する。...冒頭によつてその表現がどのように展開するかの大體の方向と輪郭とを想像することが出来るのである。...冒頭を踏まへて読み進めるといふことは、我々の自然な、また正しい讀書の姿勢であつて、それは、文章の継時的線條的性格に根據があるのである(時枝1960:52f.)」。

1.4. 文章における換喩の機能

うだけではなく、意味的統一体としての文章の方向性を徴表的に示す部分である」と述べている。

冒頭と結びとに関する研究の諸相は木坂（1990）に詳しく、本節での細かな言及は避けるが、冒頭の機能として再々とりあげられるところはおおよそ以下になるよう⁴。

冒頭の機能

- ・ 内容を集約的に述べる
- ・ 本題に対比的内容を述べる（本題は冒頭を逆接で受ける）
- ・ 著者の立場・執筆態度を述べる
- ・ 世界（時・所・登場人物）を提示する
- ・ 物語の枕をなす
- ・ 結びと対応する（以上、市川1978）
- 12 ・ 一人称 / 非人称的の語り手の表出
- ・ 特定の型を持つ（以上、木坂前掲書）
- ・ 語彙（の集中度）がヨリ分散する（「どの作品においても最初の100語の区間では異なり語の出現率は相当高いが、それ以降は急速に低くなっていく（吉岡1996：218）」）
- ・ 提題文が多い（木坂1999）
- ・ 特定の時・登場人物の登場を提示する表現の出現に（特定作者について）一定の型が見られる（落合2000）
- ・ 文が説明的になり、相対的に長文化あるいは変異係数が大きくなる傾向がある（拙論1996）

冒頭という事象があって、それが特定の機能を担い、特徴的表現をとるテキスト部分であるとすると 本論では、そのことを認めようとするのだが、冒頭という事象あるいは術語には再考が必要となるだろう。というのも、文章の展開 という考えは、e-textによって与えられる今日的
24 言語状況に合致しないものである。

1.4.2. 文章論について

時枝（1960）は、言語に対するあらゆる還元を、（内在する基本法則に還元可能な点を除いて）原子論的であると斥ける。言語は 人間の表現・理解行為の過程という人間的事実 であるがゆえに、「常にそれ自身一體であるひとつの全體として興へられ、しかもその全體性といふことが問題なので（時枝1960：11）」あり、原子論的還元を受けつけないとされる。こうして、時枝は「読み」を書き手の意図の再現であるとするようになる。和田（1997：64f.）は、時枝の用語 読者が、「きわめて一般的で受動的」、「差異抑圧的」な「傀儡的概念」であり、そのような用語の使用が、時枝文章論を成り立たせていると論じている。文章 に関わる要素のうち還元不可能なものは、時枝にあっては「読み」の持つ時間性（「継時的線条性」）だけなのだが、それが言語単位

⁴冒頭と結びとの対応は、「なか」を挟んで区切られた単位間の関係であるため、それぞれに類型論を用意するものになる。

1.4. 文章における換喩の機能

の内在的法則性⁵と一致しなければならなかったために、読みは 文章 が予定する意図の再現であるよりなかったのだと言える。始まりと終わりとに区切られ 線的展開 という明確な秩序を有する言語単位「文章」を研究対象として確保するためには、「読み」は秩序を正しく再現するものでなければならず、したがって、「読み」における多様性や書き手と読み手との関係性が問題にされることはない。

「展開」とは、正しい読みによって再現されるべき予定された秩序や価値であり、「読み」に対するこのような指定は、読むことと書くこととが行為として一致するようになる（ランドウ1996、マンガエル1999）e-text環境ではうけいられないであろう。読みうることと読んでいることとの時間的・権利的な先後関係のギャップを埋めるのが、ディスクール⁶の次元であるとすれば、そこで、読むことと書くこととが一致するように求められるのは当然であり⁷、そのような要請が全面的に共時的で・本質的に非-歴史的なネットワークの中で実現されてゆ

12 くことも同じように当然だ⁸といわなければなるまい。

e-text環境で、時間的秩序は「文脈」と呼ぶべきだろう。「場面」と同義でなく用いられた「文脈」という語は「言語学的時間」に関わり（拙論1998）、コミュニケーション行動（読み手による読み の投影）以前にはないものと言えるからである⁹。冒頭/書き出しを「文脈」との関わりで論じるときには、書き出しが文字列上の位置によって定まるのでないと考えることが問題を整理するようである。例えば、特定の要素をヨリ強く保持するエクリチュールが、文脈上の対比によって、「書き出し的機能」を持つことになるのである。そう考えると、テキストへの読み手 による読み の投影が必要であり、書き出しは、言語上の問題であるという以上に、コミュニケーション上の事実としてとらえられることになるからである。このとき、冒頭を書き出しから区別するならば、作者=読者 が、読み によって、文脈上の特定の位置を附与するテキスト部分が「冒頭」をなすことになるといえるだろう。このような考え方の検討は、[1.4.3](#)で行なうが、重要なことは、始まりをデザインすることだと思われる。書き出しや冒頭が、始まりという概念と

24 関わっていることは疑いようがないものと思われる。われわれは、始めることによってのみ、終わりで終わることになる。ここで、始めるから終わるのだということは、読み手の参与を要求している。もし、テキストが無限に開かれるものであっても、読み手として参与する彼の行為は無限でな

⁵「問題は、統一體を統一體たらしめる統一の原理を明らかにすることである（時枝1960：12）」。

⁶周知のように、ソシユールは、ラング（話しうる主体が知っているべきこと）とパロール（話している主体が話していること）との中間に、「活動化されたラング」の領域としてディスクールを設けている。以後、同じ用語は様々な領域で様々な使われ方をするが、ソシユールにあっては孤立した要素（概念）を結びつける（関係化）という程度の意味で理解され、重視されてきたとはいえない。

⁷話しことばで、同じことがすでに理解されている。「他者に向けられたメッセージは、まず第一に話し手自身に向けられているのだ。ここからして、話すということは自分に話すということだ、という結論が出てくる。同様に、受け手=解読者は、聞こえることを言える範囲でのみ解読する（クリステヴァ1983:21）」。

⁸非=歴史的な環境では、読みうることと読んでいることとの間の因果関係（どちらがどちらに依存するか）を問う必要はない。

⁹例えば、様々な状況でエクリチュール上で空白に隣接する形態は終わりという文脈を担う。

く、また、もし、テキストのあらゆる部分が意味を持つとしても、彼の行為のすべてが意味を持つと考えることもできない。つまり、テキストの何ら予定しない終了というものがあって良いことになっているのである。言い換えれば、始まりをデザインするということは、始まりと終わりという虚構にどのようなリアリティを与えるのかということだろう。ここで、虚構を虚構として通用させるための努力は惜まれるべきでなく、騙されるために人間の感覚は一定のリアリティを要求する。

「事実」（と認識される事柄）が持つ実践的拘束力は、何ものにもかえがたいからである。始まりと終わりの問題としてみたとき、書き出し/冒頭と結びとがどのようにしてリアリティを生み出すのかについては1.4.4で考察することにする。

1.4.3. 冒頭と呼びかけ構造

- 12 ウェブ上で、多くの商用サイトはポータルを目指す。その有力な手段は検索サービスの提供であり、多くの広告とともに、「キーワード[]で検索」(ZDnet-JPN)「次の語を検索：[]」(MSNsearch-JPN)「search for [] any language」(AltaVista)などの文が見える。これらの文は、あらかじめテキストの全体を予告しているものと考えられ¹⁰、この文の呼びかけに答えることで、われわれはそれ自身で終わることのないテキストを追うことになる¹²。言い換えれば、メタテキスト的機能が、呼びかけ構造の中での定型文によって果たされているもので、これらの直接的勧誘や充填を要請するフィールドを含む表現は「定型呼びかけ文」と呼びうるものであろう。

- 言語による「呼びかけ」は、ビューラー(1983: 106ff., 128f.)が指摘しているように、音の持つ特徴(人間の声とその他の音とは容易に区別され、その主が誰であるかも識別可能)と空間的方向性とを利用して聞き手との間に接触をつくりだす話し手の行為であり、その結果、最も自然な成り行きとして、聞き手は音源=発信者の方向を見ることになる。但、ビューラーも強調する通り、実際の局面で、呼びかけは言語以外の様々な手段と複合される。つまり、「話者が何を語ろうとして
- 24 ているのかを決定しようとして言語コードに頼る以前に、話者が遂行する行為の性質について、さまざまな言語外的情報を受けとっていることは、十分に明らか(エーコ1993: 115)」であるといえる。われわれは、話者の身振りや音調によって、コード解読を行わずに言語行為の種類を知ること、またコード解読を経て初めて話者の態度の評価を知ることもある。言表行為の状況に対する言語外的な指示は、話し手が物理的に現前しないことで特徴づけられる書きことばにおいても認められ、発信者の存在を想定するメタ命題の顕在化、発信点に関わる様々な推論、テキストとの対話的共同作業への参加などが生じるものとされる(エーコ1993: 116f.)。話しことばでの呼びかけの目的は、聞き手を確保し、話し手に関する情報の様々な側面を伝達すること、言い換えれば、言語コードをコミュニケーション行動に統合することだと考えられる。したがって、「呼びかけ」は、理解しうる受信者を必要としているのであり、また、何ら受信者による発信者の想定を禁止するものもない。そして、それがコミュニケーションを形づくるときには、言語やテキストはあらゆる地点で「呼びかけ」的であるといえなければならないであろう。しかし、「呼びかけ」としてと

¹⁰現実のカバー率が100%でないとしても、それらは読み手にとって可視的なテキスト(の範囲)を規定している。

1.4. 文章における換喩の機能

りたてられる言語現象は、談話やテキストの「冒頭」を構成することが多い。あるいは、呼びかけとして説明される言語現象は「未展開文」であることが多い¹¹。それはなぜであろうか。

本論は、呼びかけ文が、メタテキストとして、テキストの線的進行の一部であることを拒むからではないかと考える。観察すれば明らかのように、「冒頭」に置かれた「呼びかけ」は、たとえ説明的であっても、いかなるメタ言語的機能も持つものでない。それは、文に対する文でなく、むしろテキストに対する文である。そのため、文の連鎖の中に存在することが難しくされているのではなかろうか。しかし、サイド(1992)がいうように、「はじまり」は、何かがそれに次いで起こることを告げるとともに、後続するそれらを支配する。「はじまり」に位置する呼びかけ文は、全体(メタテキスト)であり且つ一部(開闢部)であるという二重拘束を受けているのである。しかも、定型呼びかけ文が、内容として全体と等しく・表現として一部であるという言い方は、文と物語とに形式上の同型性があり(バルト1979c:7)、また(文がテキストの下位秩序であるとし

12ても)文の加算がテキストを構成すると見ることはできない以上、適切なものとはならないだろう。

「冒頭の呼びかけ文」は、テキストの線的進行の中に分析される単位=文であることを拒もうとする、あるいは、文でありながらテキストと等しくあることにおいて、すでに何らかの無理があるというべきだろう。そのため、それは展開を拒んで「対象に没入した(永野1972:127)」表現であることを目指すのである。そして、このことは、メタテキスト的な道具立てがより直感的な表現になられる可能性を示しているものと理解できる。実際に、多くのウェブサイトでは、クリックブルなイメージやテキストフィールドとボタンの組み合わせが、定型呼びかけ文と同等の機能を果たしているはずである。現在、パーソナル・コンピュータでは、グラフィカルなインタフェイスが常識となっているものの、Macintoshが世に出たころ「個々のアイコンが何であるかがわかるユーザー側の直感的な理解力を前提にして、機能を表すアイコンを使っている(ジョン・ドヴォラックの批評; リンツメイヤー2000:154f.)」ことを設計上の欠陥であると指摘された。われわれは、(コンピュータがそのための拡張装置であるところの)新しいメディアの中で、文字をベースにし

24たコマンドラインの論理的理解力よりも直感的な理解力を選択したということだろう¹²。かかる事情は、メディアの変化がインタフェイスを取り替えるといえるだろう¹³。そして、それはコンピュータのインタフェイスについてだけ言えることでなく、GUIがコンピュータの実現するメディアのインタフェイスであるように、定型呼びかけ文は、旧来の　つまり紙=活字印刷メディアに

¹¹前原(2000:62)によれば、談話中に用いられた呼びかけ文は、そこが冒頭であるかのように見せる効果を持つという。

¹²文字・視覚記号という点からは、「人・モノ・情報の流通が大規模化した現代になって、言語の壁を乗り越えるために、表意的イメージ化の高いピクトグラムが復活した(久保1996:80)」ということになる。但、「言語の壁」が言語間の壁というにとどまらないことは時代が教えており、また、「ピクトグラムの復活」は、文字が本質において言語的意味と類像性とを競合的に共存させるものであることを顕示的に確認させるということだろう。

¹³メディアにおける情報の提示方法がインターフェイスとなる。「メディアはインターフェイスではない。メディアは、人間にたいするプログラムを実現するためのものである。メディアは、人間にたいするプログラミングメディアである。メディアによって表現されるのは、人間にたいするプログラムである。...このプログラムは、人間に意図した情報を与え、意図した反応を生じさせる。コンピュータは、このプログラムを提示したり、作成を支援したりするツールであるだけである(横井1998:40)」。

1.4. 文章における換喩の機能

におけるインタフェイスを引き継ぐものと考えられるのではないだろうか。

以上の仮説的な説明から指摘したいことは次のことである。冒頭が、特定の機能を担って特徴的な表現を含むものだとすると(1.4.1)、あらゆる「定型呼びかけ文」は冒頭のひとつのあり方と見做すことができる。しかも、インタフェイスという視点で見れば、「定型呼びかけ文」は(どこに配置されても)常に書き出しに相当するものともいえる。これは、単位としての「文章」が、書き出しからの展開によるのではなく、メタテキスト的道具立て(=テキストに対する文を産出するシステムティックな手続き)によるものだという見方を可能にすると思われる。その結果、さらにふたつのことがいえることになる。第一に、すべての書き出しが冒頭という機能を持つのではないと主張されてきたように、メタテキスト的道具立ては、活字テキストでは十分に発達しなかった形式ではないかということであり、それは、^{ラング}国語に縛られ直感的なものとしての一般性を欠いていたためであろう。読み手とテキストとの交話機能に直感を求めるかわりに、そこに「冒頭」のあ
12 ることが認められたときに、木坂(1990)の指摘する冒頭書き出し研究の一翼としての文章技術の論、とりわけ、読み手を「引き込む」ための冒頭の技巧として論じられてきたと考えられるからである。第二に、単位としての「文章」を与える展開という手続きは、文をモデルに文章を見るという見方を強いる蓋然性が強く、事実、文章論は「文章」を文法をベースとして文法論的に研究するものであった¹⁴。しかし、表現は、文をモデルにするのでないやり方で研究するはずである(その最も具体的なイメージは、e-textを想定することだろう)。そのような見方をとるならば、「冒頭」と「書き出し」とは次のようになるだろう。書き出しは、文字列の始まりに予め位置して主に冒頭という意味形式・機能を引き受ける遍在の言語形式なのでなく、始まりというテキスト上のコミュニケーション機能(あえて名づければ、書き出し的機能)を引き受ける視覚表象であり、冒頭は書き出しを担うより一般的な表現の類型であったと考えうる。また、書き出しが始まりの機能を持つように、冒頭は始まりという文脈上の位置(この位置が、終わりとの対比という換喩構造で定まることは1.4.4で議論する)によって決まる。書
24 き出しと冒頭とは、表現における始まりの不可分の設計^{デザイン}であると思われる。

かかる枠をとるとき、従来、冒頭と書き出しとの区別が主張され、しかも、それらに自然的連関があると思われてきたことは、以下のように理解されるだろう。

1. 静態的な捉え方をするかぎり、書き出しのコミュニケーション機能が析出されることは難しく、そこが始まりの地点であるという結果だけが注目され、
2. 他方、文脈という時間的秩序に関わる冒頭は、展開という線的时间概念によっても代替的に捉えることができたため、
3. 書き出しは先頭に立つ文字列として、冒頭は特定の機能と特徴的形式を持つ言語表現の部分と考えられた(必然的に、書き出しは必須、冒頭は任意となる)。

¹⁴時枝は、文章の文法論的研究を文章論とし、文章を対象にしたその他の研究である文章研究と区別したものである(永野198: 6ff.)。

4.しかし、文章という予定調和的言語単位の自明性が、展開という概念によって説明されなければならなかったため、文章は書き出しからの展開であるとされ、

5.従って、文章は、同じく時間的に把握される冒頭を免れることができないものと考えられ、冒頭として機能しない書き出しは破格の用法であるとされた。

6.同様の転倒は、書き出しの機能のインタフェイスデザインが、冒頭の技巧と見なされたところにも見られる。

12 1.4.4. 文章の完結性と統一性 ~ 「文章」と換喩

メタテキスト的道具立ては、終わりとの呼応をどのように確保するものだろうか。仮に、それが「終了」ボタンや「本当に終了しますか？」のような疑問文であるとするならば、そこでは直ちに正常な終了とそうでない終了という秩序が打ち立てられる。「終わり」が文字通りの意味で「終わること」であれば、正常な終わりというものはないはずである。

ここで、われわれは、「終わり」という語について考える必要があるようである。連用形名詞「始まり」と「終わり」とは、「始まりの始まり」¹⁵「終わりの終わり」¹⁶などの用法を許す。「別れの別れ」「集まりの集まり」などに比べて、「走りの走り」「動きの動き」などの用法が許容されにくいことを見るに、連用形名詞が重ねて用いられるには、特定の時間軸をあるいは換喩的道具立てが必要とするように思える。「別れの別れ」の後行する「別れ」は、実際の別れに隣接（先行）して行なわれる挨拶を指しており、「集まりの集まり」は、前項の「集まり（集合=体）」と後項の
24 「集まり（集合=体）」とが実際に隣接して生じる事態になっている。同様に、「始まりの始まり」「終わりの終わり」は、それぞれ後項が前項の一端であるという関係を保っている。

また、「始まりの始まり」、「終わりの終わり」の時間軸における関係を考えると、始まりの始まり - 始まりの終わり - 終わりの始まり - 終わりの終わり のような構造を導き出すことができるだろう。ここで、「始まりの終わり」によって「終わりの始まり」が始まるという考え方は、論理的关系によってでなく換喩によって支えられるといえよう。「始まりの終わり」と「終わりの始まり」との因果的な理解は、相転移点のようにもみえ、始まりという安定した秩序が失われたとき、直ちに別の安定した秩序が現れるものである。「終わり」の換喩は、その新たな秩序をでなく、その間の転移を指しているように見える（前述の構造を、始まりの 終わり の始まり、のように書くことによってヨリ良く見えよう）。ここで、「始まり」が、それに続く秩序を予告し支配するも

¹⁵例：「ソ連邦の崩壊は社会主義の終わりを意味するのではなく、真正な科学的社会主義の始まりの始まりである」。

¹⁶例：「キリスト教的世界観の終わりの終わりが指摘されたことがあった」。

のであれば、「終わり」の比喩的な意味は、「始まり」の文字通りの意味に対応しているといえることになる。

暗喩は「事実」として実践的拘束力を持つ([1.1.2]、[1.1.5]) が、換喩は現実世界での隣接性に言及するものであり([1.1.10]、[1.1.12])、すでに「事実」のひとつの型として受けとられていると見てよい。この意味で、換喩は認識のパターンを表わすもので、(事実との関係において)経験の鑄型であるといえる。「終わり」という換喩は、始まりと終わりとの間に見られる時間的構造を確認し、というよりも、寧ろ「終わり」の換喩によって特定の時間的構造が「事実」として存在するものと指定されているのである。あるいはまた、文章という単位に想定された形態上の独立性は、換喩的時間構造の直示的表現なのではないだろうか。その場合には、今井(1968)が文章という単位の終わりに関する議論を文芸が成り立つ地点を問うことにすりかえてゆく([4.1]) ことや、時枝(1960)が「冒頭」の典型として源氏や平家を引くことの意味を知ることができるように思われる。たとえば、自然数が無限の体系であっても質的に統一された秩序をもっていないとはいえないように、完結性が統一性の前提となるとは限らない。しかし、「赤頭巾」がときに少女を指すように、「終わり」が(時間的)構造全体を指すとき、完結性と統一性とは同一視されるのである¹⁷。そして、文字通りの意味で始まることが比喩的な意味で終わることと同じになる場合、完結性と統一性との同一視、換言すれば、始まりがあれば終わりがあるというわれわれの確信が、チック・タックとパラフレーズできる最も素朴な物語の型(カーモード1991)を用意することが指摘できる。物語について見ると、始まりと終わりとの対応は、物語が物語であることを物語るための形式の一つであるように思われる。バルト(1979b)が指摘しているように、物語は換喩によって成り立っており、そのことによって時間的関係を因果的關係に読み替えるという実践的拘束力が発揮される¹⁸のである。

1.4.5. 冒頭と書き出し

24

時枝(1960)は、「冒頭」は、それが文章全体に対して果たす意味機能によって決まり、「書き出し」は、それが文章という単位の上に占める位置によって決まるとし、「冒頭」と「書き出し」との区別を主張した。たしかに、「冒頭」にはいくつかの類型的機能が認められ、それに応じて「冒頭」は特定の表現の型を持つ。時枝(1960)は、「冒頭」と「書き出し」との自然的連関を、言語過程説に由来する言語事実である「文章の展開・継時性」の現れであるとした。しかしながら、冒頭と書き出しとの関係性は、文章という予定調和的単位が存在しないことと結んでいると考えるほうが良い。e-textはその実証となっている。冒頭を文脈上の位置によって、書き出しをコミュニケーション上の機能によって考えることでこそ、表現の研究は、従来の研究成果を踏まえつつ、紙=印刷物というローカル・ルールの内方で『冒頭』を考察することができるのである。

¹⁷例えば、文章について見た場合、永野(1972:70)は、「原則として文の連続によって成り立ち、内部に文脈を保ちつつ統一し完結した言語形式を備え、前後に文脈を持たぬもの、をいう」と文章を定義している。

¹⁸たとえば、われわれは、換喩による物語の実践的拘束力により「花子が殴った。太郎が倒れた。」という時間的関係を「花子が殴ったことで太郎が倒れた」という因果的關係に読み替える。

1.4. 文章における換喩の機能

要約：「冒頭」と「書きだし」とを概念の上で区別することは有効である。但、両者の自然な連関は換喩によって構成されている。冒頭の研究や理解には、紙のテキストを相対化する視点が必要になる。

引用・参考文献(1章)

- アイゲン,マンフレッド(2001)「二〇世紀の生物学のうち何が生き残るだろうか」,M.P.マーフィー&L.A.J.オニール編『生命とは何か これからの50年:未来の生命科学への指針』堀裕和,吉岡亨訳[1996],培風社.
- 浅田健太郎(1999)「『あひゞき』における振仮名表現」,『日本語表現法論攷』pp.217-229, 溪水社.
- 五十嵐力(1922)『修辞学大要』,斯文書院.
- オルトリ,スヴェン&ニコラス・ヴィトゥコフスキー(1999)『舌を出したアインシュタイン ひとり歩きした科学の神話』深川洋一訳[1996] 丸善.
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 井上秀雄(1993)『古代東アジアの文化交流』(奎學術出版基金助成出版) 溪水社.
- 今井文男(1968)[1961]『表現学仮説』法律文化社.
- イリイチ,イバン・網野善彦(1986)「対談 女性・文字・中世」,玉野井芳郎監修『ジェンダー・文字・身体』pp.39-84, 新評論.
- ヴィリリオ,ポール(1998)『電脳世界 最悪のシナリオへの対応』(インタビュアー:フィリップ・プティ)本間邦雄訳[1996], 産業図書.
- 上野千鶴子(1999)「電子メディアは文化を超えない」,『別冊本とコンピュータ1本は変わるか? 世界の電子出版・最前線からの報告』pp.137-140, トランスアート.
- 内山和也(1996)「文体試論」広島大学卒業論文.
(1998)「『終わり』ということ~会話における時間と虚構とについて~」,『広島大学日本語教育学科紀要』第8号, pp.85-90.
(1999)「共感覚の文体~視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文.
- エーコ,ウンベルト(1993)『物語における読者』篠原資明[1979] 青土社.
- 榎本淳一(1992)「『国風文化』と中国文化」,池田温編『唐と日本』(古代を考える12),吉川弘文館.
- 大浜るい子(2000)「関連性理論から読み直すデイビッドソンの隠喩論」,『広島大学教育学部紀要第二部』48号, pp.199-204.
- 魚返善雄(1963)『言語と文体』紀伊国屋書店.
- 落合由治(2000)「文章の冒頭について - 特定の時の提示と主な登場人物の登場を中心に」第37回表現学会全国大会発表資料.
- ガウアー,アルベルティーン(1987)『文字の歴史 起源から現代まで』矢島文夫・大城光正訳, 原書房.
- カーモード,フランク(1991)『終わりの意識』岡本訳[1967, 1966], 国文社.
- 笠貫葉子(2003)「シネクドキと『全体-部分』のメトニミーに関する一考察」,『日本言語学会第126回大会予稿集』pp.94-99.

- 川村湊(1998)「文芸時評」1998年7月29日付毎日新聞.
- 楠見孝(1990)「直感的推論のヒューリスティックとしての比喩の機能」,『トランスフォーメーションの記号論』pp.197-208, 東海大学出版会.
- グループμ(1981)『一般修辞学』佐々木健一・樋口桂子訳[1970] 大修館書店.
- 樺島忠夫(1979)『日本の文字—表記体系を考える—』岩波書店.
(1981)『日本語はどう変わるか—語彙と文字—』岩波書店.
- カラー, ジョナサン(1985)『ディコンストラクション』富山太佳夫[ほか]訳[1982] 岩波書店.
- 柄谷行人(1996)『差異としての場所』講談社.
- 木坂基(1979)『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房.
(1990)「書き出しと結びの型 基本と応用」,『國文學:解釈と教材の研究』35(15) pp.31-37, 學燈社.
(1999a)「近代日本語文章成立の研究—幕末・明治期の規範文体について—」, pp.2-11.
(1999b)「近代文章の成立とカタカナ」,『日本語表現法論攷』pp.190-203.
(1999c)「冒頭段落に位置する提題文」,『日本語表現法論攷』pp.114-136.
- 木坂基先生退官記念論文集編集委員会編(1999)『日本語表現法論攷』溪水社.
- 金明哲(1999)「日本現代文における書き手の特徴情報」,『人文学と情報処理』20(6), pp.4-71, 勉誠出版.
- 久保正敏(1996)『マルチメディア時代の起点:イメージから見るメディア』日本放送出版協会.
- 小林忠夫(1999)『カタカナ語の正体 外来語のルーツをさぐる』丸善.
- サイド, エドワード(1992)『始まりの現象:意図と方法』(叢書・ユニベルシタス 358) 山形和美, 小林昌夫訳[1985, 1975], 法政大学出版局.
- 阪倉篤義(1963)「文章の機能と目的」, 時枝誠記他監修『文章と文体』(講座現代語5) p.1-pp.18, 明治書院.
- 坂部恵(1989)『鏡のなかの日本語』 筑摩書房.
- 佐倉統・北野宏明(1995)『人工生命というシステム 複雑系解明の手がかり』ジャストシステム.
- 佐々木健一編(1986)『創造のレトリック』勁草書房.
- 佐竹秀雄・三省堂編修所編(1992)『デイリーコンサイス国語辞典』三省堂.
- 佐藤信夫(1978)『レトリック感覚:ことばは新しい視点をひらく』講談社.
- 三省堂編修所編(1987)『コンサイス外来語辞典(第四版)』三省堂.
- シービオク, トマス・A.(1989)『動物の記号論』池上嘉彦編訳, 勁草書房.
(1991)「指標性」山中桂一訳[1989], 日本記号学会編『かたちとイメージの記号論』pp.277-299, 東海大学出版会.
- シャルチェ, ロジェ(1999)「円卓会議を終えて」 蒲田耕二訳,『別冊本とコンピュータ1 本は変わるか? 世界の電子出版・最前線からの報告』pp.126-127, トランスアート.
- シルバークラット, アート, ジェーン・フェリー&バーバラ・ファイナン(2001)『メディア・リテラシーの方法』安田尚監訳[1999], リベルタ出版.

- 陣内正敬(1998)『日本語の現在一揺れる言葉の正体を探る』アルク.
- 杉本巧(2000)「隠喩の『意味』と『解釈過程』について - 先行研究の問題点とその解決に向けて - 」,『広島大学日本語教育学科紀要』10号, pp.93-102.
- 菅野盾樹(1985)『メタファーの記号論』勁草書房.
(1994)「原初の比喩としての 換喩 」,『生命の記号論』pp.147-160, 東海大学出版会.
- 瀬戸賢一(1986)『レトリックの宇宙』海鳴社.
(1990)「記号論の記号たち フロイト、ヤーコブソン、ラカン 」,『大阪市立大学文学部人文研究』42(10), pp.99-112.
(1995)『メタファー思考 意味と認識の仕組み』講談社.
(1997)『認識のレトリック』海鳴社.
- ソーカル,アラン&ジャン・プリクモン(2000)『「知」の欺瞞 ポストモダン思想における科学の濫用』田崎晴明, 大野克嗣, 堀茂樹訳 [1998] 岩波書店.
- 立川健二(1995)『愛の言語学』夏目書房.
- 田中克彦(1993)『ことばのエコロジー: 言語・民族・「国際化」』(人間選書168) 農山漁村文化協会.
- 多門靖容(2002)「シンポジウム『比喩分析の新展開 換喩・提喩を中心に』をめぐって」,『表現研究』76号, p1-pp.6.
- 土屋信一(1976)「現代新聞の片仮名表記」,『電子計算機による国語研究』pp.140-159, 秀英出版.
- デヴィッドソン,ドナルド(1991)『真理と解釈』野本和幸,植木哲也,金子洋之,高橋要訳 [1984], 勁草書房.
(1987)「隠喩は何を意味するのか」高頭直樹訳 [1978],『現代思想』15(6), pp.49-69, 青土社.
(1991)『真理と解釈』野本和幸, 金子洋之, 植木哲也, 高橋要訳 [1984] 勁草書房.
- ドーキンス,リチャード(1991) [1980]『利己的な遺伝子』(科学選書9) 日高敏隆 [ほか] 訳 [1989, 1976], 紀伊国屋書店.
- 時枝誠記(1960)『文章研究序説』山田書院.
- トドロフ,ツヴェタン(1987)『象徴の理論』(叢書・ユニベルシタス) 及川馥,一之瀬正興訳 [1977] 法政大学出版局.
- 豊田昌倫(1991)「言語学と文体論」,日本文体論学会編『文体論の世界』pp.52-66, 三省堂.
- 中尾佐助(1990)『分類の発想 思考のルールをつくる』朝日新聞社.
- 永尾章曹(1975)『国語表現法研究』三弥井書店.
- 永野賢(1972)『文章論詳説 - 文法論的考察 - 』朝倉書店.
(1986)『文章論総説 - 文法論的考察 - 』朝倉書店.
- 西垣通(1997)「"思想"としてのパソコン」,西垣通編『思想としてのパソコン』pp.3-64, N T T 出版.
(2001)「インターネット多言語情報処理環境」,西垣通&ジョナサン・ルイス『インター

- ネット日本語はどうか』pp.89-132, 岩波書店.
- 日本語教育学会編(1987)『日本語教育事典 縮刷版』大修館書店.
- 根来司(1985)『時枝誠記研究 言語過程説』明治書院.
- 野内良三(1998)『レトリック辞典』国書刊行会.
- (2000)『レトリックと認識』日本放送出版協会.
- (2002)『レトリック入門 修辞と論証』世界思想社.
- 橋元良明(1989)『背理のコミュニケーション』勁草書房.
- パスモア, ジョン(1990)『哲学の小さな学校』大島保彦, 高橋久一郎訳[1985], 青土社.
- ハッキング, イアン(1989)『言語はなぜ哲学の問題になるのか』伊藤邦武訳[1975, 1984], 勁草書房.
- 原子朗(1975)「文学的表現の現在: 文体論的方法序説」, 『ユリイカ: 詩と批評』7(4), pp.128-134, 青土社.
- バルト, ロラン(1971)「記号学の原理」沢村昂一訳[1964], 『零度のエクリチュール』[1953, 1965], pp.85-206, みすず書房.
- (1979a)『旧修辞学 便覧』沢崎浩平訳[1970], みすず書房.
- (1979b)「文体とそのイメージ」沢崎浩平訳[1966]. 『現代思想』7(4), pp.106-113, 青土社.
- (1979c)「物語の構造分析序説」花輪光訳[1966], 『物語の構造分析』p.1-54, みすず書房.
- ピアズリー, M. C. (1986)「隠喩のひねり」相沢照明訳[1962], 佐々木健一編『創造のレトリック』pp.30-58, 勁草書房.
- 樋口桂子(1995)『イソップのレトリック メタファーからメトニミーへ』勁草書房.
- ビューラー, カール(1983-1985)『言語理論 言語の叙述機能』脇阪豊[ほか]訳[1965], クロノス.
- ブラック, マックス(1986)「隠喩」尼ヶ崎彬訳[1954, 1962], 佐々木健一編『創造のレトリック』pp.2-29, 勁草書房.
- ペレルマン, カイム(1980)『説得の論理学 新しいレトリック』三輪正訳[1977], 理想社.
- ベンヤミン, ヴァルター(1999) [1970]「複製技術の時代における芸術作品」高木久雄, 高原宏平訳[1936, 1955], 佐々木基一編集解説『複製技術時代の芸術』(晶文社クラシック) pp.7-50, 晶文社.
- ボルター, ジェイ・デイヴィッド(1994)『ライティングスペース 電子テキスト時代のエクリチュール』黒崎政男, 下田政俊, 伊古田理訳[1991], 産業図書.
- 前原かおる(2000)「呼びかけの特徴 - 題目との接近可能性 - 」, 『広島大学日本語教育学科紀要』第10号, pp.57-64.
- 松村明編(1993)『CD-ROM版大辞林』三省堂.
- 丸山圭三郎編(1985)『ソシユール小辞典』大修館書店.
- マン, ポール・ド(1992)『理論への抵抗』大河内昌, 富山太佳夫訳[1986], 国文社

- マンゲル,アルベルト(1999)『読書の歴史あるいは読者の歴史』原田範行訳[1996], 柏書房.
- 三田村峻右(1991)「視覚世界像のパラダイム・シフト」,日本記号学会編『かたちとイメージの記号論』(記号学研究11) pp.59-70, 東海大学出版会.
- 村井康彦(1976)「国風文化の創造と普及」,朝尾直弘[ほか]編集『古代4』(岩波講座日本歴史;第1次), 岩波書店.
- 村上征勝(2002)『文化を計る 文化計量学序説』(データの科学 5) 朝倉書店.
- 森健一・八木橋利昭(1989)『日本語ワープロの誕生』丸善.
- 森本浩一(1987)「隠喩とコミュニケーション デリダとデヴィッドソンの場合」,『現代思想』15(6), pp.90-104, 青土社.
- 森雄一(2001a)「提喩および『全体-部分』『部分-全体』の換喩における非対称性について」,『日本認知言語学会論文集』第1集, pp.12-22.
- (2001b)「能力としての比喩、彩としての比喩」,『成蹊国文』第34号,p.1-pp.11.
- (2002)「提喩研究の新展開 非対称性を中心に」,『表現研究』76号, pp.15-22.
- ヤコブソン,ローマン(1973a)「言語学と詩学」八幡屋直子訳[1960], 川本茂雄監修『一般言語学』 pp.183-221, みすず書房.
- (1973b)「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」田村すゞ子訳[1956], 川本茂雄監修『一般言語学』 pp.21-44, みすず書房.
- (1977)『音と意味についての六章』花輪光訳[1976], みすず書房.
- (1984)『言語とメタ言語』[1980] 池上嘉彦, 山中桂一訳, 勁草書房.
- ヤコブソン,ローマン&モーリス・ハレ(1973)「音韻論と音声学」村崎恭子訳[1956,1968], 川本茂雄監修『一般言語学』 pp.79-124, みすず書房.
- 家辺勝文(1998)『デジタルテキストの技法』ひつじ書房.
- 山城むつみ(1993)「漢文訓読について」,『批評空間』11号, 福武書店.
- 山口仲美(1991)「各国の文体論 - 回顧と展望: 日本」,日本文体論学会編『文体論の世界』 pp.126-138, 三省堂.
- 山田誠二(1997)『適応エージェント』共立出版.
- 山中桂一(1991)「記号論と文体論」,日本文体論学会編『文体論の世界』 pp.67-75, 三省堂.
- 尹鎬淑(1999)「近代日本語における受け身表現の変遷 韓国語との比較考察」 広島大学博士論文.
- 吉岡健一(1996)「計量文体学研究の展望」, アンソニー・ケニィ著(吉岡健一訳)『文章の計量』 pp.196-238, 南雲堂.
- ランドウ,ジョージ・P.(1996)『ハイパーテキスト 活字とコンピュータが会うとき』若島正, 板倉徹一郎, 河田学訳[1992], ジャストシステム.
- リクール, ポール(1989)『生きた隠喩』久米博訳[1984], 岩波書店.
- リチャーズ, I. A. (1961)『新修辞学原論』(不死鳥英語学ライブラリイ) 石橋幸太郎訳[1936, 1950], 南雲堂.

参考文献一覧(1章)

- リファテール,ミカエル(1978)『文体論序説』福井芳男,宮原信,今井成美訳[1971],朝日出版社.
- リンツメイヤー,オーエン・W.(2000)『アップル・コンフィデンシャル 誰も書かなかったアップル・コンピュータ20年の真実』林信行,柴田文彦訳[1999],アスキー.
- レオンダー,バーバラ(1986)「隠喩と幼児の認識」長野順子訳[1975],佐々木健一編『創造のレトリック』pp.234-258,勁草書房.
- レリス,ミシェル(1986)[1971]『獣道』後藤辰男訳[1966],思潮社.
- 和田敦彦(1997)『読むということ テクストと読書の理論から』ひつじ書房.
- 渡辺慧(1978)『認識とパタン』岩波書店.
- Benedetto, Dario. , Emanuele Cagliotti and Vittorio Loreto. "Language Trees and Zipping." PHYSICAL REVIEW LETTERS 88.4 (2002): N. pag.
- Cohen, Ted. "Figurative Speech and Figurative Acts." Journal of Philosophy 72 (1975): 669-684.
- . "Notes on Metaphor." Journal of Aesthetics and Art Criticism 34.3 (1976): 249-259.
- Dawkins, Richard and John Krebs. "Animal Signals: Information or Manipulation?" Behavioural Ecology: An Evolutionary Approach. Eds. J. Krebs and N. Davies. Oxford: Blackwell Scientific, 1978. 282-309.
- Davidson, Donald. "What Metaphors Mean." Critical Inquiry 5 (1978): 31-47. Rpt. in Reference, truth, and reality: essays on the philosophy of language. Ed. Mark Platts. London: Routledge & Kegan Paul, 1980. 238-254.
- . "A Nice Derangement of Epitaphs." Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson. Ed. Ernest LePore. 1986. Oxford: Basil Blackwell, 1992.
- Glucksberg, S. and B. Keysar. "Understanding Metaphorical Comparison: Beyond Simmilarity." Psychologocal Review 97 (1990): 3-18.
- Goatly, Andrew. The Language of Metaphors. London: Routledge, 1997.
- Leezenberg, Michiel. Context of Metaphor. Amserdam: Elsevier, 2001.
- Levin, Samuel R. "Standard Approach to Metaphor and Proposal for Literary Metaphor." Ortny[1979] 124-135. (レヴィン,S.R.「隠喩の標準的な読解法と文学的隠喩」青木孝夫訳,佐々木編 pp.141-160).
- Ortny, Andrew, ed. Metaphor and Thought. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- Ortny, Andrew, ed. Metaphor and Thought. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Peirce,Charles S.S. Collected Papers of Charles Sanders Peirce 5th ed. Eds. Charles Hartshorne and Paul Weiss. Cambridge,Mas.: Belknap

参考文献一覧(1章)

Press of Harvard UP. 1978.

Searle, John R. "Metaphor" Ortny[1979] 92-123. (サール,ジョン.R.「隠喩」渡辺裕
訳,佐々木編, pp.82-140).

Sebeok, Thomas A. "Six Species of Signs: Some Propositions and Structures."
Semiotica 13.3 (1975): 233-260.

---. "Iconicity." MLN 91 (1976): 1427-1456.

Todorov, Tzvetan. "Semiotics." Trans. Diana Matias. in Screen 14 (1973):
15-23.

Williams, Bernard. Ethics and the Limits of Philosophy. Cambridge Mas.:
Harvard UP, 1985.

『研究社 新英和・和英中辞典(CD-ROM版)』(1995)研究社.

毎日新聞 1998年7月29日付朝刊(12A版)

毎日新聞 1999年1月4日付朝刊(12A版)

毎日新聞 1999年8月18日付朝刊(12A版)

2章 文字と書体

- 2.1 文体論における 期待 と 情報
 - 2.1.0 はじめに
 - 2.1.1 情報理論的文体観
- 2.2 文字と電子文字との関係 ~ 肉筆 としての電子文字
 - 2.2.0 はじめに
 - 2.2.1 文字と技術との関わり
 - 2.2.2 書風と書体
 - 2.2.3 ことばとモノ
 - 2.2.4 文字と情報
 - 2.2.5 連続性と不連続性
 - 2.2.6 文字の肉筆性
- 2.3 文体と書体との関係 ~ スタイル としての書体について
 - 2.3.0 はじめに
 - 2.3.1 読み手の参与と読み的手段
 - 2.3.2 消しゴムについて
 - 2.3.3 異体字と図像性
 - 2.3.4 紙とリレーシステム
 - 2.3.5 書体の選択について
 - 2.3.6 書体の読み取りについて
 - 2.3.7 読まれるものとしての書体
- 2.4 文体と物語との関係 ~ 表現 としてのデジタル・フォント
 - 2.4.0 はじめに
 - 2.4.1 蒐集について
 - 2.4.2 フォントマニアについて
 - 2.4.3 データベースについて
 - 2.4.4 リストについて

本章では、文字を対象として、主に「書体」に関する問題を検討する。

1節では、文体を情報の問題と見る視点を「情報理論的文体観」と称し、それがさまざまな立場から表明されうることを指摘する。2節では、筆遣い=文字をかきつける身体の軌跡が文体認識の基盤となったことを指摘し、文字の電子化を事例として「肉筆性」について考察する。3節では、書体と文体との関係を論じる。4節では、デジタルフォントの表現性を論じる。

2.1. 文体論における 期待 と 情報

2.1.0. はじめに

文体は 期待 に関係すると説かれることがある。文体が 期待 に関係するというのは、フライ(1980: 93ff.)が述べているように、ことばは主として冗長性を利用した聞き手の様々な予測によって成り立つ「あてものゲーム」であり、文体も予測をたすける重要な要素だという見方である。このような見方は、文体を情報の問題として捉えようとするものである。本節は、文体と情報との基本的な関係を整理しようと思う。

2.1.1. 情報理論的文体観

文体は、それを欺かれた期待と見做すときにメッセージに付加された情報であり、(書き手や作品、テキスト型などの)何らかの個別的な刻印と見るときに情報に対する冗長性であることになる。また、文体が情報としてゼロであれば、それは特徴がないという特徴を持つことになる。このように、正・負・ゼロのいずれの場合にあっても、文体を 情報 の問題と見做す立場を「情報理論的文体観」と呼ぶことにする。

情報理論的文体観は、文体に関するさまざまな視点を包摂する面が指摘できる。たとえば、波多野(1991: 3)は、現代の文体のイメージを大きく次のように整理している。

[文体の]説明原理として動員された概念が、昔は『選択』であった。今は『逸脱』である。したがって、昔は、文体の作り手に原理があり、今は、文章自体がノルマから離れているかどうか基準がある。折衷的に、選択と逸脱との双方を文体现象の原理だ、と説く人もいる。…逸脱性の著しい特徴として、『前景化』という概念をつかう人が多くなり、今日ではこの種の研究者が大変ふえている、といえるのではあるまいか。

但、文体を メッセージに付加された情報 と見做すときには、それが本質的に話しことばをしとかカバーしないという問題が生じるように思われる(詳しくは、[2.2](#)および[2.3](#)で論じる)。一方、文体を 余剰なメッセージ (リファテール1978)と見る見方は、語や語法のまったく個人的な使用であるとして、文体を何らかの個別性に送り返す(ムーナン1970: 213ff.)。このことは、直感的には理解できるものである。例えば、分娩室の外で我が子の誕生を待ちわびる父親に担当の医師が伝える「Congratulations old chap, I'm delighted to be the first to tell you that you have a daughter.」というメッセージの情報量は1ビットだが(Dawkins1998)、子どもの性別が知りたい父親にとっては、知りたいことを知らせるメッセージが等量であることはまったく倫理的である。逆に、文体論の基本的な発想は、その言い方・話し方を云々するものだからである。

文体がテキストの個別性の問題であれば、それは計量・数理分析によって明かされるものだろう([1.2](#))。文体を情報の問題と見るかぎり、問題になるのは情報の評価である。一般に、情報は単純和にならないものであり、文体が情報なのであれば メッセージ+文体 に対する最適な解釈

が無数にあると仮定しなければならないが（ムーナン1970：207）、このような仮定は文体に対する読み手の側の貢献を説明するときにはむしろ役に立つ。「話し手と聞き手との間に魂の触れ合いが予めなければならぬ。言論は聞かれなければならず、本は読まれねばならない。聞かれもせず、読まれもしないならば、何もなかったことになる（ペレルマン1980：32）」のだから、正しく遂行された言語的伝達は必ず成功し、間違ふことなく最適な解釈をうみだす。読み手は、さまざまな推論を重ねるだけでなく、直感や種々の道具立てをも駆使して、最適な解釈のひとつに必ずたどり着くわけである。

シャノン=ウィーバーの理論は、情報が商品だと見做すものである（Dawkins1998）。いいかえれば、情報は、コンテンツとパッケージからなるものなのである。テキストが商品として流通するかぎり、それを情報の視点で見ることには自然であるように思われる。また、文体がテキストに係る問題であれば、文体を情報として考えることにも一定の理があるであろう。古くから、文体は「うつつわ」と「なかみ」の関係に喩えられることがある。これは、文体を情報の問題と捉え、コップの外壁（=パッケージ）と空隙（=コンテンツ）との関係と解されるときには、決して不当なものではないと考えられる。ここで、コップにおける無用の用の関係を「メッセージ+文体」の式に適用すれば、「メッセージ+ [コンテンツ+パッケージ]」となる。この見方では、文体は、メッセージの乗り物であるというより、メッセージを可能にする仕組みである。そしてまた、「コンテンツ」をどのように措定するかに応じて、さまざまな定義のバリエーションを生じることになる。

このように、「情報理論的文体観」は、文体に関する古今の主要な規定を包摂する面がある。従って、そこからただちに具体的な帰結がえられるのではない。文体が情報の問題であるというのは、いわばその前提であって、具体的な方法論は別に考えられなければならない。たとえば、心理学的な立場から実験可能な方法論を考えようとするPeer（1986）の前景化の文体論などは、有力な方法と考えられているようである。あるいは、遺伝子が情報として捉えられるかぎり、本論の立場も「情報理論的文体観」を具体化する方法論であるといえるだろう。

要約：文体を情報量の問題と見る視点は「情報理論的文体観」と呼ぶことができる。情報理論的文体観はさまざまな立場から表明されうる包括的な議論であり、そこから具体的な帰結が得られるものでない。「情報理論的文体観」に基づく場合には、他に具体的な方法論が必要になるが、その場合にもさまざまな立場がありうる。

2.2. 文字と電子文字との関係 ~ 肉筆 としての電子文字

2.2.0. はじめに

スタイルの語源が鉄筆スタイラスだという意味では、筆遣い=文字をかきつける身体の軌跡が文体意識の基盤である。また、「文体」がスタイルであるように「書体」もスタイルである。書体は、概念上、書風・字体・字形などと区別されるが、現象面では区別しがたいこともある。文字がことばかつかたちであり、スタイルがうつわかつかみだからである。

リファテール(1978:118)は「表記体も彫刻や絵画と同じように触ることができ、具体的」で、文体分析は表記体の持続的な外形に限定されると述べている。書体は、その物質的で身体的な含意から、文体に対しても周辺的と見做されがちだが、文体には、書体との関係から論じられるべき面もある。シャルチェ(1992:120, 1994:407)は、受容され-読解されるテキストには、文章をつくる手続きに関する事柄(エクリチュール戦略)と本を作る手続きに関する事柄(出版戦略)とが関わっており、後者の技術的要因も読解に影響するという。書体は、文章化と書籍化との両面に関わるものと思われる。文体がテキストの受容及び読み手との関係で論じられるべきであるならば、書体について考えておくべきだろう。本節では、スタイル認識の基盤ともなりうる書字空間との身体的触れあいを肉筆性と呼び(2.2.2)、文字の電子化を事例として考察することにしたい。

2.2.1. 文字と技術との関わり

「日本文芸家協会」が唱えたように、機械処理用の日本語文字コードには漢字数の不足がいわれることがあった。JIS漢字(第1水準+第2水準)6355字が実際に不備だったかとは別に、JIS X 0213-2000(第3水準+第4水準)で漢字の不足はほぼ解決することになる。むしろ、そこで問われることになるのは、巨大な文字セットを与えられたとして、それを使いこなすわれわれの能力といえる。たとえば、文字コードが異体を区別するときには、それを使いわけねばならないだろうし、異体字を区別する文字コードがあるならば、区別しない文字コードも必要になるはずである。「常用漢字の包摂は、入力には及んでも、出力には関係しない。...しかし、JISの字体包摂では...それを出力する場合にも、まったく同じ字体の範囲での出力が認められている(太田1997:69)」からである。いずれにせよ、異体字を同定する過程は、同一性の抽出であり、事実、文字とはそのような読み手の働きによって維持されてきたものであろう。文字の形は、技術的要因に簡単に左右されるが、その変化にもかかわらず、通底して存在するものこそが文字なのである。技術の革新は、まず文字の字形に影響し、その不動性の度合いを決定する。また、文字の機能や文字に付随する状況を変化させる。われわれは、技術に頼ることなく、異なる環境や形象を同じものと見ることなしに、文字を用いえない。ここで、文字に関わる諸関係は表2.2-1のように整理されるだろう¹。

2.2.文字と電子文字との関係

素材	亀甲 獣骨	金属	石	泥	木 竹	絹	紙	スクリーン									
筆記具	のみ	鋳型	のみ	印	古筆 秦筆	今筆	ペン 鉛筆 角筆	製版 木版	活版 木活字 金属活字	平版 DTP	ワープロ	パソコン	携帯電話				
入力法	手彫り				手書き		肉筆	手彫り	電動組版	電算組版	キーボード	電子ペン	ボタン	マイク			
出力法	入力に同じ	入力に同じ	捺印	捺印	入力に同じ			印刷 (印刷機)			(プリンタ)	ディスプレイ					
行為	掻く・欠く(刻す)	鑄る	捺す	捺す	書く		掻く	刻す	鑄る	穿つ	打つ	書く	押す	話す			
媒体の 形態	亀甲 獣骨	金属器	石碑	印章	木簡 竹簡	絹布	巻物 折本 冊子 紙片	刷る				電子本			電子文書		
空間性	三次元				二次元		三次元	二次元	三次元								
字形の 性質	織起的			反復的										反復的			
字形の 統一	素材の性質			書風	書体									デザイン			
文字の 担い手	官僚・役人 特権階級				個人 書家 職人									個人 デザイナー オペレーター			
テキスト のあり方	オリジナル			オリジナルとコピー	オリジナルとコピー									オリジナルとコピー コピー			

図2.2-1 文字に関する諸関係

「矢印のような歴史はどこにもないのだから、「肉筆 印刷文字 電子文字」というような単線の姿を歴史的に描いてるのではない(石川2001:171)」のは確かである。但、それは肉筆が日本語の中心にあるというより、電子文字がそれを取り込むことによって既に肉筆だからだろう。

2.2.2. 書風と書体

本稿は用語の概念を表2.2 - 2のように考える（樺島1977, 1979, 伊藤1996, 宮沢1996, 前田2001を参考にした）。「書風」も「書体」も「字形」の統一原理と見做しうる文字の付加的情報だが、「書体」は文字に施される統一的デザイン、あるいはその表現法を文字体系についていう。

図2.2-2 術語の整理

体系	文字体系 文脈上の同位関係に置かれる文字素（あるいは字体）の集合	デザイン 書体の下位特徴 書体 統一的デザイン、またはその表現法 フォント 書体を担う物理的形態、または情報
要素	文字素 字形の示唆的特徴の集束、または字体の価値 字体 字形の構造的原型をなす図形的特徴の組み合わせ（基本的な骨格） 字形 具体的に視覚化された個々の文字、またはそのかたち	書風 字体が視覚化されるときに付加される特徴によって文字が醸し出す風格や風情を主に審美的観点からいうもの 字形 文字が視覚化されるときに付加される冗長性、あるいは特徴
	単位	付加的情報

「文字」は、用語によって字体・字形・文字体系などと同義になる

「フォント」は、本来は、同一サイズ・同一書体の欧文活字の一揃いをいう。

マテリアル

言語に対してなされた最も重要な発明のひとつは紙だろう。そして、紙という素材に文字が定着するには、そこを金属や石と同じ書字環境であると認識する必要があった。紙に奥行きがないわけでない（例：角筆）が、筆で対するときには奥行きはない。亀甲や石で、書字空間は刻されて後に存在し、対象に働き掛け削り取るとき、その行為は常に素材そのものに達していた。他方、「筆は...まるで筆が指そのものでもあるかのように、筆独特のしぐさをもっている（バルト1974：117-8）」といわれるように、筆に加わる力 - 応力によってこそわれわれは書字空間と直接触れ合うことができた。このような書字空間との身体的なふれあいは 肉筆性 と呼ぶことができる²。紙を素材としては、肉筆性によって二次元の平面に三次元の空間が作られるのである。

²原（1997：30ff.）は、文字の機能的な伝達性である「文字性」から「筆跡性」を区別している。「筆跡とは、肉筆で書かれた文字のこと、またはその書きぶり」であり、その「造形的な伝達性」が「筆跡性」である。ただ、本論では「肉筆」の意味で（書き手の個性を意味する偏りのある）「筆跡」の語を用いないため、「筆跡性」の語は採用しない。

2.2. 文字と電子文字との関係

しかし、二次元と三次元とを同一視する視点は、空間に方向を見出すことから始まる。「文字は線との関係において...とにかく線との関係において方向性を持っている（ブレッソン1992：16）」のである。しかし、これは文字が、本来的に時間的な音声の空間的固定化によって生じるということでない。「線」自体が方向性の発見を含んでいると考えるべきだろう。線は、必ず一方の端からもう一方の端へ向かって描かれる。但、線とともに発見される方向性は統一的なものでない。たとえば、児童の絵画で、方向軸は発達にしたがって獲得されるが、水平・垂直軸が画面と一致すること、更に奥行きを自然な表現が加わるには特定の契機が必要である（鬼丸1981：116）。空間が統一的な方向性を持つためには、書字空間が規定されねばならない。われわれは、例えば、紙の上に文字を書くのではなく、書字空間の発見によって書く（例：空書）のである。紙の中で方向を秩序立てるには、ノートや便箋の罫がその比喻であるように、竹簡・木簡という先行者との関係が重要であったろう³。同時に、奥行きを表現しうる筆法と、それを支える筆記具の発明・発見も必要である。その結果、「篆 - 隸 - 楷という書体の変遷は、古筆 - 秦筆 - 今筆という筆の進化に応ずるものであった（藤枝1991：84）」といわれるように、楷書という書体が作られてゆくことになる。石川（1997：5f.）は、『九成宮醴泉銘』や『雁塔聖教序』が標準的で典型的な楷書と見られるのは、紙に書かれず「石に刻されているにもかかわらずそれらを無視しうるような性質をもっている」からだという。統一的書体の確立で、紙は十全な三次元空間となったのである。

「書風」の認識は、紙と毛筆とを用いた筆写を基盤とする。しかし、紙 - 空間と筆 - 指との触れ合い、というより触れ合うことからわれわれの身体が構成されるような触覚⁴（＝肉筆性）は、既に紙にその退行を内在しているといえる。すでに見たように、紙という発明は、統一的奥行きを持った透視法的空間の発見を要請するものだった。奥行の知覚は、もとより視覚に生態学的に期待されるもので（マクファーランド編1993）、そこにはすでに、視覚と視覚が立ちあげる空間とが触覚その他に優越してゆく契機が見出されるのである。紙における触覚からのより明瞭な離脱は（木版を除く）活字印刷に見られる。筆写と印刷文字との同一視には、文字がいつも既に書かれたモノであることを認め、書かれる瞬間を抹消する必要がある。文字は字体の反復によって文字だが、字形リム-パブル・フォントの反復による活字は一文字の個性を殺ぎ、書体の統一性の中に現れる書風という個別性より、書体の反復性に注目させるのである⁵。

このように、肉筆性を、書く行為の直接性を遠ざけることは、読み方にも影響せずにはおらない。シャルチェ（1992：100）は「読むことと書くこととの違いは単に二つの異なった能力を別々のものとして分離するだけでなく、二つの読書技術を区別するものでもある」と述べている。一般に、

³書字空間が生理学的要因に限定されることが指摘できる。殆どの言語で固定された書字方向が見られ、その決定にも生理学的普遍性がある（ケルコフ1999：34ff.）とされる。書字空間とは特に自由ではないが、そのような制約があってこそ可能性の探索に適している。

⁴「ふれる」「ふれあう」は、坂部（1989）参照。

⁵「反復可能性というのは、とりわけゲーテンベルクの技術以来、われわれの世界を支配してきた機械の原理の核心である。印刷および活字の伝えるメッセージは第一に、その反復可能性というメッセージである（マクルーハン1987：162）」。

2.2. 文字と電子文字との関係

筆写された文字が読めるということは、文字が筆写できることを意味する。ところで、文字における触覚からの離脱のひとつの具体的帰結は、活字と筆写文字の類似であるといえる⁶。たとえば、小竹(2001:153)は、「手書き文字が活字フォントに相似し始めている」ことを指摘している。つまり、われわれの書いた文字は完全な同形の反復でないとはいえ、いまや活字は潜在的にも顕在的にも書かれるとあってよいのである⁷。そして、活字が読める者は活字が書けるということは、読むだけの者がいないことを意味している。逆に言えば、本来、活字が読める者はそれが書けるはずなのだが、書き手という特権性がそれを阻止してきたのである。コンピュータのキーボードは書くことを遠ざけるとして、文化の破壊者とまで見られることがあるが、それを措いては万人に書き手たりうる資格を与えるものはないだろう。

電子ネットワークは、ネットワークへの参加者を書き手とする一方で、数多くのデジタルフォントを流通させ、自作フォントの配付や蒐集を行なうマニアを生む。それはデジタルビットに自らの身体を登録し、あるいは蒐集する主体の主体性や身体性を蒐集しようとするかのようである(2.4)。テキストは、常に過剰にコード化された冗長なもので、メッセージとともに、その読解法や使い方を指示・指定するコードをも含んでいることがある。デジタルフォントの肉筆性は作者の実体的存在を予言する余剰のコードのひとつといえるものだろう。しかし、デジタルフォントが蒐集されるといっても、蒐集の対象は「モノ」でしかない。書かれたモノ、デザインでない文字というモノはデジタルフォントのどこにもない。つまり、デジタルフォントをはじめとした文字の蒐集は、文字が物理的実体の有無に関わらずモノと受けとられ、あるいは、モノという認識自体を導くことを示している。

2.2.3. ことばとモノ

文体は、ことばがモノであるという認識と不可分であり(0.2)、従ってその具体的発見は文字の発明に遅れると見なされる。「話す」ことは、話しつつあることに注意を引きつけず、「書く」ことが主体と客体とを分離する。読み書きによって、コトバはモノに、モノはコトバになる⁸。

書くことはことばをモノと見なさしめるが、印刷することはことばを商品にする。「西洋のタイプライターは表現体をあわただしく商品にかえてしまう。人が文章を書くその瞬間から、もうその文章を印刷してしまう(バルト1974:118)」のである。この技術の背景には、文字に対する独自の認識があるといえる。書道において、運筆の上で実体的な線とならない筆路(画として現れない脈絡)は「虚画」と呼ばれるが、西洋書道では同じことを「エアブリッジ air-bridge」と呼ぶ

⁶書体における筆記体と活字体ということでは、行書体と楷書体とが該当するが、ここで問題にしているのは同一字形の反復である。

⁷書かれた文字と印刷された文字との同一視が成り立つところでは、肉体でなく、コミュニケーションは事実上の身体の間で成り立つ。

⁸「識字は分離を強要する...あたかも真実はテキストであるかのように、この世界の物事を『読むこと』によって、意識へと向かう(サンダース1998:76f.)」。

2.2. 文字と電子文字との関係

(フォルサム1998:9)。それが「虚画」といわれるときには、ストローク中のプロセスと見做され、文字は動きつつある形態といえるが、「エアブリッジ」といわれるときには、すでに構築物と見做されており、文字は完成されたもの・事態の終了を示す形態といえる。それゆえ、西洋の活字は、直ちに商品化することができるのである。あるいは、肉筆(性を持った文字)が本質的に活字(印刷された文字)だということである⁹。

資本主義は、複製芸術作品を 商品 として大衆のもとに届けることによって、芸術作品が技術によって作成され-複製されうる モノ だという事実をいっそう明白にする。そこでは、芸術的作品の創造的な一回性は稀薄になり、ついに万人に制作可能な芸術的生産物への道が開かれる(ベンヤミン1999)。しかし、資本主義では、コトバが(労働の集約によって反復可能な)モノであることが、作品を専ら金に換える 作者 の存在に支えられるという矛盾が生まれてしまう¹⁰。これは、理論上の適否は別として、文体(論)がしばしば作家との関わりで論じられてきた理由のひとつかもしれない。また、書体も、表現においてそれを金銭化する者に結びついている。東洋の書道が、文字を完成された形態とは見ないものだとしても、書を商品=モノとして金銭に換える「書家」と呼ばれる人々がおり、書をベースにした多くの商用フォントが流通してもいる。

2.2.4. 文字と情報

筆写、タイプライター、ワードプロセッサの関係は、写真機、ポラロイドカメラ、デジタルカメラの関係に似ている。安部公房は次のように書いている。

24 作品を金銭に換えることが出来るプロ以外にとって、カメラは単なる空想の道具でしかありえない。...古いアルバムは、いたずらに変色するにまかされ、めったに開かれる事もない。...写真を残すつもりで、実は結果の存在しない行為に酔っているのだと気付いたとき、人はカメラを捨て去ろうと決心する。むろんカメラと一緒にシャッターを押す瞬間の、あの無償の期待も捨て去ってしまうわけだ。ただ、結果が存在しないことを承知で、しかも期待を失わずにいられる空想家も少なからずいて、それがカメラ好きになってくれるわけである。彼等の願望は、シャッターを押すだけで満たされるから、結果にはそうこだわらない。...ポラロイド社が、経営の危機に瀕しているという噂だが、マニヤの心理に対する読みの浅さもあったのではなかろうか。「アリスのカメラ」(『笑う月』に所収)

なかなか捨てられないがらくたを、デジタルカメラに収めれば捨てられるという人もいるという。タイプライターやポラロイドカメラは、行為をすぐに 商品 = モノ に換えるが、ワープロや

⁹それに対して、日本語の文字は、形態というより事態(書くこと)であるために、形態に立脚して言語を把握する 文体 の認識を十分に発達させなかった(0.2)。

¹⁰電子環境でも有効である。卑近な例:書きたがる者ほど読むことを強いられる(「良いものを書くためにはまず良いものをたくさん読みなさい」)。本来、読むことに投下した労力は、それによって得られた知識にでも、それによって書くことができるものにでもなく、書いたものを使用料に換えることで賄われるべきであろう。

デジタルカメラは、モノを情報に換える。それは、そこから商品が派生するとしても、情報であるかぎりわれわれから切り離されて存在するものではない。それが生み出す情報が常にわれわれのうちにあるということは、ワープロやデジタルカメラは、むしろわれわれの身体の一部なのであり、そこに、書字空間との身体的触れ合い=肉筆性とは対せず、むしろそれを取り込む、すなわち肉筆性を代替する表現の生じる余地があるように思われる。

2.2.5. 連続性と不連続性

絵画は瞬間的でことばは時間的である。絵画と文章との対比は、時枝(1979)にも見られるが、
シーケンシャル なおも絵画と言語との対比は無効でない。文章が線的性格を持つということは、予め定められた
コンテンツユース 順序的な配列によるということだけでなく、連続的な処理に依存するということだからである。

- 12 連続性と不連続性がテキストの一つの性質である。クリステヴァ(1969:107ff.)は、二つのもの(例えば「AとBと」)を二つのものの関係(例えば「AからBまで」)として(非論理的に)見做すことがテキストだという。不連続を連続と見做すときに、われわれは、連続が持つ不連続に無限の可能性を感じとることになるということである。文字において、連続性と不連続性が関わる現象には、例えば、文字分解やA A、アスキーアートフェイスマーク 顔文字¹¹、エアブリッジ 虚筆、線の掠れなどが指摘できる。文字に現れる後二者は筆致、従って筆写の肉筆性にゆき着き、活字の上では書体差あるいは書体のデザイン差となってあらわれる。一時、「さいたま市」の「さ」の字をめぐる些細な混乱もあったが¹²、小竹(2001:153)は、ハライの実線化を「活字フォントが筆写に与える影響」としてあげている。一方、

「糸吉女昏」 = 結婚

「反ネ申イ憂月券」 = 阪神優勝

- 24 「糸色文寸!二女兼」 = 絶対に嫌

などの字体の加工は、主に、デジタルフォント(電子書体)に現れる文字列上の不連続性といえる(このような表記は印刷活字でも可能ではあるが、電子コミュニケーションにおいて発達したものである [3.2.1]、[3.3.8])。普段、われわれは連続的なものが不可避に含む不連続性の接点から作為を窺うことで表現を一人称の主体に結びつけており、物象(例えば、書籍の頁、フィルムのカット)がそれを強化している¹³。すなわち、活字(印刷活字やデジタルフォント)は(運筆によらない)非肉筆性によってデザインに必ず不連続性を含むが、文字分解は、その字体自体の不連続性を明るみに出すことで、遍在する非肉筆性の不連続性を背景化している。また、デジタルフォントにおけ

¹¹これらはパソコン通信の時代から用いられている。川上他(1993:41ff.)は、表現を個性的で情意的なものにする試みと分析している。

¹²市制の施行にあたって、画数の問い合わせが自治体・行政に多数あったという。

¹³「ディスクールを作者に帰属させることの最も直接的で物質的な発現形態は、作品とモノとの、言い換えればテキストとしての統一性と冊子としての統一性との同一性である(シャルチェ1996:100)」。

る文字分解は、何よりも人間だけが文字言語の受け手たりうることを確認させるものでもある（たとえば、「村」と「木寸」ではバイト数が異なるので機械可読でない）。このような遊びは、一人称として、また人間の存在を予告し、結果として肉筆性を代替しているのである。ここで、肉筆性の本質は、すでに述べたように、紙をして触れることのできる書字空間と見做す（あるいは見立てる）視点にあるが、その視点は人間が文字の本質的担い手であるという視点に通底するのである。

2.2.6. 文字の肉筆性

書きコトバの重要性は、必ずしも書字 = 肉筆の重要性を意味しない。前項に例示した通り、肉筆性にはそれを代行する手段・表現法があり、そこには肉筆と同一視される要因が存在している。人間が文字を書く・読むことを代償する行為が表現性を生むのか、表現性を生み出す手法が書字行為¹²の代償として流用されるのか、いずれが直接的かは定めがたいが、代用は十分に機能するだろう。むしろ、それが不十分なのは商品価値においてであり、したがって、作品を商品として金銭に換えることができる者以外には、ただ「書くこと」は問題にならない。それがどのようなものであれ「読むこと」によって「書けること」が重要なのである。

要約：われわれが日常の言語行動において使用する文字は、写字から印刷活字・デジタルフォントへと変化している。しかも、デジタルフォントには肉筆性を代替する表現上の手段があり、われわれはそれを肉筆（性をもった文字）として用いているといえる。

2.3. 文体と書体との関係 ~ スタイル としての書体について

2.3.0. はじめに

スタイル
書体を問おうとするときに問題になるのは、文体論が書体と同じ構造を持っていることである。文体論が ^{レリーフ} 浮き彫りにされた意味 を扱うものだとすれば、書体は 強調するもの であり、文体論が 書き手の個性 を問うものであれば、書体は書き手の投影する 個性的身振り ということになる。もちろん、書体における 強調 や 個性 がなにどのようなものかは一向に明らかでないのだが、書体を分析しようとする文体論がいつもその書体と同じ型をしているために、それが突き詰められることは少ない。

一般に、文体論が問うのは、その目的に応じて様々に定義される 文体 の何であるかであり、
12 テキストの実現が必ず書体を伴うからには、文体は書体に発して書体を通じて知られる（書体を/で書くことにはじまり書体を/で読むことで終わる）ものともなる。そのときに、書体は、表現上の修辞として貧弱であると見られるばかりか、目的 = 文体に対する手段と見做されており、書体は文体を問う手段という点で文体論と同型なのである。したがって、文体論が書体を問うときには、メディアとインタフェイスとを分離することが必要であり、書体がモノとして「書かれる=読みうる」（バルト1973：7f.）瞬間でなく、モノと見做される 読み の瞬間に分け入るべきだろう。本節では、その点を踏まえて書体と文体との関係を論じてゆくことにしたい。

2.3.1. 読み手の参与と読み的手段

書き手は、自らの利益のためなら何でもできるし、実に何をしても良かった。読み手の権利は常にヨリ限定されていたが、テキストへの参与は技術的に励まされてもきた。たとえば、冊子で
24 「ページの四方にできる余白には、注釈や評言を書き込むことができる。つまり、読者がそのテキストによって語られる物語に手を加えることができるわけで、こうしたことは巻物ではなかなか困難なことであった（マンガエル1999：146）」のである。また、e-textで読み手の領域が広がったことは周知であり、これは、部分的には、テキスト側の処理と読み手側の処理との分配の問題である。

解釈者の解釈や読書行為を取り巻く物理的状況を考えるときには、書く/作る手段と読む/用いる手段とを区別することができる。e-textで、書くことと読むことが同じ一つのモノを介して繋がっているわけでないことは、最も確実な証拠である。但、書物においても、例えば、読む側が用いる道具に書見台や眼鏡などがあり、目次や索引はもっぱら読む手段といえるだろう。検索や分類の便宜をはかる「索引」は、卷子本で現実性に乏しい方法であることは明らかで、冊子本とともに生まれて印刷冊子本がさらに発展させたものと考えられる。逆に、現在のスクロールウィンドウは、
36 コンピュータが提供する検索機能と高速な処理速度とによって、同時に巻物の性質を持つことが可能にされている。

多くの電機製品が小型化する中、テレビやコンピュータのスクリーンは巨大化を続けた。しかし、

われわれは、印刷本に最高級の紙とインクとは求めず、e-textに最高水準のディスプレイも求めない。しばしば言われるように、技術の革新は、必要から生じるというより、そこから必要性が生じるものである。書き手は与えられた状況の中で最善を尽くそうとし、そこからさまざまな手法が生じるものだろう。その結果、素材や筆記用具の変化は、旧来のものとの断絶だけでなく、それが潜在的に有していた価値を浮上させたり強化したりする。紙から電子への流れとは、紙が一方的に過去になるのではなく、両者が同一視されることで、紙の制約によって可能でなかったものどもが可能になることである。同時に、「継承した形式のいくつかを放棄し新しい形式を創出しながら、印刷本が徐々に写本から解放されていった（シャルチェ1992b：45）」ように、模倣によって紙の制約とおぼしきものも電子環境に取り入れられうる。

2.3.2. 消しゴムについて

12

バルト（1987：76）は、話しことばでの訂正は、削除でも抹消でもなく、訂正を付け加えることであるという。一方、消しゴムは、時間軸を逆行して書きことばを削除・訂正する¹。印刷本の余白や本文を加工するペンと違い、消しゴムは書くためのものであり、読むためには使えない。但、読むときに、テキストは短くできる。斜め読みや、ページを引き破ることもできる。ハイパertextの読みも同じ性質を持つが、それらは量的であって質的に裁量するのではない（3.5）。消しゴムとdeleteキーとが同じものであることは、手書き作文とワープロ作文とがスタイルに影響しないこと（金ほか1994）で確かめられる。しかし、コンピュータは書くための道具でない。電子データは、触法行為でない限りは自由に改変でき、deleteキーは読むときにも用いる点で、消しゴムとは異なる質を持つ。

安部公房（1973）は、表現と現実との間に発見した裂け目を追い続け、生活の軌跡を拒絶する表現法を「消しゴムで書く」と言い表わす。「作品の軌跡以外的一切を消し去ってしまえる、極上の消しゴム」は、「世界に対して自己の存在を、真空にちかいほどの大きな負圧として自覚している」作家の「不可能なアリバイ証明」に使われる。ここで「消しゴム」は、作者と作品との、自己と「他人」との関係を立てるしくみの暗喩であり、同じ「消しゴム」は、現実の表現行為の中で直喩としても現れるといえる。安部は創作活動にワードプロセッサを使ったことで知られるが、それは消しゴムのよう24に表現を削ぎ落とす道具なのであった。「読者が読むのは書かれている文体であり、筆記用具でもなければ、書体でもない。そして文体とは、結局筆者の脳（思考）の構造にほかならない」（安部：田中1991）ともいうが、すでに筆記用具が問題でないことは明らかである。ディスプレイの電子文字が書き手の脳の動きを表示する（ボードリヤール1988：58）のなら、電子文字の書体の中にこそ文体を見ていたことになる。したがって、書体は文体を透かし見る手段であったのだが、一度印刷にまわされてしまうと固定的で同一的なモノとなるために、その事実を軽視しえたのだといえよう。他方、電子データは、その朗読的実現が常に異なる。その意味で、書体は「で読む」と同時に「を読む」ものでもあろう。

36

¹ダグラス・ラシュコフは消しゴムを2000年間で最大の発明だと言う（ブロックマン編2000：42f.）。

2.3.3. 異体字と図像性

異体字は、「異体字を記号論の観点から定義すると、『記号の形態は異なるものの、それが指し示す対象物は同じである文字の集合』となる」と、字形において捉えられ、「異体字は、辞書的には同じ意味を持つ。しかし、心的表象という面から見れば、字体の違いによって、異なるイメージや感情的成分が生み出されるケースも少なくはないと考えられる」といわれる（横山2001：53f.）ことがある。しかし、異体字において知覚の心理学的内容が問題なのではまったくない。文体論の研究史が物語るように、心理学的な態度は何ものも解決しない。

デリダ（1978：186）は「^{エクリチュール}構造的あるいは本質的諸理由から、純粋に表音的な文字が不可能であり、またそれが非=表音的なものと手を切ったことはけっしてない」という。文字だという解釈が可能な形象には、文字でない（^{判じ物}）という解釈も同じくらい可能でなければならないということである。たとえば、^{フォルマリズム}ロシア形式主義は、詩での類義語の使用を異なる音的パターンを示す点でこそ有意なものに見做し、文字コードの拡張は異体字を増加させるが、異体字は異なる形象（単なる光学的/電光的パターン）を提示する手法であるともいえる。また、文字での図像性の増大は、言語性と図形性との離反を大きくさせる。図像的イメージと言語的意味とは互いが互いを乗り越える形でしか機能しない（クローン1994：68f.）ものである。

語やその表記の選択は、語彙・語構成に属し、特に文体論の問題ではないが、ある単位（語）が特定の文脈で特定の外形を強制するような機構があるのだとすれば、その変数の設定には考えておくべき意味があるだろう。小林（2001：18）は、異体字について「文字認知上で相互に渡り歩ける知識を持つ必要」があるが、基本的には読めればよいとしている。それがどの程度容易なことかは措くとして、異体字の使い分けは、一画一画を書くのでなく、^{デザイン}された視覚的イメージ=^{フォント}活字として書けることを前提とするものといえるだろう。その点では、複数の字体を包摂するコードポイントを用いるか、包摂しないものを用いるかの選択が確保されねばならない。包摂のない、
24 基準の曖昧なコードは、むしろ表現を制限するものである。また、表記と語（彙）との関係でいえば、用字が用語に依存すると同時に用語が用字に依存する側面がある。漢語/洋語を用いれば漢字/片仮名を用いることになる一方、特定の表記を避ける/行なうために用いられる語があり、その結果、「誤用」を含む語が生まれることがある。われわれは、非標準的で逸脱的な表記を誤った用字と見ることはあっても誤った用語と見ることは少ない。しかし、永瀬（1999）や小池（1999）が指摘しているように、旧字旧体を目指すことから生じる規範の逸脱というものがある。それは表記の誤りというより、意図し（て実現されなかつ）た表記をその語こそが要求するという理解の、用語の誤りなのである。

ボルター（1994：82ff.）も指摘するように、書くことの電子化はアルファベット環境でもテク
ストを絵画的にする。Macintoshのデスクトップやハイパテキストでの^{イメージ}画像とのハイリンクもその現れだが、これらが電子的技術であるのに対し、異体字は言語上のパターンを提示する言語表現上の構造的な手法と見なされている（しかし、単なる形象や電光的パターンの提示に過ぎないと
36 もいえる）。そのため、詩が音に拘るように字面への拘泥が生まれる。卑近な例に、人名用の異体字がある。姓名判断のように文字に神秘的機能を求めると同時に、それが言語上の問題だという理

解から正誤で判断されるのである。言語は規範的接近を生じやすいものだが、字体に関する知識が専門家にしか期待されない以上、それらは個人的な趣味にすぎない。魚返（1963：155）は、日本人は伝統的にその心性として字体よりも字形に拘ってきたと述べているが、現在も変わっていないといえる。

2.3.4. 紙とリレーシステム

文体はテキストのレベルに属する問題だが、それはテキストのあり方が書物に影響されうる限り、書物にまで延長される。書体は、即文体なのでも、下位要素なのでもでもないはずだが、書体は（文法事項や語彙論的特徴と同様）テキストの解釈を枠づけ方向づける言語の形態的特徴である（リファテール1978：118f.）。

- 12 文字と文字によるテキストとは、物理的外形なしに存在しえない。文字は、その歴史のはじめ、例えば石面に刻され、石碑の建立は、支配者の 正しいことば を伝えた。それは、不動性を意識してのことであつたらう。しかし、時間を超えるコミュニケーションには、不動の痕跡よりも適格な伝承が適している。このことをシービオク（1985：166）は「情報伝達の『リレー・システム』」と呼んでいる。これは、口承の性質を持つともいえるが、素材が強靱であるより複製の容易さ、すなわち多産性と正確性が重要であるからには、紙と文字とにヨリ適する。文字は複製に対する強度が音声より大きく（エスカルピ1988：12）、紙は（後に印刷本の可能性を整えたように）複製に向いているからである。事実、石碑の方が早く失われて紙への写しのみが現存する（藤枝1991：58）ことも珍しくない。リレー・システムは、メディアが共時的な書き手と読み手の間の一方的な情報の導管的経路でなく、それ自体がある径路を通して伝えられるモノ = ^{メカニズム}機構であることと同時に、書物の物質性とテキストの機能性との相互性を示している。現在、複製における多産性と正確性とを保証する手段として、デジタルデータに如くはない。その結果、逆に、テキストは組
- 24 み合わせに対して柔軟になり、読解の形態の多様性を確保する。しかし、従来型の書物がなくなつたわけでも、なくなるわけでもない。では、書籍は何のために役立つのであろうか。同じ言語的価値を持つ文字列からなっていると ^{オリジナルコピー}しても、活字テキストと電子テキストの読まれ方は、必ず異なるであろう。そのとき、両者の関係は、主/従、原典/写本という基準では論じられない。石碑と写しとの関係と異なり、活字テキストは既にリレー・システムに組み込まれているからである。そのとき、書籍は典拠として引用を権威づける表現の源泉でなく、内容に力強い線的進行性を与える ^{スタイル・ブック}基準でもなく、活字書体見本帳となるだろう。当初、文体において紙が石を皮相に写いとる ^{スタイル}低級な素材であったように、スクリーンは ^{スタイル}書体の再現性において低級な素材である。しかも、紙が現在まで最良の書字素材であるからには、デジタル環境は独自の特徴とともに紙のような性質をも持つことになるはずである（3.4）。

2.3.5. 書体の選択について

36

字形は、読みの行為の時点に生じる読み手における事実であり、選択されるものでない。一方、

文字体系の選択は表現における 意識 の選択であり、文字の選択は 効果 の選択である。これらの選択は、文や語彙の選択と同様にいたるところで生じており、直ちに文体論の問題になるのではない。つまり、フォントにおける書体の選択は、ヨリ実質的な問題である。そのため、ここでいう効果とは、結果であっても目的でない。また、効果が非形式性あるいは無限性を含むとき、使用されたテキストは文学的でなければならない。しかし、字体や書体は、解釈のコストを増大させてヨリ大きな効果を導くとしても、両者の関係は常に特定されているべきである。それらの選択は概ね規範的な効果を担うのであり、効果自体よりもそれを可能にする機構が問われよう。既に述べたように、字体は不連続性や図像性をもって言語の形式性に抵抗するのである。

文体は、一般にテキストのレベルで論じられ、内容と本質的に独立しない（文体のみを実体的に取りだして示すことは難しいと考えられる）。しかし、書体は内容と独立しうるように見える。例えば、ほとんど重要でないテキスト部分をゴシック体で表示できる。あるいは、サイズや文字色など、
12 放縦な操作は書体に可能であって、文体には可能でない。書き手にとって、後者の過大な操作は、意味を失うか制御できない過剰な意味を生み出すものと考えられるからである。スタイルは、多く、
内容 - 形式 の二分法で後者に属すると見做されるが、形式を操作するとき、書体は文体と同等には有益で、それよりも無害なのである。

電子環境での書体は、形式上の独立と同時に、読む側の機械的・技術的処理にも依存する点で、文字分解や異体字とは異なるところがある。既に見たように、文字分解は一人称と（[2.2.5](#)）、異体字は類義語の提示と部分的に等しい（[2.3.3](#)）ものと思われるが、書体の操作は、主に、
24 画像として用いられるか、印刷を前提する。文字コードに文藝家が発言するのは、異体字が効果の選択だからだが、しかし、電子書体の、特にその美しさには無頓着である（小宮山1998）らしい。たしかに、手書きの視点は、書いた通りに読まれるという入-出力の対称な処理を前提としており、書体は非関与的な印刷工程の問題である。また同時に、書き分けるといふ点からは、字形でヨリ識別的なものは字体である。しかし、伝統的な 書き手 はともかく、多くの場合、書体の方が目を引くものだと思われる。潜在的にも顕在的にも多くのヴァリエーションが可能だからである。この変異は、漢字政策で「デザイン差」と呼ばれ、活字や電子フォントで具体化しているといえる。

2.3.6. 書体の読み取りについて

字形に対する個人的趣味をどのように表現に統合するかが問われるであろう。字形は、それ自体としては 選択 されないものであり、その統合は書体を通じてなされるだろう。それは、個性を映すといわれる「書風」がそうであるように、また、80年代の『変体少女文字』（山根1986）が書きコトバに「かわいい」という批評用語を求めたように、文字の解釈コードを文字に内在させるという形で現れると考えられる。『書風』や『変体少女文字』は、文字の典型的な形姿に対する部分的で体系的な逸脱によっている。ルールを知らない人間はそれを破ることもできない以上、何かの表記を逸脱的と見做すとき、書き手が規範を知っていると既に読み手に信じさせているのである。
36 したがって、書体のコード解読は、テキストを特定のイメージの書き手の下に一つの全体と見做すことになる。統一の動きが生じることの基底には、テキストが文字の組み合わせからなっている（＝

モノ)という理解がある²。そのため、個々の文字の変化が離散的な活字・フォントでは、文脈上の対比が利用されることになる。ポルター(1994:108f.)は「平均的な読者は一般的な書籍用フォントのどれがどれであると見分けることはできないだろう。だがそういう一方で、**何千もの**ディスプレイ・フォントの中のいくつかが印刷書籍の中で混在していたら、読者はすぐに何か変だぞ、と気づくことだろう」という。対比の点で、書体は句読点と同じような働きをするのである。漢字と平仮名との字形差などがあることから日本語の句読法は必ずしも構造的になっていないが、それは読みの速度をコントロールする手法であり、読み手・書き手双方の力関係が交差する場だともいえる(3.3)。その意味で、書体は、読み のモデルを指示するテキスト外のコードの一つである。e-textは、書体の操作をより容易にしておき、技術が読み手の参与を開いていくものである(2.3.1)とすれば、書体は文体への単なる経路でなく、読者を招き入れる設計であるといえる。テキストの質的な統一は読み手においてなされるものだが、それが書体の変異にもかかわらず

12 に成り立つときに、読み手は 統一的な書き手 というイメージのもとに制御されているのである。また、書体は文字体系を超えて字形を統一するものでもある。本来、仮名文字に明朝体の字形はない³が、ワードプロセッサ(専用機)の普及以来、明朝体フォントは漢字・仮名・アルファベットを通じて存在するようになっている。このような書体の統一は 統一的な書き手 の類像として働く。他方、書体の混在もまた、不連続性の創出を通じた同様の表象であるといえる。テキストにおける連続性と不連続性にはすでに触れたが(2.2.5)、作り手としての作者の一般的イメージは、連続的なものが持つ不連続なつながり目から読み手が透かし見るようなものなのである。

したがって、書体「を読む」ことは、書き手と読み手との境界がより微妙なものとなるときに重要である。e-textでは、表示用の書体^{ディスプレイフォント}を設定でき、だれでも容易に変更することができる。多彩な書体「で」多彩な書体「を読む」ことができるところに、表現・文体における書体の可能性^{スタイル}が示されている。書体の多彩な変異は、むしろテキストを統一し、書き手・読み手・テキストの関係を規定する。それは新しい読みのモデルと文体のイメージとを伴い、字形の嗜好は表現過程に組み込まれる。e-textは、単に電気仕掛けの仕組み⁴だが、ここでも多くの問題を示唆しつつ具体的なイメージを提示している。

24

2.3.7. 読まれるものとしての書体

文字は、そもそもの起源から、文脈を無視した形象の反復で絵文字となったのだが、印刷では書体・字形が反復される。その点では、書体を文体論の問題とすることは、印刷されたテキストで既に可能であった。しかし、コトバがモノであることにおいて書体が文体論と同型であったため^{エクリチュール}に、書体が特に論じられることは少なかった。たとえば、リファテール(1978:146)は、「文章

²モノは単純和をなすが、情報や機能はそうではない。

³明朝体は(中国の木版用)漢字活字のデザイン様式で仮名には及ばない(小宮山1999)。

⁴「図書館の壁を破壊し、そこあらゆる書物のページをひるがえさせ、生命を取り戻させることができるような書物があるとすれば、それは《至高の書物》と言えるかもしれない。だがそれは、...それ自体としてはけっして至高の価値などもたぬたんなる仕組みにすぎぬかもしれぬ。(清水1984:289)」。

2.3. 文体と書体の関係

には表情の要素を表象する手段が余りない(イタリック体・大文字の使用)」ため「文体機能が《埋め合わせ》」^{アルファベットシステム}という。書体に言及しながら、それを貧弱と斥けるのは、表音的書記法にでなく、理論上の問題 文体は強調する に起因する。文体論で書体を問うには、強調 や 書き手の個性 から文体を切り離し、書体を含む文字が読まれる瞬間を観察しなければならないことが知られるのである。

要約：字体は、文字分解や異体字の選択によって、一人称・類義語の提示と部分的に等しいが、書体は、ヨリ多くの変異がありうる点、読み手側の処理にも掛かる点で字体と異なる。多くの変異がありうる点、およびスタイルとして自由な操作を許すことから、書体は電子環境で極めて多彩なものとなり、紙の書籍は、紙を模倣するスクリーンに対して書体見本帳となる。使用された書体は、文脈上の対比をつくり、統一性と不連続性とを生み、特定の読みのモデルを提示するが、読み手側¹²の処理にも依存することから、書体は書かれるものにでなく、読まれる = 書きうるものに属する。

2.4. 表現としてのデジタルフォント

2.4.0. はじめに

フォントマニアは、単にデジタルフォントを^{コレクション}蒐集するだけでなく、デジタルフォントを自作し、配布し、コレクションを積極的に使用に供する。つまり、デジタルフォントはその蒐集をめぐって表現として捉えることができるものである。

本節では、フォントマニアを手がかりに、デジタルフォント（電子書体）の表現性について考察する。

2.4.1. 蒐集について

ボードリヤール（1980：106ff.）によれば、「蒐集」は機能を抽象化された等価なモノの所有であり、差異によって系列化したモノ（の全体）が所有を延長してじらすことに特徴づけられる。また、蒐集において、系列に究極的に存在する関係項は蒐集家それじたいであり、したがって、次々に置き変わる関係項の反復こそ蒐集家の存在そのものとなる。この構造主義的分析で強調されているのは、蒐集が系列によるということである。同じく、ショア（1998：315）は次のように指摘している。「わたしの絵はがきのコレクションで大切なのは、個々のはがきとそれがもともと置かれていた環境との繋がりではない。あくまでも大切なのは……何らかの共通のテーマによって関連づけられるはがきの中に私が創造する繋がりなのである。起源の換喩は、ここでは、コレクションという二次的な換喩、人工的換喩によって置き換えられている」。

脱文脈的かつ自己指示的な文脈との関係で成り立つという点では、蒐集はテキストと似たところがあるといえるかもしれない。われわれはすべてを書くことはできないし、すべてを読むこともできず、すべてを書くことができないときには可能なかぎりすべてを書かなければならないだろうし、誰にもすべてを読むことができないときには誰しも読んだものがすべてであると信じてよいことになる。一方、モノの蒐集は、すべてを集めることができると信じるからこそすべてのものを集めようとし、^{コレクティン}且つすべてを集めることができないときにもすべてのものを集めようとする。したがって、^{コンプリート}蒐集の完結は、^{コレクション}蒐集の完全性をいっこうに立証せず、^{パーフェクション}コレクションが完成することはないし、そうしてもいけない。

2.4.2. フォントマニアについて

デジタルフォントを蒐集するコレクターはフォントマニアと呼ばれる。但、文字の蒐集は、古くから人々の行なうところであった。文字は、情報を分類して記録するための手段（ガウアー1986）であると同時に、その発生から「神聖文字」として神と人とのコミュニケーションツールだった（白川1996：62）が、活字印刷術によって文字は神秘的でも呪術的でもなくなってゆく。文字が人と人とのコミュニケーションツールになると、ヨーロッパの王侯貴族たちは世界中の文字

2.4. 表現としてのデジタルフォント

(字体)の集成に血道をあげた(前田1998:273)。異なる種類の文字(文字体系)の蒐集は、文化的差異を一所に支配する権力の獲得そのものとして、文字を集成した書物はひとつの世界の隠喩となった。王侯貴族の支配が途絶えてからも、文字の蒐集は多くの人々(文字学の門外漢)に受け継がれてゆくが、その基底にはやはりそれを大きな全体と見る世界観があったように思われる。一方、フォントマニアは、DTPの普及より古いものでないが(津野1993:9f.)、現在一般に流通しているフォントのセットは数万種類以上ともいわれる。

フォントマニアは、単にデジタルフォントを蒐集するだけでなく、しばしばデジタルフォントを自作して配布する。このデジタルフォントの配布は、デジタル環境に身体を登録する試みであると考えられ、サイボーグ的な身体の領域であるといえる(拙論1999)。配布されるデジタルフォントには手書き文字をスキャンしたものが少なくないが、デジタルフォントに身体を登録して蒐集の系列につけくわえることで、欠如の充足(触覚性の回復)と新たな欠如(触覚性の喪失)とが同時にうみだされるのである。「人間は自分のコレクションより長生きできない(カーディナル1998:120)」が、人間はそのコレクションより実体的であることもできないのではないか。

フォントマニアのもうひとつの特徴は、彼らがコレクションを積極的に利用するという点である。フォントマニアは、デジタルフォントを飾って眺めるのではなく、それをういて多くのテキスト(印刷物やウェブデザイン)を産出しようとする(その点で、フォントマニアは潜在的にも顕在的にも表現者である)。そもそも、コレクションを見せびらかすことは、コレクターの避けがたい欲求であると同時に危険性であるといえる。見せびらかしは、対象を独占する願望を示しつつ他者の所有への可能性をひらく。蒐集がしばしば犯罪への越境を含むことは、すでにひろく知られているだろう(たとえば、古地図窃盗犯ギルバート・ブランドを追跡したハーベイのノンフィクションを参照)が、それでも多くのコレクションは見せびらかされる。デジタルフォントも見せびらかしの対象となるだけでなく、そこに盗作の噂が絶えることはない。書体が字体に対するごく小さな変動の範囲内で(数学的に)定義されるものである以上、実際に類似は避けられないのだが、盗用の非難はフォント(ファイル)名の部分一致にさえ及ぶことがある。このことは、フォントマニアが、その表現において、同時に「リスト」と深く関わっていることを示しているように思われる(リストについては [2.4.4](#)で改めて議論する)。

2.4.3. データベースについて

ティボールの小説『コレクター蒐集』の語り手は、古さという概念が発明されるより古くから存在する自由に形姿をかえられる器である。その器は、さまざまなコレクターによって蒐集されながら、同時に彼らコレクターを「この星にあまるほど蒐集し(7)」、その身体や性格、そしてあらゆる行為にいたるまでをことごとく分類している。器は、蒐集について、「コレクションというものは、往々にして法則の神殿である。すべてが絵だから、すべてが壺だから、一堂に集められる。存在の、ある小さな区分の整理。離散していくものの、ささやかな索引(54)」と語るが、その器が好ましいと思う数少ない歴代の所有者オディール(さまざまな発明や発見・文学を生み出すが、そのすべてがダーウィンやマルクス、フローベル、エジソンらにごくわずかに遅れ

2.4. 表現としてのデジタルフォント

てしまう19世紀の女性)は、「法則は人を油断させるために存在しているだけで、自然は気が弱くて囲われることに甘んじはするが、中には必ず一匹や二匹はくれる羊がいるはずだ、と(72)」感じて、ボールの落下実験に多大な時間を費やす。そして、器によれば、「[自宅の敷地に小さな精神病院を建てて気狂いを蒐集した]彼女は本物のコレクター、コレクター蒐集家だけがその真価を知る種類のコレクターだった(75)」ということになる。偽物は常に本物より多いが、その中には常に本物の偽物も存在しているのである。コレクター蒐集家たる器が考えるところによれば、蒐集が何らかの法則によって行なわれるものである以上、コレクターは法則(の集合)そのものであり、法則においては、いかなる法則も疑うことができる一方、どんなにいい加減な法則でもわれわれの実践を拘束しうるのである。それゆえ、蒐集の依拠する法則は、コレクターの振る舞いや人づきあいにも適用される。たとえば、器の現在の所有者であるローザ(さほど専門家とはいえない古美術の鑑定人)は、完璧な愛の対象になるたったひとりの理想の男性を求めるがために何度も恋愛に失敗する。

但、そのような法則とのかかわりは、われわれにとって日常茶飯事になっている。しばしば指摘されるように、デジタルデータはわれわれのさまざまな行動を履歴化して監視する(このことは「電子(電腦)監視社会」などと呼ばれる)。実際に、われわれの行動はさまざまな「顧客データ」「ご利用明細」「アクセスログ」などに蓄積され、無数の監視カメラや盗聴器、スパイウェアにも監視されている(この点については「まなざしのグローバリズム(ヴィリリオ1999)」も参照)。より卑近な例では、コンピュータの日本語システムは変換の履歴を蓄積する(変換語の学習機能と呼ばれる)が、スタイルが個人のほとんど体質的な言語行動の習慣をいうのであれば、その完璧な記録はわたしのコンピュータの中に具体的なデータとして存在していることになってしまう。また、最近、ウェブ検索エンジンは(ウェブブラウザの)ブックマークがわりに利用されることが多いという¹。しかし、ある人が(検索エンジンを使って)深刻なセキュリティホールを修正するプログラムをMSのサイトからダウンロードしたことと、彼/彼女がその前に(検索エンジンを使って)別のウェブサイトで読売ジャイアンツの試合結果をチェックしたこととは、何ら必然的な関係はないであろう。しかも、その接続履歴は、彼/彼女を権威に弱い人間として分類させることになるかもしれない。いったい、データベース²は、「データベースの外には存在しないような情報の要素間の関係を創作する...データベースは情報の単位間の関係を操作することで個人を構築している(ポスター1991:181)」のである。

ここで考えるべきなのは、われわれの行動がデータベースに瞬時に登録されるのであれば、われわれの行動はすでにデータベースに蓄積されていたのと区別がつかないということである。ここでは、われわれの行動の履歴がデータベースに新規登録されるのではなく、われわれの行動がむしろデータベースからの新規選択の履歴だといった方がよい。したがって、デジタル環境での(読み

¹ASCII24 / インサイドストーリー 2002年10月18日「理想のウェブってどんなウェブ? ネットの世界が求めているものは」[online] ascii24.com/news/inside/2002/10/18/639345-000.html

²「データベース」は複数の意味でつかわれる。蓄積されたデータを特定の目的に応じて処理し利用するためのコンピュータシステム(ソフトウェア)をデータベース(またはデータベースシステム)と呼ぶが、特定の目的でのデータの蓄積(データバンク)もデータベースと呼ぶことがある。また、データベースシステムによって利用が可能になった特定の利用システムもデータベースと呼ばれる(上條1972、上林1994)。ここでは、アプリケーションソフトウェアまたはユーザに共有され集中管理される体系的に整理されたデータの集合、あるいはそれを管理するシステムをいう。

手の) 行動は、データベースとの関係においてすべてが分類され、その履歴も一定の型を持つものとなる。内部に時間的なひろがり(質)を持つ出来事を時間的ひろがりの中に位置づける行為は一般に「物語」と呼ばれ、それが必然的でやむを得ないものと見なされるときには因果関係(運命)が外部の实在(モノ)であるかのように語られることになる(語られることによって過去の出来事はモノとなる)。一方、データベースからの選択の履歴は、単なる偶然の連続にすぎず、かつデータベースのデータ構造(データ間の複雑な相互関係)に対応する具体的な現われでもある。

デジタルなコレクションは、それ自体が(ウェブの) 検索 というデータベースの参照によって行なわれる部分があり、データベースとの関係において、コレクションの対象は均質化されている。商業的には紊乱であっても、フォントマニアには、商用フォントも個人の自作フォントも同じようにコレクションの対象であるにすぎない(この点については、「データベース消費(東2001)」も参照)。但、蓄積と蒐集とは意図や目的において違いがあるように思われる。地図の「ジャイアント・コレクター」である「ミスタ・アトラス」は、コレクターとしての自分の目的が包括的な物語を語ることだと語っている(ハーベイ279)。蒐集がデータベースを参照するにせよ、そこで生成するのはリストだと考えたほうが良いだろう。

2.4.4. リストについて

コレクション

蒐集は、モノとモノとを関係づけ、その中でモノのさまざまな文脈(来歴)が顕在化され、同時に多様な文脈は特定の視点に統一される。その特定の視点を代表するのがコレクターである。一般に、コレクターはコレクションのカタログやリストをつくることが多いが、デジタルフォントの蒐集では、コレクションとリストとはほとんど近接している。それがコンピュータのディスクやメモリの一定の領域を占めているという事実以外には、ディスプレイ上のファイル名のリストでしかないからである。

リテラシー

しばしば、リストは書字言語の形式であるとされる。リストは、音声的朗読を予定しておらず、ことばを読むものへと変える。そして、本来的に音声的対応者がいないということは、文字が音声の代理であるという観点を無効にする。Goody(1977)は、次のように指摘している。「リストは、連続的というより不連続なものである。それは、自然な配置や位置の選定に依存しており、縦横上下左右の異なった方向で読むことができる。それは、明快な始まりと正確な終わりとがあり、つまり、一枚の布のように輪郭を境界されている。最も重要な点は、番号順、五十音順、カテゴリー順などのアイテムの序列化を励ますことである。内的かつ外的境界の存在が、カテゴリーを特に可視的なものにし、同時により抽象的なものにする(中略)したがって、ある意味でリストは話しことばの形式とはまったく異なったもので、言語的アイテムを不連続に抽象的に処理する[引用者訳](81)」。

リストは項目を抽象的に取り扱うが、同時にそれ自体の明確な輪郭を持つ。蒐集との関わりでいえば、蒐集がモノの間に関係をつくる作業であるときにリストはデータを関係化し、同時に情報をひとつの商品とするものと思われる。いったい、モノは加算できるが、情報は全体として単純和にならないものである。コレクションがモノの蒐集であるだけでなく、情報を統合するのだとすると、

2.4. 表現としてのデジタルフォント

システムティック

情報を分割・結合する体系的な方法がなければならなからう。そのとき、コレクターは、蒐集行為の及ぶ限りの世界を無数の要素からなる全体としてではなく、おのおのが構造化された部分からなる大きな部分と見做していることになる。このような世界観は、ウェブやe-textの構成と共通している。

また、情報が結合・分割可能な商品であることは、情報理論の本来のアイデアであるとともに、メディアの本質であろうと思われる。例えば、ネグロポンテ(2001:105)は「メディアはメッセージではない。メッセージを具体化したものがメディアなのだ」という。デジタルビット化されたメッセージはさまざまなメディアに具体化可能であり、異なる具体化の時々異なる商品価値を実現するのである³。あるいは、シャノンの理論は本質的に情報を商品だと見做すもの(Dawkins1998)である。「表題はテキストを商品に変える機能を持つ(バルト1988:191f.)」といわれるが、テキストが商品として流通するかぎり、それを情報の問題と見做すことには理があると考えられる。

ここで、商品名が、リストの項目・要素としてもっとも一般的なもののひとつであることに注意する必要がある。オンラインストアの中には、ユーザ(クライアント)がおすすめの商品のリストを作成して公開できるサービスを提供しているところが少なくない。例えば、amazon(www.amazon.co.jp)には、サイト上の商品すべてにコメントをつけてリストの形で公開できる「リストマニア」というサービスがあり、イーショッピングブックス(www.esbooks.co.jp)には「みんなの本屋さん」というヴァーチャルストアが提供されている。これは、サイト内の商品に対するコメント付きのリストをヴァーチャルストアの「商品」として出品でき、紹介した商品の実際の売り上げによってランキングがつき、「店舗」をグループ化したり「店長」同士でコミュニケーションができたりするヴァーチャル書店経営サービス(一種のオンラインゲーム)である。このようなサービスの基本は、リスト(の分類システム)がリスト作成者と常に同一視されるということにある。気の利いたリストを提供するリスト作成者は、センスのよさをアピールすることができるのである(例えば、「リストマニア」のリストは電子メールで知りあいに送ることができる)。このような、リストの解釈や評価は、さまざまところに生じている。

Aubrey(2003)は、playlistismとよばれる新しい偏見が生じていると書いている。playlistismとは「人種や宗教やジェンダー、ことばづかいによって分け隔てるのではなく、iTunesのプレイリストによって人物を審判すること[引用者訳]」である。iTunesは、アップルコンピュータによる優れた電子ジュークボックスソフトで、windows版もリリースされ事実上の標準となっている。iTunesはLANなどを通じて音楽ライブラリ(リスト)を共有することができるため、センスのないプレイリストはその持ち主に対する差別的な取り扱いを許すことになるということである。デジタルデータのコレクションは簡単に共有できるという事実は、リストの表現の影響をより大きなものにする。つまり、デジタル環境の中で、われわれのさまざまな行動は自然に蒐集のリストを作成し、同時にリストの構成原理たる「法則」にわれわれは拘束されるのである。

³デジタルなメディアでは、情報の受けとり方を読み手が決定できる。例えば、映画をDVDで観るかオンライン配信で観るか映画館で観るかは、読み手がどのような身体的快感を求めているかに依存している。映画(=デジタルデータ)は映画であるより前にタイトルによって商品化され、上演において個々のメディア(=映画)となるときに金銭と交換される。

2.4. 表現としてのデジタルフォント

デジタル環境の特徴は、すべてが文字（記号）をもとに構成されていることであり、Goodyの次の指摘は役に立つものだろう。つまり、「テーブルのあらゆる空白は充たされなければならない、スキーマは無意味な囲み枠を許さず、マトリクスは空白を嫌悪する。実際に、毎日の話しことばに見られるゆるい分類法が、このような方法〔図や表：引用者注〕で形式化されると、それは分類体系の記録ではなくある種の参考図書にシフトする〔引用者訳〕（153）」。「したがって、リストは（拡張された文字言語としての）電子メディアにおける最も主要な表現法であり、しかるべく研究の対象とされるべきものである。

要約：表現が ことば を モノ にするように、リストの作成はデジタルデータをモノにする。デジタルフォント（電子書体）の蒐集には、 情報 を モノ と見なして蒐集する手続きが含まれる（その最も具体的な現われはリストおよび〔デザインされた〕テキストである）。これは、文体論が ことば を モノ と見做してその対象にする手続きと比較できる（その最も具体的な現われは〔物理的実体を伴った〕テキストである）。デジタル環境で、われわれの振る舞いは自動的にリストを生成する表現行為となるが、そのとき、われわれはそのリストによって分類され、型を与えられ、評価される。これは、 文は人なり という原初的な認識とも比較できる。つまり、それらはコミュニケーションにおいて読み手による 異議申し立て の手段として用いられるものである。

引用・参考文献(2章)

- 東浩紀(2001)『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』(講談社現代新書1575), 講談社.
- 安部公房(1973)『安部公房全作品』15, 新潮社.
(1984) [1975]『笑う月』新潮社.
- 石川九楊(1997)「書の典型とは何か」, 石川九楊編『屹立する帝国の書・初唐楷書』(書の宇宙 8) pp.4-17, 二玄社.
(2001)「ゲーテンベルクVS.王羲之 - 声と文字、印刷と書字 - 」, 『文學界』55(8), pp.168-191, 文芸春秋.
- 伊藤英俊(1996)『漢字文化とコンピュータ』中央公論社.
- ヴィリリオ, ポール(1999)『情報化爆弾』丸岡高弘訳 [1998], 産業図書.
- 内山和也(1999)「共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文.
- エスカルピ, ロベール(1988)『文字とコミュニケーション』末松訳 [1973], 白水社.
- エルスナー, ジョン&ロジャー・カーディナル編(1998)『蒐集』(Kenkyusha-Reaktion Books) 高山宏監修・高山宏, 富島美子, 浜口稔訳 [1994], 研究社.
- 太田正孝(1997)『いま日本語が危ない』丸山学芸図書.
- 魚返善雄(1963)『言語と文体』紀伊国屋書店.
- 鬼丸吉弘(1981)『児童画のロゴス』勁草書房.
- カーディナル, ロジャー(1998)「蒐集とコラージュ製作 クルト・シュヴィッターズ」浜口稔訳, エルスナー他編 pp.85-122.
- 樺島忠夫(1977)「文字の体系と構造」, 『文字』(岩波講座日本語8) 岩波書店.
(1979)『日本の文字』岩波書店.
- 上條史彦(1972)『データ・ベース・システム』(山下英男, 雨宮綾夫監修: コンピュータ・サイエンス・シリーズ) 産業図書.
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治(1993)『電子ネットワーキングの社会心理』誠信書房.
- 上林弥彦(1994)『巨大データの世界』(情報処理学会編・情報フロンティアシリーズ5) 共立出版.
- 金明哲(1994)「手書とワープロとによる文章の計量分析」, 『計量国語学』19(3).
- クリステヴァ, ジュリア(1983)『記号の解体学 セメイオチケ1』原田邦夫訳 [1969], せりか書房.
- クローン, ライナー(1994)「意味のかけらの宇宙 - パウル・クレーの音節について - 」太田泰人訳, R.クローン&J.L.ケナー『パウル・クレー 記号をめぐる伝説』(同時代ライブラリー 177) p.1-80, 岩波書店.
- ケルコフ, デリック・ドゥ(1999)『ポストメディア論 結合知に向けて』片岡みい子, 中澤豊訳

- [1995], NTT出版.
- 小池和夫(1999)「『東京セブンローズ』の文字について」,小池[ほか] pp.327-349.
- 小池和夫[ほか]著(1999)『漢字問題と文字コード』太田出版,
- 小林一仁(2001)「漢字政策と『表外漢字字体表』」,『人文学と情報処理』31, pp.16-27, 勉誠出版.
- 小宮山博史(1998)「美しい書体はいらないのか」,『技術と人間』27(7), pp.55-8.
- (1999)「錯視を友とし - 明朝体活字の設計」,『InterCommunication』27, pp.90-101, NTT出版.
- 坂部恵(1989)『鏡のなかの日本語』筑摩書房.
- 小竹光夫(2001)「文字を書くことに対して『活字フォント』が与える影響について」,『言語表現研究』第17号, pp.144-154, 兵庫教育大学言語表現学会.
- シービオク, T. A. (1985)『自然と文化の記号論』池上嘉彦編訳, 勁草書房.
- 清水徹(1984)『書物の夢 夢の書物』筑摩書房.
- シャルチェ, ロジェ(1992)「書物から読書へ」[1985], シャルチェ編 pp.87-136.
- (1992)『読書の文化史 テクスト・書物・読解』福井憲彦訳, 新曜社.
- (1994)『読書と読者 アンシャン・レジーム期フランスにおける』長谷川輝夫, 宮下志朗共訳 [1987], みすず書房.
- (1996) [1993]『書物の秩序』長谷川輝夫訳 [1992], 筑摩書房.
- シャルチェ, ロジェ編(1992)『書物から読書へ』水林章[ほか]訳 [1985] みすず書房.
- ショア, ナオミ(1998)「パリを蒐集する」富山美子訳, エルスナー他編 pp.311-339.
- 白川静(1996)「中国における文字の成立」, 石川九揚編『天への問いかけ・甲骨文・金文』(書の宇宙1) pp.62-75, 二玄社.
- 鈴木一誌(1998)「文字の不安」, 『ユリイカ』403, pp.183-198, 青土社.
- 田中良太(1991)『ワープロが社会を変える』中央公論社.
- 津野海太郎(1993)『本とコンピューター』晶文社.
- 時枝誠記(1979)「文章論の一課題」[1951], 山口仲美編『文章・文体』(論集日本語研究8) pp.7-23, 有精堂出版.
- デリダ, ジャック(1978)『根源の彼方に グラマトロジーについて』足立和浩訳 [1967], 現代思潮社.
- 永瀬唯(1999)「漢字消費者に贈る弁 文字コード排外主義の三つの退嬰」, 小池[ほか], pp.161-228.
- ネグロポンテ, ニコラス(2001) [1995]『ビーイング・デジタル』(新装版) 西和彦監訳, 福岡洋一訳 [1995], アスキー.
- ハーベイ, マイルズ(2001)『古地図に魅せられた男』島田三蔵訳 [2000] 文芸春秋.
- 原子朗(1997)『筆跡の文化史』(講談社学術文庫1298) 講談社.
- バルト, ロラン(1973)『S/Z バルザック「サラジューヌ」の構造分析』沢崎浩平訳 [1970], みすず書房.

- (1974) 『表徴の帝国』(叢書創造の小径)宗左近訳[1970],新潮社.
- (1987) 『言語のざわめき』花輪光訳[1984],みすず書房.
- (1988) 『記号学の冒険』花輪光訳[1985],みすず書房.
- フィッシャー,ティボール(2003) 『コレクター蒐集』野口百合子[1997],東京創元社.
- フーコー,ミシェル(1970) 『知の考古学』中村雄二郎訳[1969],河出書房新社.
- フォルサム,ローズ(1998) 『カリグラフィー辞典』須子桂子訳[1990],日本カリグラフィースクール.
- 藤枝晃(1991)[1971] 『文字の文化史』岩波書店.
- ブロックマン,ジョン(2000) 『2000年間で最大の発明は何か』高橋健次[2000],草思社.
- ブレッソン,フランソワ(1992) 「読むこととその難しさについて」[1985],シャルチェ編 pp.13-28.
- ベンヤミン,ヴァルター(1999)[1970] 「複製技術の時代における芸術作品」高木久雄,高原宏平訳[1936, 1955],佐々木基一編集解説『複製技術時代の芸術』(晶文社クラシック) pp.7-50,晶文社.
- ボードリヤール,ジャン(1980) 『物の体系』(叢書ユニベルシタス)宇波彰訳[1968],法政大学出版局.
- (1988) 『アメリカ 砂漠よ永遠に』田中正人[1986],法政大学出版局.
- ポスター,マーク(1991) 『情報様式論:ポスト構造主義の社会理論』室井尚・吉岡洋訳[1990] 岩波書店.
- ボルター,ジェイ・デイヴィッド(1994) 『ライティングスペース 電子テキスト時代のエクリチュール』黒崎政男,下田政俊,伊古田理訳[1991],産業図書.
- 前田年昭(1998) 「“工業化に立ち向かう文化,”という幻想 『JIS批判』翼賛体制は如何にして成立したのか?」、『ユリイカ[詩と批評]』403, pp.262-278,青土社.
- 前田富祺(2001) 「『字体』『字形』『書体』『デザイン差』」,『人文学と情報処理』31, pp.61-71, 勉誠出版.
- マクファーランド,デイヴィッド編『オックスフォード動物行動学事典』木村武二監訳[1981, 1987],どうぶつ社.
- マクルーハン,マーシャル(1986) 『ゲーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』森常治訳[1962],みすず書房.
- (1987) 『メディア論 人間の拡張の諸相』栗原裕,河本仲聖訳[1964],みすず書房.
- マンゲル,アルベルト(1999) 『読書の歴史 あるいは読者の歴史』原田範行訳[1996],柏書房.
- 宮沢彰(1996) 「文字コードと文字」,『人文学と情報処理』10, pp.3-10, 勉誠出版.
- 山根一真(1986) 『変体少女文字の研究 文字の向うに少女が見える』講談社.
- 横山詔一(2001) 「視覚的情報と意味」,平沢洋一編『電腦意味論』(日本語教育学シリーズ 第4巻) pp.49-74, おうふう.
- リファテール,ミカエル(1978) 『文体論序説』福井芳男,宮原信,今井成美訳[1971],朝日出版社.

参考文献一覽(2章)

- Aubrey, Stephen. Adventures in Higher Education; iPod Envy. Wesleyan Argus Nov.4.(2003) Wesleyan University.
[online] www.wesleyan.edu/argus/archives/nov042003/dateyear/w1.html
- Dawkins, Richard. "The Information Challenge." Skeptic 18.4 (1998); [online] www.skeptics.com.au/journal/dawkins1.htm
- Goody, Jack. The Domestication of the Savage Mind. 1977. Themes in the Social Sciences, Cambridge UK: Cambridge UP, 1990.
- Peer, Willie Van. Stylistics and Psychology: Investigations of Foregrounding. Croom Helm Linguistics Series, London: Croom Helm, 1986.

3章 文脈と表記

- 3.1 第二の言文一致と第二の欧文脈
 - 3.1.0 はじめに
 - 3.1.1 第二の言文一致
 - 3.1.2 第二の欧文脈
- 3.2 現代口語体における言と文
 - 3.2.0 はじめに
 - 3.2.1 現代口語体の表現特徴
 - 3.2.2 言語における速度について
 - 3.2.3 俗語・隠語と個性的スタイル
 - 3.2.4 電子メディアと言語の変化
- 3.3 句読点と表記符号の用法について
 - 3.3.0 はじめに
 - 3.3.1 表現における句読点の問題点
 - 3.3.2 スタイルと筆記用具
 - 3.3.3 スタイルとコンピュータ
 - 3.3.4 日本語表現における句読点の役割
 - 3.3.5 句読法への表現上の制約
 - 3.3.6 e-textにおける句読点
 - 3.3.7 句読法と文のスタイル
 - 3.3.8 文字と表記符号
 - 3.3.9 句読点と表記符号
- 3.4 振り仮名と宛字とについて
 - 3.4.0 はじめに
 - 3.4.1 振り仮名の視覚性について
 - 3.4.2 振り仮名の媒体性について
 - 3.4.3 振り仮名の触覚性について
 - 3.4.4 振り仮名の形式性について
 - 3.4.5 e-textと振り仮名
- 3.5 文体における修正と引用とについて
 - 3.5.0 はじめに
 - 3.5.1 修正における追加と削除
 - 3.5.2 引用と文例集
 - 3.5.3 テクストの修正装置

本章では、メディアの問題を中心に検討する。

1節では「第二の言文一致」「第二の欧文脈」と称する問題について明らかにする。2節では1節を踏まえ「現代口語体」について包括的な議論を行なう。以下、3節・4節では個別のテーマを取り扱う。具体的には、句読点をはじめとする表記符号について3節で論じ、4節では振り仮名と宛字の問題を論じる。また、5節では、テキストにおける修正装置という観点で考察する。

3.1. 第二の言文一致と第二の欧文脈

3.1.0. はじめに

明治期の言語変革の主要な問題に、「言文一致」に代表される文体改良運動と、「欧文脈」と称されるヨーロッパ語との言語接触とがある。言文一致は、長らく続いた言文二途に対して唱えられるものであり、言と文との文体としての距離を前提に、その間を縮めようとするものである。一方、e-textは、話しことばと書きことばとの二項的秩序の解体-構築を通じて言と文との本来的不可分離性を可視化すると考えられる。このことは、現代語の生きる特定のコミュニケーション形式と併せて「第二の言文一致」と呼びうる現象である。また、e-textが多言語性を内包することは「第二の欧文脈」と呼ぶことができる。

3.1.1. 第二の言文一致

「言文一致」は、主に

- ダイグロシア
- (1) 二言語使用を問題にする文体改良運動（言文一致運動）
 - (2) 明治期に見られる文章体（言文一致体）
 - (3) 近代以降に確立した非文語体（近代口語体）
 - (4) 口頭語と文章語が同型であること

を意味する。(1)は「言文一致運動」、(2)は「言文一致体」、(3)は「近代口語体」ということができ、(4)が広義の「言文一致」となる。ここで、これら各号には、以下のような関係がある。

言文一致運動(1)により生じた言文一致体(2)は、文章語の特定の書き方である。また、言文一致体(2)を経て確立された近代口語体(3)は、口頭語本来の対面的・日常的・線的情報交換インターフェイスの手法を文章語で模倣するものであり、口頭語のsimulationといえる。魚返(1963:162f.)は、口語体と「一段とくだけた『話しことば調』」である談話体とを区別している。これは、口頭語と文章語とのやむをえぬ乖離を名づけたもので、口語体の中にも一定の質の違いがあり、それが新たな口語体の体系化の動因となることを示している。このことから知られるように、口頭語と文章語との同型性(4)は、一方で両者間の区別を前提とした共通スタイル(中間言語)の存在を意味するが、他方、既存の口頭語と文章語とがコミュニケーションにおいて相互に置換できることだと考えることもできる。後者は、いわば口頭語のハードの模倣emulationであり、口頭語が行なわれる本来の環境とは異なる環境で口頭語と同等の機能を実現して互換性を持たせるものと規定されよう¹。言文一致が範とした西洋にあっても口頭語と文章語との別はあるといわれてきたごとく、これは従来の言語環境でなく、口頭語と文章語との境界の曖昧さにおいてこそ実現するものと思われる。一般に、ものごとの電子化=デジタル化は、種々の境界を曖昧にする。例えば、メディアの電子化は既存の

¹このことは、話しことばが書きことばの 内部 に位置することを意味する。

メディアの境界を（奥野1993）、情報の電子化は人間と機械との境界を（Levy1993）、出版の電子化は、作者・編集者・出版者・消費者の境界を（佐野2001）曖昧にする。また石井ほか（2002：226ff.）は、チューリングテストの判定をチューリングテストとするメタチューリングテストや機械が審判となる逆チューリングテストを提案している。同様に、テキストの電子化は、書き手と読み手の境界を曖昧にするものだが（ランドウ1996）、時間の瞬間性と持続性との境界をも曖昧にする（[3.2.2](#)）ことから、広義の「言文一致」が意味する（コミュニケーションにおける）口頭語と文章語との相互置換を実現しうる環境のひとつと考えられる。また、e-textが、既存の口頭語のメディアとも文章語のメディアとも質的に異なっており、それらを可能性において拡張すべきものであるならば、そこは言文一致の場としてふさわしいものであろう。本論では、口頭語と文章語との本質的な同型性を「第二の言文一致」と捉え、電子書字環境で口頭語と同等の機能を実現すると見做される口語体を近代口語体に区別して「現代口語体」と呼ぶことにする。

したがって、現代口語体は、電子コミュニケーションにおいて一般的に見られる表現と理解される。但、同型の表現は他の空間でも観察され、それが電子環境と既存の環境との互換性を確保するものである以上、相互の影響関係が想定される。しかし、その因果関係には、不確定な要素も少なくなく²、ここでは現代口語体に様々な要素が参加していることを確認するに留めたい（現代口語体の詳しい分析は [3.2](#)参照）。

3.1.2. 第二の欧文脈

文章脈として日本語の文脈に混入した近代西洋語の表現要素、あるいは近代西洋語の要素が混入した文章体内部の流れを欧文脈と呼ぶ（木坂1976a；1988）。欧文脈は、明治期以降の西洋語との言語接触および、西洋語文献の移入に際しての欧文和訳と密接に関わるものである。但、ヤコブソン（1973：57f.）は、翻訳には、(1)言語内の翻訳（＝言い換え）・(2)言語間の翻訳（＝本式の翻訳）・(3)記号間の翻訳（＝移し換え）があると論じている。この分類では、文章体に係る欧文脈や文字体系に係る翻字は（もっぱら記号形式に関与するため）翻訳の範疇とはいいづらい。しかし、上記の分類にコード間の翻訳という第四の次元を加えれば、欧文脈や翻字も一種の翻訳であるといえることになり、欧文脈は文章体の水準での翻訳の問題と見ることができ（拙論1999a：105f.）。いいかえれば、西洋語に特有の表現形式を日本語の表現形式に翻訳したものが欧文脈であり、それが翻訳であることは翻訳を通じて当該表現形式の文法性が維持されることによって知られることになる。例えば、無生物主語による表現を欧文脈と解釈する（木坂1992）場合、その無生物主語は敢えて表現されているのではなく、表現しなければならないものとして表現されていると考えられる。いったい、「諸言語が本質的に相違するのは、それらが送達しなければならぬことにあるのであって、それらが伝達し得ることにあるのではない」[下線原文]（ヤコブソン1973：62）のである。

²大衆小説、漫画などの表現が現代口語体に影響を与えているように思われても、それらは「会話文」の位置を出るものでないとも言える。例えば「～だわ」「～のよ」「～だぜ」「～さ」など口頭語で殆ど見られない形式が用いられている。

3.1. 第二の言文一致と第二の欧文脈

翻訳というときに、本論の文脈では、機械翻訳について考えることが役に立つ。機械翻訳の構想は、コンピュータの誕生に先だつ1930年代にロシア人研究者によって提唱されたものだが（ドラヴネ1964）、日本で機械翻訳システムが商品発売されたのは1980年代、パッケージの低価格化で一般ユーザによる利用がはじまったのは1990年代以降である。また、近年は検索サイトでウェブページやテキストのオンライン翻訳サービスが無償で提供されており、機械翻訳の利用者はさらに増大しているものと思われる。オンライン翻訳は、ともに軍事技術として開発が推進された機械翻訳とインターネット³とが結合した技術であり、コミュニケーションにおいて 敵を知り・味方を知る ための象徴的な技術と位置づけられる。もちろん、現状では、機械翻訳は完全な翻訳結果を出力しないし、将来において可能であるという技術的見通しもない。そのため、例えば、企業向けに定額制の機械翻訳サービスを提供しているAMIKAI (www.amikai.com/) は、翻訳には「公表するための翻訳」と「理解するための翻訳」とがあり、自動機械翻訳⁴は理解のための翻訳に非常に適した技術であるとセールスしている。実際に、英語と英語と同系統の言語間の（自動）機械翻訳の精度はすでにかなり高く⁵、英語から日本語への（自動）機械翻訳も一般的な内容理解を目的としたものであれば十分に実用的であるといえる⁶。現在のウェブページ数は、少なくとも60億ページ以上と思われ⁷、その約2/3が英語ページだとされる⁸が、機械翻訳の普及は（日本語のようなローカル言語の専用者にも）可視的なウェブページ数を飛躍的に増大させることになる。また、このことは、自らのサイトに他言語を直接・間接に引用する可能性も同時に高めるものである。つまり、ハイパーリンクによってe-textは本質的に多言語的だが、機械翻訳などの支援ツールはe-textを実際に多言語的なものにするに役立つといえる。このように、現在、e-textが実際に多言語的であることは、「第二の欧文脈」と呼ぶことができる。欧文脈は、一般に、明治期の言文一致以降の日本語の表現領域を拡大したものと評価されているが、「第二の欧文脈」も日本語表現のソースを拡張するものであるといえるだろう。

一般に、（自動）機械翻訳では（同じソフトウェア環境で行なえば）同じ入力文は必ず同じ出力文に訳されることになるため、より高い精度をえるためにはプレエディット（前修正）やポストエディット（後修正）が必要になる（長尾1986：135ff.）。プレエディットは、ひとつの言語（入力言語）に対する知識があれば可能である。具体的には、日本語を英語に翻訳しようとする場合、日本語を直訳体のような単純な構文で書くことでより精度の高い英文の出力が期待できる。他方、ポ

³機械翻訳の研究史に関しては、長尾（1986）横井（1991）を参照。インターネットの歴史については浜野（1997）を参照。

⁴「機械翻訳」は、“machine-translation”の訳語として定着している術語だが、機械翻訳システムには対話型のインタフェースを持つものもあるため特に「自動」の語を補った。

⁵カナダで実用される英語仏語間の翻訳システム（Meteo）は、毎日約8万語分の記事の翻訳に利用され95-7%の精度を持つ（Oudet1997）。

⁶逆に、現状では日本語から他言語への翻訳精度は極めて低い。この問題を克服するために専門家のノウハウを利用する支援システム（龍・福士2001）などが提案されている。

⁷グーグル（www.google.com/）にインデックスされたウェブページ数からの推定。

⁸情報通信白書（平成14年度）による。

ストエディットは、複数の言語（入力言語と出力言語）に対する十分な語学力が必要になるため、誰にでも行ないうるものではない。また、ポストエディットでは、語や語法の訂正だけでなく、表現形式の修正が必要になる場合もある。すでに初期の研究から「翻訳機はそれ自体に特定の文体がないであろう。それに文体があるとすれば、ある程度単純化されたものでであろう（ドラヴネ 1964：132）」と予測されているように、機械翻訳の出力はどの言語間でも多かれ少なかれ翻訳調（直訳体）になると考えられるからである。

ひとつの内容（基底の意味）が複数の形式（テキストの表層）と結びつきうることを文体の問題と考える立場（選択の文体論）がある。これは、言語内でのテキストの表層の変換が文体を変更すると考えるものといえ、その限り、言語間で文体の問題は発生しないことになる。（言語間の）翻訳による表層の異なりは、言語を反映するもので、文体を反映するものではない。しかし、ポストエディットで表現形式の修正（テキストの表層の変換）が行なわれるとき、それは（言語間の）翻訳の精度を高めるためになされるものである。また、翻訳の現場では、翻訳を支援するツールとして翻訳メモリ（TM）が広く利用されている（ルイス2001：173ff.）。また、佐藤（1997：114ff.）は、（言語間の）翻訳を（言語内の）言い換えの一種と見做すことで、「言い換えによる翻訳」を提案している。これは、機械翻訳において一般的な

人間による前修正 入力文 自動機械翻訳 出力文 人間による後修正 ...
というプロセスを、

入力文 機械による言い換え（翻訳） 機械による言い換え 出力文 ...
というプロセスで処理することでより自然な出力文を得ようとするものであり、言い換える具体的な方法として、訳文データベースを参照した連続的な置換によってテキストの表層を操作する「実例型翻訳」が示されている。

ここで、長尾（1989）の「類似性による翻訳」の概念を発展させた「実例型翻訳」は、選択の立場による場合に、文体の問題が言語を超えて生じうることを示しているように思われる。ここで注目すべきは、プロセスが等価変換の原理的不可能性を前提にすることだろう。従来、文体の問題が翻訳を困難にしていると考えられることはしばしばあり⁹、その場合、文体は同じ内容に結びついた複数の形式と考えられている（例えば、Nidaほか1973など）。しかし、翻訳が実際に可能であるという事実は、選択の文体論の理論上の困難を示しているように思われる¹⁰。また、同じことは、どのような立場に立つにせよ、文体論の問題でありうる。文体論が言語形態に立脚するものであるかぎり、文体の具体的な（言語間の）対照が困難であることは周知である¹¹。主要な

⁹実際は、翻訳におけるテキスト型（ジャンル）の問題（エコ&ネルガルド1999：15f.）である場合も多い。俳句を英語に訳すときには、さまざまな表現上の工夫が必要になるが、それは英語に俳句というテキスト型がなく、そのテキスト型を特徴づけているマーカ（音数律）も利用可能でない。

¹⁰「言い換え」が「翻訳」の一種であるかぎり、言い換えは必ずしも可能ではない。ある表現に必ず同値の別の表現がありうるのではないことは明らかだろう。たとえば、地口や押韻の類を含む表現が言い換え可能であるかはともかく、実用的な表現でも強くコード化された「火事だ！」や、一語文である「地震！」のような表現では言い換えはきかないと思われる。逆に、「翻訳」が「言い換え」の一種であるとする、言い換えは常に可能である。あらゆる表現が文体との関わりで論じうるのだとすれば、文体論は後者の立場に与すべきであろう。ここで、選択と文体の全面性との両立性（Wales2001：371f.）という点が問題になる。

3.1. 第二の言文一致と第二の欧文脈

問題は、具体的な作業を可能にするような理論的支えが与えられていないことにある。

要約：e-text は、話しことばと書きことばとの二項的秩序の境界を曖昧にし、両者の同型性を可視化すると考えられる。これは、「第二の言文一致」と呼びうるもので、現在の電子コミュニケーションに一般的に見られる表現は、現代口語体と呼ぶべきものである。また、e-text が、ハイパーリンクによって本質的に多言語性を内包し、機械翻訳などの支援ツールによって実際に他言語的であることは「第二の欧文脈」と呼ぶことができる。

¹¹日本文体論学会（旧日本文体論協会）は、各国語（主に仏語・英語）の文体論研究者の親睦団体として発足したものであり、いまなお対照文体論という研究領域は存在しない。

3.2. 現代口語体における言と文

3.2.0. はじめに

エレクトロニック

電子コミュニケーションは、70年代の米国を嚆矢に、本邦では80年代半に商用パソコン通信が営業を開始する。電子コミュニケーションで独特の言葉が用いられることは、以前から指摘されているが（川上ほか1993）、近年その遍在化は著しい。WWWや携帯端末の普及に伴い、それは特殊と見做される表現から一般的なものになっている。

電子化は、種々の「境界」を曖昧にし、その曖昧さは統合と分散とをもたらす。自明の区分が疑われる一方、相反する視点の循環による併存を可能にする¹。タークル（1998：232ff.）は、「違った説を、また時には正反対の説を循環する」並列定義と循環思考とがインターネット時代の思考であると述べている。メディアの電子化は時に過大評価を受けつつも、社会に一定の影響を与えている。それは、言語表現や言語表現を捉える概念に影響する。本節では「口語体」をとりあげ、電子化が与える影響を現象と概念の両面から論じたい。

メディアによる言語の別である口頭語と、語体である口語とは区別される。口頭語と文章語との区別を前提に、それぞれに口語・文語が定義される（魚返1963：161f.）。しかし、電子メディアで個々の媒体の境界は不分明で分割しがたい。また、音声入力やテキスト（スクリーン）リーダーのように音声を読み - 文字を聞くという経験も異質なものでない。そのとき、口語体はどのように考えられるべきだろうか。本節では「言文一致」を手掛かりに「現代口語体」を説明しようとする。

3.2.1. 現代口語体の表現特徴

現代口語体を、その実証であり、通史上言文一致の最も推し進められた姿であると考え、その表現特性を、言文一致を手掛かりに考察することには一定の意味があるだろう。実際には、両者には比較しうる点も多い。

「言文一致運動」に交通・流通・出版の基盤整備などの技術的な裏づけがあったように、現代口語体にはコンピュータやウェブという技術的な背景がある。また、言文一致運動には、結果として国家＝国語の統一政策と並行した一側面があるが、現代口語体はウェブでのコミュニティの構成と関わっているように思える。それは、ローカルな集合に地縁・血縁に限らない多様性を与えている（行為が行為者を規定するがぎり、地縁・血縁以外の絆は選択できる）。科学的合理主義を基底にした近代写実主義にあって、実物をリアルに写して見せるスタイルが必要とされたことから、「言文一致体」は文芸領域で先行して探求・完成された。現代口語体は、事実上の対面空間で、デジタル文字列をリアルなものとしてスクリーンに映して見せる。現代口語体の電子環境での優位性は言文一致体の文学での先行性と比較できると思われる。われわれは、出来合いのストーリーを求めがちだが（例：テレビドラマやベストセラー本）、文学では、表現の曖昧さに直面しつつ解決を求

¹現代人は、仕事の時に電源が切れるという理由で電子犬を「ペット」にしなが、あるときにそれが電機的不調に陥ると「私のアイボが病気になってしまった」「このままでは死んでしまう」などと狼狽する。

3.2. 現代口語体における言と文

められ、それを楽しんでいる。また、ウェブでは、茫漠な空間を探索し、情報を抽出し、関係の繋ぎあわせを楽しむ。SteveJobsは、テレビを用いたウェブ端末がほとんど例外なく失敗するのは、われわれがテレビの前では受け身であることに慣らされているからだと言っている（MacExpoでの講演による）。文学とウェブとは、受け手の主体的参与を要求するという相似た性質を持っている。また、「近代口語体」によって、大衆に思想の表明・意見交換が可能にされたが、ウェブで行動することはすなわち情報の発信者となることである。ここで「近代口語体」は、技術・口頭語と文章語との区別の自明性に限定されて現れた言と文との同型性であるといえ、ヨリその徹底された現代口語体を考えるときに「近代口語体」の性格を基準とすることは一つの方法である。

山本（1965：5ff.）は、日本近代文体の重要な事象（要件）として、(1)平明性、(2)細密性、(3)俗語の尊重、(4)句読法の確立、(5)客観的描写性、(6)近代的写実のため、個性的を挙げている。本論は、各号に相応して、それぞれの特質をよりよく現わす現代的要因を示しうると考え、そこから現代口語体の表現特徴を把握しようとする。また、上記7号以外の点にも考慮し、あわせて、その表現特徴を捉える概念・視座について考察する。

(1)「平明性」と 速度

電子コミュニケーションでは、速度と距離という関係的概念が重要で、時間や空間という名目上の実質的概念は特に有効でない。速度あるコミュニケーションでは、表現は平易であることを目指される。詳しくは3.2.2を参照。

(2)「細密性」・(5)「客観的描写性」と マルチメディア化 ・ データの提示

言語は、一面、思考を表出し伝達するものであると理解されることがあり、「細密性」は、（日本人の）思考が複雑で精細になるに応じて求められた要素であるといわれている（山本1965）。音・画像・触感・匂いなどを伴うテキストのデジタルな表現は「マルチメディア」と呼ばれる。全情報のデジタル化が基本で、テキストはディスプレイモニタに表示される。このとき、可変スクリーンに実現する言語の表現力は、それが連携する他の表現手段の精度にも依存することになる。また、ボードリヤール（1988：58）は、コンピュータのディスプレイは頭脳の働きそのものであり、われわれは、ディスプレイを前にしたとき自らの思考の展開に立ち会いたいという欲求を眺めるのだと述べている。いまや様々な情報が透過するスクリーンは「『幕』というよりもはや『膜』」（東1999：161）である。思考や認識を言語化するに細密性が必要だったのならば、それらを見えるようにするスクリーンの性質にも注意が払われなければならない。その性能でさえ、表現と無関係でない（3.2.2）。

また、細かなデータの提示も重要である。一覧と比較の容易さから、ウェブで広告の表現がイメージより価格・性能等の詳細な数値で争わざるを得なくなっているのも一例であろう。また、価格比較サイトと呼ばれるサイト（代表的なサイトは「¥価格.com」<http://www.kakaku.com/>である）では、さまざまな商品の実際の値段を一覧して比較できるようになっている。描写とデータの提示

3.2. 現代口語体における言と文

との関係は、事実と客観性への期待という点で、また、言語表現を補う点でも、絵画に対する写真に似ている。しかし、写真の選定が、時に報道の評価を定めるように、どのデータのどの部分を提示するかは発信者の姿勢を知らしめる表現行為となる。つまり、描写の客観性を延長して補うべくデータを提示することは、計算された偽善²を含みえ、それはそもそも描写が対象の一部を切り取るものであることによって許されるのである。

(3) 「俗語の尊重」と 俗語の積極的利用

「言文一致」において、俗語は（雅語に対する）日常の口頭語を意味し、ここでは低いレジスターの語を指すが、いずれの場合も、一段低く見做されがちな要素を蔑まずにとりいれている。詳細は [3.2.3](#) を参照。

12 (4) 「句読法の確立」と 記号や文字の新たな用法

句読法の確立は、文章の平明性の獲得に貢献したとされるが、e-text では句読点の用法に変化が生じると予測される（[3.3](#)）。

また、顔文字やA Aの使用も指摘できる（前者は山口2000に詳しい調査がある）。また、しばしば見られる「スキャナ」「クリム」のような表記は、横書きから生じた「変体少女文字」（山根1986）が電子環境に書体の一として定着しているように、（デジタル）フォントが文字というよりもデザインであることを示すものだろう。文字列を文字と見せる「糸吉 糸昏」「矢口 言音 戈」の如き文字分解、「あや__い」（アヤシイの小書き）など文字の代用（ここでは「し」を「イオタ」で代用）も同様である（[3.3.8](#)）。ここからも知られるように、われわれがフォントに求めるのは、美しさや面白さであって正しさでない。美しさや面白さがそうであるようには、正しさは価値評価の結果でないからである。

24 (6) 「近代的写実のため」と 事実上の現実

近代文学が提示した写実は、日常性の機微や人生の美を描くべく実物をリアルに写して見せることであった。一方、スクリーンは事実上のリアルを映して見せることがある。VR（ヴァーチャルリアル）やMR（ミックストリアル）を含むものは、少なくとも経済原理に服し、なまなましさを備えている。これらのいずれも、常にわれわれの日常的な現実において捉えられるべきもので、その外部に独立し存在するものでない。従って、それらが如何に現実（或は混同されるほど）似ているかではなく、如何に現実であるかが問われ、リアリティーの強度が方法上の課題にされることになる。ふるく直接民主制下でも、言論がどの程度現実であるかは重要であり、弁論術（レトリック）もリアリティーの強度を問題にしている（トドロフ1987参照）。一方、現代口語体では、リアリティーの強度は扇動的/文学的でないおしゃべりにも遍在するものである。

²ここでは、客観性や（受け手の）わかりやすさを口実に、データを自身の都合の良いように取捨選択・編集して提示することを言い、実証はいずれこの種の問題を孕む。もとの語句はSir Peter Brian Medawarに借りたもの。

(7) 「個性的」であることと 個性的スタイル

現代口語体で、スタイルは形式・内容、重要性・無用性、個性的・画一的という並列定義と視点循環とによって理解される。詳細は3.2.3を参照。

上記以外の特徴として、ここではハイパテキスト化、待遇の表出をとりあげておきたい。ハイパテキストはe-textの一般的な特徴だが、言文一致に類似現象が指摘できないわけではない。開化期の言文一致論説文に見られる同系文末形式の凝集傾向と文章レベルでの複数文末形式の混用（木坂1976：182f.）など、過渡期的に表現が断片化したことである。言文一致の記述（研究）で象徴的に扱われた文末形式は、一般に、口頭語の冗長さを廃して待遇表出を最低限の状態を実現すべく工夫された結果である。言文一致文に対するかかる修辭的な配慮は、それが特定の場面性を持たず、遮り/異義を唱え/敢然と自説を述べ始めることで話線に介入する受け手の実在を有しないこと、つまり「対話的」でないことを示している（したがって、文章の線的進行に従って書き手の意図を精確に再現する読みというモデルが想定されることになる）。断片化はその途次に起きたことである。一方、ハイパテキストは当然「非線的な表現」と解すべきだが、黎明期の礼賛の中で、ハイパテキストが表現を解体・構築する手段として奨励され切り貼りが表現過程の全てという矮小化された帰結が導かれがちだったことは周知であろう。

ところで、コミュニケーションには二つの相補的な手段、人間の移動を伴うものと情報のみの転移とがあり、その究極は、ワープとテレパシーの夢想となる（斎藤1999：209）。現実と人間とを忘れたコミュニケーション論は、あるいはオカルトになり、無効なのである（0.2）。上記の例では、現実の受け手の実在性に対する意識の不足が、一方で表現の断裁こそが本質であるかのごとき誤解、一方で言文一致初期の文章構造の断片化を生じているのである（但、いずれも時間の経過によって解消されたといえる）。

断片の連結は 大きな断片 に過ぎず、しかも、受容された表現は 統一体 であるから、重要なのは受け手の主体的参与という対話性だろう。しかし、ハードの模倣により口頭語の対話性を取り込む時には、再び、多様な待遇表出が入り込む。一般に、日本語の待遇表出は文末に担われる割合が高いと理解されている。現代口語体で、文末の形式は多様であり、言い差す表現・体言止めも多い。文を書き・語で話す（バルト1977：93f.）といわれるように、口頭語で「文」の境界は複雑かつ不分明である。近代口語体の二項的文末形式（常体・敬体）が解体されていることはソフトの模倣からハードの模倣という口語体の概念の変移を示す証の一となる。したがって、現代口語体では、待遇性も口頭語と同等に実現されてゆくことになる³。

3.2.2. 言語における速度について

言語は 時間と空間 との関係から理解される傾向がある。言語が時間的に産出される差異 = 記

³たとえば、「見てる人の数によって『言い方』を変えりゃいいんだよ...一万人が見る文章ならラジオで放送してるかんじ。で、五人くらいしか見てないなら、ファミレスとかファーストフード店でしゃべってるようなかんじをそのまま書きゃいいわけだし」（ウェブより）。

号であることを線や行のイメージで語り、あるいは、文字言語を、本質的に時間的な言語の空間的な固定であると考えたこともあった。しかし、電子コミュニケーションでは、時間と空間でなく、速度と距離とが基準になる。

通信・交通の技術に対してしばしばいわれるごとく、速度は時間と空間とを消失させる。これは、二つのメタファによって理解される。時間的關係が空間的關係によって理解されることは、人間の認知の示すところだが、速度は時間を瞬間的なものに変え、持続的時間の消失は空間のメタファによって、空間の消失とも見做されることになる。また、われわれは「飛行機で二時間」離れていると意識する方が、「直線で1000キロ」離れていると感じるよりもむしろ普通で、空間的關係を時間的關係によって理解することがある。これは「距離は(持続的)時間である」というもので、距離は空間的隔たりとしてより、持続的時間で測られる二点間の接続の容易さになっている。要するに、速度は時間空間によって時間と空間とを消失させ、空間は時間によって距離を空間的關係から接続の容易さに変える。更に、その反転した関係は、瞬間的時間による「速度」と持続的時間による「距離」とを関係づけ、異なる種類の時間を併存させる。これは速度がコミュニケーション様式を変えることと密接に繋がっている。言語表現について考えると、音声はもとより瞬間的且双方向的な伝達を可能にするもので、発信された文字は痕跡として時間の遅れを可能にし、二者間の「距離」を空間的關係の意から接続可能性へと変える。しかし、そこで音声と文字とは異なる「言語」であって、両者の統合は高速な通信網に俟つことになる。電子コミュニケーションが、従来のメディア環境と区別されるのは、話す・聞くことと書く・読むこととの境界を不分明にすることで、同時的で瞬間的な時間概念と継続的で持続的な時間概念とを共存させたことによる。

伝達速度が、コミュニケーション様式を変えても、情報転送の速度自体は流通の早さというだけである。関与するのは同じ人間であり、速度が人間を変えるわけではない。しかし、伝達速度は、表現を速度において捉えるよう求める。速度が情報に対する受け手の期待を変えるためである。伝達速度が増せば増すほどに、受け手は更なる速度感と臨場感を求め、有意な情報を送らんとする送り手はこの欲求を知らずに済ますことはできず、そのための手法を模索し、追及するのである。

速度が感じられるものはリアルで臨場感があり(例:生中継と録画中継との違い)、いまや口語体が用いられる主な理由は、平易であるよりも速く読めるからである⁴。近代口語体が平易であることを求めたように、現代口語体は速度あることを求める。われわれは、話すより早く書くことができ(例:定型句・テンプレートの利用やカット=ペーストなど⁵)、話す以上の速度で書きコトバ

⁴たとえば、「口語調の方が「わかりやすい」というわけではない。口語調では、リズムが強調され、普段の言葉づかいが多用されるため、「読みやすい」「速く読める」のである」(沖縄タイムス99.10.20「詩時評」欄)。

⁵コンピュータによって表現が均質=貧困になることはないだろう。たしかに、われわれは速度の中では組み合わせによって表現し、コンピュータがそれを援助することになる。しかし、発想が組み合わせを生むのではなく、組み合わせこそが発想だと考えると、読み手の参加を積極的に要求するe-text(読み手が与えられた単位を受動的に・順序通りに繋ぐのではなく、対象を分割・結合する規則的な方法が読み手に与えられている0.3.3)は、むしろさまざまな発想にあふれているといえるだろう。

を交換できる（例：電子メール・オンライン転送）。そこでは速度あること（^{リアルタイム}実時間の共有）がリアリティ・対面的臨場感を生む。ここに、紙からスクリーンへの変化も加わり、「読みやすさ」は言語の形式的・内容的平明性より視覚的な見やすさを意味しているということもできる。

12 テクストの電子化は、(1)生成過程（電子出版・流通）(2)閲覧手段（マルチメディア・ハイパーテキスト）(3)交話機能（対話的文書・機械可読文書）という3段階に区別できる（小町1998）が、速度には、(2)閲覧手段の電子化においてのスクリーンの電光性が関与する。電光メディアでは眼の負担が大きく、速く読める必要がある。例えば、不要に冗長な「軽すぎる」表現は、視覚的コストが不当に高いため敬遠される。しばしばe-mail作法が行幅を注意するのも同様である。口頭語の使用以外に、読む速度に直接訴える手段としてあげられるものとしては、頻繁な改行（htmlでの
タグの多用）による行の短い折返しや行末での表記符号の多用がある（例3.2-1を参照）。また、小型で低解像度のスクリーン（例：携帯電話の液晶）では、これらの手法はより必然的であり、ここでは表現に更なる速度が生じ、同時に文章語（文字）が持っていた分析性や反省的思考は減じてゆく。ときには、速度は思考の速度を上回るかもしれない。ブルデュー（2000：45ff.）は、（TVでは）視聴率計算が強いる情報の速度が、思考を欠いた＝紋切り型の思考を繰り返すコミュニケーションを生じるといふ。同様にヴィリリオ（1998：101）は、「リアル・タイムの横暴は、古典的な専制政治とあまりかけ離れていません。なぜなら、そこには、反射的な行動を誘って市民の反省をなくし、しよとしようとする傾向があるからです」と警告している。われわれは、しばしばスローガンが平易であることによって煽られるが（例えば、「極右政治家」たちの発言はしばしば驚くほど平易である）、速度あるメッセージにも翻弄されるということだろう。そうならないために、情報の受け手は常に送り手と闘うべきなのである。

例3.2-1)

あは。。（^^；
和之のレスだぁ～＼(^ ^@)ノ
24 そうなの、そうなの
日記が寂しかったのお～～
って、和之忙しいもんね
しゃぁ～ないっす(^ ^)
お引越し準備順調そうでなにより
けっこういろいろと大変でしょぉ～？
あいも大変だったんだ、
また、一人暮ししたいなぁ～（遠い目）

おや？仙台に来るの？
いつでも待ってるよ～～
俺もたまに京都に行くことあると思うから
36 その時は連絡するよ～～
しかし、8円しかないのはきついねえ・・・。
ガムも買えないじゃん（^^；）

3.2.3. 俗語・隠語と個性的スタイル

スタイルを「内容・実体」に対する「形式・衣裳」として捉えるイメージは古いものだが（バルト1979：106f.）、現代口語体ではなお有効である。この二分法は「内容に適う表現形式」だけでなく、内容を伝えるのであれば形式は自由に装飾できるという理解を生みもする。現代口語体は、スタイルを形式として捉え、視点の循環によって、形式の重要性（形式は内容と一致する）と無用性（表現形式は内容に干渉しない）とを共存させている。視点の循環は、弱い定義⁶によるものでもあり、「内容と形式」とは単純な二元的構造と見られているのでない。但、本質的に内容のない形式の多層的構造（バルト1979：108）が想定されるのでなく、対立の曖昧さと二者間の無限の往復が確認される。スタイルを形式の側に置くことは、形式と内容との境界の曖昧さによって、それが時に形骸であり、時に内容に入り込むという理解を導く。このことは、現代口語体に、「私話的スタイル」と「人格の設定」とをもたらす。

町（1999：267）は、俗語の使用は（広い意味での）グループ形成に関係し「人はだれでもグループに属し、連帯感を示すために、俗語とされる可能性のある新語、職業語をつねに作り出している」という。電子コミュニケーションで、書き手と（想定される）読み手とが両者にとって十分に明らかであるとき、すなわち匿名でないかあるいは完全な匿名性が前提されるときには、表現形式の放縦な装飾が私話的スタイルを生む。ここでは表現形式は内容に干渉しないという「スタイルの無用性」がその根拠となる。スタイルが規範に囚われていないという印象が現実の書き手の印象と直接に比較され、日常的な対面性を作りだす。そこで用いられるのは、例えば、方言・幼児語・語呂合わせ・駄洒落・繰り返される特殊な語尾などの俗語的要素を多く含むスタイルである（例3.2-2を参照）。

例3.2-2)

- 24 お好み焼き、いいっちゃ。
おれも、食べてっちゃ。
ほやけど、金ねえで行かれんっちゃ
- あー、洗濯物がたまっちゃー。
洗うのたいぎいわー。
- おはよ～ろっぱ
今日も氏んでまふ・・・(-_-;))
でも今日がんばれば明日は休みでしゅ。
- 36 こんにちわ おらわ やまねこたかおと いいまつ
きぶんしだいで かんけいしゃのぺえじへ てきとおに
転送しまつてつ

⁶厳格な二分法的態度による「強い定義」は、パラドクスを生じることがある（例：「私の言うことはすべて嘘だ（私はいつも嘘をついている）」）が、曖昧で大雑把な態度による「弱い定義」ではそうでない（例：「私はうそつきだ」は、真または偽）。

3.2. 現代口語体における言と文

そうでしか
がんばってくださいにや
わかってもらっちゃだめですよ
これはきみつじこうですにや

- * ビデオクリップをそのまま置いとける場所 (サーバー) がほとんどない。
- * あったとしてもまともに使えないバヤイが多々ある。
- * 結局分割することになる。
- * だとしたら、画質比で RealMedia よりも綺麗に仕上げられる MPEG1 のほうがヨイ。
- * 加えて、製作環境 / 再生環境ともに MPEG1 のほうがヨイ。

12 また、「俗語とされる可能性のある新語」も利用される。それらの多くは宛字・省略・転倒・音変換などの方法で作られるが、注意を要する手段に「ミスならぬ『変換ミス』(川上他1993: 35)」がある。誤変換は偶然的なら誤字だが、誤字と宛て字とはもとより連続的であり、もとは誤字であったとしても読み手の解釈は両者の間を揺れ動き、ときには新語を生ずることになる。その背景には、入力方式が仮名漢字変換であること、IMが近代口語体(文章語)を基礎にしていることなどの理由もあって、現代口語体においては俗語・隠語の有力な生産方法となっている。例えば、「ははは。藁田よ」

「笑った [WARATTA]」のミスタイプ [WARATA] から隠語として用いられるもの
「その話題は外出です」

「既出(きしゅつ)」の誤読(がいしゅつ)と誤変換から⁷隠語として用いられるもの
「久しぶり。中華、久しぶりすぎてネタがないっす」

「ちゅうか」(< 「っていうか」) の誤変換から隠語として用いられるもの

24 「データうpしてよ」

(英数入力をすべき) up[load]のカナ入力から隠語として用いられるもの
のようなものである。このような隠語には意識的につくられることも多い。「氏ね」(< 死ね) 「基地外」(< 気狂い) などは、BBSでの使用禁止語の代替表記として、また「部落ら」(> ブラクラ) などは新造の略語(> ブラウザクラッシャ = ⁸) がうまく変換できない場合に、変換ミスを宛字のように用いたものである。

他方、電子コミュニケーションにおいて、一定の匿名性がある場合には、スタイルによって人格が設定される。これは、言語表現が潜在的に一人称であることと関係している。いかなる言語理論も、われわれが表現の背後に統一的な個人を想定することを(禁じることはできても)やめさせることはできない。電子コミュニケーションには、グローバルな連携のみならず、匿名あるいは均質なメンバーによるコミュニティが多数あり、特定の型の表現が行なわれる。多くのコミュニティでは「自治」やローカル・ルールがいわれ、暗黙の了解・流儀に反する言動が(特に新規参加者から)
36 なされた場合、他のメンバーの反応は概ね寛容でない。結果、技術用語・略語やジャーゴンが多用

⁷ガイシュツと発声しないと「既出」が認識されない音声認識ソフトがあったためともいう。

⁸閲覧者のコンピュータ(アプリケーションあるいはシステム)を一時的に操作不能にする意図の悪意あるプログラムの類。

3.2. 現代口語体における言と文

され、表現は似通ってくるように感じられる。「様式としての文章 = 文体とは、共通性、同質性を基礎とした部分社会の内部でこそ在り得る（月村1990：14）」から、これは、集団に行動・思考の特定の様式があり、それに見合う表現のスタイルのあることが認められた結果であり、形式が内容に一致してゆくという方向である（行動が行為者を規定し、その逆ではなく、ここでは形式が内容を作るとはいえない）。そして、その中で、人格の設定という個性の演出が生じてくる。仮構された書き手の、あるいは現実の書き手の誇張された特定の属性を受け手に印象づけ、時に信じさせることが目指される。ネットワーク化された電子メディアの上では、一定の匿名性を前提としたコミュニティが生じる。このようなコミュニティにおける他者は、都市空間の他者に対する Milgram(1977)の“familiar stranger”になぞらえて「インティメイト・ストレンジャー（岡田・松田編2002：62f.）」などと呼ばれる。この個人的に親密な他者との関係は、人格の設定にも支えられているといえる。ここでスタイルは、伝達内容に対して本来的に無用のものであるという

12 確信とともに伝達に重用されている。（同一人物の）スタイルを違えた言論は、別の人格によってなされた同質・同内容の伝達でなければならないからである。たとえば、「呼んだか？なんか用か？」と「お呼びですか？なにかご用でしょうか？」とは、対面的コミュニケーションでは丁寧さの違いと見なされるだろう。しかし、この発話の対は、電子空間では等価な内容と強さを持つものとして見られる。それらが同じ強さでありうるようにそれぞれに人格が想定されるのである（例えば、前者は不作法な若い男性の発話、後者は職業的に腰の低い中年男性の発話など）。従来、対面的コミュニケーションで変動するのは発話の内容 + 発話の強さであり、発話者や人格は不変であった。一方、電子空間で変動するのは発話者 + 発話者の人格であり、発話の内容 + 発話の強さは不変なのである。これは、行動（アクト）が行動主体（アクター）を規定するという

24 ことであり、あるいは、電子空間での行動がすなわち情報の発信者となるということである。しばしば日本人は場面に合わせてスタイルを使い分け、欧米人はスタイルの選択で場面をコントロールすると言われるが、現代口語体では、スタイルで人格を設定することになる。

24 従来、人格の設定が問題となるのは、作者（本を著す者）に関してであり（例えば、土左日記の紀貫之、シャーロット・ブロンテ Charlotte Brontë、ティプトリー・ジュニア James Tiptree Jr. など）、あるいは人を騙そうとする悪漢についてだった。事実、電子コミュニケーションでは、中年の男が少女を称すこともでき、スタイルによる人格の設定は、表現が匿名・偽名ハンドルであるとき、ヨリ一般的に行なわれていると見做される。但、大江（1998：48-65）は、狭山事件での大野晋の文体分析が、犯人が装おうと意図した人格を通じて犯人の人格（犯人が自覚し秘匿しようとした人格）を析出した的確性について述べている。つまり、重要なのは騙すことでなく、寧ろ演じること自体であろう。要請されるのは、現実と非現実との混同でなく併存・循環だからである。

本項で見た性質は、新思想を盛る「文体」建設に努めた言文一致と違い、いずれもその無用性を重要なものと見てスタイルの操作に没頭するものであり、そこには視点の循環がある。但、言文一致がそうであったように、現代口語体にもスタイルとしての一般性がある。言文一致には、言語変種と対立する「国語」概念の実現を目指した一面がある。月村（1990）は、文学者が「様式とし

36 ての文章 = 文体」という認識を脱して「『独自の風』 = 文体」という認識に至るには、「口語体がひとつの様式から国語という普遍性にまで転移する」状況があったと述べている。スタイルの均質

性が階級・地域性を覆い隠す統一性の中で、言語が思想の表現だという自覚と共に「個性」が現れたのである。制約なき均質性の上で、個の確立とありのままの表出が求められ、また「自らの思想」を表明する表現主体は個性的であらねばならず、内容に適う個性的スタイルが模索された。一方、現代口語体は、現行の口頭語と同等・互換的であり、既に全国共通語化された口頭語から均質性・統一性がもたらされる。これが一方で私話性に個別化され、一方で、コミュニティへの特定の変形を伴った分散を介して個別化される。異質なものを共通性を抽出するのではなく、共通性から異質性をデザインするのがデジタル化の特徴だと考えられる（家辺1998：13）。言文一致（近代口語体）では、ローカルな均質性＞統一性＞個人的スタイルという歴史的な道筋があったが、現代口語体では、それらが循環的に共存する。

3.2.4. 電子メディアと言語の変化

12

電子メディアでは、個々の媒体の境界は不分明であり、口頭語と文章語も例外でない。口語体は口頭語のハードの模倣と捉えられ、その具体的なありようを「現代口語体」と呼ぶと、それは口頭語と文章語の統合環境にあるため、言文一致と比定しうる。また、近代口語体は、限定された現代口語体として再解釈が可能になるだろう。

現代口語体の特徴は、文末・待遇表出の多様性、数値・データの詳述、読む速度に直接訴える手法、俗語・隠語の多用、記号使用の多彩さ、スタイルへの緩い定義及びその重視と軽視との併存、スタイルにおける画一性と個別性との共存などが挙げられる。これらは、それ以前の類例のあるなしにかかわらず、現代口語体にあっては、並列定義と視点循環という現代的思考法、口頭語との直接の互換性、高速な通信技術、スクリーンの性質、電子コミュニティの性格など、従来の研究では考慮されにくかった要因から生じたものである。

本節では「口語体」をとりあげたが、電子コミュニケーションの拡散にしたがい、言語表現の研究にわたって現実的・技術的要因に応じた概念の設定や変更が求められることになると考えられる。

ところで、ICTは言語を変えるのであろうか。しかし、言語がそれ自体として変化するものであるなら、両者に因果的關係はないことになる。仮に言語が絶えず変化するものだとしても、昨日も今日もわたしが同じ日本語を話しているのは事実である。一回性を持つのはわたしの行動であり、言語は単に存在するに過ぎないといえる。言語の変化を問題にすると、劇的に変化するのは、言語と関わりあうわれわれの振る舞いであろう。われわれは、あるときにある語り方をやめてまったく別様に振る舞いはじめるのである。ICTはそのような契機の一つであると思われる。電子コミュニケーションにおいては、言語（のあり方）が変化するというよりも、むしろ変化するのは言語や言語（の漸進的な）変化を捉える視座なのである。

要約：現代口語体の表現にはさまざまな特徴が見られる。それらの特徴は、言語の枠組みで紙のテキストを対象に研究したかぎりでは捉えられにくいものである。電子メディアと電子コミュニケーションの普遍化は、言語をとらえる視点に変更を要請する。

36

3.3. 句読点と表記符号の用法について

3.3.0. はじめに

本節では、句読点をはじめとする表記符号について論じる。

句読点は、「言文一致」以来、ことばに一定のリズムを与えるものとして、話しことばと書きことばとの接点にあるものとも思われる。1項から6項では、デジタル環境が表現に及ぼす影響について、句読点を例として事象的に考察する。具体的には、e-text環境で句読法が変化しうることを示し、そのことを通じて言語表現のスタイルに変化をもたらす可能性がある¹と論じる。また、7項では、表現における表記符号の役割について述べる。

3.3.1. 表現における句読点の問題点

「停止させる、切る、再びつなく、分かち、知らせる、念頭に浮かばせる、説明する、対比する、比較する、遠ざける、組み合わせる。句読法は時として語よりもよく、これらのすべての任務を果たすことができるのである（クラレ2001：77）」といわれる一方、日本語の規範的句読法は未整備のままである。その背景には、千早（1979：178）が指摘しているように、句読点などの表記符号を従属的で地位の低いものと扱い、例えば、正式の手紙に句読点や濁点（符）を打たないというような慣習の存在がある。この慣習は、同時に、句読点による書き手側の論理や解釈の押しつけは不敬だという理解とも関わっているといえる。他方、句読点や区切り符号の不在は、読み手に テクストの改変 を許すことになるようにも思われる。例えば、土田（1962：6）は、先入観にとらわれない古文書解読の要諦を「句読点を打ち変えて考えてみる」と表現している。つまり、句読点を従属的と見る姿勢は、規範的句読法は文章の論理的な理解に貢献すべきであり、読み手の理解を妨げない範囲で行なわれなければならないという観点¹を導きやすいのである。このことを文章作法とは異なる点から見れば、句読法は書き手と読み手との力関係の交差する点である ということになる。また、句読法の「適用は一種の修辞でもある」（文部省国語調査室1946）ともされるように、句読法に見いだせる言語空間の表現性は、時間的性質の線的現れをめぐる議論を必要とするもの²と考える。

かつて、ワードプロセッサが言語表現のスタイルに影響するか否かは盛んに論じられた。小関（1993：265f.）は、ワードプロセッサは筆記用具としての表層的側面からだけでなく「文章の物理的前後関係と執筆者の作業との関係の構造的革新」を通じて表現を変えるという意見を述べている。そして、e-textでは、読み手の作業を含んだ構造的革新が生じたのである。ICTがコミュニケーション行動領域を拡大し、書き手と読み手との力関係を再編成するとき、言語表現にも一定の影響が考えられる。

¹例えば、影山他（1989：41）は、読点の多用は文学では独特のリズムを生み出すことがあるが、実用的な文章では理解を妨げるので避けるべきであると教えている。

3.3.2. スタイルと筆記用具

すでに、ワードプロセッサは、流通の外形を専用機から（パーソナル）コンピュータに移したものの、ワードプロセッサが日本語のスタイルを（大抵よくない方向に）変えると主張されることは少なくない²。ワードプロセッサがスタイルを変えるという主張の背後に、文科系の 本質的な機械嫌い と 機械への恐怖 とがあると反論されもする³が、金ほか（1994）によって、ワープロ作文と手書き作文とでスタイルに変化が生じないことは実験的に確認されている。ワードプロセッサを筆記用具としてみる限り、それがスタイルを変えることはない。つまり、筆記用具の変化は、書記空間の革新と結びつかないとき表現を変えることはないもので、実際に、鉛筆とシャープペンシルとがスタイルを分かつといった類が実証されたことはないのである。

3.3.3. スタイルとコンピュータ

本稿では、筆記用具としてのワードプロセッサでなく、 行動支援機械 としてのコンピュータ 特にネットワーク化されたコンピュータがスタイルを変更する可能性について論じる。手掛りはe-textとタイプライターとの比較に求められる。

しばしば指摘されるように、電子メールは独特の話しことば体やレトリックを生み出している。話しことばと書きことばとの違いをコミュニケーションにおけるスタイルの違いであると考え、新たなコミュニケーション領域を開拓する電子メールが新たなスタイルを創出することは、特に驚くべきことではない。例えば、茂呂（1997：59）は、パソコン通信の言語が書きことばと話しことばのハイブリッドなレジスターであると述べており、また、20世紀初頭に、英語のスタイルはタイプライターの普及によって質的に変化したものとされている。タイプライターによる肉筆原稿の活字化が、英語の句読法を論理的句読法に再編し、結果として文の短文化と構造変化とをもたらしたのである（外山1997、山中1998）。以下の項では、この事例を参考に、電子メディアにおける句読点と句読法との考察を通じメディアとコミュニケーション行動領域の拡張がスタイルを変更する可能性を検討する。

3.3.4. 日本語表現における句読点の役割

句読点などの表記符号は、日本語表記に欠かせない要素であるとともに、一定の表現特徴として指摘できる可能性を持つ。木坂（1976：7）は以下のように指摘する。

われわれは文章という言語空間を、読みの流れによって一つのまとまった意味として理解するととも

²最近の論では、石川（1998）および同じ著者による一連の批判などがある。

³「科学技術というやつは、ほっておくと壁のむこうで暴走し、事故と社会構造の変化という厄介な問題をもたらすだけだ、という不信感が残っている...ワープロを使うと文体が変わるとか、日本語が変わるのでは、という危惧には、この不信感と共通したものがあるように思えてならない（中野1992：208-210）」。

3.3. 句読点と表記符号の用法について

に、その空間に配置されたことばからある力を感じる。この力も言語空間の表現性のあらわれである。しかもこれは、ことばの間隙や非言語形式にも存在する…言語空間の表現性は、いわゆる諸符号の用法にも認めることができる。

このことは、読み手の能動的な働きが支えるe-textでは、さらに強調されなければならない。実際に、ウェブ上の文が句読法のために読みにくいという意見は少なくない⁴し、同一書き手の手紙文と電子メールとを比較した場合、句長がいずれも短くなるという事実も指摘できる（拙論1999：32ff.）。このようなことは、句読法が、読む行為の実現に直接関わる事実であることとともに、e-text環境で句読法に一定の変化が生じている可能性を示している。

文中で読点の置かれる位置に関する表記上の規範は確立していないが、同時に、文章作法は、読点の少ないことをよしとする傾向が強い。文章作法書は、たいてい読点に関して以下のいずれかの立場をとる⁵。

- (1)書くときのリズム、息継ぎとして打つものである
- (2)読むときのリズム、息継ぎとして打つものである
- (3)視覚上の効果、美的な配慮として打つものである
- (4)文章の論理構造を明示するために打つものである

このような分裂の中に、句読点の表現性という問題の様々な要素が含まれているのだろうが、ここでは「日本語では主として息継ぎによって読点をうち、多義を防ぐ手段として構造的句読法を併用するのが通則である（山中1998：214f.）」ことを認めたいと思う。計量文体学は表記符号を最もしばしば利用する研究として挙げられようが、計量研究もこのことを支持している。金ら（1993）、村上（1994）によれば、読点の位置と頻度とは、書き手の殆ど体質的な個性を反映するのである。また、(2)は、「息継ぎ」あるいは「リズム」の問題として(1)に関連しており、これは、読み手への配慮（論理構造の明示）でなく、読みに障害を設けることで息継ぎのタイミングとリズムとを生み出すのである⁶。(1)のように用いられたと見做される句読点も、読みにおいては同様に機能するはずであるから、(1)と(2)とを読点の用法の基本と見做してよいことになる。

読点に、書き手の筆癖が強く現れるのは、一に自由度が高く、一に無意識的な行為によるからであると推測される。文頭・文末位置での禁止など、限られた規則の外では、読点の打ち方は自由であり、その自由度の中で、文中の各地点における読点の生起確率が定められていることになる。例えば、並列関係を示す表記における語句の切れ目ではその生起確率が極めて高く、語の内部では極

⁴「最近気になって仕方がないものがあります…最近増えたMMやあちこちの掲示板を読むと『点』が多すぎて時々読むに堪えないものがあります。MM・掲示板・個人の日記公開サイトなど、誰でも簡単に自分の文章を一般に公開できるようになったのですから、もうちょっと読み手を意識した正しい(?)書き方をしてほしいなと思います。」『日本語って難しい? やさしい?』第48号（電子出版）

⁵筆者の書架にある文章作法書のうち句読点に言及しているもの12冊を分類した。

⁶本多勝一（1984）は、ジャーナリスティックな文章のための句読点の「技術」を求めている。但、報道文スタイルは、伝達効率に奉仕するものでなければならないので、句読法は文の分かりやすさを保証するというより、読みの速度をコントロールするものと見た方がよい。また、リファテール（1978）が読みにおける反応時間を文体分析の足掛りにすることも併せて考えられる。

3.3. 句読点と表記符号の用法について

めて小さい⁷。言い換えれば、文構造が生起確率を定め、確率に対するその現れを一定の水準で決定するところに書き手の個(別)性が見いだされる。

以上のことを踏まえ、ここでは、読み手の読みの速度をコントロールするために書き手がテキストに仕掛ける物理的な(表記上の)手段が句読点であると考え、その現れ(パターン)が書き手の個(別)性を反映するものと見ることにする。

3.3.5. 句読法への表現上の制約

読点の用法に関する制約は、寧ろ、正書法にでなく、印刷技術に見出される。組版によって、視覚的に許容される一文の長さには、おのずと制約が生じる(家辺1998:83)。合理的に考えれば、縦書は横書に較べて可視領域に収まる文字数が少なくなり(われわれの両眼は横方向に並んでいる)、また、段組は視覚的に捉えうる文字範囲(可視領域)を拡大する試みであると思われる。ここから、組版と文長との一定の関わり(文長において:横>縦、二段>一段)が予測される。

では、縦書と横書、一段組と二段組とで一文の長さにどのような違いが生ずるであろうか。同一書き手の異なるテキストについて、組版と句読点の生起頻度との関係を調べると、表3.3-1~3のようになる(ただし、句点間の字数を文長、読点間の字数を句長と呼ぶものとする)⁸。

句長の算術平均がほとんど変化しない一方で、文長の算術平均は組版形式によってはっきりとした特徴を示す。文長は、ここで立てた4つの形式についてみると、横書2段組が最も長く、以下、

表3.3-1 各資料の文長と句長

		平均文長	平均句長	総字数	文数	句数
資料A	横書一段組	43.0806	15.1761	8013	186	528
資料B	縦書二段組	53.9791	15.5149	5182	96	334
資料C	横書一段組	55.5688	17.9201	6057	109	339
資料D	縦書二段組	61.0000	17.3757	5734	94	330
資料E	横書二段組	55.2767	13.7884	12382	224	898
資料F	横書二段組	60.6923	14.7822	6312	104	427
資料G	横書二段組	68.9661	20.3959	8138	118	399
資料H	縦書一段組	47.5517	16.3389	6895	145	422

⁷ 「民主、共産、社民各党は…」のような表記は普通だが、「民主、主義の原則は…」のような表記は異常である。

⁸ 『日本語表現法論攷』等を資料にした。

表3.3-2 組版形式と文長・句長との関係

	平均文長	平均句長
横書一段組	49.3247	16.5481
横書二段組	61.6450	16.3222
縦書一段組	47.5517	16.3388
縦書二段組	57.4895	16.4453

表3.3-3 書字方向・段数と文長・句長の関係

	平均文長	平均句長
横 書	56.7169	16.4125
縦 書	54.1769	16.4098
一段組	48.7337	16.4783
二段組	59.9828	16.3717

縦書 2 段組、横書 1 段組、縦書 1 段組の順になる。これは予測に一致するものといえる。また、書字方向と、段組数とについてみると、文長における大小差が、縦書 / 横書よりも 1 段組 / 2 段組で大きくなることから、文長に関して段組数の限定がヨリ大きいと推測される。組版は文長の上限を設定するよう機能していると思われる。

以上の調査結果によれば、読点の打ち方が書き手の個人的な筆癖を反映しているのに対して、一文が含む句の数（文長と文構造）は組版の形式を反映しているようである⁹。したがって、印刷という工程で書字方向・段組数が固定されているとき、文構造がその形式に応じて変化しうるといふ事実が指摘できよう。

3.3.6. e-text における句読点

前項で見たように、読点の用法は書き手の筆癖と組版の形式とに制約されていると考えられる。しかし、印刷形式に応じた句読法と文構造との変動は、e-text では失われるのではないだろうか。e-text は、読み手が読み方を自己決定しうるといふ特性を持つからである¹⁰。一方、e-text においても、句読法は体質的なものでありえよう。読み手の自己決定が尊重されるとき、それは、文の

⁹但、このような外形的特徴が、「表現主体」の意識的な配慮によって生じているのかという問題は、特別重要でない。いずれにせよ、表現主体について検証された問題は、e-text 環境で直接比較できるものではない。

分かりやすさに貢献する書き手側の技術でなく、書き手の意識的選択、あるいは（組版形式などに対する）無意識的選択でさえなく、単に書き手の筆癖を表わすものとなるよりないだろう。そのため、計量文体学により本質的な因子となりえ、筆癖は、書き手の身体の反映というより、数的な記述に置き換えられることになるだろう。

では、組版が与える制約の喪失は、書き手の筆癖の露出とともに、ひろく日本語の長文化を招くことになるのであろうか。e-textでは、テキストに外形を与えるものは読み手の読みであり、組版の持っていた書き手への制約を読み手が担うことになる。これは、書き手への制度的な制約を課すべく読み手に当然与えられるべき権利の主張といえる。具体的には、長文（不当なコストを要求する言語行為）への抵抗であり、利用しうる文構造の制限ということになる。このような読み手の短文化の要請によって、それが組版による制約の喪失による長文化の方向と抗争することにおいて、文長に劇的な変化が生じることはないはずである¹¹。

但、組版の制約と読み手の制約とは質的に異なり、前者が（固定的な形式による）段階的な制約であるに対して、後者は（可変的形式による）斉一的要求であって、このことが文長の標準化を導くと見ることは、理に適っている。前川（1995）は、文長の偏差の大小は、計量的特徴を構成するとする。つまり、長文を許容しないということは、あらゆる発信点におけるより一般的な文長・文構造の標準化であるとも言える。したがって、e-textは、文長の偏差をひとしく圧縮することで、スタイルに一定の変化をもたらすと考えることができるのである¹²。

3.3.7. 句読法と文のスタイル

句読点の問題に関しては、以下のようにまとめられる。

句読点には、書き手の個性が反映する（書くときのリズム）とされるが、また、句読法は、分かりやすさに奉仕するというより、読み手の読みに対して障害を設ける実践的な技術である（読むときのリズム）。句読点の用い方には確率論的な格子があり、その範囲内において特定の度合で生じている。その限り、そこでの「個性」は計量的手法によって明らかにされ、それが表現主体の意識的選択の結果であるとする解釈に、特別な意味はない。

句読法には別の角度から焦点を当てることもできる。句読法は、そのe-text環境での変化を通じて、言語表現のスタイルを変更する可能性を持つ。本節では、句読法の変化を促す事象的な要因のひとつとして、組版と句読点頻度との関係をもとに考察した。このことはワードプロセッサが言

¹⁰始まりと終わりとを持つ文章という単位は、読み手の参加以前には自明でない。文章のはじまりは読み手が読み始めた任意の地点であり、終わりは読み終えた任意の地点であるとしか言えない（ランドウ1996など）。

¹¹現状は、書き手と読み手との関係の中で、新たなスタイルが模索されている段階であるとも言えよう。電子メールでは、手紙文や論文と比較して、文長自体に関する傾向は明確でないものの、短文長（50字以下の文の文長）の低下・長文率（50字以上の文の出現率）の増加という一見相反する事実が指摘できる（拙論1999：33-6）。ここで「長文」の定義は、前川(1995)による。

¹²付け加えれば、このことは、相互に置換されるものであるべきハイパテキストで、質量両面にわたる文の均質化が目指される（淘汰圧が加わる）ことの一側面であると見做すことができよう。

語表現のスタイルに影響するか否かという問題の回答を含んでいる。筆記用具としてのワードプロセッサはスタイルを変えないが、ICT（情報通信技術）はコミュニケーションのあり方を変更し、書き手と読み手との力関係の再編成を通じて、ついにスタイルに変革をもたらすと考えることができる¹³。言い換えれば、道具は個人のスタイルを変えないが、言語のスタイルを変える可能性があり、問題が筆記具＝表現主体の選択にでなく、メディア＝書き手・読み手間の関係にかかるものであると教える。実際に、筆記用具の変化は、書記空間の革新と結びつかないとき、表現を変えることはない。

コミュニケーションがコントロールであり、テクノロジーも人間を支配するのだとすると、そこに技術と通信との結合の必然性が生じると考えることは理にかなっている¹⁴。われわれは、それが重要なものであるほど「単なる道具ではない」と言いたがる。しかし、技術の産物は、たいてい単なる道具であり¹⁵、重大事が世界の解釈でなく変革であるとするれば、単なる道具こそが物理的現実を再配置し、行動を変化させる。使いにくい道具が使用機会を減らす一方、使いやすい道具は物質的現実を変え、行動の可能性を変えてゆく。コミュニケーションにおいても、道具が表現を変化させることがあり、メディアの問題と見るときにワードプロセッサはコミュニケーション行動領域を変化させるが、その変化は、書き手-読み手間の力関係の再編とともに考えられなければならない。そして、その変化が、情報へのアクセス方法の変化¹⁶を意味することは明らかなように思われる¹⁷。問題が言語に関わる場合に「言語文化」を擁護する立場からなされるという批判に対しても、その矛先となる技術的不備が大抵直ちに解消されうるものであり、実際にそうされてきたということは軽視されてよいものでない。一体、技術の進化は 言語変化 より速いのである。

3.3.8. 文字と表記符号

一般に、文字は概念的意味を担うと捉えられ、表記符号は概念的意味を持たないため、表現にとって周辺のものと見做されがちである。加藤（1977：184f.）は次のように述べている。

文章表現では、当然文字が主役であり、符号はその脇役であるにすぎないと、一般には思われている。しかし、符号がなかったり、あるいはその使われ方が適切でなかったら、文脈の倫理的な関係を把握することが困難になったり、読みにくくなったりする。...書き手が意識的に符号を用いるようになら

¹³音声入力の技術も進歩しているが、最も一般的な方法とはいえない。本論ではキーボードによる疑似書字行為を前提としている。

¹⁴卑近な例を挙げれば、コミュニケーションを支えるインターネットおよび関連技術は生活環境のコントロールに利用されてゆくだろう（家庭内LAN、家電製品のオンライン化）。

¹⁵技術のカバーする範囲の拡大を進歩の階段とみるか破局への道程と見るかという議論以前に、人間が局面から後退してゆくわけではなからう。

¹⁶この点では、言語も情報にアクセスする方法のひとつであり、情報へのアクセスを統制しようとする権力との必然的関係も生じる。

¹⁷卑近な例を挙げれば、高速回線（および通信サービス）の普及によるコンピュータの連続起動によってコミュニケーション行動はさらに拡大する。

3.3. 句読点と表記符号の用法について

なければ、符号の持つ、文中の役割が、正しく認識されることがないといつてよい。

但、表記符号の適切な評価は、表記符号に「意味」を与えて、文字と同じ待遇に引き上げることによってなされるのではないだろう。実際には、表記符号が周辺の要素と限らないことは、両者の歩み寄りによって明らかにされていると考えられる。すなわち、絵文字を文中に挿入し、また、文字を絵文字的に使用することである。

スマイルマーク (:-)) から発展したものとされる顔文字 (フェイスマーク) は電子コミュニケーションに定着し、広く見られるものになっている。顔文字には、

表情を表すもの

あいたっ	(x_x)ゞ
怒り	(-_-#)
えーん	(TOT)
苦笑	(^_^;)
号泣	(TOT)

行為や態度を示すもの

置いといて	\(^^\)\
聞こえない	(-_-) キコエナイ
寝ている	(-_-)'zzz'''
メモをとる	(°_°)m
万歳	\(^o^)/

人物やキャラクターを示すもの

ウルトラマン	(o!o)
やくざ	(ㄨ)
魚	°))≡

などがある (顔文字については [4.3](#)も参照)。

また、

苦笑	(苦笑)
笑い	(w
笑い	(ㄣ
爆笑	(爆

のようにカッコつきで感情要素を付記する表記も一般に用いられる。これは、顔文字と併記されていた文字 (テキスト) 要素が残存した一種の省略表記と見られる (この表記については岸本2000に用法の詳しい分類がある)。顔文字は、表記符号 (の組み合わせ) を^{アイコン} 図像 (絵画的イメージ) と見立てることだが、表記符号や文字を別の文字と見立てる表記もある。

コンピュータの上で漢字を扱う場合、字種には制限が伴う。例えば、「瞠 (JIS第3水準1-85-37)」や「鄧 (JIS第3水準1-92-80)」などJIS第二水準までに含まれない漢字は、通常の方法ではコンピュータ上に表示 (入力) したりコンピュータから印字・印刷 (出力) したりできなかった

3.3. 句読点と表記符号の用法について

たために、さまざまな代替手段や代替表記が行なわれた。プリントしたものが必要な場合には、入力できない漢字を空白（2バイトスペース）で処理し、プリント後に手書きで修正したり、活字で印字したもの（書籍からのコピーなど）を貼り付けたりすることが行なわれた。また、電子メールや電子掲示板などディスプレイ上の表示が問題になる場合は、「久野ススム」「トウ小平」のように片仮名表記語（[1.3](#)）にしたり、本文を「久野」「小平」とし「は日偏に章」「は登にオオザト」のように注記することが行なわれた。また、後者の場合、漢字のイメージを伝えるために

「久野 日章」 = 久野 暉

「登 小平」 = 鄧小平

のような方法が行なわれることがあった。このような方法は、「里予 木寸」などのように通常の方法で入力できる文字に対しても行なわれる。文字分解は、隠語（女＝「くノ一」）や字源の俗解（「木の上に立って子どもを見守るのが親である」「人の言うことを信じる者が儲かるのです」など¹⁸）の類に古く見られるものだが、現在ではコンピュータ上の文字遊びとして定着している（文字分解については [2.2.5](#)も参照）。このような表記符号・文字を文字と見立てる表記はさらに「判じ物」化し、01年末ごろに現われた表記は「ギャル文字」などと呼ばれた¹⁹。例を挙げると、

「オハ 」 = オハヨ（おはよう）

「オヤスミ」 = オヤスミ（おやすみ）

「おや§ 」 = おやすみ

「あ ぼ」 = あそぼ（遊ぼう）

のようなものである。

携帯電話によるメールやメッセージの交換では、絵文字は欠かせない要素となっている。携帯電話機には「絵文字」が多数登録されており、各メーカーがその種類やユニークさを競っている（絵文字は競合各社を通じて数百から1000種類になるともいう）。また、携帯電話の機種依存文字である絵文字をコンピュータ（パーソナルコンピュータ）の上で表示するためのソフトウェア（外字のセット）もさまざまなものが配布・販売されている。絵文字が、顔文字の類と異なるのは、顔文字が主に文末に使用されるのに対して、絵文字は文中にもしばしば使用されることである。以下にいくつか例を挙げておく。

- (1) ⇨☎ して！（電話して！）
- (2) 🎤 行かない？（カラオケ行かない？）
- (3) レポート完了～
- (4) 気分いいっす 🌞
- (5) 飲み会 🍷 いつだっけ？
- (6) ラブラブ 🍷💕 だよ

日本語の表記の中に使用された絵文字は、文脈に依存する度合いが大きい。絵文字は、あるときには漢字や仮名の代用であり（上例1.2）、あるときには顔文字の代用であり（上例3.4）、あると

¹⁸例文は阿辻（1994）による。

¹⁹[online] www.zdnet.co.jp/mobile/0205/08/n_galmoji.html

3.3. 句読点と表記符号の用法について

きには振り仮名やルビにも似ている（上例5.6）（振り仮名については [3.4]）。ただ、このような多様性は顔文字の使用にも見られるところであり（ [4.3]）、表記に絵画的イメージを付加するという点では両者は連続した存在である。

絵文字による表記が広く行なわれる背景には、日本語の表記体系を構成する主要な文字体系（漢字と仮名）が同じ正方形内に収まるデザイン（方塊性）を持っていることがあげられる。この性質によって、種々の絵文字が日本語表記の中に無理なく挿入できることになる。近年のトンパ文字（例：[遊] [大] [月]）などの象形文字（表意絵文字）の流行も、同じ特徴によるものだろう。文字の方形のデザインは、もともと原稿用紙の普及に貢献したものだが、現在では「原稿用紙10枚程度」といった執筆分量の指定に直感が働かない世代が増えている。日本文字の方塊性に依存した商品は、原稿用紙（紙のメディア）から絵文字（電子メディア）に移っているのであり、電子メディアをめぐる市場規模も絵文字の普及を加速している面がある。

3.3.9. 句読点と表記符号

句読法について明らかにしたように、筆記用具の変化は表現に特に影響を与えるものでないが、メディアを通じた書記空間の革新は、新たな表現を生じる潜在的可能性を持つ。句読点のような表記符号は、概念的意味を担う文字に対して周辺的なものと見做されがちだが、文字をメディアの問題としてみる場合には看過できない重要性を持ちうるのである。そもそも文字は本質的に言語的意味と絵画的イメージとの両義性によって成り立つものなのである（ [3.4.3]）。この性質を利用した表記法は、新しいメディアの上に成立する電子コミュニケーションにおいて積極的に利用されるようになってきている。

要約：文字はメディアとしてとらえられなければならない。メディアという観点をとってこそ、コミュニケーションツールの変化による表現の変化を観察することができる。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

3.4.0. はじめに

日本語の表記体系の特徴の一つに振り仮名がある。大島（1989：63、1991：21）は、「振り仮名」という名称が漢字と仮名とを主従関係と見る偏りを持つとし「漢字仮名並列表記形式」という語を提案しているが、本論では「複数の文字列を併存させ、相互参照を可能にした表記形式を振り仮名という（拙論1999b：230）」ものとする。そのかぎり、宛字はゼロ表記への振り仮名と見られ、本質的に連続した問題と捉えられる。また、玉井（1932）は「正しきルビの付け方」を明らかにする目的から、「ルビか否かは、その形式と本質との両者より決定さるべきである」として、ルビと注釈とを区別しているが、本論では特に厳密な立場はとらない。

歴史的には、振り仮名が日本語表記を可能にした側面が指摘できる。振り仮名は、漢文訓読の作業の中で生まれたものとされるが、山城（1993）が指摘しているように、漢文訓読は解読にとどまらず日本語を表記するための方法となる。由良（1973a：16）は「音訓混交主義、ルビ主義が、異質言語の自国語に引きつけた解読力の源泉となるだけでなく、それをもとにした創作へのエネルギーになる」とのべ、訓読とルビとが日本語表記の要諦であるとしている。また、紀田も「ふりがなはなるべく使わず、ふりがなの不要なやさしいことばで読み書きを行う」というのが戦後の国語政策の流れだが、そもそも日本語はふりがながなくては通用しない言語ではないだろうか」と述べ、その歴史的な重要性を指摘している。使用量や使用範囲に一定の変動があるものの、振り仮名は現代にもその命脈を保っている。新聞での使用実態¹を調べてみると²、新聞1紙当たりの平均数が、1998年で46.86（1500/32）、2000年で67.19（2150/32）となっている。また、用例の約8割が漢字のよみを示す振り仮名であった。古い時代の表記の工夫である振り仮名が現代にまで生きる「生命力」を、浅田（1997）は「創造性」によって説明しようとしている。使用上の規範的制約がなく、自由に施しうることで振り仮名に生命力を与えているという意見である。確かに、振り仮名という形式には相当の柔軟性があり、その用途を当初のものから大きく拡大しているといえる。しかし、われわれが日常的に接する用例の大半が「読み仮名」であることを考えると、振り仮名を「必要悪と称すべきものであり、日本語のさまざまな特徴と問題点を集中的に体現している（泉1993：103）」と見る方が実情に合っているとも思われる。

また、多くのテキストが電子的に実現される状況を考えるときに、振り仮名をどのように理解し、説明すべきかという問題が生じる。坂井（1968：195）は、コンピュータの普及が言語表現を変えると予言し、「コンピュータを動作させる言語と人間の自然言語との間で相互の接近が考えられる」と述べている。現在、入力での形式言語の直接使用はむしろ少ないが、コンピュータに関連する多くの新語や表現が使用されているという意味では「インターネット、電子メール、ニュースグループもまたそれら自体が世界の語彙に大きな影響を与えている（フィッシャー2001：292）」という

¹以前は括弧による注記もしばしば用いられたが、現在では作業の電子化や印字の大型化などによってほとんどが振り仮名である。

²毎日・読売・朝日新聞の朝刊（夏季）から単純無作為に32紙分を選び、語レベルでののべ数を調査した。

ことができる³。表記の面でも、ディスプレイと紙との間の接近⁴によって、変化が生じると考えられる。

本節は、以上の点をふまえながら、振り仮名を文体論的観点から包括的に論じてゆく⁵。

3.4.1. 振り仮名の視覚性について

振り仮名は、文字と文字との関係と見ることができる。このことには、ふたつの意味がありうる。まず、振り仮名の大半は漢字と仮名との関係であり、その「表語絵文字」と「表音節文字」との関係が、疑似的に文字と音声との関係（共感覚性）であるように見られることから、デジタル環境において視覚と聴覚との直接的な関係（マルチメディア化）に進んでゆく可能性（拙論1999）が考えられる⁶。

同時に、文字と文字との関係であるからには、テキストや表記に独自の機能を担っているのが自然である。木坂（1976：390）は、振り仮名が「言語音の一次元的、単線的展開に対して二次元的、複線的構造を文章に持ち込み、言語の意味だけでなく、発話の意味（場面や情感の内実）に代わりうるものを加えようとする」と述べ、言文一致文の確立に重要な役回りを演じたとしている。但、振り仮名が「複線構造の表記様式」であるのは間違いないにしても、複線性格が本質的に言語表現一般の特徴であることは注意されなければならない。Clark and Fox Tree（2002）は、会話が2つのパラレルなトラック（本来のメッセージと表現プランの自己調整のための付帯的メッセージ）から成り立ち、書き手が挿入・並置・修正・随伴などの手法を用いてそれらを単一の行動の流れに合併するものであると提案している。言語伝達がメッセージの流れとメッセージの流れに対する書き手の即時的反応とを行動の上に同時に表示する（ことによって表現を一貫性あるものに構造化する）という見解は、西条（1999）にも見られる。「語るものと語られるものに分けて考えるという観点」をとる限り、言語の中にも言語（語られるもの）とメタ言語（語るもの）とが見いだされるのはむしろ自然であり、メタ言語を含んだ表現の流れを書き手において捉えれば、複線的で重層的な表現を単一の行動のうちに表示していることになるのである（西条1999：8ff.）。そして、語られつつあることについて語る行動を続ける書き手の行動の一貫性によって構造が生じることになる。従って、振り仮名が書記言語に独自の表現性を付与するのは疑えない

³Patrick Moorheadは「なじみのない頭文字語や難解なハイテク・ターム」が新技術採用の減速の一因になっているとも述べている（zdnet.com.com/2100-1107-946534.html）。

⁴紙に替わる素材として、電子ペーパー（シート状の薄膜ディスプレイ）とリライタブルペーパー（繰り返し使用可能な黒発色する白地の素材）とがある。電子・電光的素材に紙の性質が取り込まれ、紙の中に電子・電光的性質が取り込まれるのである。

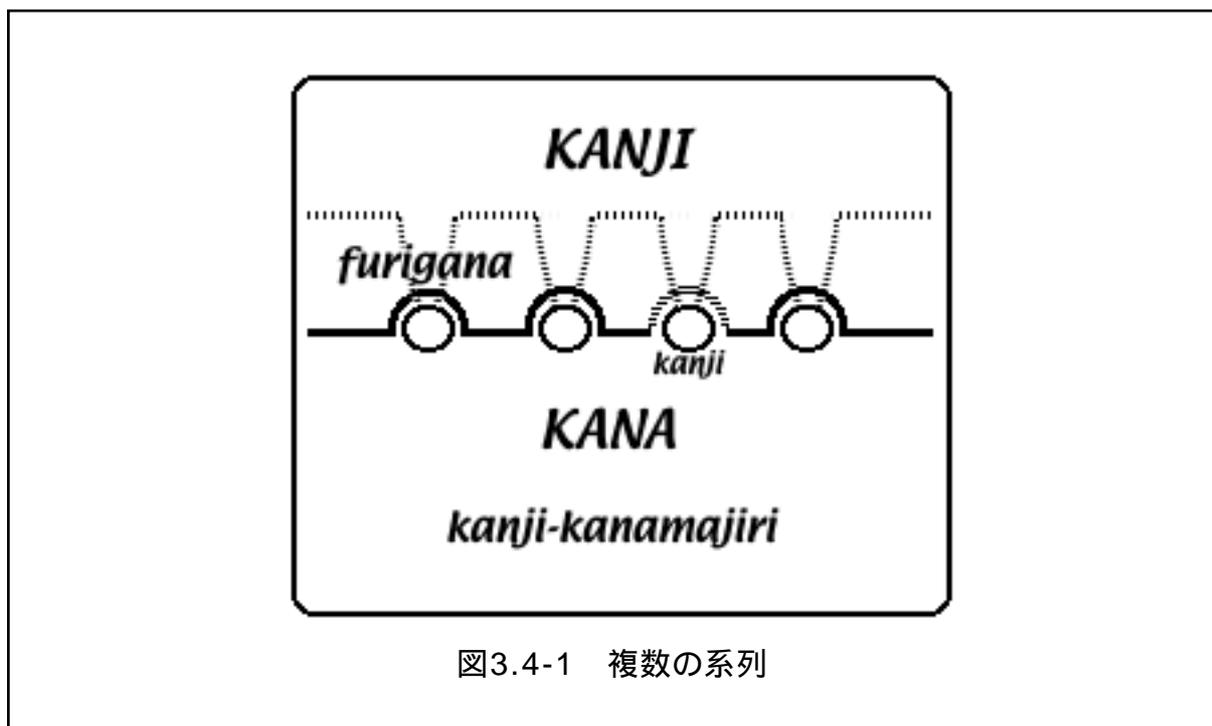
⁵従って、表記主体が、どのように振り仮名を用いるかという「仮名振り（大島1989：61）」の視点は採用しない。新井（1995：162-165）は、マクルーハンを援用して「メディア・リテラシーをもっぱら『主体の能動的創造による産物』として理解」することが活字的発想であり、「受容スタイルが成熟し、一般化した時」に現れる新たな行動様式や創造性において新しいメディア・リテラシーが形成されると説いている。

⁶テキストでの音声と文字との併用という点では、DAISY Consortium（www.daisy.org/）が国際規格化を目指す「話す電子本」がある。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

としても、単線・複線という対比を過大視することはできない。振り仮名が口頭語にない表現性を持つのは、それが可視的な複線構造だからである。

拙論（1996）では、表記面における振り仮名の機能を、テキストの外形である複数の系列間に結び目を作る機能であると論じた。言い換えれば、仮名だけで書かれたテキストの系列と漢字仮名交じり文の系列との絡み合った関係と理解するということである（図3.4 - 1 参照）⁷。これは、本来的な仮名文字の系列を副次的と見做される位置にずらし、本来の位置に漢字を入れ込む操作に関わっている。日本語の表記体系において、漢字は、歴史的にも共時的にもすべて宛て字であ



る。アンガー（2001：29-32）が指摘している通り、漢字は仮名の臨時的な代用であり、非本来的である⁸（その点で漢字仮名交じり文は潜在的に複線構造だといえる）。しかし、一方で、われわれは、漢字に仮名が並列しているとき、仮名を補助的であると見る。これは、振り仮名の受容に一定の「方向性」のあることを示している。拙論（1999：233f.）では、振り仮名の果たす機能の類型化の基準として参照の方向を用いた。また、先行研究でも、振り仮名と本文のいずれが主たる機能を果たすかが論じられている（進藤1982、岩淵1988、細川1989など）。受容に方向性があることは、情報の強度（信頼度）に格差があることを意味する。卑近な例を出せば、左を見よ という張り紙があるとき、われわれは矢印が指示する方向に従いがちである。情報の強度は、行動上のコストによって計られる⁹と見られ、その意味で、振り仮名に漢字の「読み」を示す用例の最も

⁷同様の見解として、鹿島（1992：80-81）が、ルビ付き漢文を「ヒエログリフとデモーティックの並記の様に二つの文字言語が並記されていると観た方が適当」で「原語と訳語の別は外観からは判断できない」（対等）と述べている。また、現代語のルビ付き表記は、それが「語翻訳」であること除けばルビ付き漢文と基本的に同じとしている。

⁸現行の表記体系で、全仮名表記が可能で全漢字表記の可能でないことが証拠となる。

⁹認知上のコストでない。対馬山猫の写真に「西表山猫」と説明文があったとして、恐らくコトバを信じ、一々「動物図鑑」で確認する手間はかけない。

多いことは自然であろう。

また、参照の方向について考えるときには、絵と文との間に矛盾が存しないことに注意すべきだろう。矛盾は、言表の中・間にしかない（フーコー1986：18, 49）といえる。絵と文との間には、対応の誤りがあっても矛盾は生じない。振り仮名はコトバとコトバとの関係であるから、常に矛盾を生じることができる。^{つくりごと} 眞実、^{いつでも} 一時的など、作例は示せるが、実際の用例が多いとは言いがたい。むしろ、振り仮名は、コトバの間の関係を、絵とことばとの対応関係（ここで形・音・義をもつとされる漢字の性質が利用される。読みの不明な・不明であると前提された漢字は、音を欠いているわけでないが、仮名が並列することによって音を欠いた単なる形象と見做される）である「説明文」の形式に同化する¹⁰。但、そうであれば、コトバは小書きの仮名の方にあることになり¹¹、漢字が「本文」であることが名称の上で矛盾する（「本文は『文』でない」）だろう。このとき、コトバとコトバとの関係であるが故に生じうる矛盾が名称の上にならざれ、循環しえない等価な対応に裁ち直されることで、参照の方向が^{つくりだ} されれる。また、ひとたび参照の方向と意味上の等価性とが確立されると、垂直・水平軸からずらされた表記形式が名称上の矛盾を覆い隠す。矛盾が名称の上にならざれたことは見えにくいものの、表記のずれは一目瞭然だからである。

覆い隠された矛盾は、ふたつの錯誤にわれわれを導く。まず、テキスト全体の二次元的構成から系統的に逸脱していることが、仮名系列を副次的文字列と見せ、本来全く必然的でない漢字が、日本語表記の中心に位置づけられることになるのである。また、日本語の漢字が、振り仮名に頼ることなく、つまり形と義との関係のみで書くことが出来ているのだと考えることは、語が連なって文になるという理解を容易に生み出す。形が義と直結しているのなら、語どころか一字一字、一筆一筆が意味に満ちたものとしてたちあがり始めるからである。そして、このことが漢字を意味の極めて濃密な存在となす。しかし、いかなる書き言葉であれ、話し言葉よりはるかに整っているということは、語の集積でなく、文を書いているということの意味する¹²。文が原理的に反復可能である限り、仮にそれが連続的な手続きで産出されるのだとしても、何らかの不連続な単位に分節されることは明らかである。しかし、それは、不連続なものの連続が文を構成するという意味でない¹³。換言すれば、文字や語によって文を書くのではなく、それらはほぼ同時に書かれると考えるべきなのである。しかれば、振り仮名は、文の中の語と呼ばれる範囲に生じているのではあっても、語という自己充足的な単位に付属している¹⁴のではないはずである。すでに述べたように、振り仮名は、「複数系列間の関係」と見られるべきである。

¹⁰五十嵐（1922：114）は、^{めづらか} 稀見、^{そのとき} 爾来のような振り仮名の用法を「一挙両得策」により「二重以上の意義を兼ね表はす」視覚的修辞法としている。

¹¹一方、「^{みーんなおれのもんじゃ} 全世界征服の野望」「^{このあたり} 北岸地峡の地下」のような用法に対しては、漢字が振り仮名に対する説明文であると指摘される（岩淵1988：77-9）。ここでは双方向的な参照が可能になっている。

¹²ひとは、文を書き語で話す（バルト1977：93f.）。語を不完全な文とでも考えない限り語の集積は語に過ぎない。

¹³「[言語は]前もって区切られた記号の総体としては現われない...それは不分明なかたまりであって、ただ注意と習慣によってのみ個々の要素を見出すことができる.....最初から知覚しうべき実在体を呈示せず、しかもそれらが存在するという、およびそれらの営みが言語を構成することは疑う余地がない、という奇妙な・おどろくべき特質を示す（ソシュール1972：146-150）」。

以上のことから、最も基本的な振り仮名の機能と見做される「読み仮名」は、表現論上の問題としてしばしばとりあげられる 独創的な用法 に対する^{ゼロ}零度というわけではなく、むしろその方が視覚的な修辞¹⁵なのだといわなければならないだろう。

3.4.2. 振り仮名の媒体性について

振り仮名の使用実態は、テキストジャンルにおいて一定の違いが見られる（京極1981,拙論1999a:22-25）。一般的に言えば、振り仮名は、テキストがいかなるテキストであり、いかなる参加者に開かれるものであるか標識する表現のレベルの選択だといえる。出版物が、総ルビ・パラルビ・ルビなしのいずれを選択するか、パラルビの場合に何を振り仮名とするかは、ひきつける読み手を選別する（小野瀬1999は読み手の能力との間の好ましい選択を実証的に調査している）¹⁶。

また、振り仮名は、本質的に相互参照の形式であり、何かと何かとを結びつける働きがある。時にそれは、特定の読者を集団に結びつけるものでありうる。これは、メタファーが二つの概念を結びつけると同時に、自己と他者とを結びつける働きを持っていること（坂部1989:145）と似ている。

短歌では、様々な種類の振り仮名が豊富に用いられる。高島（2002:32）は、「残る生を快適に過ごす」のような用法を、それぞれの文字列を歌の外形と内実とに任務分担せさたものとする。この例は、音数律を維持するねらいが明らかなものであるが、武部（1979:482）が「二重表記は、音声化の際の音節数を重んじる詩歌の場合に、特に効果的な表現法となった」と指摘しているように、短歌に用いられた振り仮名は多かれ少なかれ同時に音数を維持する技巧となっている。但、進藤（1982:232）は、「詩はリズムを尊重するからどちら側（本文かふりがなか）を読み下すべきかは特に表現上の工夫のあるところであり、またその点において受け手をも規制する力が強いと考える（現代の和歌俳句などにもしばしば見られる）」と述べており、音数を維持するための技巧は、それが朗読されるものであることを考えるときに、すべてが万人に受け容れられるものではない。振り仮名が、音数の規範の中で読むように強いるものであっても、当然、受け手はそれを拒否することができるのである¹⁷。にもかかわらず、短歌の中で多くの振り仮名が通用していることには、

¹⁴振り仮名を語の問題であると見るとき「振り仮名そのものは自体が単独で存在できるものではない（浅田1999:229）」といえる。その限り、振り仮名は寄生的・周辺的存在と見做される。

¹⁵振り仮名が相互参照を可能にする形式のひとつで、基本的機能が相互参照指示の中に共通性を理解するように強制するものであるとき、隠喩の機能に同じプロセスの認められることが指摘できる（[1.1](#)）。

¹⁶振り仮名に一定の教育効果があると説かれることは、アクセス権の制約に関係している。情報へのアクセス方法の制限は、組織内の力関係・秩序の維持と密接に結んでいる。但、島田（2002:173f.）は「現代の学生は...授業で『知識や技能』を獲得しようとするのではなく、『情報』を収集しようとしている。...教師がトークとテキストと板書を使い、学生がノートと鉛筆を使うことを前提とした授業観は、いまやほころんでいる」と指摘している。「知識蓄積型から情報消費型へ（中野1986:227）」の情報形態の変化は以前から指摘される。情報へのランダムなアクセスの容易さが、先生が生徒に順序よく学ばせる という線形的学習観を変容させつつあるとき、振り仮名の教育効果を主張することが反動的なことに注意すべきだろう。

¹⁷破調は音数律を尊重する上で生じるものでそれを無視すのでない。規則を知らないものが規則に違反することはできない。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

事情があると見なければならぬ。短歌というジャンルの特徴は、テキストに参加するほぼ全員が、実体的な書き手兼読み手であるようなサークルを形成している点にあるが、畢竟、振り仮名は、それを貴重な技巧と見なすことができる読み手にテキストを開くことで、場を共有する上演形態の形成に参加しているといえよう。モリス（1960：138）の述語を用いれば、振り仮名は伝達的手段であると同時に、共有化の手段なのである。

このような振り仮名の用法は、解釈のスキームの伝達が言語行為となる例といえる。同様の運用は接続助詞の用法などにも見いだせる。接続助詞「から」には「理由を表す」用法と「理由を表さない」用法とが認められる。永田（2000）によれば、「から」の本質は、前件から読み手が得る想定に条件文の形式をとる文脈上の制約を課すことであり、限定された想定が後件の発語内行為と比定されるときに「理由を表す」用法、後件の発語内効力の構成要素と比定されるとき「理由を表さない」用法となるという（いずれの解釈を許すかは様々な点からアドホックに選択される）。例えば、「明日返すから5000円貸してくれ」では、明日返せば支障がないという想定が、誠実性条件にマッチされることによって 依頼 をより良く遂行するのである。しかし、ここで「明日返すから5000円貸してくれ」という発語行為が、「返す」に卓立がある場合と「から」にある場合とで、印象に違いを生じることに気づく。これは、前者の焦点が条件に関する具体的内容であるのに対し、後者の焦点が発話行為であり、前述した解釈のスキーム自体をメッセージとして構成するからだと考えられるのである。

メディアはメッセージだという警句（マクルーハン1987：7）は、マルチメディアの出現によって単体的メディアという概念が意味を失いつつあるときにも、内容だけを問題にする議論が表層的で皮相であることを教えている。形式は内容の乗り物なのでなく、内容を産み出す機構として働く一つのシステムなのである。振り仮名や韻律的特徴など、時に周辺的と見做されがちな要素を動員することによって、そのシステムに意識をひきつけ、読み手を取りこむよう表現することができるのである。

3.4.3. 振り仮名の触覚性について

「触覚」という語が、しばしば「共感覚」そのものを表わしうることが示すように、表現の共感覚性を考えるときに殊に問題になるのは触覚である。

しばしば論じられるように、主客の意識を生み出すのは識字であり、書くことは現実と記述されたものごととを引きはがす力を持つ¹⁸。また、本質的において、文字は言語的であると同時に絵画的であり（デリダ1978）¹⁹、絵画的性質も現実をしきうつす非体験的なものと見られうる（しかし、その現実とは文字の言語的性質によって生じる）²⁰。音声中心主義は、これら二重の意味

¹⁸加賀野井（1999：133-139）は、漢字仮名交じり文を中心とする書記体系の中で漢語の「視覚的な存在感」に慣れた日本人には「記号操作」に終始して「自分の目で物を見ない」傾向があると述べている。但、識字とは、現実が可視的に外部存在するという意識を生み出すものである。

¹⁹現実には、文字コードに指定された特定の「文字」が、絵画的に取り扱われることも珍しくない。

²⁰コロミーナ（1996：32-38）参照。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

で、文字を「生きた言語」から退けたと言えよう。振り仮名が視覚的修辭であるならば、振り仮名は専ら視覚に律された空間（文字的＝絵画的空間）で最も良く機能するといえようが、小書きの文字列を体系的にずらす形式が、文字の方塊性ととも透視法的空間を創出するのであれば、直ちに視覚の優位性を浮上させるだろう（[2.2](#)）。

しかし、ウェブのクリッカブルテキストを一例として、文字は触覚の参与を要請し、^{ビクトリアル} 絵画的なものから操作的なものへ進化する（この語は、ウィーナー1965：32f.より借用した）。コンドラートフ（1979：374）の「そのうち『全世界的文字』である『機械文字』が考案されることであろう。それは、どんな人にも、どんな計算機にも理解可能なイデオグラムとなるであろう」という記述は、GUIのアイコンを思わせる。拙論（1999b：237-238）では、テキスト間に相互参照を設定する機能において、振り仮名とハイパリンクとを同種のものを見たが、多くのアイコンはテキスト付であり、同じく振り仮名と同型と見ることができる。但、クリッカブルテキストやアイコンには操作性があるが、振り仮名には触知可能性が欠けている²¹。

由良（1973a：17f., 1973b：30ff.）は、黄表紙本などの江戸大衆文学が、総ルビと挿し絵との共存によって十全な表現力と大衆への訴求力とを得ていたと指摘している。挿し絵は、^{ビクチャー} 絵画と文章との相互参照であり、書籍などの物理的形態上に実現される。従って、挿し絵は視覚の対象であるだけでなく触覚の対象でもあると考えなければならない。なんとすれば、絵画は鑑賞に際して距離を要求するが、書籍はそれを手にとるよう求めるからである。挿し絵は、^{イメージ} 視覚に触覚を対置するものであり、振り仮名との共存は、振り仮名に欠在する触覚性（不足する像でない）を補完することが期待されているのである。

3.4.4. 振り仮名の形式性について

振り仮名には視覚と聴覚との関係が含まれているが、発言・会話の書き取り、^{ディクテート} アナウンス内容の要約などのテロップは、視覚と聴覚との関係化という点で振り仮名と共通する点がある。

塩田（2001：53ff.）は、関与性理論を援用し、テロップを通じて視聴者が「伝達行為全体を刺激として受け取る」ことで「すべての物事を客観的に見、批評的に観察する視点」を獲得することができる^{レラヴァンス} と説き、テロップが「強制的に視界に入ってくるがゆえに、わずらわしさを感じさせる」のは「批評的視点に達することに失敗した受け手」＝単に受け手であること甘んじた者に対してであると述べる。確かにテロップが邪魔に感じられることはあろう。但、テロップによる伝達行為は一度しか失敗しない。失敗とは、読み手が読むこと自体を拒否して作為に対抗することだからである^{コミュニケーション・チャンネル} ²²。読み手たることを自覚したものは、伝達経路の開閉の主導権を握ろうとするだろう。伝達に参与者間の力関係が関与する以上、読み手は書き手より優位になろうとするが、それは、超越的観

²¹触覚性の不在は、振り仮名研究が、特段「肉筆的特質」に言及しないことによっても示唆される。活字の用語「ルビ」が振り仮名の全体を覆って用いられることも無関係ではないだろう。

²²さらには、視聴自体を拒否するかもしれない。「番組がつまらないとすぐにチャンネルを切り替える」ことが「よくある」人が約6割、「時々ある」をあわせると約9割になるとする調査（三上2000：146）がある。この「チャンネル切り替え行動」は、小中高校生についてもほぼ同様の調査結果が報告されている（白石2000：34）。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

察者と振る舞うよりも、信号を無視することで達成される。

また、「伝達行為全体を刺激として受け取る」というときに、視覚と聴覚との共感的図式を考慮せずに済むことはできない。テロップは、出来事・場面・話しことばを文字において繰り返し²³、出来事や風景やテロルがシミュレーションによって繰り返されることでしか存在しないというボードリヤール（1988：53）の記述に対応する。テロップは、特に口頭性が書記性によって繰り返されることで存在するという事実を、スクリーンの上に映し出していることになろう。例えば、政治家のことは、新聞活字で模倣される前に、テロップで反復されることで ことば となるのである。声が文字によるシミュレーションの中のみ存在するというのは、文字を音声の代理（不完全な声）と見做すことではない。e-textに馴染んだわれわれにとって、そこで従来の意味での音声・文字の二項性の無効になっていることは、容易に見てとれるのである（3.2）。文字が必ず朗唱可能であるという点では、文字は音声の下位秩序と見做され、音声は文字による反復のうちにしかないのであれば、声は文字の下位秩序と見做しうる。矛盾する秩序が併存し循環するのである。しかし、スクリーンでの文字と音声との物理的同期においては、話すことこそが不完全な書くことであるという秩序が見えてくる。完全な形式性を持つのは書くことだけ（バルト1987：153-157）だからである。つまり、テロップがその物理的形式自体を伝達するのだとすれば、声に対する文字の優位性が広告され続けるだろう。テロップは、その形式性において、文字と音声との解体された二項性から文字-中心の再構築を行うもので、換言すれば、スクリーンに 紙 の性質を付与するのである。

バルトやデリダらのテキスト理論は、印刷テキストをe-textのように読むことを教える。印刷テキストの本質は、読み手の様々な能動的解釈によって構成されることである。テロップがスクリーンを紙と見せるのなら、視聴者が得る「批評的視点」は、印刷テキストの読み手の視点に他なるまい。しかし、その批評的意識の喚起は限定的である。印刷テキストは、紙 から逃れる理論的術^{すべ}を与えられなければ、世界が書物の中に限られているというメッセージ（文字中心の世界観）を伝えるからである。その必然的帰結として、読み手は線的秩序の中に収容され、主体的に意味を構成することはない。テキスト理論が印刷テキストをすら多声的に見せたのとは逆に、テロップにはひとつの声しかない。テロップがシミュレーションであるなら、それはそれ自体を現実^{リアル}として繰り返す²⁴。つまり、テロップは、それ自体の形式にしか言及せず、且つ、その自己言及的指示が受動的な受け手を共示する形でしか生じないところで、読みの依存的な受容の秩序を再構成するのである。

山城（1999：66）は、振り仮名が電子環境でも「書くための操作手順として生き残っている」と指摘している。このことは、音声から漢字が意識されていることを示すと見ることもできるが、電子環境ではすべてのデータが文字的に記録・処理される以上、漢字仮名交じり文をローマ字で書いている（アンガー2001：31）と見ることができる。永原（2002：102-3）が指摘しているよう

²³サイドスーパーは常に、速報スーパーは即時に、出来事を繰り返す。

²⁴そのため、テロップはそれ自身に似てくる。坂本（2000）は、60分間のニュース映像に現れた285のテロップは、「異なった放送局のニュースでも同じシ - ンタイプでのテロップの特徴は似ており、文字の大きさや位置によってある程度分類できる」としている。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

に、ローマ字入力、アルファベットによる平仮名の臨時的な代用であり、発音の実体はもとより、ローマ字のつづり方とも関係がない。ローマ字入力で「おはよう」と入力するためには、順に [O・H・A・Y・O・U] と打鍵するが、「おはよう」の発音は [qhayq:] であり、ローマ字は“ohayoo”あるいは“ohayô”のはずである。ローマ字入力は、アルファベット仮名併列型の振り仮名であり、識字以前の音声中心へと回帰しているのではない。音声性が浮上するように思われるのは、触覚性を欠いた振り仮名が音声・文字の二文法的秩序を構成するからであろう。

コンピュータの設計は米国向けであり、多言語処理環境の実現には、符号化（テキストのメモリへの格納）・打鍵（キーボードによるテキスト入力）・表現（プリンタやディスプレイへの出力）の方法が確保されなければならない（Becker 1984 : 82）。ワードプロセッサを開発した動機は、いかにして手書きより早く書くかということだったという（森・八木橋 1989 : 106）が、そこで発明されたかな漢字変換は、効率的であるばかりか、日本語の在来の表記システムに非常によく適合する。かな漢字変換は、振り仮名と深く結びついているのである。かな漢字変換と組み合わせられるローマ字入力は、すでに見たように、常に振り仮名を産出する。そして、可視的現れがゼロであるということでは、サイレントコード²⁵といえ²⁶、かな漢字変換の符号化を通じて、コードは漢字の重要性のメッセージに複号化されると考えられる。かな漢字変換が漢字の正確な用字を要求することから、「ワープロを使いこなすには漢字に対する知識がこれまでよりも一層必要である（阿辻 1991 : 191）」とされるのもその現れであろう²⁷。

視覚と聴覚との関係から見ると、文字的空間に帰属するという点で、振り仮名とテロップとは近い関係にある。音声は、テロップでは文字の下位秩序としてしか存在しえないように思え、かな漢字変換では不可視の振り仮名の持つ潜在的読みとしてしか存在していないように思える。両者の共通点は、「音声・文字」という二項的秩序を文字の優位をもって構成するところにあるといえるだろう。言い換えれば、両者は、表現素材に紙の性質を要求するのである。

3.4.5. e-text と振り仮名

歴史の理論は、多くのことについて様々な情報を提供してくれるが、今日の段階では、コミュニケーションの本質といった問題には無力である。答えは歴史の中ではなく、自然選択の中にあるのかもしれない。自然に存する複雑なもので自然選択によらないものはない。小林（1977）は、表記が多様性を指向して進化し、認知閾・コスト性の低さという合理的基準によって選択されると

²⁵例えば、マジシャンや「超能力者」がテレパシーで使うゼロによるコード化をいう。

²⁶電子メディアの特徴は「超平面的（東 2001）」なことだが、全面的に可視的であるという意味では表面でもある。表面に現れないものが存在しようとするれば、ゼロとして現れなければならないだろう。

²⁷効率的なテクノロジーが非効率的な表記と結託していることは、言語の改良より技術の改良が好まれることを明確にする。テレックスが唯一の文字通信手段だったとき、カタカナを使用することに合わせた新たな表記・表現が必要と説かれた。例えば、山田（1969 : 263）は「読みにくいカタカナを、読みやすいカタカナにしたなら、テレタイプ・テレックス文章は、日本列島の陸海空をウナリをたてて飛びかうに違いない」と書いている。しかし、表現を技術にあわせるのではなく、表現にあった技術が選ばれ、FAXや電子メールの前にテレックスは2002年9月末をもって廃止される。

3.4. 振り仮名と宛字とについて

いう見解をしめしている。もちろん、選択という言い方は、そうでありえたものの存在を意味するので、意志的行為をさすものでない。

本節では、振り仮名に、テキストの相互参照を可能にしたり・複数のものどもを結びつける機能があることとともに、振り仮名が、漢字仮名交じり文・触覚性の不在・音声と文字との二分法的秩序・表現素材としての紙に深く結びついていることを論じてきた。振り仮名が、紙の上での漢字仮名交じり文の適応の一部なのであれば、表現環境が変わることで新たな適応が模索されようと考えられよう。

デジタルメディアは、本質的にスクリーンを表現素材とするマルチメディアであり、全体的な共感覚化を指向して触覚の取り込みを計るとともに、文字・音声という二項的秩序を解体する。その結果、振り仮名とデジタルメディアは離反してゆくだろう。紙の上での振り仮名の機能は、複数のものを結びつけたり・テキストの相互参照を可能にするという点では、e-textのなかで異なる技術や形式によって果たされるだろう²⁸。

冒頭の問いに戻って、振り仮名の 生命力 は、それが漢字とともに日本語表記の「必要悪」だからというだけでなく、紙というメディアに特化され・テキストへのアクセス権を制限するところに見出されるというべきだろう。十分に廉価で・扱いやすく・所有可能な表現素材は、使われ続けるはずであり、その中で追及された 表現性 が、深く備えつけられ不滅化されているところで、振り仮名は半永久的な生命力を持つ。

要約： 振り仮名は日本語の表記体系の重要な要素であり、テキストの相互参照を可能にしたり・複数のものを結びつける機能がある。振り仮名の機能は、e-textでのハイパーリンクに進化し、その表記は紙の上で有効であり続ける。

²⁸XHTML1.1で<ruby>タグが正式に採用されたが、ブラウザの対応は不十分なままである。

3.5. 文体における修正と引用とについて

3.5.0. はじめに

テッド・ネルソンによる60年代の造語「ハイパーテキスト」は、「順序通りに書かなくても良い文章、つまりひとつの文章がいくつかに分かれていて、対話的な画面上で読者が読みたいところを自由に選択できるようなもの（ネルソン1994：42）」であるとされる。ハイパertext環境の特徴のひとつを端的に言い表わせれば「情報が増大するほど一貫性が失われてゆく」といえる。これは、今日、ICT（情報通信技術）の発達によって印刷テキストでも一般的な文章作法となっている。テキストの量的・質的な増大が、読み手の能力をはるかに凌駕しているとき、読み手は自らの手に負えるテキストを作り出さなければならないし、テキストはそのことを許さなければならない。そうしなければテキストは「記憶」という存在基盤を失うだろう¹。

また、テキストは、物理的支えなしにも存在しえない。われわれの身体が、それを知覚しなければならないからである。そして、その支えには、書き手の用いるものと読み手の用いるものがある。書き手の用いるものは、大抵、読み手も用いる。道具立てにおいて非対称性が成り立つものとして、書見台と消しゴムとが思い浮ぶ。古く、写本や印刷本は、貴重であったり巨大であったりすることを理由に、書見台に括りつけられることになった。同じく、現在、電子書籍は専ら技術的な理由からハードウェアに括りつけられている。書籍と直接比較できるのは閲覧ソフトのインタフェースである。デスクトップ機での読書は、書見台での読書に似ている。また、「作者」の存在するテキストは、その外形に書物（紙に印刷され製本されたテキストの配付形態）を指定するため、消しゴムは読み手には使えない。紙の上の書き手の特権は消しゴムに象徴される²。

本節では、消しゴムに代表される「テキストの修正装置」に焦点を当て、それらの道具立ての間
24 の関係を、文体論的視点で整理することを通じて、従来周辺的と見做されてきた表記上の要素と他

3.5.1. 修正における追加と削除

バルト（1987:76）は、話しことばでの修正・訂正は、削除でも抹消でもなく、訂正を付け加えることであるという。書きことばでの修正は鉛筆によっても消しゴムによっても可能だが、話しことばはそうでない。初期の印刷文化内では、書物が「短期間に利益を得ようとやっきの無知な印刷業者の手に渡ると...異本が急増し、正誤表をきりなしに出さなければならなかった（アイゼンステイン1987：56,80）」し、電子掲示板などの電子コミュニケーションでは、訂正を付け加えることがしばしば見られる。テキストの修正法には追加と削除とがあるが、消しゴムは、時間軸を逆行し、

¹ここで「記憶」というのは、テキストが相互に関係化され置換される場を指す。

²消しゴムとデリートキーとが同じものであることは、手書き作文とワープロ作文とがスタイルに影響しないことで確かめられるが、後者は（電光的に可変的な文字列と関わることから）読み手の利用可能性がより大きい。

ことばを 削除 し 修正 する点で、コミュニケーションの速度に関わっているように思える。

伝達の速度は、技術とメタファーとの両面から、コミュニケーションの様式を変え、同時に表現を含む情報伝達を速度という観点から捉えるよう要請する(3.2.2)。人間のコミュニケーション行動において「言語」を際立たせているのは、その速度である。言語ほどトータルに人間に対して素早くはたらきかけ、それを動かすものはない。言語コミュニケーションの速度を問題にすべきことの源はそこにある。杉本(2001)は、三島由紀夫の『新聞紙』を対象に、移動する行為者に体感された速度が、実在する物理的時間³を空間の実在から引き剥がして 純粹に意識的な時間をうみだす表現上の効果(『新聞紙』では現象の表層における因果的直結性の設定)について述べている。この指摘は、ボードリヤールが述べるところと基本的に同じである⁴。体感される速度は、重力の空間的支配を逃れるすべとなり、速度自体よりも早いために持続的時間を無効にするのである(ボードリヤール1988: 11f.)。例えば、テレビの衛星中継における送受信の継時的速度が「
12 LIVE」という即時性に読み替えられるとき、われわれの存在 = 所有していた空間は対象に向かって移動する速度を追い越して、持続的時間と均質な空間とは不連続性へ霧散する⁵。そのとき、われわれは遠隔存在するといえ⁶、そこでは部分と全体との関係が転倒される。持続的時間において、すべてを経験することが或る長さに渡ることをいうのであれば、当然、存在の瞬間性においては経験したことがすべてである。修正装置と速度との関係を考えるに、追加による修正は速度の中でも機能するが、削除による修正は持続的で遅い速度の中でしか可能でないように思われる。しかし、一定の早さを超えると、速度は追加の余地のない全体性を構成する。

ここで、e-textの読みが思い出される。いうまでもなく、それは物理的に固定された明確な境界がなく、分散ハイパメディア資源は膨大で、全体を読むものは誰もいない。そこでは、行為の持続によって一つの全体を読むことが重要なのでなく、読んだものだけがすべてといえる。もちろん、印刷テキストも拾い読みできる。グラスムック(1995: 060-061)が論じているように、グーテンベルグの銀河系 でのアルファベット順の排列が語句の検索と拾い読みとを可能にしたのであ
24 り、引用符なども文字の ことばとしてのつながり と モノとしてのつながり とを切り離すものと見ることができる(引用符については別に論じる)。但、印刷テキストは図書館などでのストックを前提し⁷、e-textは分散的なフローを前提する(金子1999)。過剰なフローがわれわれの情報処理能力を問題にする限り、誰も自分の読んだものが全体であると理解してよい。しかし、自分の読み方が唯一であると考えべきではないはずである。

注釈の挿入可能性を排し、他者のことばをテキストから締め出すときには、印刷本の作者を裏返

³原文では「外界の時間」「客観的な時間の流れ」などとされるが、ここでは私信によりこう表現する。

⁴表現自体の速度と表現された速度とがまったく同じ問題を構成すると主張するものではない。

⁵持続的で計時的な時間(連続的・均質 = 空間のようなもの)から瞬間的で経験的な時間(不連続で伸縮するもの)へと言い換えることもできよう。時間概念が、連続的・持続的時間と断続的・瞬間的時間とに二分されるのは、大雑把であったとしても役に立つ。持続性・連続性を含むかぎり、それは空間のメタファーを免れない(バシュラール1997)からである。

⁶存在の転移ではあっても、 身体の移動 に対する 意識のみの移動 でない。

⁷書物には、本質的に 完成 を目指して 蒐集 される性質があると考えられる。

ただけであり、テキストは線の秩序の境界に閉ざされる。また、ウェブブラウザ市場が米企業の寡占を許している⁸ことから、他ソフトの閲覧を制約するウェブページが増えている。情報の可視性の増大に反するかかる傾向も、われわれのコミュニケーションを利することにはならないだろう。開かれた非線形的結合の中では、読み手の裁量に注目されるが、コミュニケーションが力関係の競合を伴う以上、テキストを閉ざし、可視化に対する不可視化・非線形に対する線形の導入といった逆行する動きも一方の本質といわなければならない⁹。

趙(2002)は、志賀直哉の草稿とテキストとの比較から、簡潔と評されることの多い表現特徴が、削除と追加という両方向の改変によって成ることを明らかにしているが、テキストの修正装置は、追加と削除という観点から考えることができそうに思える。表現は、しばしば、その全体性と統一性に言及される。書物の線形的表現では、両者が一致するのが常だが、それが表現一般の性質でないことは明らかだろう。追加・削除という基準は、全体性と関わっており、
12 同時に拾い読みや引用との関わりでは、統一性に関わっているといえる([3.5.2])。テキストの修正装置という観点は、メディア形態を問わず表現の全体性と統一性を考えるときに有効であると考えられる。ここでは、追加・削除という点から、テキストの修正装置を図3.5-1のように整理し、以下に、追加と削除とによって整理されるテキストの修正装置が、具体的な言語表現の中でどのように現れるのか考察することにしたい。また、テキストの修正装置は、現象のレベルにおいて区分することもできるだろう。マイクロ・メゾ・マクロの3分法(野村2000)をとるときには図3.5-2のようになるだろう。[3.5.2]ではテキストの引用が、マクロ・メゾ・マイクロのそれぞれの水準で、テキストの修正装置としてどのように見做されるのか、特にその形式に注目して考察する。

丸谷オー「年の残り」では、見せ消ちの手法が使われている。少年の日記に上書きされた字消し線と物語中の隠蔽された遺書とが対比され、存在という事実の削除の意味が問われる。消しゴムは過去にさかのぼって原因を消去するが、字消し線は現在の結果を追加する。また、符号による

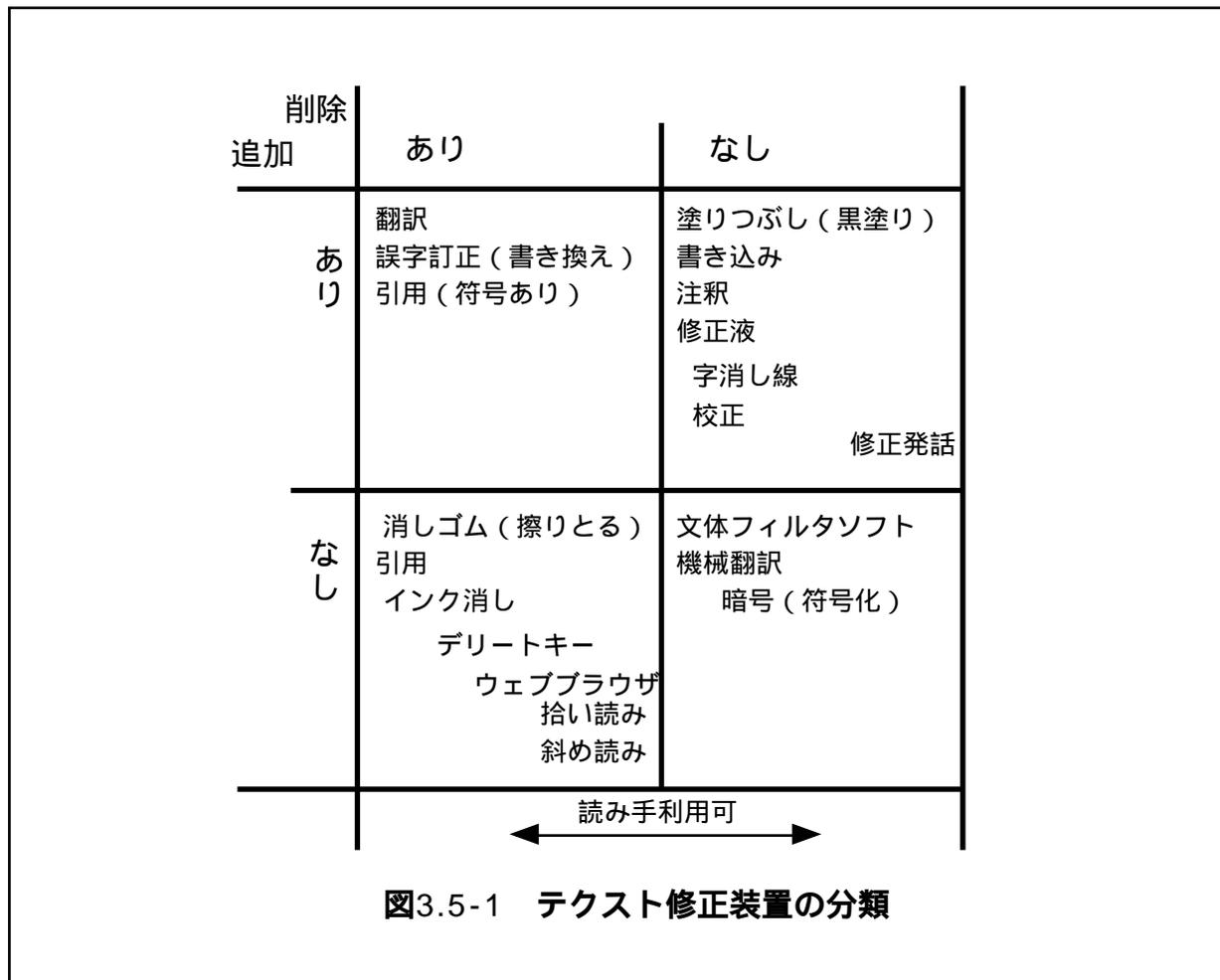
⁸表現されたものの違いが、表現すべきものに依存しているのならば、そこあるのは表現するものの個性の違いでしかない。しかし、重大な差異は、表現されたもののうちの読み手がそれを見ないものをめぐって存在し、表現するものの側から見れば、見えるものをどのように見ないように仕向けるかが関心事になるだろう。テキストの全体的可視性は、表現が「見えるようにすること」であると示す([0.3])とともに、表現しえないものは表現できないことを明らかにする。課題は、表現しえないものを表現しようと努めることでは勿論なく(それは不可能である)、表現しうるものを表現しないことでもなく、表現しうるものを表現しながら見せないことにあると考える。戦略的に語ろうとすれば、人は沈黙よりも冗舌を選ぶはずである。これは、見えるものを見せないという点で木の葉は森に隠せ(「賢い人は葉をどこに隠す? 森の中に隠す... 森がない場合には、自分で森を作る。そこで、一枚の枯れ葉を隠したいと思う者は、枯れ木の林をこしらえあげるだろう(チャエスタトン1982: 317))という原理だといえよう。表現されたものの膨大な量を前にしては、読み手は見えるものを見ない選択を強いられる。但、そこで重要なことは、十分な選択肢の提供であろう。ウェブ・ブラウジングでも、個々のページやサイトが様々な環境で同一の見え方をしなければならぬ(この要請は表現の可能性を不当に制約する)わけではない。ある環境で特定のサイトやページが見えないことはむしろ当然であり、特定のブラウザが事実上の標準と君臨している現状こそが打破されるべきなのである。これは「まなざしのグローバリゼーション(ヴィリリオ1999: 22ff.)」ともいえる状況だろう。なお、onestat.com(<http://www.onestat.com/>) のリサーチによれば、MSIE(Micro Soft Internet Explorer)の占拠率は2002年1月現在95.3%である。

⁹力関係の競合は様々な逆用を生む。例えば、ICTのは、地縁・血縁を脱した広範な人的交流とともに、草の根でのテロルにも利用される。

3.5. 文体における修正と引用とについて

修正は必ずしも否定を意味するのではない。「内部は外部である。」のような抹消記号は対立を棄却することで二項性を無化する。ここでは、遺書の存在の否定と存在をめぐる問の拒絶、過去と現在、老人の受いれる運命と少年の他愛のない生活との対比と交錯とが、削除による修正と追加によ

12



24 修正との対比に託されている¹⁰。30数年後に改めて遺書の存在を問われた老医師は「なかった」と付け加えるが、「何も言わずに死んだ」とき痕跡の消去のなされることが示されるのである。

3.5.2. 引用と文例集

テキストは物理的支えなしには存立しえない。従って、テキストは認知性の環境内に留まるだけでなく、「引用」されなければならない。テキスト理論に依って言い換えれば、テキストは関係的に定義される引用のモザイクで、ことばは隅々まで鍵括弧で括られている。痕跡としての文字は原理的に発音可能だが、その本質は口頭言語と書記言語との区別に権利上先立って存在するものと見做される¹¹。書かれたコトバが音声的に朗唱されうるのならば、話されたコトバは文字によって繰り返されなければならないはずだが、書かれたコトバもまた文字によって繰り返される。われ

¹⁰丸谷は、最終章と他の部分との対比を明確にするため「消し」の多い日記の文章体を使ったと自作解説している（『文学界』43年9月号138頁）。

¹¹このことは「エクリチュール」などと呼ばれる。

	言語的 ←	→ 物理的	
マ ク ロ	翻訳 パロディー 引用 注釈		
メ ゾ	拾い読み 斜め読み 修正発話 書き込み	ブラウザ 符号化 正誤表	
マイ ク ロ	引用構文 誤字書換え 機械翻訳 (文法 ベース)	字消し線 塗りつぶし	消しゴム インク消し デリートキー 修正液

図3.5-2 テキスト修正装置の分類(2)

われは、そのような言語形態の反復を引用と呼ぶ。「引用」とは既に書かれたものを書くことだといえる。

藤田(2000)は、先行して存在するコトバ(それ自体の類似記号か発話の行為や発話という事柄の指標記号と見做される)を類似記号によって提示することを意図した表現が「引用」だとして¹²。ここで、類似記号が必ずしも類似物を意味しない(内田編1986:37)ことから、極めて一般的な規定になっている。鎌田(2000)は、引用を元発話に関わりのある「創造的表現」であるとする「引用句創造説」を提案しているが、基本的にはこの規定を外れるものでない。「引用句創造説」のいうところは、表現が現実の再現でないということであろう。

小森(1988:3-10)がいうように、引用は、先行するテキストの連合関係と統辞関係を新たなテキストの表層に喚起し、相互干渉作用を生じさせるもので、その表示が特定の語によってなされたとしても、関係はテキスト空間の全体に関わる(このことは、ハイパーリンクを考えると明らかである)。連合関係はテキストの表層に潜在し、統辞関係はテキストの表層に顕在するが、引用が

¹²表現は、それが世界の言及であり、同時に、世界の一部であるという事実によって、インデックス的性質を持つ。引用をアイコン的と見做しうるのは、表現の中に引用を識別するとき、つまり、表現におけるインデックス性よりもアイコン的性質を強調するということである。そのことによって、言語表現は引用(部分)と非引用(部分)とに区別され、言語の本質がシンボリック側面にあることも明らかになる(「象徴は、かれ[パース]も力説しているように、そのなかに類像と指標との双方か、あるいはどちらかひとつを摂りこむことができる(ヤコブソン1984:53)」)。

テキストの表層での削除の操作を伴うことは、電子メールの返信などで実感することができる¹³。

引用を特定の部分テキストの部分の削除と見做しうるならば、引用符や引用中の表記符号の有無が問題になりうる。つまり、引用符のない直接引用が削除によるのに対し、引用符や省略記号（リーダー「…」や「（中略）」など）付きの引用は、削除+追加という手続きとなる。この点で引用は翻訳と似ている。機械翻訳が表現の置換（同じ文を必ず同じ文で訳す）と見られるのに対し、自然翻訳は、新たなテキストを対置した上で元テキストを消す手続きであるといえるだろう（そこから翻訳は作者の表現の追体験と言われてきた）¹⁴。引用と翻訳との違いは、手続き上の前後関係で、引用が同等性の提示を意図するものであることが知られる。但、口頭語での引用（直接話法）は、伝送連鎖での保守力が脆弱である。そのため、翻訳との区別は難しくなる¹⁵。また、沈黙に対する「『……』」や、疑問や不可解さに対する「『?』」、驚きに対する「『!』」のような引用にも同じことが言える¹⁶。

- 12 ここで、スタイルの引用という問題を考えておくべきだろう。鎌田（2000：57）は、「[直接話法は]『直接話法スタイル』とでもいうべきレトリカルな要素を含む、新たに『創造』される表現である」と述べているが、スタイルとはスタイルの引用であるというバルト（1979）のヴィジョンに近づくなれば、先行して実在したテキストの「模倣」であろうとなかろうと、スタイルは一言語の規範的文例集からの引用である。この引用はステレオタイプの類型の使用といえ、形式の問題であっても内容の問題でない。内容は、形式が形式と内容とのシステムである限りにおいて機能する。また、形式が、書き手によって意識的に選択されているのではないということに注意が必要であろう。形式の存在以前に意識はありえないからである。文体論は、行動が存在を規定し、存在が意識を規定すると考えるのである。

- 24 言語表現の中には引用であることを明示する形式が存在する。引用の最も明瞭な標識は引用符である。引用符には様々な形式があり、小カギ（「」）や二重カギ（『 』）のほか、二倍ダッシュ（ ）、二倍リーダー（……）、山形（ ）、二重ギメ（《 》）ダブルクォーテーション（ “ ” ）などもしばしば用いられる¹⁷。これらの記号には、テキスト内で使い分けが見られるのが普

¹³引用の本質が構成要素の省略にあるとするものではない。

¹⁴機械翻訳と文体との関係については、拙論（1999）で言及した。

¹⁵この点を敷衍するのが引用句創造説だろう。実際に、鎌田（2000：82）では、映画の吹き替え翻訳が直接引用の一種とされている。

¹⁶藤田（2000：581）は、「……」のような引用の用例は、引用が類似記号の表現であることを明らかにするものとしている。

¹⁷小カギのような文中に埋め込まれる引用符に加えて、電子メールや電子掲示板では行頭に不等号や二重不等号を用いる慣習がある。

11 名前：ななしたん

>10

>>なんか恥ずかしい…

恥ずしいのが(・_・)イ!! のでは? w

この例では、発言番号10の一部を引用しコメントを付加したものであることが示される。このようなスタイルは、川上他（1993：38）が指摘しているように「改めて打ち直す必要がない」ところから広く行なわれている。

通である。例えば、手許の文庫本（村上春樹『風の歌を聴け』）を調べてみると、通用にしたがって直接引用は小カギ、会話表現の話者交代は改行で示されているが、引用中の引用には山形と二重カギが用いられ、話ことばでは前者、書きことばでは後者という使い分けが観察される。また、ラジオ放送時に断続的にやりとりされるオフレコの会話は二重ダッシュを用いて散らし書きされ、音楽や小説などのひとまとまりの引用には小カギと字下げとが用いられている。

大内（1986：58）は、杉みき子の「夜の果物屋」について、「『 』による会話表現が地の文との対比から、あたかもつばやきのような、際立たせない効果をもたらしている」と指摘しているが、小カギには引用を強く明示する機能がある。なぜ引用を明示するのかと素朴に考えれば、テキストが等しく引用であることを隠すこと、また、表現にテキスト内/間の距離に応じた階層性を持ち込むことで、線性を生じるということだろう。藤田（1996）は、池波正太郎の『剣客商売』について、「その一文のモザイク的成り立ちを殊更示して見せる」小カギの用法を指摘している。

- 12 この場合、引用のモザイク性は、平面的広がりではなく、文章の物理的な一次元的展開の中で、内部に序列性を感じさせる。ネルソンは、ウェブのディレクトリ構造は線性の残滓で、ウェブはハイパertextでないと批判している¹⁸。ハイパertextは、全体を平面且つ表面とする純粋なリンクの構造でなければならないということだろうが、引用符（小カギ）は、装飾的なウェブページの構造とよく似ている。本稿では、引用符は、引用という表現行為の表現性を線性の表現と見做すための記号であると考えたい¹⁹。話されたことばの引用に引用符が用いられやすい²⁰のは線性の顕在化という点で自然だろう。その機能が引用の明示だとすると、引用符は過度に装飾的といえ、結果として印刷テキストの視覚的修辞のひとつになっている。

3.5.3. テキストの修正装置

- 様々な事象を横断的に概観してきたが、テキストの修正装置 という観点から、メディア形態を問わずに表現の全体性と統一性を考える場合に有効であると見られよう。また、テキストの修正装置 という観点から捉えるときに、字消し線や引用符などの周辺的と見做されがちな表記上の要素を含め、引用、翻訳、注釈、拾い読み、ウェブブラウザ、表現の速度などが文体論の問題として統一的な見通の中で論じられることも理解されるであろう。

要約：テキストには物理的支えが必要だが、それは、テキストの参加者が等しく利用可能なのではない。その点で注目されるのが テキストの修正装置 である。 テキストの修正装置 は、メディア形態を問わず、表現に全体性と統一性とを与えるものである。

¹⁸<http://ted.hyperland.com/buyin.txt>

¹⁹旧来の線の秩序を解体し、新たな線の秩序を表現の表層に定着させる点で、引用符は「ディープリンク」と似た問題を提起するだろう（いわゆる「文脈を無視した引用」）。

²⁰藤田（2000：585-586）は、話されたことばの引用に引用符が用いられやすく、間接話法などで通例避けられるのは「リアルさの意識の強弱の反映」であるとしている。

引用・参考文献(3章)

- アイゼンステイン, エリザベス(1987)『印刷革命』別宮貞徳監訳[1983], みすず書房.
- 浅田健太郎(1997)「『ルビ』の発生と展開に関する研究」広島大学修士論文.
(1999)「『あゝびき』における振り仮名表現」, 『日本語表現法論攷』pp.217-229, 溪水社.
- 東浩紀(1999)「サイバースペースは何故スペースと呼ばれるか」, 『InterCommunication』27, pp.158-65, NTT出版.
(2001)『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』(講談社現代新書1575), 講談社.
- 阿辻哲次(1991)『知的生産の文化史』丸善.
(1994)『漢字の字源』(講談社現代新書1193), 講談社.
- 新井克弥(1995)「電子メディアによる『書くこと』の変容」, 『マス・コミュニケーション研究』47, pp.153-167.
- アンガー, マーシャル(2001)『占領下日本の表記改革』奥村訳[1996]三元社.
- 五十嵐力(1922)『修辞学大要』斯文書院.
- 石井健一郎(編著)・天野成昭・柏野牧夫・小暮潔・白柳潔・管村昇・平田圭二・前田英作
(2002)『コミュニケーションを科学するチューリングテストを超えて』NTTコミュニケーション科学基礎研究所監修, NTT出版.
- 石川九揚(1998)「文字という虚構」, 『ユリイカ』30(6), pp.158-169, 青土社.
- 泉文明(1993)「二重表記の現在 短歌・俳句の表記の調査」, 『日本語学』12(3), pp.95-104, 明治書院.
- 岩淵匡(1988)「振り仮名の役割」, 『日本語の文字・表記(下)』(講座日本語と日本語教育9), pp.58-86, 明治書院.
- ウィーナー, ノーバート(1965)『科学と神 サイバネティクスと宗教』鎮目恭夫訳[1964], みすず書房.
- ヴィリリオ, ポール(1998)『電脳世界 最悪のシナリオへの対応』(インタビュアー: フィリップ・プティ)本間邦雄訳[1996], 産業図書.
(1999)『情報化爆弾』丸岡高弘訳[1998], 産業図書.
- 内山和也(1996)「文体試論」広島大学卒業論文.
(1999a)「共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文.
(1999b)「振り仮名の12の機能とその分化」, 『日本語表現法論攷』pp.230-241, 溪水社.
- エコ, ウンベルト&シリ・ネルガルド(1999)「翻訳研究への記号論的アプローチ」谷口伊兵衛訳[1998], ウンベルト・エコ他著, 谷口伊兵衛編訳『エコの翻訳論』, pp.5-16, 而立書房.
- 大内善一(1986)「表現開発のための 句読法 指導の試み」, 『表現研究』第44号, pp.55-63.
- 大江健三郎(1998)[1978, 1983, 1993]『小説の方法』(岩波現代選書・特装版)岩波書店.
- 大島中正(1989)「表記主体の表記目的から見た漢字仮名並列表記形式」, 『同志社女子大学学術

- 研究年報』40(4), pp.60-74.
- (1991)「語の漢字仮名並列表記は有用か 語彙教育とのかかわりにおいて」, 『同志社女子大学日本語日本文学』第3号, pp.19-33
- 魚返善雄(1963)『言語と文体』紀伊国屋書店.
- 岡田朋之・松田美佐編(2002)『ケータイ学入門 メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』(有斐閣叢書1651)有斐閣.
- 奥野卓司(1993)『情報人類学 サルがコンピュータを作った理由』^{わけ}ジャストシステム.
- 小野瀬雅人(1999)『ふりがなの教育心理学的研究』(野間教育研究所紀要第41集)野間教育研究所.
- 加賀野井秀一(1999)『日本語の復権』講談社.
- 影山尚之[ほか](1989)『日本語と表現の工夫』双文出版.
- 鹿島英一(1992)「文字言語のソフトウェア」, 『東北大学言語論集』第1号, pp.71-87.
- 加藤彰彦(1977)「符号の働き」, 林大[ほか]編『文字と表記』(現代作文講座6) pp.161-186, 明治書院.
- 金子務(1999)「自然記号・イメージとしての書物」, 図書館情報大学講演録『多様な「知」と情報化社会』(知の銀河系第5集), 図書館情報大学.
- 鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房.
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治(1993)『電子ネットワーキングの社会心理』誠信書房.
- 木坂基(1976a)『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房.
- (1976b)「近代文章の成立について」, 『表現研究』23号, p.1-8.
- (1988)『近代文章成立の諸相』和泉書院.
- (1992)「近代日本語の成立」, 永尾章曹編『日本語学』pp.190-200, 和泉書院.
- 木坂基先生退官記念論文集編集委員会編(1999)『日本語表現法論攷』溪水社.
- 岸本千秋(2000)「インターネットの日記サイトにおける表記の特徴」, 『武庫川女子大学文化研究所年報』12, p.1-15.
- 紀田順一郎「ふりがなを排すべし」, 『技術と日本語物語』第一期第四話「ふりがな 日本語の小さな虫」[online] www.honco.net/japanese/04/page3-j.html
- 京極興一(1981)「振り仮名表記について」, 『信州大学教育学部紀要』44, pp.222-210.
- 金明哲ほか(1993)「読点と書き手の個性」, 『計量国語学』18(8).
- 金明哲ほか(1994)「手書とワープロによる文章の計量分析」, 『計量国語学』19(3).
- グラスムック, フォルカー(1995)「チューリングの銀河系[1] ディープ・サーフェイス讃」大宮 訳 [1994], 『InterCommunication』12, pp.060-070, NTT出版.
- クラレ, ジャック(2001)『語の選択』倉田清, 中川恭明訳 [1976], 白水社.
- 小林芳規(1977)「表記法の変遷」, 林大[ほか]編『文字と表記』(現代作文講座6) pp.211-286, 明治書院.
- 小町祐史(1998)「紙から電子へ」, 『情報処理』39(6), pp.507-513.

- 小森陽一（1988）『文体としての物語』筑摩書房.
- コロミーナ,ピアトリス（1996）『マスメディアとしての近代建築』松畑強訳 [1994] 鹿島出版会.
- コンドラトフ,アレクサンドル（1979）『文字学の現在』磯谷孝, 石井哲士朗訳 [1975] 勁草書房.
- 西条美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房.
- 齋藤嘉博（1999）『メディアの技術史』東京電機大学出版局.
- 坂井利之（1968）『電子計算機』岩波書店.
- 坂部恵（1989）『鏡の中の日本語』筑摩書房.
- 坂本健一（2000）「ニュース映像からのテロップ出現検出と領域抽出に関する研究」神戸商船大学大学院修士論文.
- 佐藤理史（1997）『アナロジーによる機械翻訳』（日本認知科学会編・認知科学モノグラフ4）共立出版.
- 佐野真一（2001）『だれが「本」を殺すのか』プレジデント社.
- 塩田英子（2001）「文字テロップと推論モデル」, 『表現研究』74号, pp.47-56.
- 島田博司（2002）『メール私語の登場 大学授業の生態誌3』玉川大学出版部.
- 趙宣映（2002）「文の長さに関する一考察 志賀直哉の方法を通して」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第2部』第50号, pp.175-180.
- 白石信子（2000）「小・中・高校生のメディアライフの変容」, 『情報革命の光と影』pp.27-36, カルチュラルエコロジー研究委員会.
- 進藤咲子（1982）「ふりがなの機能と変遷」, 『現代表記との史的対照』（講座日本語学6）, pp.228-254. 明治書院.
- 杉本巧（2001）「三島由紀夫『新聞紙』における時間の表現 概念的隠喩を用いた分析」, 『文体論研究』第47号.
- ソシュール,フェルディナン・ド（1972）[1940] 『一般言語学講義』小林英夫訳 [1915, 1916, 1949], 岩波書店.
- タークル,シエリー（1998）『接続された心 インターネット時代のアイデンティティ』日暮雅通訳 [1995], 早川書房.
- 高島俊男（2002）「短歌のふりがな雑感」, 『短歌研究』59(2), pp.30-33. 短歌研究社.
- 武部良明（1979）『日本語の表記』角川書店.
- 玉井喜代志（1932）「振仮名の研究（上）」, 『国語と国文学』9(5), pp.74-82.
- チェスタトン, G. K.（1982）「折れた剣」中村保男訳, 『ブラウン神父の童心』 [1911] pp.298-326, 東京創元社.
- 千早耿一郎（1979）『悪文の構造 - 機能的な文章とは -』木耳社.
- 月村敏行（1990）「文体まで」, 佐藤泰正編『文体とは何か』, p.1-20, 笠間書院.
- 土田直鎮（1962）「平安時代の記録《歴史研究の手びき》7」, 『岩波講座日本歴史月報』7, pp.3-6, 岩波書店.

- デリダ,ジャック(1978)『根源の彼方に グラマトロジーについて』足立和浩訳[1967], 現代思潮社.
- トドロフ,ツヴェタン(1987)『象徴の理論』及川馥, 一之瀬正興訳[1977], 法政大学出版局.
- 外山滋比古(1997)『文章を書くヒント』PHP研究所.
- ドラヴネ,エミール(1964)『翻訳機械』別所輝彦, 沢辺弘訳[1959]白水社.
- 長尾真(1986)『機械翻訳はどこまで可能か』岩波書店.
(1989)『画像と言語の認識工学』コロナ社.
- 永田良太(2000)「接続詞カラの用法間の関係について」, 『日本語教育』107号, pp.36-44.
- 中野収(1986)『メディアと人間』有信堂.
- 永原康史(2002)『日本語のデザイン』美術出版社
- ネルソン,テッド(1994)『リテラリーマシン ハイパーテキスト原論』ハイテクノロジー コミュニケーションズ社訳[1980, 1992], アスキー.
- 野村真木夫(2000)『日本語のテキスト 関係・効果・様相』ひつじ書房.
- パース,チャールズ・S.(1986)『記号学』(パース著作集2)内田種臣編訳, 勁草書房.
- バシュラール,ガストン(1997)[1969]『瞬間の直感』掛下栄一郎訳[1932], 紀伊国屋書店.
- 浜野保樹(1997)『極端に短いインターネットの歴史』晶文社.
- バルト,ロラン(1977)『テキストの快楽』沢崎浩平訳[1973], みすず書房.
(1979)「文体とそのイメージ」沢崎浩平訳[1966]. 『現代思想』7(4), pp.106-113, 青土社.
(1987)『言語のざわめき』花輪光訳[1984], みすず書房.
(2000)[1987]『言語のざわめき』花輪光訳[1984], みすず書房.
- フィッシャー,スティーヴン・ロジャー(2001)『ことばの歴史 アリのことばからインターネットのことばまで』鈴木訳[1999]研究社.
- フーコー,ミシェル(1986)『これはパイプではない』豊崎光一訳, 清水正訳[1973]哲学書房.
- 藤田保幸(1998)「書記テキストにおける引用マーカーとしてのカギカッコの用法 池波正太郎『剣客商売』を例として」, 前田富祺編『国語文字史の研究四』pp.189-222, 和泉書院.
(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.
- ブルデュー,ピエール(2000)『メディア批判』櫻本陽一訳[1996], 藤原書店.
- ボードリヤール,ジャン(1988)『アメリカ 砂漠よ永遠に』田中正人訳[1986], 法政大学出版局.
- 細川英雄(1989)「振り仮名 近代を中心に」, 『漢字と仮名』(漢字講座4)pp.201-224, 明治書院.
- 本多勝一(1984)『日本語の作文技術』朝日新聞社.
- 前川守(1995)『文章を科学する』(1000万人のコンピュータ科学3・文学編)岩波書店.
- マクルーハン,マーシャル(1987)『メディア論 人間の拡張の諸相』栗原裕, 河本仲聖訳[1964], みすず書房.
- 町博光(1999)「日本語俗語の意味特徴」, 『日本語表現法論攷』pp.256-268. 溪水社.
- 三上俊治(2000)「メディアの利用実態」, 『情報革命の光と影』pp.143-157, カルチュラルエコ

ロジー研究委員会.

村上征勝(1994)『真贋の科学』朝倉書店.

森健一・八木橋利昭(1989)『日本語ワープロの誕生』丸善.

モリス,チャールズ(1960)『記号と言語と行動』寮金吉訳[1946]三省堂.

茂呂雄二(1997)「発話の型 教室談話のジャンル」,茂呂雄二編『対話と知 対話の認知科学入門』
pp.47-78, 新曜社.

文部省国語調査室(1946)「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」.

ヤコブソン,ローマン(1973)「翻訳の言語学的側面について」,長嶋善郎訳[1959],川本茂雄監
修『一般言語学』pp.56-64, みすず書房.

(1984)『言語とメタ言語』[1980]池上嘉彦,山中桂一訳,勁草書房.

家辺勝文(1998)『デジタルテキストの技法』ひつじ書房.

山口英彦(2000)「電子コミュニティにおけるエモティコンの役割」平成11年度神戸大学卒業論
文.

山城むつみ(1993)「漢文訓読について」,『批評空間』第11号,福村出版.

(1999)「ルビと漢字」,『InterCommunication』No.27, pp.63-67, NTT出版.

山田本生(1969)「テレタイプ・テレックスの文章」,平井昌夫編『文章表現ハンドブック』
pp.223-236, 至文堂.

山中桂一(1998)『日本語のかたち』東京大学出版会.

山本正秀(1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店.

由良君美(1973)「日本語の修辞力」,『言語』2(1), pp.11-18, 大修館書店.

(1973)「ルビの美学(上)」,『言語』2(7), pp.28-37, 大修館書店.

横井俊夫(1991)『日本語の情報化 その技術をめぐって』共立出版.

ランドウ,ジョージ(1996)『ハイパーテキスト 活字とコンピュータが出会うとき』若島正, 板倉
巖一郎, 河田学訳[1992], ジャストシステム.

リファテール,ミカエル(1978)『文体論序説』福井芳男,宮原信,今井成美訳[1971], 朝日出版社.

龍忠光・福士公三(2001)「専門化のノウハウを獲得し成長する自動機械翻訳支援システム」IPA
Technology EXPO ITX 2001 プロジェクト成果発表展示会, 情報処理振興事業協会.

ルイス,ジョナサン(2001)「翻訳とコンピュータ」,西垣通&ジョナサン・ルイス『インターネット
で日本語はどうなるか』pp.171-206, 岩波書店.

Becker, Joseph.D. "Multilingual Word Processing" Scientific American
(Intl.ed.) 251.1 (1984), 82-93.

Clark, Herbert.H. and Jean. E. Fox Tree. "Using *uh* and *um* in spontaneous
speaking" COGNITION 84 (2002) 73-111.

Levy, Steven. Artificial Life: A Report from the Frontier Where Computers
Meet Biology. 1992. pbk. Random House, 1993.

Milgram, Stanley. The Individual in a Social World: essays and Experiments.
Addison-Wesley series in social psychology, Reading, Mass.: Addison-

参考文献一覧(3章)

Wesley. 1977.

Nida, Eugene A., Charles R. Taber, and Noah S. Brannen. (1973) 『翻訳 理論と実際』 沢登春仁, 升川潔訳 [1969], 研究社.

Oudet, Bruno. "Multilingualism on the Internet" Scientific American 276.3 (1997), 77-78.

Wales, Katie. ed. A dictionary of stylistics. 2nd ed. Harlow, UK: Pearson Education, 2001.

『情報通信白書』(平成14年度).

4章 修辞学と文体論

- 4.1 文体・表現・修辞
 - 4.1.0 はじめに
 - 4.1.1 『表現学仮説』再考 ～表現と修辞
 - 4.1.2 表現学と諸科学
 - 4.1.3 共感覚と情報通信技術
 - 4.1.4 ジャンルとスタイル
- 4.2 言語とスクリーン ～児童文学に見る色彩語
 - 4.2.0 はじめに
 - 4.2.1 色彩・色彩名・色彩語
 - 4.2.2 水準に応じた色彩語の表現
 - 4.2.3 色彩語と文字
 - 4.2.4 色彩語と色彩
- 4.3 電子空間の言語的ふるまい ～ブログを手がかりに
 - 4.3.0 はじめに
 - 4.3.1 話しことばの包摂
 - 4.3.2 表現の一般性と個別性
 - 4.3.3 ハイパリンクの質と量
 - 4.3.4 ブログの表現について

本章では、主に身体と行動の問題を検討する。

具体的には、1節で文体（論）・表現（学）・修辞（学）の関係を、身体という点から整理する。2節では、色彩と色彩語とを手がかりに、スクリーンが表現に対して持つ意義を考察する。3節では、ブログをとりあげ、電子空間での新たな表現様式と言語行動について考える。

4.1. 文体・表現・修辞

4.1.0. はじめに

『表現学仮説』（今井1968：以下、『仮説』と略記する）は、表現学 という学問を打ち立てるべき仮説の提示を意図したものである。『仮説』は、表現学 創設の記念碑的書物として扱われ、以降、表現学は、言語研究における分野横断的な交流の場として機能してきたものと思われる。但、表現学の方法に関する技術的議論に対して、『仮説』は暗黙の前提とされがちであった。本節の1項では、『仮説』が最初に検討する問いかけ「文章はなぜ終わるのか」——第1章の標題でもある——をとりあげて理論的な検討を試みる。また、2項では、1項の議論を踏まえて、表現学と関連諸学との関係を検討し 表現学 の基本的構想を明らかにする。3項では、2項の帰結を踏まえ、表現におけるメディアと身体との関係を考察する。4項では、より具体的な議論を行う。

4.1.1. 『表現学仮説』再考 ～表現と修辞

文章を文法との関わりで論ずること、あるいは文法の拡張を文法でない何かのようにいうことは、おおむね時枝誠記による「文章論」の創唱に起源すると思われる。近時、時枝学説は、思想史的文脈から問題にされることも多いが、文法と文章論とに関して用いられた時枝の論法は、状況外の状況 を作り出すという解決であったと思われる。

「文章論」が創唱されたとき、それが文法論の（新たな）一部であるのか、文法論を応用した（新たな）一領域であるのかは必ずしも明らかにされていなかった。いいかえれば、「文章論」における「文章」は、「文法（論）」の研究対象の「内部でありかつ外部である」と指定されたわけである。文章が「内部でありかつ外部である」ことは、すなわち、「内部と外部との 境界 であること」と同じであり、また、「内部でもなくかつ外部でもない」こと（＝規定不能）と論理的に等価であるはずである。したがって、文章を文法論の対象とすることは、背理を内在せざるをえないように思われるのだが、その背理は「文章論」というネーミングによって背景化される。結局、文章論は、文法論の 拡張だが別の何か ということになり、「内部でありかつ外部」であることだけが印象づけられることになる。

それが主に文法学からの議論（文章論は文法論なりや）を呼び起すことになるのだが、論争は、時枝が、文章論は文法学の内部でないとする事で終結し、以降、文章論は次第に衰退の方向へ向かう。文章論の衰退は——文をモデルとするかぎり 文文法 を超えられないという——立論上の困難とともに、それが従来知られているいかなるやり方によっても学問として独立することができなかったからである。その点でも、「文章論」は、文法の内部に文章を囲い込むことを目指すものでなく、文法の境界として文章を位置づけようとするものであった。そして、その 境界 によって外部であるとされるのは、時枝（の言語過程説）によって「構成主義」と呼ばれる類のあらゆる言語理論であり、文章あるいは文章論は、国文法と言語学とを隔てる装置として利用される¹。

『仮説』が、時枝学説に対してとる立場は些か複雑である。『仮説』は、文と文章とがひとつの統一された全体であるという点で時枝学説に同意し、他方、そこに別種の統一原理が働くという点を批判する。『仮説』は、文と文章との「統一原理」に異なる部分があったとしても、共通する基本原理がなければならないと考える。そして、『仮説』が、そのような共通原理を求めるのは、「語と文とをまったく別の質的統一体とみなさないで、それらを同質のものとみなし、その同質のものが、次元のちがいによって、ちがった様相をしめすとみなしたい(6)」からなのである。

ここに表わされているのは、自然科学を範とする古い有機体モデルであるといえる。その際、下位単位の量的増加が上位単位を構成するのではないと考える点は妥当であり、また、下位単位とは異なる秩序を示すことによって上位単位が規定されると考えることが問題なのでもない。ある上位単位が必然的に次なる下位単位として連鎖すると見做す点が失当なのであり、文と文章とが同質の統一体か異質の統一体かということだけでなく、文の構成要素が語であるように、文章の構成要素が文であると見る[当然、このことと文の量的な増加が文章を構築するということとは同じでない]ところが錯誤なのである。文と文章とを同じ原理で把握して文は小さな文章で、文章は大きな文であるとみなすためには、形式と内容との関係を検討する必要が生じる。実は、文より大きな単位にあっては、出来事あるいは物語がその構成要素となる(バルト1979b:7)からである(後に見るように、『仮説』は、ついにかかる結論にかかわることなく、議論を別の形で打ち切ることになる)。これは、文章の形式上の完了が、その内容の完結とどのように関係するのかというテーマであり、実際に『仮説』は、文章が表現すべき内容の終結と文章の形態上の終了との関係を議論する。このほとんど技術的な議論に、もっともらしい理論的な外形を与えるのが、「文章はなぜ終わるのか」という題目である。そこで問われているのは、文章の終わりだけでなく、文章の水準で文がその構成単位であるという「仮説」なのである。

木坂(1992:88)は、表現学のいう「表現」が、動態(表現すること)と静態(表現されたもの)における二重の意味を持つと指摘している²。一方、今井(1975:1)は、表現を「何かを何かであらわすこと」と規定している。今井にあって、「表現」とは、熟語の成り立ちと同様に「現れ(=静態)を表わす(=動態)こと」なのである。くわえて、今井(1975:1)は、「『あらわす』とは、はっきりわかるように外に打ち出すことである。外に打ち出されたものは『かたち』をもつ」という。いいかえれば、表現は、表現主体の意図(=はっきりわかるようにすること)によって生じるが、それが表わす「現れ」は、知覚の網に掛かるもの(=かたち)ということになる。このことは、記号論が形態を有するものをすべて記号と見做すこと(JAKOBSON1984:31)とも関わるものだろう³。そして、表現主体が「現れ」を表わすという図式からは、現れ(記号)とその解釈(コード)とに着目すれば記号論的、図式と読み手との関わりに着目すれば文体論・文学理論的、記号化のプロセスに着目すれば言語哲学・言語理論的、表現主体の意図を情報意図と伝

¹これは戦争前後の状況下において構造言語学の最重要の一部が日本に根づかなかった(城田1995:245-47)ことの一面であるかもしれない。

²宮地(1984)、湊(1986)、栗原(1988)などにも同様の指摘が見られる。

³例えば、栗原(1988:10)は次のように指摘している。「人間の活動およびその所産のすべてが表現としての性格を持つとも言える。このことはそれがすべて記号としての性格を持つと言うのと同じである」。

達意図と見れば（スペルベル&ウィルソン1993：34-6）認知（一般）語用論的、表現主体に加わる制約と可能性とに着目すれば社会言語学（言語社会学）的・（認知）意味論的な立論etc...も可能であったはずである。しかしながら、『仮説』は、認識をいかに表現すべきかという視点を選びとってそれを表現学と定める。ここで重要なことは、どの視点が正しいかということではなく、表現を現れを表わすものとしてみる限り、『仮説』による表現学の構想は「表現」という枠組が必然的に明らかにするものとは違っているということである。

『仮説』において、表現学がその位置を定めるのは、固有の訳語が与えられるとき「表現学という名称の訳語であるが、わたくしはひそかにRhetologyとおきなおし使っている（4）」である。ここで、Rhetologyからは、ただちにrhetoricが連想される。この新造語は、修辞学と表現学との関わり（より正確には、些か一方的な宣言）を論じた後に提示されるものであり、レトリックとのアナロジーであることは間違いない。但、一般にrhetoricは、ギリシア語のレートリケー（rhetor [話し手]の形容詞形）に由来するので、Rhetology（あるいはRhet-ology）は、一見、異分析とも見える。但、これ以降は推測になるが、-logyに、言葉・談話・文章という意味（ex.tautology）と学問という意味（ex.philology）とを持たせようとし、また、日本語が[r]と[l]とに弁別機能を持たないことからRhetorologyなどとせず「レトリック」との音声（音感）の上での連続性を維持したのであろう。この訳語によって、表現学は、レトリックがさまざまに派生しつつ再生産されてきた西洋の知的伝統と繋がる。また、表現学という名は、主に国語学との関係を示しているものと解される。

「表現学」と「Rhetology」との表裏をなすネーミング（造語）によって、表現学は、国語学とも修辞学とも違うその独自性を主張できるのだが、それは「文章」を障壁に西洋言語学を隔てようとする時枝学説の試みからそれほど遠いところにあるのではない。「表現主体」という「語りつつある主体」の導入で、表現学は（不可避に）ラング（言語）に対するパロールの立場に立つとは言うものの、それはラ・ラング（一言語）の立場にとどまることを含意していたのではないだろうか。実際に、今井（1968：2）は、『仮説』が「国語表現学」に終始していると認めている。しかし、『仮説』が構想するのは、より一般的な「表現学」なのである。なぜか。

レトリックは、歴史上、幾度か解体され、また再生もされてきたが、その議論のテーマは、語義変換、とりわけメタファーを中心とする転義に移ってきたといいうる（バルト1979a）。メタファーに関していえば、その理解には三つの段階が区別される（レオンダー：1986）。一つは、メタファーを言語における装飾と見る。一つは、表現上の必須手段であると見る。一つは、認識上の必須手段であると見る。最後者は、認知論的立場であり、それは「～である」ことと、「～的である」こととを同一化するものである。これは、「女性^{セックス}である」ことと「女性的^{ジェンダー}である」こととを共に文化的に構成されたものとしてみる「セクシュアリティ」の観点が社会学に重要なパースペクティブを与えたのと同じように、「メタファーである」ことと「メタファー的であること」とを同じ神経科学的作用（認知方策）としてみることで、修辞学に新たな視点を提供するものである。言語学においてこの視点を採用することの評価は、未だ定めがたく、事実、語学的研究の多くはメタファーを「表現上の必須手段」——メタファーに依ってしか伝えられない何かがある——と見做してきた。そして、その主要な意味あいには、レトリックが弁論術・文章術であろうと、「発見的認識

の造形（佐藤1978：15）」であろうと、何らかの意味で伝達における「発想」に関わっているということである。

Rhetologyというネーミングは、表現をこの点に関係づけることによって、表現の構造を「発想」によって決まるものとして、表現を「発想」が依拠しあるいは可能とする何らかの伝達機能を担うものとして、いずれも目的論的に把握させる。ここで、表現のもつ二重の意味を、現れ＝文章、表わす＝表現と置き直してみると（この置換は『仮説』の用語法に外れるものではない）、文章は「発想」によって構造化され、特定の伝達機能を担うもので、それを表現主体が表現しようと意図する（あるいは意図して表現する）ことになる。したがって、文章は、常に何かのためのものでありうることになり、それが表現のためのものであるとき、文章は現れを表わすもの以外ではなくなる。そのときに、文章を表現学の研究単位に置くことは、その出発点で『仮説』がとることのなかった視点を呼び戻すことになる。文章を基本単位と指定することで、現れを表わすという図式が可能とする諸学は、表現学の一部としてあるいはそれに協同すべきものとして配列されることになるのである。これこそが、文法学の分析単位が文で、表現学の分析単位が文章であると『仮説』が主張することの意味である。

文章というひとつの独立した分析単位によって、表現学の名のもとに放棄されたものどもが、いつの間にか困り込まれることになること、疑問文「文章はなぜ終わるのか」の果たす役割のひとつが理解されるであろう。かかる問いは、表現学の構想を可能にし、修辞学との距離を宣言することによって（『仮説』では、このことに合理的理由は示されない。「もちろん表現学が修辞学を排除する理由はない……ただたくしは表現学がそのまま修辞学と同一であるとは考えないだけのことである（4）」）、表現学を学際的に位置づける。

ここまでの議論をまとめれば『仮説』が「文章はなぜ終わるのか」と問うのは、そうすることによってしか表現学の位相を見極めることができなかつたからである。しかも、それは、その発問が表現学の本質的な問題を構成するからではない。「文章はなぜ終わるのか」という疑問文は、有機体モデルのほころびに過ぎないものを理論的な問題であるかのように見せしめ、また文章という既成事実化された単位を表現学にふさわしいかたちで定義するための修辞疑問なのである。

西洋の知的伝統と表現学との関係は、「終わり」に対する問い方の違いとしても見出される。科学は「どうやって」と問いかけるものであり、たとえば視覚の仕組みを記述することは、「なぜ見るのか」には関わらないが「どうやって見るのか」という問いの十分に精密な回答とはなりうる。シェグロフ&サックス（1989）は、「単一の会話」という分析単位を設定することで、会話がどのように終わるのかを詳細に記述することができた。一方、『仮説』は、文章という「表現上の」単位を設定したのであるから、文章の終わり方を研究することもできたはずである。しかし、『仮説』の発問は、「文章はどのようにして終わるか」でなく、「なぜ終わるか」という形式をとった。なぜか。

なぜかと問うかぎり重要なのは、答えではなくその問いである。問いが問いを作りだしてゆくその動きである（ガーダマー1995：31）。しかし、『仮説』は、問いに対する答えをむしろ重視することで、問うことの意味を自ずと矮小化してしまう。結局、「文章はなぜ終わるか」という問い掛けのもつ意味のほとんどは、文章を「終わらせる」表現主体の存在に回収されるのである。しか

も、表現主体を打ち立てることから表現学の仮説が必然的に帰結するわけではないのである。

『仮説』において、文章の終わりの問題は、「表現主体」という十分に検証されない概念の導入によって劇的に解決される。『仮説』は、文章が終わるのは、表現主体が表現に先立って「全体」（これは、認識の全体であり、表現の時間的構造＝筋立ての全体である。したがって、「意図の全体」と読替えても差支えはあるまい）を把握しているからだという。このことによって、『仮説』は、今度は「文章はなぜ終わらせうか」というねじれた問いをひねり出すことになる。これは、表現主体の存在が単純にその答えとなる以上、「表現主体がどのようにして文章を終わらせるのか」ということとは本質的に違っている。その結果、ここでも、内容と形式との、表現すべきこと（認識）と表現しうること（文章）との、あるいは、プリンス（1996）の用語を借りれば、「物語るもの」と「物語られるもの」との不一致という問題が繰り返される。『仮説』が、この問題に拘泥するのは、そこでこの不一致が解決されなければ、「文章」を（誰かが）「終わらせるもの」であるといいつらくなるからである。そして、ここに至って問いの形式が問うことを正当化する訳にはいかなくなる。すでにモデルの理論的不整合は、「なぜ」と問うことが醸し出す何がしかの深遠さを超えてしまっている。その結果、『仮説』は、不一致の存在をやむを得ないものとして認め、その不一致を補うものを「余情のかもしかた、象徴（23）」その他であると議論することになる。「文章はなぜ終わるのか」という問いの核心は明らかにずらされ、議論の矛先は、ついに言語や文学の存在論的な問いへと向けられる。「なぜ言語／文芸は可能であるのか」と『仮説』は問うのである⁴。『仮説』以降、表現学で「文章の終わり」の問題は、余情をかもすための手法の論、文章種に応じた「結び」の分類学——主に小説の手法が明らかにされる——などとして論じられ、研究されてゆくことになる。

このような事情で、表現学は「文章の終わり方」を健全な形で研究することができなくなったために、言語のメディアとしての側面を見落すことになる。それは、書記言語の物質的なあり方（書物としての側面）と言語的なあり方（テキストとしての側面）との関係には到達しない。しかし、テキストの終わり方は、そのとる物理上の形態（書物）によって制約されていた（鈴木1998：191-3）のである。『仮説』は、「文章」がいつでもすでに終わっている自明な単位であると認めることで、文章を終わらせる「表現主体」の立場に立つことができたのだが、その思考が活字文化の産物であったことは疑いようがない。

「表現主体」を中心化する『仮説』は、不十分なデータに対してはどのような理論も成り立つ余地があることを証明しようとしているかのようである。現在であれば、あるいは、インターネットやWWWというイメージさえ与えられれば、『仮説』において「表現主体」と「文章」とが果たした劇的な役割は、読み手とハイパテキストとにその席次をゆずっていただろう。つまり、「文章はなぜ終わるのか」という問いに対する回答は「テキストには読み終えるべき読み手がいるから」ということにならざるをえない。

⁴付言すれば、『仮説』のキーターム「レフ」「レフのレフ」「直観」はこれ以下の文脈に現れる。

4.1.2. 表現学と諸科学

表現学が、書き手の主体的で実体的な存在を暗黙の前提としてきたことは否定しがたい。実際に、表現学で、書き手の不要性が説かれたことはほとんどどないが、読み手の重要性はたびたび指摘されてきた。但、[4.1.1](#)の議論は、単に「いままでの表現論は、やや表現過程に重点を置きすぎている（山口1979：318）」と指摘するものではない。『仮説』において表現学がどのように建てられたのか考察する中で、(1)文法との関わり(2)自然科学からモデルを借りることに関する論点を引き出すものである。

小松（1997：4f.）は、言語研究を「言語の単位を前提として日本語という言語を明らかにする研究」と「表現の枠組みを前提として日本語による表現を明らかにする研究」とに分け、前者は「文法学・文法論」、後者は「表現学・表現論」と呼ぶべきであるとする。このとき、「文法学・文法論」は「国語学者の文法研究」をいい、「外国語研究者、言語学研究者」「若い研究者、外国人研究者が積極的に参加する」文法研究＝「新文法」は「表現学・表現論」に属するという。そして、「新文法」における「文法的枠組みそのものの放棄あるいは外国語の文法的枠組みの移入という状況に対しても警鐘を鳴ら（湊1997：2）」す。このように文法学と表現学とを分離し、同時に国文学と西洋言語学とを隔てられたものとして作りだす枠組みのとり方は、「文章論」を検討する中で既に見たことであろう。実際に、小松の著作『日本表現文法論』に対して、糸井（1997：61）は「小松氏の根底にある言語観に最も近いのは、時枝誠記博士のそれである」と指摘している。

しかし、文法と表現学との関わりが論じられるとき、国語学が規準とされるのでないやり方が探られても良いはずである。認知科学は、多分に、工学的関心から発したものであるか、あるいは工学的関心をひろくひきおこすものであろう（ライバー1994）。生成文法が、認知科学の中にその位置を占めると考えられるとき、その工学的な側面が見落されるべきではない。実際に、機械翻訳や工学的言語研究の多くが、生成文法をその参照枠として採用している。人工知能研究は、知的と呼びうる構造体の実現を通じて知能の工学的な構成を目指すものではあっても、脳そのもの——あるいは人間の脳をも支配するような脳——を造りだすものでなく（「人工頭脳」という古い訳語がかかる誤解に力を貸してきたことはよく知られている）、脳そのものを工学的に再現する技術的・現実的可能性とは関係がない。同じく、生成文法は、文法と呼びうる形式体系の実現を通じて言語の公理的構成を目指すものだろう。言語を文法という形式体系に還元し、その社会的側面や人間的意味から目をそらすのでも、あるいは（伝統）文法に対して、モデルによって特化された「ある種の文法」を提案するものでもなく、まして還元や特化がなされなかった場合に、それらが孕むかもしれない困難とは何ら関係がない⁵。但、表現の問題が、生成文法と交差する地点はおおよそ想像がつかない。例えば、言語の普遍性が（集団）遺伝学的な問題とならないのは⁶、そこに「差異」がないからであり、そのような枠組で表現を論ずることができうとは思われない⁷（[0.2](#)）。

だからといって、統語論から表現への経路が確保されていないということではないだろう。それ

⁵その意味では、生成文法を文法から飛躍した「冠文法」と見る（永尾1997：36-7）のは不注意だろう。

⁶このことは、生成文法の試みを批判するものでは本質的にはない。言語において人間には遺伝的差異がないのであるから、その立場は正当である。

は見出されるべきなのだが、同時に、少なくとも「言語」という枠に何かを主張するものでなければならぬのではないか。そう考えるとき、自然科学を、新しいものの見方や考え方を提供する発見法の一つとして研究に反映させるべくつとめることが重要になるだろう（それは「情報」という問題を考えるときには殆ど必須であろう）。

但、科学や技術の流入に限らず、新たな事物との接触は、往々にして困難な局面を引き出す。中村（1975）は、既に、「表現主体」という概念がコンピュータ作者という問題を引き入れざるを得ない不可避性について論じている。このことは表現主体を措定することによって成り立つ学問が、極めて記号論的な枠組に接近せざるを得ないことを明している。例えば、エーコ（1996：11）は、意味作用を伴う記号過程における発信点は人間に限らないが、受信者は人間でなければならないとしている。幸いにして、「文体論」は、それがテキストの個別性を論じるという学問上の伝統を利用して、コンピュータ＝表現主体に対して個性や世界観を問うことを殆ど無意味な作業であると認めることができたのだが、「表現主体」によって引き起こされる表現に関する学である「表現学」は、栗原が指摘するようにあらゆる表現を対象としてゆかなければならぬはずである⁸。そして、それは人間の営みという括りでは統制できないものであるかもしれない。

しかし、DNAの塩基配列（ということは分子における化学法則が含まれる）や分子が構成する結晶のかたちを表現と見做したり、コンピュータプログラムや空中を飛び交う携帯電話やPHSの電波を表現の問題であるというのは、どこかが間違っているに違いない⁹。永尾（1988：19）は、「表現学の対象を言語表現に限ることは、現実的には当然のことである」としながらも、言語表現に「広く表現一般に通じる汎性的な一面と、言語表現としての特性的な一面と二面が同時にある」とすると、その二面性の追及を避けては通れないことを認める。しかし、「表現一般について、そのすべてに通じることは、よほど超人的な能力の持主でもない限りできることではない（21）」ものである。この難題に対するひとつの解決は、永尾（1988）によれば、「表現一般について、そのすべてに通じていることが必要条件だと考えなければよい」というものである。現実には、一人ですべてを背負うことはないとはくことによっても、表現学の対象を言語表現に限ることはできないのかもしれない。しかも、対象が言語表現に限られたからといって、表現学の背負うものが軽くなるのではない。確かに、DNAの塩基配列そのものはいかなる意味においても表現ではないだろう。それはコンピュータのオブジェクトコードが表現でないのと同じであり、人間が直接理解できないものは表現ではないと言い切れるからである。一般に、表現の研究は「人間」という概念を必要とするが、それは作者の精神世界を云々するためではなく、それが表現と表現でないものと

⁷たとえば、「入会のすすめ」は、以下のように述べている。「わたくしたちは、つねづね、ことばによる表現の微妙なはたらきに感動し、それにひきつけられ、その醍醐味を味わっています。けれども、なぜそうなのだろうかという反省は、必ずしも徹底してはいませんでした。従来は多分にその体験を個々の表現効果の分析で解明しようとしていました。表現全体の問題として、それを考察の対象にするような動きは、あまりみられなかったように思います」。

⁸表現学会第34回全国大会シンポジウム要旨（湊1997）による。「『表現学』とは『表現』という観点から人間の営みのいっさいを対象とするものである。それは言語・文学はもとより絵画・音楽・生活・動作、はてはDNAの配列にまで及ぶであろう（2）」。

⁹現実には、表現学は、それが「天からの手紙」であったとしてさえ「雪は水分子の自己表現である」というわけにはゆかないのである。

の違いを正当化するということである。逆に言えば、人間が理解できるものには表現としての権利があり、その意味は、表現学がチューリングテストに依存することで工学的立場に立つということか、あるいは科学論文に記号化されて現れたDNAの分子構造やコンピュータプログラムのソースコードなどが依然として表現学の対象としてとどまるということのどちらか（あるいは両方）である。じつは、表現学が求めるべきもののひとつは、どのようにすればプログラム言語やデオキシリボ核酸の塩基配列の記述をその対象から放棄できるのかについての理論的な立場なのであろう。しかし、かかる理論は未だ確立されているとは言いがたい¹⁰。

言語学が文で終わり、そこから物語論が始まる（バルト1979b：44）ように、生理学（＝認知）が閉じ、生態学（＝行動）が始まる地点を、われわれは通常 身体 と呼んでいる。しかるべく、言語は文を避けることができず、コミュニケーションは身体を避けることができないのではないだろうか。その意味では、「どんな情報の媒体も身体性に結びついている（上野1999：140）」ことは確かであろう。小野原（1999）は、表現学と記号論との類縁性、並びにその学際性（境界の曖昧性）とを確認させる。そこでは、現代のストリート＝ファッションが自己表現における異化の戦略として称揚されるが、その論述には、衣服を語と、身体を文とするメタファーが利用されている。このようなメタファーの働きは、ことばの研究とコミュニケーションの研究とを、いいかえれば、言語と情報とを結びつけるという意味で、20世紀末にわれわれの置かれた知的状況¹¹を反映するものであるといえる¹²。それが必然的に到達する単位であるということにおいて、文をめぐる「言語」の議論は、身体をめぐる「情報」の議論と交差する。しかるべく、文法と表現学との関わりを考えるとすることは、メディアと身体との関係を考えるということであり、そこに否応なく介入してくるの工学と技術とである。問題は、それを**表現の問題**として どのように論じるのかということであろう。表現学は、活字の中で安穩としてはおられまい。

4.1.3. 共感覚と情報通信技術

スタニスワフ・レムによるSF長編に『ソラリスの陽のもとに』がある。このテキストは、アンドレイ・タルコフスキーによって長編のフィルム（邦題『惑星ソラリス』）になっている。いずれも古典的名作といえる両者において、主人公ケルビンの一貫した行動原理 モノを目で見ようと し、ことばで話しあおうとし、互いの気持ちを理解しようとする が彼の困難の源泉となり、そのことを通じて未知の状況での倫理が問われる図式は共通している。しかし、レムがフィルムの脚

¹⁰論者の意見では、その試みに対する理論的な援助は、それ自体をモデルにすることである。表現には、動態と静態とが区別される。更に、表現主体という概念は、表現に先行する価値を確保し、そのことを意図や世界認識として理解する。ここで行われているのは、結果とプロセスとが、どちらからどちらに対しても（理論的に）特定できなければならないという思考である。コンピュータや遺伝子は、このような因果律の否定を具体化するものであるべきだろう。そこでは因果的關係でなく相対的關係の存在が予定され、1対1の關係があったとしてさえ、それを特定する汎用化された手続きの非在を明らかにしている（0.2, 0.3）。

¹¹例えば、「来るべき21世紀には、『言語』というキーワードは『情報』に変わると考えられます。言語からのアプローチというのはどうしても人間中心主義に陥ります（西垣1998：181-2）」。

¹²4.1.1および4.1.2は、1999年10月執筆の論文をもとにしている。この記述は現在の時点（2004年）では適当でないが、議論の文脈上、特に改めなかった。

本に満足せず、大きなもめごと発展したことはよく知られている。実際に、全体的印象　レムのテキストが明快なストーリーであるのに対して、タルコフスキーのフィルムはひどく難解で、多くの演出は一般の理解をはるかに超えている　をはじめ、両者には大きな違いがある。ここでは、両者に見られる感覚の表現を簡単に考察することにしたい。

一般に、言語では、聴覚は視覚の下位セグメントとして存在している。会話の場面でも身振りや表情などの非言語的要素が重要であると指摘され（エンゲル1981）、あるいは、音声による呼びかけが情報源の視認を導くとされる（ビューラー1983）。ここで確認されるのは、視覚と聴覚とが明確に区別されていること、そして感覚の区別があるところで感覚と感覚とは同期するということである。一方、その区別の溶解は病理といえる。レムのケルビンでは、いるはずのない人影が困難のはじまりとなるが、ひとたび視覚が疑われると、聴覚や触覚も役に立たず、ソラリスの海は認識を実体化し頭から心にも入り込む。ソラリスでの体験は、視覚が信じられないときは他の感覚も信じられない（視覚のみが独立して有効であったり無効であったりしない）ということでは、暗闇を手探りで進む体験とは異なり、共感覚体験の異常さ（サイトウィック1994）に似ている。事実、ケルビンは異常な感覚体験に錯乱することなく、その良心に従って振るまおうとする。レムのケルビンの困難は、視覚を中心とした感覚のハイラーキーと両立しない環境にあるわけである。

二つのソラリスは、ソラリスに留まるケルビンの同じ決心あるいは諦観をめぐって、論理性と情緒性とに分岐するが、それは環境に感覚をどのように適応させるかという選択でもあるように思われる。レムのケルビンは、ソラリスの海と手を触れあうことで、触覚のもとに感覚の全体性を確認する。海と接触したケルビンが「理論は現実の感覚にとってかわることはない（301）」と感じるとき、感覚はすでに理論と比較しうるだけの合理性を整えている。諸感覚が境界を失っているのではなく、シームレスに結合されているということである（これは、MRに似ている¹³）。そこで、感覚の秩序は、状況（理解しえないものを理解すること）の両立不能性に絶望しつつハリーを待つレムのケルビンにわずかに残された期待となる。ついに謎は謎として残るとはいえ、レムのソラリスは、未知の理性的存在との接触　という直接的な状況がどのようなものかという徹底された空想の結果というべきだろう。

他方、タルコフスキーのフィルムでは、未知の理性的存在との接触がなにゆえに起こるのか突き詰められる。「なぜ」と問いかけたところで、もしも、フィルムが、未知の理性的存在がどこにでも（地球上やあるいは人間の中にこそ）ありうることをいうだけならば、むしろレムの受け容れるところであつたらう¹⁴。しかし、フィルムのラストシーンは、明らかなルール変更を含んでいるように思われる。いったいレムのソラリスは、あくまでも何らかの物理・化学法則に還元される科学的真理を戴く世界である。しかし、タルコフスキーのケルビンは、諸感覚の区別の溶解の中に進んで身を投じることで、現実と非現実との混淆の中に、妄想とともに希望を見いだそうとする。しかも、諸感覚の区別（細分化された秩序）ないしは統合（階層化された秩序）が都合よく喚び戻されるのでなければ¹⁵、他にとるべきみちもありえない。そこで示唆されるのは、技術と道徳との根本的不整合である。そして、その状況が、「交通」ないしは「通信」の発達あるいは複雑化と関わる

¹³VRは、物理的な現実を事実上の現実と置き換えようとし、MRは、物理的な現実を事実上の現実とシームレスに連結しようとする。

ことも疑いえないものと思われる。ヴィリリオ（1998：47）は、テレプレゼンスが固有の身体を固有の世界と関係づける現前を否定して身体の配置を限定できないものにするとして「テクノロジーの速度は...私たちの固有の身体を決定的に失わせるように仕向けてい」と指摘しているが、現在の直接性が絶対的であることはICTの本質だろう。ついに、タルコフスキーのケルピンは、感覚の基盤を身体に置くかぎりにおいて、交通や通信のテクノロジーと道徳的に共存することはできないのである。

4.1.4. ジャンルとスタイル

テキストにおける時間は、読み手との関わりにおいて現れる。読み手は人間でしかなく、やむなく時間と空間との中で行動するからである。e-text環境においても、読み手が完全に電子化されることはない（人間のように言語を理解する機械はない）。したがって、ネットワークに接続された読み手は、コミュニケーションにおいて速度を体感することになる。ネットワーク上の読み手を考えるとき、テキストが言語的コミュニケーションにおいて「超-言語学的装置」（クリステヴァ 1985：18）であれば、それは知の領域だけでなく「結合知」（ケルコフ1999）の問題であるともいえるだろう。そして、われわれはまったく意味のないことを覚えたり考えたりはできないはずであるから、テキストは無意味を許容しないものであり、e-textあるいはハイパテキストではすべてが有意味な切片なのである。一方、誰にも読まれることのない書物にはどのような意味があるともいえず、紙のテキストは書物という物理的形態においてまったく無意味であることができるものと思われる。

書物とテキストとは、ひとつの書物がひとつのテキスト（の全体）に対応するという理解において自然な結びつきを持っている。また、「ジャンル」は語源的に何かを生成する力を含意するが、その生成的な面に注目すれば、種々の言語レベルでジャンルとそれが生み出す様式との対応¹⁶を考

¹⁴ 『ソラリスの陽のもとに』は、しばしば「想像を絶するものを想像すること。理解不能なものを理解しようとする（森下1990：64）」を問うテキストであるといわれる。SFでは古くから異なる環境が異なる生命を進化させるというプロットがとりいれられており、特殊な自然環境の中でひとつの生態系が巨大なひとつの有機体だというアイデアも突飛なものではない（ステイブルフォード1985：74,126）が、その有機体との接触は様々な難問を引き起こす。レムは「地球上の現実が持つ条件とは似ても似つかない現象」のもとでの「他の惑星の理性的存在との接触のありうべき可能性」を通じて、人間に生じる「一連の認識的、哲学的、心理的、倫理的な性格の問題」を語ろうとしたのだと自作解説をしている（文庫判あとがきによる）。レムの描くところは、理性的存在が全く異質のものであれば、接触の中に交感がうまれることはないという状況である。それは同時に、同じ場＝物理法則を共有することになれば、相手がいかに異質な他者であっても接触に何らかの結果が伴うという状況設定でもある。レムは、他者との接触をめぐるSFの3つの紋切り型（勝つ・負ける・引き分ける）を指摘している。生活の基盤を共有するなど、他者同士が徹底的に争いえない状況に置かれれば、共生ないしは協力関係が生まれるべきだという考え方はしばしば表明される（例えば、ワルシャウスキー2003）。ただ、共生は安定した均衡を意味し、必ずしも平等な関係でない（実験装置の中などの一定の生活空間を共有するとき、両者の相互[影響]関係によって、一方のヘゲモニーのもとで安定した共存状態に入ることがある。このような「自分だけが生き残ろうとしても、結局は他の生物と共存せざるをえなくなる現実（四方1997：61）」は「競争的共存」と呼ばれる）。

¹⁵ ソラリスにおける分断と統合とについては、室井（1988：206ff.）参照。

¹⁶ バフチン（1988）など参照。

えることができる。そのとき、テキスト型（テキストジャンル）という点からは、その商業的側面を見逃すべきでなかろう。書店において、テキスト型はほとんどそのまま商品の陳列法である。書物が一個のテキスト全体と対応していると理解される限り、テキストジャンルの区別は商業的につくられる側面を持つものになるだろう。しかし、電子本では、商品に想定される物理的一個性や分離性がない。e-textにおいて、テキストの全体性は読み手の読む行為の中にのみ与えられていくものである。電子出版が商業ベースに乗りにくいことは一般に知られているが、それは電子本がジャンルとの対応を紙のように実現していないということだといえる。実際に、「書物」の電子化は、実体的に商品価値の低いものに対してしか進行しない。たとえば、高価なメディアに入り込めないとき、人は廉価なメディアを選ぶことがある。紙のメディアは、1対1コミュニケーションでは十分に廉価である。しかし、1対nコミュニケーションでは、nの値が大きくなるにつれて困難になり、n対nコミュニケーションは非常に難しい。そこで、代替手段を提供するのがウェブであり、e-textである。その限り、それが事実上の対面空間を作りだすとしても、経済原理の及ぶわれわれの現実なのだが、同時に、そのヴァーチャリティの基盤は、通信の速度と人間の身体がネットワークに接続されているという事実である。スクリーンを介してネットワークに接続された身体は、既存の身体を裏切り、ハイブリッドなものになってゆく（ポスター1991：214ff.、タークル1996など参照）といわれるが、それはジャンルという生産性にも影響を与えるはずである。また、文体にジャンルとの関係で論じられるべき面がある（モリニエ1994など）のであれば、スクリーンのメディアとしての性質やネットワーク上の（新たな）表現様式などが文体論の課題となりうるのである（[4.2](#)、[4.3](#)）。

要約：『表現学仮説』は、不適切なモデルを用いて「表現主体」を中心化したことから言語のメディアとしての側面を見落している。表現の研究は、表現主体・文章にかわって読み手・ハイパテキスト（e-text）という概念を採用すべきである。そのときに、メディアと身体との関係を表現の問題として考える必要が出てくることになり、表現の研究は工学と技術とにもしかるべく配慮しなければならない。既存の身体には情報通信技術の進歩と両立しない部分があり、われわれの身体はネットワークに接続されたハイブリッドなものになってゆく。そのような身体の領域では、スクリーンの性質やネットワーク上の表現様式などが文体論の課題になる。

4.2. 言語とスクリーン～児童文学に見る色彩語

4.2.0. はじめに

身体の振る舞いは、表現の重要な要素であると考えられている。特に、表現として為された身体的振る舞いはジェスチュアと呼ばれ、基本的に口頭語と同時あるいはその前後に生じるものとされる(喜多2002)。われわれの話しことばは、言語的表現と非言語的表現とからなるものである。マルチメディアであれば一層明らかだが、書きことばを実現する書字空間も同時に言語的表現と非言語的表現とからなっており、後者は表現としてディスプレイ(システムの表示デバイス)の上に現れる。言い換えれば、書きことばで振る舞いの要素はディスプレイ上に実現する。電子環境において、文字は紙の上と同様に外化された記憶であると同時に振る舞いの要素となるものだろう。また、ディスプレイは基本的にスクリーンの性質を持つが、Welch(1999)は、レトリックを相手の行動に影響すべく働きかける行動と捉えるときに、スクリーンの性質に注意するよう指摘している。

寺山(1974: 143f.)は、映画がスクリーンの外へ拡大することなくスクリーンがいつまでも四角であることは、映画が映画でしかないことと同じだという。コンピュータのディスプレイデバイスとしてのスクリーンは、フラットパネル平面液晶化に伴っていっそう四角くなった。そして、その性能が向上するほど、それが映像でしかないことには気づきにくくなっている。ディスプレイ上の情報をプリントアウトして閲覧するときにも、われわれは紙を一時表示用のスクリーンと見做しているといえるだろう(紙にスクリーンの性質を与えるものに「リライタブルペーパー」がある)。いまやスクリーンはことばの主要な舞台となって、われわれはウインドウとページとの違いにも鈍感になっている。ここで「四角」が「視覚」であることはにはすぐに気づかれるだろう。オーラル口頭コミュニケーションでノンバーバルすら非言語的要素の力がむしろ強い(エンゲル1981)ということは、コミュニケーションがわれわれを視覚から解放しないということ、すでに意味しているものと考えられる。このことは、スクリーンの電光的性質に基づいて、とりわけその色彩の実現に関して文体論の問題になるものと思われる。

「色彩語」は、使用頻度・割合、共感覚表現・象徴性などの種々の観点から文体論の素材とされてきた。本節では、色彩語を文体論で研究することに関わる論点について考察する。まず、色彩・色彩名・色彩語の各水準を区別し、また、それら相互の関係を考える必要があると論じる。そして、その関係の教えるところをe-textとの関わりなどから見てゆくこととする。

4.2.1. 色彩・色彩名・色彩語

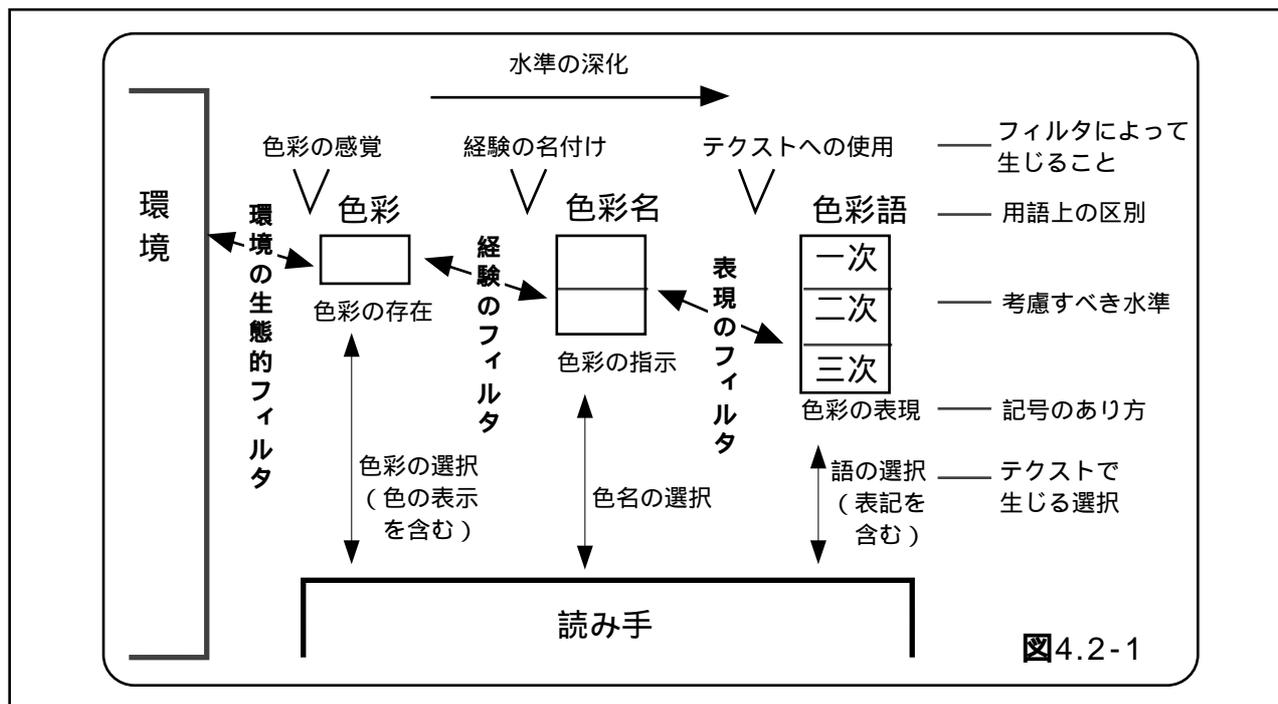
色彩語の研究では、色彩・色彩名・色彩語の水準を区別することが重要であると考えられる。ここでは、図4.2.-1のように考えたい。これは以下のような概念・問題を含むものである。

色彩は一項関係、色彩名は二項関係、色彩語は三項関係である。上位水準は下位水準を包含し、色彩語はそれら三者間の関係体と理解される。それらの象徴性は、視覚性と言語性との交点に現れると考えられる。言い換えれば、その象徴性は、コミュニケーションにおける事実である。文体を

4.2. 言語とスクリーン

コミュニケーションの中に考えようとするれば、色彩に関して、「（眼でなく）脳が見る」というだけでなく、^{アクション インタラクション}行動と相互作用とを問題とする「人間が見る」という生態学的立場が必要となるだろう。認知的水準を包含する行動的水準が考慮されるべきであり、物語に投影された行動の軌跡・語りの構造、メディア的状况にも注意が必要となる。

膨大な情報が容易にアクセス可能な状況に置かれているとき、情報を処理する側には、適切な選択性のある情報のフィルタが必要である。色彩は光を個体がフィルタした産物で、色彩名は色彩の経験をフィルタし、社会的に機能する¹。色彩語は色彩名に対するフィルタで、意味作用を生ずる（色彩名と色彩語とが必ずしも一致しないという点に表現性の一つの源泉がある²）。但、これは



類と例でなく、色彩名が含意する様々な種類の経験の（受け手側における）解釈を色彩語が選択すると考えるべきであろう。色彩語の文体性は三段階の（選択的な）フィルタを経て語彙として標準化されている。そのとき、外界の情報が受容器にもたらされ、一連の処理の結果受け手に意味作用^{インタラクティブ}を及ぼすという、周辺から中心への認知的筋道を描くべきではない。環境は、本来的に相互的であろう。外界の情報と第一次フィルタとしての身体・受容器との関係は双方向的であり（見るから見える）、色と名との関係（経験を名付け名付けられた経験を経験する）も、名と語との関係も双方向的であると考えられるべきだろう。言い換えれば、色彩は色彩名としてシミュレートされ反復される中で存在し、色彩語はその個別言語的な使用である³。

このように考えるとき、色彩語における語と色彩との象徴性は、時に、区別されにくいものであり、テキストが紙上に黒色インキで実現するという前提が疑えないものであったからには当然であった。テキストは複雑な構造を有し、物理的な諸手段の支えなしでも存在しない。ここで、テキスト

¹経験の質感としてでなく色彩と色彩名との対応の混同と理解された「色覚異常」に対する社会の不公正な取り扱い（市川1999）はこの見方を示唆する。

²語と名との違いは（差異化の度合いにおいて）後者が二値論理で扱えるところにある（河西2002：25）。

の電子化は、選択可能な（等価な）複数の読み方を提示する⁴ものだとしても、テキストの受容過程をめぐる社会的要因の一つに過ぎないが、影響はいずれ色彩語の読解にも及ぶ。レベルの区別は、e-textについて更に明らかである。

つまり、デジタルメディア環境においては、本来フィルタされるべき光が直接に訴えかけてくる。デジタルメディアは電光メディアであり、それがマルチメディアを指向する以上、必然的に多色多光的である。つまり、現在のメディア的状况に考えれば、一次性的記号（色彩）の文体への組み込みを考えるべきではなかろうか。色彩語に語の意味に還元できない効果があるのは、色彩語が意味や指示として色彩を持つだけでなく、その物理的実現に必ず色彩を（従来は、多くの場合、多色性を被覆するモノクロを）伴うからでもある。

4.2.2. 水準に応じた色彩語の表現

12

以下、『はてしない物語』『スカイの金メダル』『トロッコ』の3作品を例に、物語の中で象徴的にはたらくときに、先の図式のそれぞれのレベルがどのように利用されるのかを簡単に見ておく。

ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』は、本文をワインレッドとダックグリーンの二色刷りにし、それぞれが物語内の現実世界（バスチアンが読み手として『はてしない物語』に出会う水準）と物語内の物語世界（バスチアンが行為項としてファンタージエン国に出会う水準）とに対応し、両世界間の移行が色彩の交替によって示される。ここでは、一次レベルが利用されているといえる。

次に、松谷みよ子「スカイの金メダル」（初出昭和21年）について見てみる。あらすじを本文の表現によってみてみると次のようである（下線引用者）。

勉強嫌いのスカイは、優等生の金メダルを欲しがり、急に勉強に打ち込む。しかし、金メダルはとれない。なんとなく家に帰るのがいやだと思いながら、窓から「青やむらさきや赤の電気が、遠く夢のように浮かんでい」る地下鉄の中で口笛を「まっかになってふいているうちに、ギッととま
24 り」スカイはカラスの国に入ってゆく。更に進むとカラスの国の学校に着く。学校の教室では、先生は同じだが生徒には他の組の者もいて、何より壁が「ピンク色であたたかにかがやいている」ことに違和感を感じる。先生に命じられて移動した隣の教室は、「上から下までまっ白でした。そしてまっ白な粉が、山のように床につままれてありました」。スカイは真っ白けになって白いカラスの像を作り、優等生の金メダルをもらう。スカイは「ピンク色の部屋に帰ると」家に帰ろうとするが、学校は恐ろしく高い所にある。カラスでないスカイは階段で降りるが、途中でメダルを落としてしまう。スカイは泣きながら何時間もかけて地上につき、やっとの思いで家に帰る。スカイは学校に行ってカラスの国の話をするが誰も信じない。「『だって、ほんとなんだぜ』と、いいはりながら、かばんをぶらさげて、門を出ました。門からしばらくは、はばのひろい、ゆるやかな、白い階段で

³さらに、語と読み手との間にも、読み手が構造を発見し、構造を再生産するという円環を仮定する必要がある。同じ名を呼ぶことに依存する色彩名>色彩語が、それ自身を再生産する特定の方法に従っていると見做すことには一定の意味があるものと思われる。テキストにおける色彩語の機能は、特定の構造によって拘束され、その拘束が色彩語の機能を可能にする。この構造は、表層の色彩語の連合と排列が、それに対する選択として生じるようなものであり、同時に解釈におけるコードとしても機能するはずである。それを「色彩語の表現構造」と称する（拙論1999）。

⁴紙としても、また、それ以外のものとしても読みうること。

4.2. 言語とスクリーン

す。」その時、たくさんのカラスが飛んできて、金色のものを置いてゆく。カラスが去った後には金メダルが残っていた。「スカイはつくづく、からすの国に、もういっぺんいきたいと、わたしにいいました。」

ここでは、（スカイが語る）物語中の現実世界に赤、物語中の物語世界（カラスの国の実在）に白、両世界の繋ぎ目に境界の融解を示すピンク色が用いられていると見られる。混色＝一次レベルとそれを指示する色名という二次レベルとを用いている。

次に、芥川龍之介「トロッコ」（初出大正11年）をみる。

岡崎（1995）は、「人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭のどこかに、はっきりした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい」というくだりで、初稿が「小さい黄い麦藁帽」となっており、これが必ずしも誤字・誤植でないことを明らかにしている。「黄い」は「キイ」あるいは「キイロイ」と読むべきものだという。

少年の良平がトロッコを押し行きながら嬉しい気持ちで眺め見る両側の蜜柑畑には「黄色い実がいくつも日を受けてい」る。しかし、日も暮れかかる中、遠い道のりを一人帰らねばならなくなった良平が、恐怖に駆られ泣きながら走り帰るころ「行きと帰りと変るせいか、景色の違うのも不安」で「蜜柑畑へ来るころには、辺りは暗くなる一方だった」。黄色ほど明るさで印象を変える色彩はないといわれる。明るい黄色は陽気さ・暖かさ・活気を感じさせ、暗い黄色は陰気さ・憂鬱・衰えを感じる⁵。行くときに日を受けていた 明るい黄色 は、帰るときにはすっかり 暗い黄色 に変わっている。そして、黄色のかかる二面性は、「黄い」という表記がキイロイとキイとを二重に喚起することによって補強されることになる。良平は、トロッコが押せることを喜ぶが、それを許した土工の「小さい黄い麦藁帽」は、本来は忌諱すべき奇異なものだったので、行き帰りで明るさを変える黄色い色は幸福感と不安感とが裏表であることを暗示する。

「良平は、二十六の年、妻子と一緒に東京へ出て来た。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆²⁴を握っている」が、時々トロッコの経験を思い出す。この、良平に甦る、子どもの良平に経験された物語（幸福感と不安感との反転、忌諱すべきものに気づかず深みにはまる）を色彩語が象徴するのだが、反転する色彩の象徴的経験は年毎に薄れてゆく（「その記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい」）。「塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ継続している」。妻子ある身には、先行きの不安ばかりが強まるというのである。ここでは、明度の違いという一次レベル、それらが同じ色であることを示す二次レベルの色名、それを表現する色彩語の（特殊な）表記という三次レベルとが用いられているといえる。

以上の素描に見るように、上位の水準に属する表現は、そのうちに下位の水準を含んでいる。但、ここで問題とすべきは直接に一次レベルを利用する場合である。次項では、芥川の例を発展し、文字とそれ自体の色彩（一次レベル）とについて考えたい。

⁵ 『色の博物誌』（朝日新聞社編1986）による。

4.2.3. 色彩語と文字

吉村(2001)は、色彩語の表現には多くの二重性があるという。但、文字の持つ、視覚に訴えながら(読まれることを求め)単に見られることを拒むという二重性も考慮に入れる必要があるのではないだろうか。

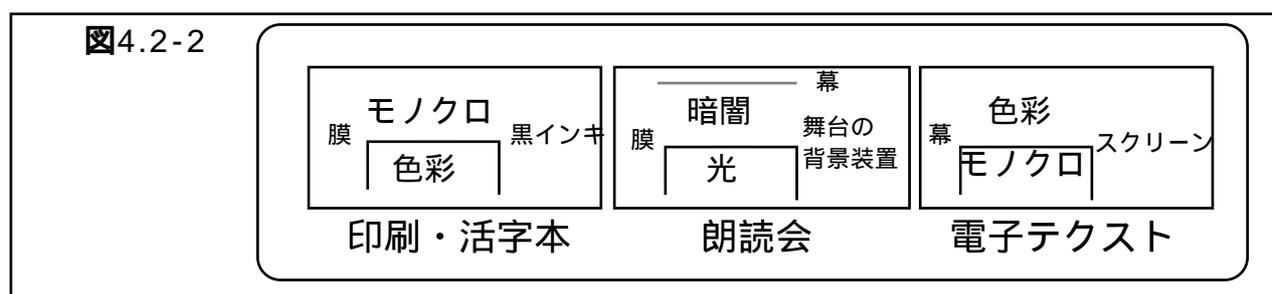
印刷された文字は、多くの場合、黒以外の色で実現する可能性をそもそも排除していることから、読み手とテキストとの間に生じる現実の色彩感覚・色彩を覆い隠すものといえる。隠すことによって、モノクロは色彩の不在でなく、背後に多色性を担った被覆として見られ、想像力と象徴性との豊かさが期待されてゆく。また、印刷されたテキストの黒白の鮮明な対比は、時に、根源的な対立として、起源や創造に象徴的に重ね合わされる(清水1984)。色彩語の象徴性は、その起源としての色彩の象徴性(一次レベル)を遮蔽することによって深遠でありうる。書籍が黒インクで印刷されること自体、一次レベルの利用であるはずだが、活字文化の中では特に問題でなかった。しかし、e-textのスクリーンはそれを疑う。モノクロの印字が、背後にイメージされる色彩に対する余剰だとすると、電光メディアでは、色彩がモノクロのスクリーンに対する余剰となる。

寺山修司の自作詩の朗読会は、詩を活字メディアから引き剥がす試みであった。

闇というのは、今までは光を引き算して作っていくものだ、つまり光の欠落した状態だと考えられてきたけれど、そうじゃなくて、今ある光の状態に暗闇をプラスして生成するものですよ。つまり暗闇は生成であり、余剰のものであるべきだ。その中では言葉もふくらんでいくべきである、と考えていたんです(寺山1980:231)。

しかし、暗闇の中で行なわれた朗読会はうまくゆかなかった。それは、暗闇が活字と同じ型をしていたからだろう。スクリーンが光を載せる幕ならば、活字は光が漏れ出てゆく膜なのではないだろうか(図4.2-2)⁶。

ところで、「色彩が眼に浮かぶ」という言い方には、色彩の不在=活字を前提するところがある。



対して、e-textではあらゆる表現が既に共感的である。紙のメディアは、話し言葉と書き言葉が、視覚言語と聴覚言語とであることが示すように、感覚の局限と分断とを特徴とし、それは言語が感覚の統合という働きを持つということよりもむしろ決定的である⁷。例えば、松谷みよ子「3つの色」は、青・赤・黄色の3色からすべての色彩が成り立つことをテーマにしたものだが、坪田譲治は「むつかしい作品」であり、それは「色が直接眼に浮かんでこない」からだという(文庫判

⁶「幕」と「膜」との対比は、東(1999:161)による。

4.2. 言語とスクリーン

解説)。色彩そのものをモチーフにした結果、多数の色彩語がテキストを埋めている⁸のである。このことは、色彩を隠すほど色彩語が効果的であること、また、上位水準が下位水準を含むことを示すが、また、次のような問題も生む。「赤い花」と書くことと「花」という文字を赤色で表示することとは、どのような関係にあるだろうか。一方は語の、他方は文字の問題で、両者が言語学的に全く異なっていたとしても、文字に施された色が解釈に影響しないということではない。テキストの解釈はその物理的外形にも大きく依存するはずである、表記の外形が関わりうることは既に「トロッコ」で見たところである。活字の中で先のように問うまでもないのは、言語学的事実によるのではなく、印字が常に黒いからである。技術の進歩は、印刷された冊子本の行間と余白とが「書き込み」を可能にしたように、読者のテキストへの参加を励ましてもきた。e-textで読み手の裁量は更に大きくなり、例えば、「赤い花」という表現は常に様々な色で表示される。そのときにもわれわれは今までと同じテキストとして読むものだろうか。

- 12 堀内(1979:46)は次のように言う。「大人の絵本!大人だけが絶対に面白くって子どもが全く解らない絵本、私には春画しか思い浮かびません。...大人の絵本というなら写真集や漫画や美術書をどうジャンルと考えるのがよく、視覚の楽しみを持ったあらゆる表現の本を造り出すことは活字崇拜的な文化の片寄りを正すにいいことですが、それは当然そうになっていくでしょう」。これは、多くのテキストが絵本と同じジャンルへ収斂してゆくことと読み替えてよからう。電子書籍の普及には、更に時間を要するだろうが、e-textはわれわれにとって最も一般的なテキスト形態となっている。テキストが絵本化してゆくなかで、われわれは色彩そのものの豊かさ(一次レベル)について研究する語彙を持たなければならないであろう⁹。

- そのとき、色彩語の表現がテキストの活字へのとらわれを逆用する技法だということに思いを致すべきであろう。今井(1968)は、表現の本質の一つは文章が終わらせうるものであることで、それは余韻の醸し方の技巧として現れるという。しかし、余韻を残す終わり方は、卷子本から冊子本へと移行するとき冊子本が多くのページを持つことができなかつたところから生まれたのもである。
24 表現の技巧は、それが時に本質的な問題と考えられてさえ、技術を補う手段であることがあるということだろう。同じように、新たな表現を求めて異なる枠組みを模索するとき、それによって得られる表現上の可能性と失われる表現性とがある。色彩の一次レベルを考慮に入れるということは、テキストが電子環境で新たな可能性を獲得する一方、失われる表現性があるということかもしれない。色彩が豊かにされる一方、色彩語の表現性が制約される可能性を考えなければならないであろう。

⁷話し言葉で用いられる色彩語の多くが、直示か慣用的で、文学をはじめとする書き言葉ほど「象徴的」でないのは、(逆説的だが)現実に読む場面よりも話す場面の方がより多く色彩が関与するからだろう。よく知られているように、口頭伝達の場においてさえ、身振りやしぐさ、表情などへ十分な視覚的注意が払われるのである。

⁸文庫判17ページに対して120語。

⁹絵本は絵画によって与えられるイメージに対応する物語性を持つ。例えば、キーピング(1979:431)は、絵本における色彩の効果として、美的配慮や人物・事物の同一性指示だけでなく、「物語を語る」ことをあげる。日中青いものが夜には緑になるように、また、赤く/青くべた塗りされたページが興奮/静寂を示すように、色彩は人物や事物の置かれた状況を物語る。

4.2.4. 色彩語と色彩

色彩語の象徴性を活字テキストにのみ限定して考えるのでなければ、色彩語は、色彩と競合しながら存在することになるはずである。そのときには、表象やイメージだけでなく、表記・表示・書物の形態などテキストのあらゆる形態的特徴が色彩語研究の場・対象となりうる。その多くの要因を切り分け、またテキストの電子化という状況自体に説明を与えるためにも、上に示した三水準のモデルが足掛かりにされるべきだと考えるものである。

要約：われわれの表現の多くはスクリーンに実現する。紙のテキストでは、モノクロの印字が、背後にイメージされる色彩に対する余剰といえるが、電光メディアでは、色彩がモノクロのスクリーンに対する余剰となる。電光メディアでは、従来の色彩語の表現性（視覚的象徴）は機能しない。

4.3. 電子空間の言語的ふるまい ～ブログを手がかりに

4.3.0. はじめに

ICT（情報通信技術）の進展は、電子メディアを表現研究の対象とするよう求めている。社会学的・社会心理学の文脈では、比較的古くから電子コミュニケーションが注目されているが、荻野（1996：10f.）は、電子メディアが言語行動を大きく変えると指摘し、言語の研究が「言語とコミュニケーションに関わる広い範囲を研究対象としてい」く必要性を説いている。

近年、ウェブではブログblogと呼ばれるサイト形式が急増している¹。ブログとは、《批評や個人的な注釈・感想・評価をハイパリンクとともに記した（部分を含む）コンテンツ（コメント付きリスト）で、ウェブに公開されたウェブ閲覧の日誌》（定義）である。一方、日本語のウェブページでは、「web日記」と呼ばれるコンテンツが発達している。これは、日記のような体裁を持ち、それ自体「～日記」と題されるものが多いことを特徴とする。また、もともと日本には、ウェブ上のニュースをソースとするコメント付きリンクリストである「（個人）ニュースサイト」という形式があり、そのうちテキスト量の多いものは「テキストサイト」と呼ばれてきた²。本節では、小野田ほか（1998）による「固有情報量」と「リンク情報量」とを基準に、各サイト形式を図4.3-1のように理解することにし、日本語のブログとウェブ日記とを表現の問題として考えてみることにしたい。

4.3.1. 話しことばの包摂

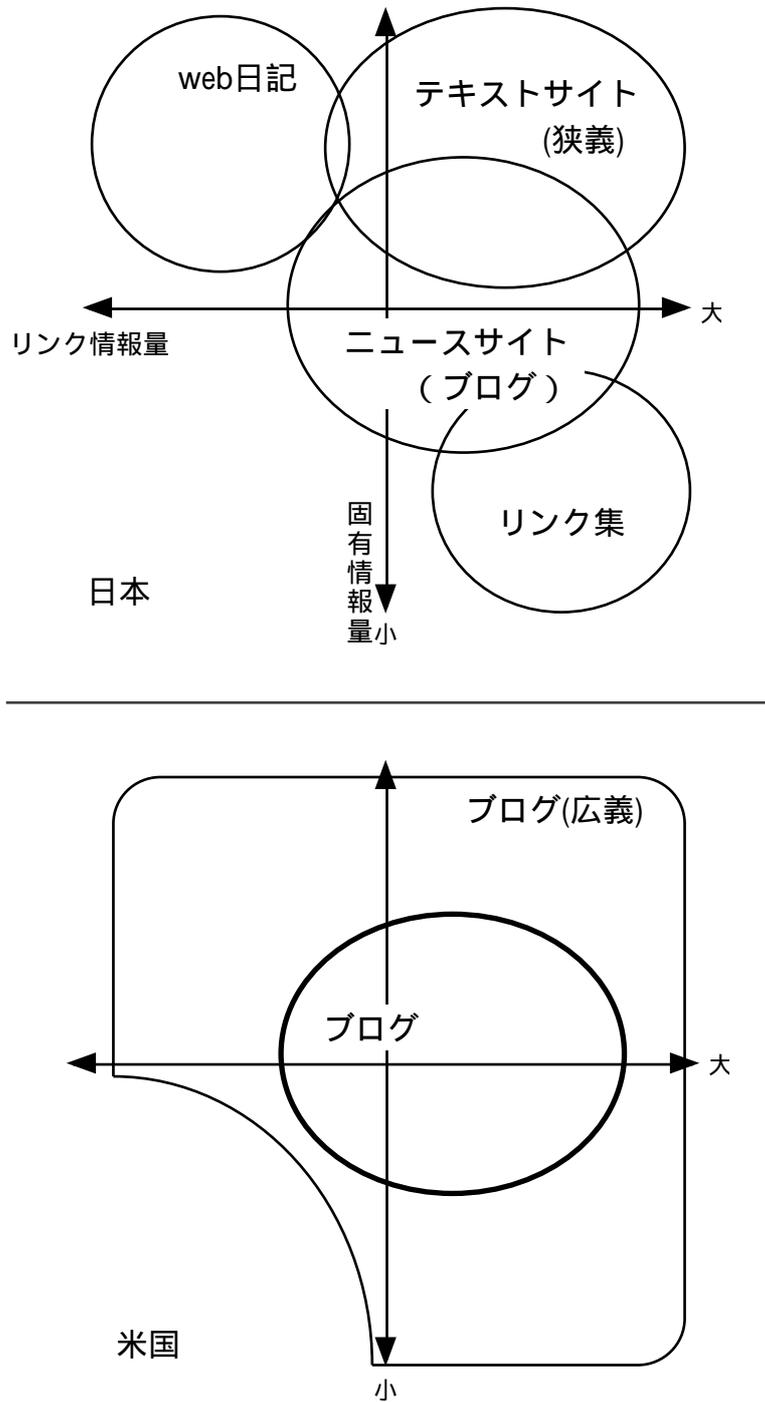
ブログとweb日記とは、日時の記載と定期更新という共通の性格づけを受ける。いったいICTは、ローカルな標準時でなく^{リアルタイム}実時間を共有させるもので（アタリ1986、ヴィリリオ1998）、ウェブの表現は実時間に制約されるものが多い。一般に、話しことばは書きことばより場面性が強く形式性が弱い。そのため、話しことばでは部分が内的に構造化されず、時間軸に沿った直線的な把握が必要になる傾向があるが、ウェブでは、時間は書きことばの構造化の一般的手段ともなる。ただ、時間による構造化は、最新でないものの可視性を妨げるという弊害があるが、ブログ用のツールには、特定の記事に直接リンクできるようにするためのpermalinks機能が用意されている³。一般に、電子メディアは対面性（話しことば性）を志向する文字ベースのメディアだが、この点で、ブログは話しことば的性質をうまく包摂した書きことばだといえる。

¹ウェブログは、「ネットサーフィン」でみつけた興味深いウェブコンテンツへの定期更新されるリンクリスト（フィルタ）のコミュニティとして、1997年頃に米国で発生したものとされている。ブログの歴史については、Blood（2000）および「ウェブログ事始め(1)～(8)（[online]トップページwww.alterope.co.jp/splash/ から閲覧可能）に詳しい。

²広義にはweb日記やニュースサイトを含む総称としても使われる。詳しくは拙論（2003）参照。

³ブログでは、縦長のページに最新記事が先頭になるよう数日分が掲載されるのが普通である。古くなった記事は別にストックされ同じリンクで恒久的に参照可能である。

図4.3-1 サイト形式の位置づけ



12

24

話しことばの包摂という点では、「役割語(金水2002)」の使用も指摘できる。役割語とは、特定の人物像と結びつけられた話体をいう。ところで、人格がもともと流動的で多面的なものであるとすると、それを容易に形にできるオンライン環境で、オフラインと異なったあるいは複数の
36 ペルソナ 人格=仮面を持つことは自然であるように思われる。ウェブは「ボイス・チェンジャーならぬパーソナリティ・チェンジャー」(室井ほか1992:36)という側面を持っているのである。タートル

4.3. 電子空間の言語的振る舞い

(1996: 10章)は、ウェブ上で複数の人格を使い分けるとき、自己は多重でありながら一貫しているという。多様性と一貫性の併存は、互いにコミュニケーションを行う複数の自己(の多様性)を意識することによってなされる。ハイパリンクと(ウェブ)ページによるウェブの基本的な構成は、それ自体が多重性と一貫性との併存のモデルであるため、複数の人格または人格の複数性の使い分けを促すといえる。また、受動的な書き手と能動的な読み手によるウェブで、スタイルの選択は人格の選択と受けとられることになる。場面に関与するのが専ら読み手であるとき、特定のスタイルは、そのスタイルに自然な書き手(の人格)を想定させるからである([3.2.3](#))⁴。

信号で隣に止った車がなんとホンダのZ。なつかしか～。[田舎者]

イエティは、UMA的には「獣人」にカテゴリズされるなり。[アニメのキャラ]

なんてストーリーだよ(° °)ポカーンくそう、面白そうじゃねえか(笑 [江戸っ子]⁴

12

金水(2002)は、「役割語」が主に会話文に現われる表現のステレオタイプとして標準語(基準となる書きことば)との偏差によって階層化された体系(ヴァーチャル日本語)をなすものと規定している。コッホ(1987: 160)は、「記号行動における新発明はどんな形であるにせよ、既存の全表現範囲を新しい可能性のためのステレオタイプのセットに変化させる」と述べているが、書きことばが話しことばを下位類として取り込んでいるとき(このことはe-textでいっそう明らかである)、話しことばは書きことばであることを侵犯しない限りで、つまり書きことばを標準に、ヴァーチャル・リアリティステレオタイプとして機能してゆくということだろう。また、VRには、代用品としての ヴァーチャル安価な現実 という面があるが、役割語が書きことばのスタイルとしてヴァーチャルとされることは、話体が事実上の話しことばであるとともに、話しことばが書きことばの安価な代用品であることを示すものと考えられる。

24 4.3.2. 表現の一般性と個別性

ブログが、話しことばを包摂した書きことばであるとしても、その特異性は、書き手の 声 が読み手に直接届くというところにあるわけではない。Sullivan(2002)は

読者は、威厳のある大げさなタイトルや大規模なスタッフにもかかわらず、既存のメディアをますます疑うようになっている。読者は、その背後に誤りを犯しうる記者や編集者がいることを知っているのだ。彼らは、読者の尊敬を得た孤独なブロガーより常に信頼できるわけでない

という。一般に、言語表現は受信時に評価されるべきものであり、メディアにはフィルタが必要である。チョムスキー(1994: 141)の言うように、メディアの読解から有効な情報を引き出しうるのは、そこに些かの正義があるという信頼に基づく。そして、それは書き手への人間的信頼による

⁴例文はゴシック体で示し、ウェブでの蒐集に基づく。また、下線はハイパリンクを、角括弧は筆者の補足を示す。

ものである。われわれが表現に実体的な書き手を想定する慣習は、意味ある情報を受け取るために必須であり、単なる情報の束からは何も学ばないし、それに対して批判的読解力を保持する必然性もないだろう。

web日記の表現内容を特徴づけるのは、その凡庸さである（赤尾2002）。平凡であることは出来事リアリティの現在感を生じる一方、受け手との同属意識を高めることで書き手への人間的信頼の基盤となる。また、ブログでは、時に感情的・情緒的反応が同時代的な気分を盛り上げ、受け手をして表現の背後に同じひとりの人間の存在を強く意識させる。我々は個人の不公平や偏向を気分や感受性の問題として容認しがちであり、それはむしろ常識的な表現者の誠実性と結びつけられる。

これらは、何を話すかよりもどのように話すかを問題にするという点では、古典レトリック（弁論術）に似ているかもしれない。しかし、結局それは単なる「おしゃべり」ではないかとも見える。紙のメディアでは、書くことは話すことよりも難儀であり、同時に、人は用心深くなって思慮深くもみえる。他方、我々の話しことばの大半は無益なおしゃべりであり、「話す」ことと同じくらい簡単にウェブで行動できるのであれば、その大半もおしゃべりになるのが自然であろう。

そこで注目されるのが、電子テキスト全般に見られる表記上の特徴である。

液晶() ゲッツ うすーい、かるーい 設置してふにふにと設定。[流行りのギャグ]
 ってことで (...)重要(お [メモをとる]
 (T_T)うううう MS氏んでくれ... [泣き顔]

佐竹（2002：14）は、このような表記を「情報の不完全さを補い、感情、感覚のスムーズな伝達をサポートする手段」だとしているが、岸本（2000）や山口（1999）が指摘しているように、文字ベースの電子メディアで対面的コミュニケーションを目指すときに必要になるものだと考える方が良い。話しことばが空間（対面性）と時間（同時性・線形性）とに制約され書きことばより不自由である以上、特徴的な表記は、コミュニケーションの不足を補うというよりも余剰を付加するものと考えべきだろう。また、表現の面では、手軽でおしゃべり的な表現法として話しことばの性質（談話体）をとりこむときに必要になるものといえる。また、岸本（2003）は、特徴的な表記には「大げさな表現方法で目立たせて、多数の人に読ませようとする」自己顕示と自己満足が見られるとしている。しかし、それが読み手を惹きつける工夫であることは認めても、それ自体がアクセスを増大させるわけではない⁵。

アクセスの増大には、直接の訪問者が期待でき、同時にウェブ検索⁶でヒットしやすくするという点で、広く認知されたサイトと相互リンクをすることが最も簡単な方法である。その結果、ウェブではコミュニティ形成（ヨコのつながり）が重視されてゆく。また、表現の面では、特定の語句にポジティブフィードバックが働くだろう。表現の内容はともかく、形式においてはキーワードとなりそうな語が頻用され、みんなが使っていることばはより使われるようになる。さらに、検索エンジンが、形態素解析を行ない序列などを評価する際には、語結合や文型にも同様のフィードバックが働くと見るのが自然である。ギロー（1959：123f.）は、逸脱的に使用された語がテキス

⁵また、岸本（2003）の議論は、そもそもHTMLに基づいて表記を認定しているのかははっきりしない。

トの文体を特徴づけるとして統計学の必要性を説くが、ウェブでは、語の使用および使用の環境、特にその一般的側面がテキストを特徴づけているのである。木坂（1992：91f.）は、表現は明示的な伝達性の指向と個性的な表現性の指向との緊張関係の上に成り立つものであるとし、その相互性は文学言語で特に明かだと述べている。同様に、ウェブ上の電子テキストが、検索でヒットしやすい定型性とスタイルの個別性との緊張の上に成り立っていると考えると、テキストの個別性を高めようと表記（表示スタイル）を操作することは現実的な選択といえるであろう。これは、内容を伝えるべく一定の読み手を確保しておくには形式の工夫が重要だという理解であり、内容こそが重要だという理解の中に分化するものといえる。ただ、web日記が一般に特徴的表記に訴えるのに対して、ブログは認知度が高いほど表記の変形に抑制的な傾向がある。これは、ブログの様式上の特徴（詳しくは内山2003参照）を示すものだろう。

12 4.3.3. ハイパリンクの質と量

個人ページにリンクを盛り込むことは、自己の多様な関心を一貫したものとして構成するという背反両立的行為であり（タークル1996）、ブログはそのことを端的にあらわしている。また、ブログが一定のリンク情報量と一定の固有情報量との関係からなる形式と理解できることはすでに示したが、リンクは引用の行為であるといえ、リンクへの言及は批評性を帯びることになる（ブログは本質的に論争的である）。

藤田（2000）は、先行して存在するコトバを^{アイコン}類像で表示する表現が引用であるとする。一方、ハイパリンクを設定された引用では、^{インデックス}指標的性質も顕著である。

もっともProxyを経由すれば安心というのは幻想という話もありますし。[施線部が掲載元のサイトへのハイパリンクが設定された直接引用]

24 検索エンジン名が表示されないのは仕様かしらん? 仕様です。[同上。コロンの回答]

これは、テキストの模倣というより切り取られたテキスト（全体-部分の関係 = ^{インデックス}指標）であるといえる。ハイパリンクは、引用というだけでなく、先行テキストに対する指示の問題を含み、またそこから切り取られた部分テキストを文脈に統合するという点では接続の問題にもかかわりあうよう

⁶「検索」は、読み手による書き手のふるいわけといえようが、書き手による受け手のふるいわけにジャンルの自己規定がある。ウェブへのアクセスはすべて記録され監視されており、匿名というイメージとは逆に私話的な場はない。したがって、他人の干渉を受けない小さなコミュニティをなすにはすすんで私話的状况を創出しなければならないわけである。ジャンルの自己規定は、その一手段である（私話的スタイルの使用 3.2.3もまた別の一手段であろう）。実際に、ブログやweb日記には、自らを「ブログ」や「日記」と名乗るものが多い。米国でしばしばブログが既存のジャーナリズムと比較されるのは、有力なブログの多くがプロのジャーナリストやそれに類する者の手によるという事情がある。その一方で、（日本語のサイトを含めた）大半のブログはごく限られた読者しか有していない。それらは、情報を世界中に発信しようというより、内輪で楽しもうといった趣きを持つものである（リービー2002）。それは、公的な側面を持ちながら私的でもあるという点で、既存のジャーナリズムとは本質的に異なるものなのである。そもそも誰もが情報を管理（送受信・蓄積など）できるところでは誰かと関係を持つとする必然性はなくなる（林2002：97）のだから、ジャンルの自己規定によって狭いサークルを築こうとすることはむしろ当然のなりゆきといえるべきだろう。

に思われる。

浜田（1991：42n7）は、テキスト間に潜在的に成立している意味上の関係を体現するものが接続語であり、接続語に関係を規定する積極的な機能があるわけでないとしている。関係を作るのではなく、関係を確認するということは、ハイパertextのクリッカブルテキストでも明らかである。開始タグ内のHREF属性でマークされるリンクターゲット（URL文字列）は関係を作るが、アンカー要素内のテキスト文字列は関係を様々な仕方で確認するといえるだろう。

調べたら、一応[あるらしい](http://***)。 [ソースコード]

リンクの量的把握に対して、その質的把握は、ターゲットのファイル属性などを除いては、機械（プログラム）的には測定しづらい部分があると考えられる。そのため、関係的意味に基づいたリンク形式の分類を考えることには一定の意味があるように思われる。本稿では、ブログとweb日記の表現からリンクの用法を帰納し、アンカー要素内のテキスト文字列に対して以下の分類を提案する。ここで、指示とは名称や外形・概要を示すことであり、表示とは全体や部分をより具体的・直接的に示すことをいう。

関係を指示：

指示語

これ、凄く見たいんですけど。

関係を表示：

注釈

このニュースのネタ元（詳細）。

場所を指示：

24 サイト運営主体名・個人名・ハンドル

目黒区民センターで卓球。

武藤さんも福岡にいたらしい。

久しぶりによしさんのところに行った。

サイト名

2chに書いてあった。

場所を表示：

URL（例文略）

内容を指示：

タイトル・ヘッダ・記事名（例文略）

サービスの内容・ソフト名

アドレス検索です。

36 アップルから、iTunes4が配布されていました。 [DLページへリンク]

本文の要約

サイバーナイフ道遠し う～む [リンク先の記事の要約]

4.3. 電子空間の言語的振る舞い

集計によれば 英語のページは約半分強ということになっている。

商品名やその説明

J-Phone J-SH53 (シャープ製)

ベッカムチョコ食べてるのに。 [サッカー選手がCM出演しているチョコ]

イメージの説明

タイヤ交換。うへー。人数多すぎ。 [超ロングリムジンのタイヤ交換のイメージへ]

内容を表示：

本文の直接引用 (例文略)

行為を指示：

依頼や要請

押してみれ [クリックを要求]

12 買ったら？ [オンラインショップへリンク]

行為を表示：

行為の結果

こんなのつくってみた。 [自作のスク립トへリンク]

よそに投げてやった。 [やや問題のある内容を他のサイトに書き込んだ]

ブログでは、ハイパリンクがこれら様々の種類の表現で確認されることで、(テキスト間の)関係の多様性が(テキストの)一貫性に統一されることになる。

4.3.4. ブログの表現について

本節では、ブログやweb日記の表現が、話しことばと書きことばとの、表現の一般性と個別性と
24 の、自己の多様性と一貫性と、関係の生成と確認との狭間に見いだされるものであると述べた。
表現は、従来、二項的性質の併存を特性とすると理解されてきた部分があるが、ブログはそのような性質を典型的に、かつ多くの情報源から大量に生み出すことで、表現研究の重要な対象になりう
ると思われる。本節は、その序説を意図するものである。

要約：電子空間での言語行動は、さまざまな二項的性質の両極の併存によって特徴づけられる。
また、電子メディアは対面性を志向する文字ベースのメディアであることを基本とするが、ブログ
は時間によって構造化されており、話しことばを包摂した書きことばだといえる。

引用・参考文献(4章)

- 赤尾晃一(2002)「ハイパージャーナリズムとしてのウェブログ」
[online] www.akaokoichi.net/sougou/weblog.pdf.
- 芥川龍之介(1968)『蜘蛛の糸・杜子春』新潮社.
- 朝日新聞社編(1986)『色の博物誌』朝日新聞社.
- 東浩紀(1999)「サイバースペースは何故スペースと呼ばれるか」,『InterCommunication』27,
pp.158-65, NTT出版.
- アタリ,ジャック(1986)『時間の歴史』蔵持不三也訳[1982, 1983], 原書房.
- 市川一夫(1999)「色覚異常と社会環境」,『遺伝』53(9), 裳華房.
- 糸井通浩(1997)「書評 小松光三『日本表現文法論』」,『表現研究』第65号, pp.61-64.
- 今井文男(1968)[1961]『表現学仮説』法律文化社.
(1975)『文章表現法大要』笠間書院.
- ヴィリリオ,ポール(1998)『電腦世界 最悪のシナリオへの対応』本間邦雄訳[1996]産業図書.
- 上野千鶴子(1999)「電子メディアは文化を超えない」,『別冊本とコンピュータ 1本は変わるか? 世界の電子出版・最前線からの報告』pp.137-140, トランスアート.
- 内山和也(1998)「終わりということ～会話における時間と虚構とについて」,『広島大学日本語教育学科紀要』第8号, pp.85-90.
(1999)「共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文.
(2003)「ブログの表現スタイルについて」第40回表現学会全国大会発表資料.[online] home.hiroshima-u.ac.jp/utiyamak/shiryo.pdf
- エーコ,ウンベルト(1996)[1980]『記号論』池上嘉彦訳[1976]岩波書店.
- エンゲル,フォン・ラフラ編著(1981)『ノンバーバル・コミュニケーション ことばによらない伝達』本名信行編訳,大修館書店.
- エンデ,ミヒヤエル(1982)『はてしない物語』上田真而子,佐藤真理子訳[1979],岩波書店.
- 岡崎晃一(1995)「近代文学における『黄色』」,『表現研究』61号.
- 荻野綱男(1996)「電子メールの光と影」,『日本語学』15(12), pp.4-11, 明治書院.
- 小野田浩平・土肥浩・石塚満(1998)「WWWハイパーリンクの意味による分類とノードリンク構造の提示」,第56回情報処理学会全国大会発表資料, No.1Z-03.
- 小野原教子(1999)「衣服による表現の可能性—衣服はどこまで言語に似ているか—」,『表現研究』第69号, pp.61-74.
- ガーダマー,ハンス・ゲオルグ(1995)『ガーダマーとの対話』カルステン=ドゥット編,巻田悦朗訳,[1993]未来社.
- 河西良治(2002)「多重境界線と意味」,『英語青年』148(3), pp.24-25.
- ガデ,フランソワーズ(1995)『ソシユール言語学入門』立川健二訳,[1987],新曜社.

- キーピング,チャールズ(1979)「自己表現としての絵本」,今江祥智責任編集『絵本の時代』(叢書児童文学第二巻)世界思想社.
- 木坂基(1992)「日本語表現法—日本語表現法研究の構想」,奥田邦男編『日本語教育学』(教職科学講座第25巻),pp.88-102,福村出版.
- 岸本千秋(2000)「インターネットの日記サイトにおける表記の特徴」,『武庫川女子大文化研究所年報』12,p.1-15.
- (2003)「インターネットと日記」,『日本語学』22(5),pp.38-48 明治書院.
- 喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー 考えるからだ』金子書房.
- ギロー,ピエール(1959)『文体論』佐藤信夫訳[1954,1957],白水社.
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』,岩波書店.
- クリステヴァ,ジュリア(1985)『テクストとしての小説』谷口勇訳[1970,1979],国文社.
- 栗原裕(1988)「表現学を考える」,『表現研究』第48号,pp.10-16.
- ケルコフ,デリック・ドゥ(1999)『ポストメディア論 - 結合知に向けて』[1995]片岡みい子,中澤豊訳,NTT出版.
- コッホ,ワルター(1988)「演劇の生得的基礎」山田=ボヒネック頼子訳,日本記号学会編『文化のインターフェイス 境界・界面・越境』(記号学研究7),pp.149-183,東海大学出版会.
- 小松光三(1997)「文法研究から見た表現学の現在」,『表現研究』第66号,pp.4-9.
- サイトウィック,リチャード(1994)「形を見ると味がする?」[1993]『イマージ』5(2),pp.116-125,青土社.
- 佐竹秀雄(2002)「変容する『書く暮らし』」,『日本語学』21(12),pp.6-15,明治書院.
- 佐藤信夫(1978)『レトリック感覚』講談社.
- シービオク,T.A.(1985)『自然と文化の記号論』池上嘉彦・編訳,勁草書房.
- シェグロフ,E.&H.サックス(1989)「会話はどのように終了されるのか」北澤裕,西阪仰訳[1973],G.サーサス[ほか]著『日常性の解剖学 知と会話』マルジュ社.
- 清水徹(1984)『書物の夢 夢の書物』筑摩書房.
- 城田俊(1995)[1993]『日本語の音【テキスト版】』ひつじ書房.
- 鈴木一誌(1998)「文字の不安」,『ユリイカ 詩と批評』30(6),pp.183-198,青土社.
- ステイブルフォード,ブライアン(1985)「SFの各テーマ」,デイヴィッド・ウイングローブ編『最新版SFガイドブック【入門・歴史編】』安田均[ほか]訳[1984]pp.47-150,サンリオ.
- スペルベル,ダン&ディアドーレ・ウィルソン(1993)『関連性理論—伝達と認知—』内田聖二[ほか]訳[1986],研究社出版.
- タークル,シェリー(1996)『接続された心 インターネット時代のアイデンティティ』日暮雅通訳[1995],早川書房.
- 谷本誠剛(1990)『児童文学とは何か』中教出版.
- チョムスキー,ノアム(1994)『アメリカが本当に望んでいること』益岡賢訳[1992],現代企画室.
- 寺山修司(1980)『鉛筆のドラキュラ 砂男・少年探偵団から啄木・大宰まで』思潮社.

- 永尾章曹(1988)「表現学再考—シンポジウムの司会を終えて—」,『表現研究』第48号, pp.17-23.
- (1997)「書評 小松光三著『日本表現文法論』」,『國語學』191, pp.35-40.
- 中村明(1974)「文体の性格をめぐって」,『表現研究』20号, p.1-11.
- 西垣通(1998) [1997]「ショートレクチャー 情報が組換える21世紀の知」,日本総合研究所編『生命論パラダイムの時代』(レグルス文庫228), pp.178-182, 第三文明社.
- 浜田麻里(1991)「『デハ』の機能」,『阪大日本語研究』3, pp.25-44.
- 林直二(2002)「電腦民主主義は実現するか」,緑風出版編集部編『IT革命の虚構』pp.84-97, 緑風出版.
- バフチン,ミハイル(1988)『ことばと対話テキスト』(ミハイル・バフチン著作集8) 新谷敬三郎 [ほか] 訳, 新時代社.
- バルト,ロラン(1979a)『旧修辞学便覧』沢崎浩平訳 [1970] みすず書房.
- (1979b)「物語の構造分析序説」花輪光訳 [1966],『物語の構造分析』p.1-54, みすず書房.
- ビューラー,カール(1983-1985)『言語理論 言語の叙述機能』脇阪豊 [ほか] 訳 [1965], クロノス.
- プリンス,ジェラルド(1996)『物語論の位相—物語の形式と機能—』遠藤健一訳 [1982], 松柏社.
- ポスター,マーク(1991)『情報様式論—ポスト構造主義の社会理論』室井尚・吉岡洋訳 [1990], 岩波書店.
- 堀内誠一(1979)「さまざまな絵本のなかで絵本画家の手紙6通」,今江祥智責任編集『絵本の時代』(叢書児童文学第二巻) 世界思想社.
- 松谷みよ子(1974)『貝になった子ども』角川書店.
- 湊吉正(1986)「表現研究と表現開発の授業研究」,『表現研究』第44号.
- (1997)「表現学の現在—シンポジウムの概要—」,『表現研究』第66号, p.1-3.
- 室井尚(1988)『ポストアート論』(風の薔薇叢書) 白馬書房.
- 室井尚・西垣通・吉岡洋・黒崎政男(1992)「ポストモダンの情報空間」(日本記号学会第11回大会ワークショップA), 日本記号学会編『ポストモダンの記号論』(記号学研究12), pp.19-58, 東海大学出版会.
- 森下一仁(1990)「オールタイム・ベスト『ソラリスの陽のもとに』スタニスワフ・レム」,早川書房編集部編『SFハンドブック』pp.62-65, 早川書房.
- モリニエ,ジョルジュ(1994)『文体の科学』(文庫クセジュ753) 大浜博訳 [1993], 白水社.
- 山口仲美(1979)「解説・参考文献」,山口仲美編『文章・文体』(論集日本語研究8), pp.309-327, 有精堂出版.
- 山口英彦(2000)「電子コミュニティにおけるエモティコンの役割」平成11年度神戸大学卒業論文. [online] www.page.sannet.ne.jp/gucci/seminar/soturou.pdf
- 吉村耕治(2001)「色彩表現の特性と役割」,『表現研究』73号.

- 四方哲也(1997)『眠れる遺伝子進化論』講談社.
- ライバー,ジャスティン(1994)『認知科学への招待 チューリングとウィトゲンシュタインを道し
るべに』今井邦彦訳, [1991] 新曜社.
- リービー,スティーブン(2002)「ブログ空間の愉快的な生活」Newsweek日本版2002年10月9日号.
- レオンダー,バーバラ(1986)「隠喩と幼児の認識」長野順子訳 [1975],佐々木健一編『創造のレ
トリック』pp.234-258, 勁草書房.
- レム,スタニスワフ(1977)『ソラリスの陽のもとに』飯田規和訳 [1961], 早川書房.
- Blood, Rebecca. "weblogs: a history and perspective" 2000.
[online] www.rebeccablood.net/essays/weblog_history.html
- JAKOBSON,R.(1984)『言語とメタ言語』池上嘉彦訳, [1980] 勁草書房.
- Kawaura, Yasuyuki., Y.Kawakami and K.Ymashita. "Keeping a diary in cyberspace",
Japanese Psychological research. 40.4 (1998), pp.234-245.
- Sullivan, Andrew. "The Blogging Revolution." Wired Magazine May 2002.
[online] www.wired.com/wired/archive/10.05/mustread.html?pg=2
- Welch,Kathaleen.E. Electric Rhetoric: Classical Rhetoric, Oralism, and a
New Literacy. Cambridge,Mas: MIT P. 1999.
- 「ウェブログ事始め」(1)~(8)
[online] www.alterope.co.jp/splash/ [左記トップページからハイパリンク]
- 「迎二十年の記」(1983),『表現研究』昭和58年以降の各号の扉.
- 「入会のすすめ」(1964),『表現研究』昭和58年以前の各号の扉.
- 『惑星ソラリス』(DVD版)アンドレイ・タルコフスキー監督 [1972] アイ・ヴィー・シー,
1998年.

5章 結論

5.1 まとめ

5.1.1 言語教育との関わり

5.1.2 まとめと結論

5.1.まとめ

5.1.1 言語教育との関わり

ウィドウソン(1989:191f.)は、文体論は被教育者に優れた解釈を伝達するのではなく、優れた解釈ができるようになるきっかけを与えるものだ述べている。優れた解釈とは優れた解釈者の行なう解釈なのである。したがって、優れた解釈をするためには優れた解釈者であらねばならず、優れた解釈者であるためには優れた解釈を実際にするのでなければならないという循環が成り立つ。そこで、被教育者は、優れた解釈をする優れた解釈者でありたいがために優れた解釈をしたいと欲することになる。テキストの解釈はテキストとなるので、被教育者は優れた解釈者になるために他人に優れた解釈を(無償で)提供しなければならない。ここから、利己的願望を利他的欲求に転化することが教育である一方、利他的行為が利己主義によって生じうることも同時に理解される。ウィドウソンは文学がコミュニケーションであると強調するが、それがうえのように理解されるとき、そのコミュニケーション観は本論と共通するところである。

そうであるならば、本論で提示した文体論のモデルも、言語教育(とくにメディア教育など)に応用できる可能性があるものと思われる。

5.1.2 結び

本論は、現在の具体的な言語的状況を踏まえたうえで、文体がどのような問題として現われているのかを明らかにしようとするものである。まず、文体をコミュニケーションのなかで考えるべきであると主張し、そのために文体を表現との関わりにおいて捉えるべきであると述べた(序論1節)。

そもそも、われわれは世界を表現するために記号を用いるもので、コミュニケーションとは受け手の行動変容を意図した表現のことである(序論3節1項)。1章1節では、隠喩が、文字通りの文を用いることで聞き手にさまざまな解釈を引き起こすように意図するコミュニケーションの手段であることを論じた。1章3節では、コンピュータとユーザとをコントロールするコンピュータのインタフェイスが隠喩的の性質によって構築されていることを指摘し、ハイパテキスト(実体はe-textである)がテキスト(の概念)を文字通りに実現するものであることも確認した。このような性質に整合的でない「片仮名表記語」が漢字・平仮名に回帰してゆくと予測されることもあわせて述べた。

隠喩としばしば対になってとりあげられるものに換喩があるが、換喩とは現実世界での全体-部分の関係に基づいた記号の用法である。隠喩だけでなく、換喩について考えることも文体論にとって重要な議論となる。文体論には、文体をひとまとまりのテキストの換喩と捉える立場があるが、その立場は文体をテキストの個別性をとりだす手続きと同一視することになるため「操作主義的文

体観」ということができる。1章2節では「操作主義的文体観」を具体的な事例によって検討した。操作主義的文体観は、数理的方法に基づくときには、修辞学などの階層的な分類にかわるテキストの相対的分類の原理となりうるものと思われる。また、ひとまとまりのテキストが与えられたときには、原著者推定の便法ともなりうるものである。しかし、操作主義的文体観は所与の単位を必要とする偏りがあるため、e-textには適用しがたい面があるように思われる。また、1章4節では、換喩の概念に基づいて「冒頭」と「書きだし」との関係が再考されるべきことを論じた。一般に両者を概念の上で区別することは有効だが、その自然な連関は物語図式の換喩によって構成されている。本論では、テキストの持つコミュニケーション機能から考えるときに、「冒頭」と「書きだし」との関係は従来説とはむしろ逆に捉えられるものと指摘した。このことはe-textにおいて最も明示的であり、冒頭の研究や理解には紙のテキストを相対化する視点が必要になると思われる。

隠喩や換喩およびそれらの概念を適用した考察から、言語表現をコミュニケーション行動や情報通信のテクノロジーにおいて捉える必要性が理解される。表現には、言語のように人間的なものだけでなく身振りのように動物的なものや電子コミュニケーションのように機械的なものまでがあるのであるから、コミュニケーション行動や情報通信のテクノロジーに関する視点を持たないことはそもそも片手落ちなのである。表現の研究が人間の学であることを標榜するあまり、人間中心主義に陥ってしまってはならない(序論2節1項)。

また、文体論は、文体の原初的な認識からして、ことばをわれわれの外部に実在するモノと見做すことに基づくものといえる(序論2節2項)。ことばをモノと見るためには「書く」ことが必要である。なんとなれば、書き-読むことこそが対象との距離を生み出すからである。スタイルという語の語源も文字を書きつける身体の軌跡が文体意識の基盤であることを示唆している。また、文体がスタイルであるように書体もスタイルである。書体は、一般に、文体に比べてより物質的なイメージとまたより身体的なイメージとがあることから周辺の問題と見做されがちである。しかし、このことは書体がテキスト(化)と書籍(化)の両面に関わることを示しているとも見ることができる。書体に関わる議論として、まず2章2節で、電子文字(デジタルフォント)を考察した。文字には、肉筆性と呼ぶべき性質がある。これは、紙を指先で触れることのできる書字空間と見做すときに文字が持つところの性質だが、そう見做すための視点には、人間が文字の本質的担い手であるという視点と通底するところがある。その意味では、電子文字には肉筆性を代行する手段・表現法があると考えられ、その代用の機能するところでは電子文字はすでにわれわれの肉筆なのである。しかし、電子文字が従来の意味での肉筆から最も後退しているのは、そのままでは商品価値に欠けるという点である。電子文字はスクリーン上の光のドットでしかないからである。この点については、2章4節で電子文字(デジタルフォント)の蒐集行為に注目して論じた。蒐集の対象はモノであるから、電子文字は蒐集の欲望を充たすべく(商品)価値を生みださねければならないわけである。本論では、そのしかたに関して、データベース及びリストという表現形式(様式)の関与を指摘した。また、デジタル環境でのわれわれの振る舞いは自動的にリストを生成する表現行為となることから、リストによって分類し・型を与え・評価することが、コミュニケーションにおいて書き手

に対抗する読み手の手段として用いられうるものであることをあわせて述べた。

以上のことから明らかであろうが、文体論がことばをモノとしてみる視点に基盤を置いていると考えるときには、議論を具体化するという点でICTをこそ議論の起点とすべきなのである（序論2節3項）。

また、書体は「情報理論的文体観」の特定のバージョンで文体論上の難問となることがある。情報理論的文体観とは、2章1節で考察した通り、文体を情報量の問題と見る視点を指す。情報理論的文体観はさまざまな立場から表明されうるもので、古今の定義を包摂する包括的な議論である（本論の立場も広い意味では情報理論的文体観を共有する）。2章3節では、書体をスタイルとして議論するときに、文体を「投影された個性」「浮き彫りにされた意味」などに見做す立場が適切でないことを指摘した。テキストの実現が書体を伴うからには、文体は書体に発するもの（投影された個性）か書体を通じて知られるもの（浮き彫りにされた意味）となる。そのときに、書体は目的である「文体」に対する手段であり、文体を問う手段という点で文体論そのものと同型なのである。したがって、文体論が書体を問うときには、メディアとインタフェイスとを分離する必要がある。それは、書体がモノとして「書かれる＝読みうる」瞬間でなく、モノと見做される 読み の瞬間を問題にするということである。したがって、そのことを可能にする文体論のモデルが必要になる。

表現は「見えるようにすること」であり、表現されたものは「見えるもの」である。表現は全面的可視化の要求によってテキストを目指し、すべてが表面であるようになる（序論3節2項）。その表現のすがたに対する大文字の遺伝子型（GTYPE）が文体であり、文体論とは表現を解体してGTYPEの記述を試みるものであることになる（序論3節3項）。その好適な対象は、e-textである。なんとなれば、e-textこそがテキストの実体であり、且つテキストをつくりあげる手続きでもあるからである（序論3節4項）。

3章1節では、e-textの基本的な性質として、それが文字を伝達するもので、本質的に多言語的であることを述べた。「インターネットは『コミュニケーション手段としての文字（視覚記号）』という可能性を開くメディア（西垣2000：335）」であり、文字をベースとして多言語的なのである。e-textが、ハイパリンクによって本質的に多言語性を内包し、機械翻訳などの支援ツールによって実際に多言語的であることは「第二の欧文脈」と呼ぶことができる。また、e-textは文字をベースにしたものではあるが、既存の書きことばとも異なるものである。e-textは、話しことばと書きことばとの境界を曖昧にする一方で話しことばそのものを書きことばの中に取り込ませるのである。このことは、「第二の言文一致」と呼びうる現象で、そのときに、話しことばを（模倣simulateするのではなく）emulateした書きことばは、現代口語体と呼ぶべきものである。現代口語体は、現在の電子コミュニケーションに一般的に見られる表現であり、さまざまな特徴が見られる。その具体的な特徴は3章2節で記述した。その特徴は、言語の枠組みのなかで紙のテキストを対象にしたかぎりでは捉えられにくいものと思われ、電子メディアと電子コミュニケーションの一般化は言語をとらえる視点に変更を要請すると考えられる。

話しことばと書きことばとの関係を考えるときには、句読点や振り仮名について考えることが役

立つと思われる。句読点は、読むことあるいは書くことの線的で時間的な進行に対して一定のリズムないし秩序をあたる空間的な要素と考えられてきた。3章3節では、紙のテキストとe-textとの比較から、e-textがコミュニケーション行動様式を変更するとき書きことばのスタイルに変化の生じる可能性があることを明らかにした。また、表記符号は概念的意味を持たないために周辺の要素と見做されてきたが、電子コミュニケーションにおいて文字と表記符号との境界が曖昧化していることもあわせて指摘した。

句読点（表記符号）に関する考察の中で明らかにされたように、コミュニケーションツールの変化による表現の変化は、文字をメディアとしてとらえるように求めるものである。紙のテキストにおいてもe-textにおいても、その基盤を提供しているものは文字である。したがって、文字の性質に注目することなしにテキストを捉えることもまたできないのである。

文字のメディアとしての性質は、振り仮名を対象にすることでよりよく知ることができる。3章4節では、振り仮名および振り仮名に関する表現様式を広くとりあげて論じた。その中で、振り仮名は日本語の表記体系の重要な要素であるが、テキストの相互参照を可能にしたり・複数のものを結びつける機能などがあることが明らかになった。振り仮名は、その機能をe-textでのハイパーリンクに進化する一方、その表記は紙の上で有効であり続けるものと考えられる。

ここで、ハイパーリンクは「読み」においてテキストを生成する手続きのひとつと見ることができるが、同じ手続きを問題にするときには、テキストの物理的な基盤について考えることが役に立つ。テキストの物理的支えは、テキストの参加者が等しく利用可能なものでないからである。その点で注目されるのが消しゴムをはじめとする「テキストの修正装置」である。3章5節では、「テキストの修正装置」が、メディア形態にかかわらず、表現に全体性と統一性とを与えてテキストの生成に関わるものであることを論じた。

テキストは、読みにおいて全体性と統一性とを整えるものであるが、文体論や表現の研究は、しばしば十全な全体性と統一性とを備えた所与の単位を前提することがある。それは「文章」などと呼ばれ、主に「表現主体」との関わりにおいて説明される。4章1節では、そのような考え方を含む『表現学仮説』をとりあげて、「文章」という所与の単位を想定することの理論上の問題を検討した。本論では、『表現学仮説』が不適切なモデルを用いて「表現主体」を中心化したために、言語のメディアとしての側面を見落していると指摘した。書き手の主体的で実体的な存在を暗黙の前提とする理論は見直されるべきものであり、少なくとも「読み手」「e-text」という概念が採用されるべきである。したがって、表現の研究にはメディアと身体との関係を表現の問題としてどのように考えるべきかという課題が生じることになる。また、現在の言語状況においてその関係を考えるときには、工学と技術とにもしかるべく配慮しなければならないだろう。本論では、これらのことをうけて、感覚の表現という点からメディアと身体との関係を考察し、既存の身体には情報通信技術の進歩と両立しない部分があること、われわれの身体がネットワークに接続されたハイブリッドなものになってゆくことを指摘した。

そのようなハイブリッドな身体領域では、スクリーンの性質やネットワーク上の表現様式など

のテキストのインタフェイスに関することがら文体論の課題になって現われてくるだろうと予測される。現在、われわれの表現の多くが実現する場であるスクリーンの性質については、身体性に係る象徴の問題としてしばしばとりあげられる「色彩語の表現」との関係において4章2節で考察した。本論では、紙のテキストでモノクロの印字が背後にイメージされる色彩に対する余剰といえるのに対し、スクリーンによる電光メディアでは、色彩がモノクロのスクリーンに対する余剰となるため、従来の色彩語の表現性（視覚的象徴）は機能しがたいものになるであろうと述べた。また、ネットワーク上の表現様式については、最近急速に普及しているウェブログをとりあげ、4章3節で論じた。本論では、電子空間で新たな表現様式に基づいた言語行動が、さまざまな二項的性質の両極の併存によって特徴づけられることを指摘した。また、対面性を志向する文字ベースのメディアであることを基本とする電子メディアにあって、ログは時間によって構造化されているところがあり、よりよく話しことばを包摂した書きことばといえると述べた。

本論で提案した文体論の理論は、表現とのかかわりにおいて文体のありかたを説明するものであるとともに、それをコミュニケーションにおいて理解するためのものである。さまざまところで電子化が進行する中において、文体あるいは表現の現状をとらえるためには、少なくとも本論で示したモデルが有効であろう。また、それは、種々の学科や学問領域に架橋する学際的な領域として、ひろく文体論の考えを展開してゆくことにも役立つはずである。

以上が、本論文の成果であるが、残された課題もある。最も大きな問題は、紙のテキストに対しては様々な論証や実証の方法が規格化されあるいは提案されているのに対して、オンラインリソースを学術的に取り扱う方法論がほとんど確立されていないということである。この点について、指宿（2000）は「オンラインの時代に、学術資源がオフラインにおいてのみ存在するというのではネットの真価は発揮しえない。オンラインにおける知的営為を可能とする枠組みを構築していく作業が、学術共同体全体に突きつけられていると言えるだろう」と指摘している。また、MLA方式では、本文内の引証に発表年の記載を求めている。文科系の研究で学術資料の有効期間は非常に長いという理由である。しかし、ICTに関係する研究の耐用年数はかなり短いようにも思われる。現状を肯定あるいは否定するだけでなく、本論の議論をより高いものに発展させようとする過程において、これらの難題と積極的に向きあってゆくことが今後の課題となるだろう。

あとがき

文体論の研究を志してからほぼ九年になります。その間に世紀が一度改まり、わたくしのコンピュータも何度か新しいものになりました。月日の流れは速いものですがICTではその数倍早い時間が流れているように感じもします。ともあれ、この論文が完成したことをよろこびたいと思います。もちろん、この論文は多くの方々のたすけがあっはじめて形をなしたものです。この場を借りて、お世話になった多くの方々に感謝申し上げます。主任指導教官の町博光先生はじめ審査委員会の水島裕雅先生、沼本克明先生、中村春作先生、久保田啓一先生には多くの貴重なご指導を賜りました。深く御礼申し上げます。修士論文をご指導いただいた前指導教官の木坂基先生には学会活動等を通じて研究に関するご助言をいただきました。学部生時代にいただいた「健康でいることもよい研究の条件だ」というお言葉は三十になったいま身にしみているところです。また、すでに広島大学を巣立っていった方々を含めて、さまざまな個性を持った同じ院生の皆さん、情報メディア教育研究センターの皆様にも感謝しなければなりません。とかく協調性のゆたかとはいえないわたくしではありますが、よい環境に身を置くことができたと感じています。Macintoshは誕生20年を迎えましたが、学部から大学院を通じてMacはつねに文体論研究の最良のパートナーでした。Think Different な Macこそが最高のパソコンであるとわたしは信じています。また、熊木大輔氏をはじめ新潟高校時代の友人たちにはたびたび励まされました。ふるい友は大事にしなければいけません。さいごに、永田良太氏にもいくつかの点でたいへんお世話になりました。彼のためにもぜひとも善人の得をする世になってほしいものです。

究極的には生きることに意味などないのです。けれども生きていることは楽しいと思いませんか。

リチャード・ドーキンス

2004年 1月24日

冬の西条、学生アパートの一室にて

うちやまかずや